
武装守護霊

改樹考果

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装守護霊

【Nコード】

N8364S

【作者名】

改樹考果

【あらすじ】

両親の仕事の都合で会った事もない叔母の下で暮らすことになった少年・黒樹夜衣斗が、叔母が住む町『星波町』で巻き込まれる謎の存在『武装守護霊』に関する事件に巻き込まれ、知る事が出来なかった自らの宿命と運命に邂逅し、世界に蔓延する『宿命の悪意』に立ち向かう物語。

プロローグ『選択の武霊使い』 1（前書き）

この小説は武装守護霊（旧）と書いてある作品を基に新たに書き起こした新たな武装守護霊です。ですので、旧版と展開が同じ所が多々あると思いますが、旧版より面白く読み易く書く事を心掛けていますので、楽しく読んでいただけると幸いです。

プロローグ『選択の武霊使い』 1

人工島に築かれた巨大な学園に、全てが黄金に輝く大樹が生えていた。

下から見上げても全体を全て見る事が出来ないほど巨大な樹。

直視すれば眩しいぐらいに輝いている黄金なのに、何故か周囲の夜の暗闇を邪魔せず、空にある星の光をかき消していなかった。

その樹を本土と人工島を繋ぐ大橋のほぼ中央で見ている一人の男性がいる。

電動車椅子に乗り、喉に酷い手術後がある四十代ぐらいのその男性は、待っていた。

視線の先にある黄金の大樹が果実を実らし、落ちるのを。

そして、

黄金の大樹に無数のつぼみが着き始めた時、彼の背後に一人の青年が現れる。

彼は振り返りもせず電動車椅子に備え付けられているノートパソコンを操作。

「「やつぱり来たな」」

ノートパソコンから男性の人工音声が発せられた。

男性はこうして普段のコミュニケーションを取っており、初見の者は大体驚く。

だが、声を掛けられた青年は大して驚きもせず、黙っている。

つまり、少なくともこの青年は男性の知り合いである様だった。

「「きつと君なら、僕の所に来る『選択』を選ぶ……そう思っていたよ」」

男性のその言葉に、青年は何も言わず、代わりに溜め息を吐いた。その溜め息に男性は苦笑し、

「「そうだね。君が僕を止めない様に諭しておきながら、僕は心の奥底で……君が来る事を望んでいた……正直、僕も迷っていると

言う事なのだろうね……」

そこまで言わせて、男性は少し間を置く。

何かを思い起こしているかのように目を瞑り、次に目を開けた時には強い意志の光が宿っていた。

「だが、それでも僕は止まるわけにはいかない」

そう言わせて、電動車椅子を操作して、身体ごと振り返る男性。

「さあ、始めようか、お互いに最後の戦いを」

男性の視界が青年の顔を収めようとしたその瞬間、

彼の『意識が目覚めた』。

気が付くと、青空が見えた。

彼がそれまで見ていた不可思議な夜の光景とのあまりにもギャップに、目を覚ましても身体を動かす事が出来ない。

「大丈夫かい？」

不意に聞えた自分を心配する声に、彼ははっとし、上半身を起こす。

すると彼の視界に、白髪で立派な白髭を生やした老人と、その周囲に彼と同じ様に芝生の上に座っている六人の男女が入った。

一人の男性はメガネを掛けていたが、そのメガネを掛けるはずの『両耳の場所には耳がなく、酷い傷跡があるのみ』で、メガネはゴム紐で頭に固定されていた。

傷跡は、聴力が失われている事を連想させるのに十分な物だったが、不思議とそれを不便にしている様子はない。

耳の無い男性のその隣には、サングラスを掛けた女性があり、隙間から見えるその下の『両目周辺には酷い傷跡があり、瞼は何とか残ってはいても、眼球は明らかに人工物』の様だった。

隣の男性同様に、視力の一切を失っているのは間違いなさそうだが、これも同様にそれを不便に感じている様子はない。

目の無い女性のその隣には、米国人らしき男性があり、その『両足が腰から義足になっており、足が無い』。

足が無い男性のその隣には、中国人らしき女性がおり、『見た目上はどこも欠けていないが、服の至る所から大小様々なチューブが出ていて隣にあるいくつもの機械に繋がり、内臓が無い』。

内臓が無い女性のその隣には、英国人らしき男性がおり、その『両腕が肩から義手になっており、腕が無い』。

腕が無い男性のその隣には、露国人らしき女性がおり、その『鼻が義鼻になっており、鼻が無い』。

身体のだこかが欠損しているこの場の者達の中で、唯一どこもの欠損していない老人は国籍不明だが、少なくともコーカソイドであるようなので、日本人ではないのは間違いない。

彼らが何の為にここに集まり、何をしているのか、はたから見ただけでは誰も分からないだろうが、少なくとも身体のだこかが欠損した若者達が、老人に師事している事は間違いなさそうだった。

「師匠……今見たのは一体なのだったのですか？」

意識がようやくはつきりしたのか、彼はこの場にいる老人以外全員が思っていた事を、膝に乗せていたノートパソコンに喋らせた。

彼の『喉には酷い手術跡があり、それにより喋る事が出来ない』様だった。

そして、彼の後ろには、車椅子があり、足はちゃんと在っても足として機能はしていない事を示唆している。

まるで彼が先程まで見ていた不可思議な夜の光景に出てくる男性をそのまま若くしたような姿。

それが意味するのは一つ。

彼の問いに頷いた老人は、

「今回あなた達に体験させたのは、『予知夢』です」
そう言つて若者達を絶句させた。

それはそれぞれが違う光景を見ており、そして、その光景が個人個人望まない光景であつた為の絶句。

「それぞれが『宿命の悪意』に『負けた場合に迎えるであろう最大の選択の時』……それを見せる様に設定しました」

老人は言葉に、何人かが顔を青ざめさせたが、何人かは特に反応らしい反応はしなかった。

見様によつては何かを抑えている様に見えるその無反応に、老人は特に気にせず、

「私が見せた未来からして、皆が同じ人物……つまり『主人公』を見たのでしよう」

主人公。

その老人の言葉に、全員が複雑な表情を見せ、主人公と言う言葉に『通常では使われない意味』がある事を示していた。

「これが意味するのは……宿命の悪意に君達が負ければ、君達は間違いなく『宿敵』となると言う事……それが君達の選択だと言うなら、私はそれを非難するつもりも、怒るつもりもありません……ですが、」

老人は空を見上げ、しばらく青空を眺める。

そして、ゆっくり顔を正面に戻し、

「この『シエルトン』シルベリア』は願わずにはいられない」

自分の弟子達を見回しながら、

「願わくば、君達に与えた『運命を変える選択』が、あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を……」

老人・シエルトン『シルベリアの言葉に、七人の弟子達はそれぞれ違う表情を浮かべた。

決意を、

愉快を、

思考を、

逡巡を、

確信を、

無心を、

そして、彼は、茫然を浮かべ、

それぞれが見た『最悪の未来の先』を思い浮かべた。

武装守護霊

第一部『七人の宿患の武霊使い』

選択する事を怖いと思った。

どんな時でも、

喜びを感じている時でも、

怒りを感じている時でも、

哀しみを閉している時でも、

楽しみを感じている時でも、

選択する事は怖かった。

…… だけど、選ばなくちゃいけない。

選ばなくてはいけない。

それが、俺の運命だから、

それが、俺の宿命だから、

それが、俺の選択だから、

選ぶ。

俺は選ぶ、進み、また選択する。

俺が死ぬまで、

俺が存在しなくなるまで、

選択し続ける。

宿命に打ち勝ち、

運命を変える為に、
選択する。

例えばそれが間違った事だったとしても、
例えばそれが新たな運命を呼ぶとしても、
例えばそれが逃れようのない宿命を早めるとしても、
俺は選択した。

その結果、俺は――

プロローグ『選択の武霊使い』

子供の頃……いや、今でも子供だから……正確には物心付く前から、俺は両親の仕事の都合で日本各地を転々としていた。

もともと、小学生になる頃には転々と住む場所を変えるのが教育に悪いと思ったのか、両親は一戸建ての家を買い、定住し始めてはいた……だが、直ぐに両親は仕事の都合で家を空ける事が多くなり、最近では長く家を開ける事も多く……嫌な予感があった。

両親が度々家を空ける事は、最初は寂しかったが、慣れた今ではある意味都合がよく、色々と自由に出来ていたんだが……困った事に、今度の両親の仕事は海外出張で、かつ、長期に渡ると言う事だった。

しかも、外国の幾つもの国を転々とするらしく、とても、英語すらまともに喋れない俺が付いていける出張ではなく、かと言って長

期間も俺を一人で家に居させるのも、俺自身も、両親も不安。

なので、両親は苦肉の策として今まで俺が会った事が無い母方の叔母の所に急遽俺を預ける事になり……そんなこんなで、今、俺は一人で叔母が住む町に向かつて電車で移動している。

叔母の住む町の名は、『星波町^{ほしなみ}』。

山と海に囲まれ、元空港建設予定地だった人工島に上に建てられた『星波学園』と言う小中高大一貫の学校がある町で……その学園に、俺はゴールデンウィークの休み明けから通う事になっていた。叔母のいる町へと向かう電車で揺られながら、俺は大きいため息を吐いた。

正直、一度も会った事が無い……と言うか、親戚がいるなんて、今回の事があるまで知りもしなかった……なんでも、うちの両親は駆け落ち同然で結婚したらしく……それで今でも両親とは疎遠で、親戚付き合いと言う物をしなかったらしい……が、そう言う事は前もって教えて欲しい様な……まあ、あまり興味を覚えなかった俺もいけないんだろうが……いけないのか？……ん……とりあえず、今はどうでもいい話か……

つで、両親は親類の中で唯一連絡を取り合っているのが、互いの弟・妹だけらしく、そのどちらかに預けるとなると、ド田舎に住んでいる父さんの弟より、町に住んでいる母さんの妹の方がいいだろうって話になったらしい。

ド田舎に住んできると言う父さんの弟にも興味はなくはないが……なんでも……俺自身は憶えがないが、幼い頃にそのド田舎に少しの間だけ住んだ事があるらしい……が……本当に憶えが無いんだよね……まあ、とにかく、今は叔母さんの事だよ……

母さんの話によると、叔母は少女漫画家をしているらしく……そのせいか、社会人としてちょっとだらしく、駄目な部類に入るそう。うだ。

少し漫画家に対して偏見を感じなくもないが……まあ、実の姉がそう言うのだから……警戒をしとくべきか？……と言うか、そん

な人の所にいきなり行かなくちゃいけないこの状況……憂鬱だ。

俺は思わず深い溜め息を吐き、外を見た。

流れる海岸の光景。

海沿いを走るこの電車は、次で降りる予定の星波駅に到着する。

だからか、

初めての一人での長旅？ 遠出？ ……まあ、どつちでもいいか

……なのだから、少しぐらいは外の風景を楽しんでもいいか……

なんて事を……家を出てから初めて……色々な要素で余裕が全く

無かったせいだろうけど……考え、何となしにぼくと外の光景を見ると、視界の隅に何かがあるのに気付いた。

遠目からでも分かる巨大な橋。

その先にある無数の学校らしき建物が建つ人工島。

……あれが……これから俺が通う学校か……ネットで航空写真と
か見てたから、ある程度予想はしていたが……実際に見るとやっぱり
でかいな……

そんな事を思いながら、俺は視線を車内に戻した。

進行方向上にトンネルを確認したからで……まあ、何と云うか……

窓に映る前髪で目を隠した自分の顔を見たくないからって言う理由が
一番強い………ただ自分が嫌い何だか………

そんな自分に苦笑していると、ほどなくして電車はトンネルに入る。
る。

このトンネルを抜ければ、星波町。

いよいよ全く知らない土地での生活が始まるのか……

そう思うと期待より不安が大きく、胃がきりきりし始め……再び

溜め息が出て、何となしに何も無い外を見てしまう。

窓に映る自分の姿を見ない様に、流れる壁を見る。

ん？

一瞬、その壁に『太い赤い線』が見えた様な気がした。

その次の瞬間、ぞわっと今まで感じた事がない違和感を感じ、急に意識が薄れ出す。

明らかに睡魔とは違う意識の薄れに、恐怖を感じて必死な抵抗をしようとするが……どうする事も出来ず――

プロローグ『選択の武霊使い』2

気が付くと……………見知らぬ公園に俺は居

「夜衣斗^{やいと}」

不意に背後から名前を呼ばれ、驚いて振り返ると、そこには悲しげな表情で俺を見る見知らぬ女性がいて、

「やっぱり『こういう運命』になったね」

俺と目が会うとそんな事を言いながら、優しく微笑んだ。

俺の前に現れた女性は、周囲の公園には似つかわしくない、どこかの舞踏会で着られていそうな簡素な白いドレスを着ていた。

何が何だか……

意味が分からず、その女性を凝視していると、

「サヤ」

？

「忘れちゃった？ 夜衣斗が付けてくれた私の名前だよ？」

はあ？

俺がこの女性に名前を付けた？

全く覚えが無い、どう見ても年上の女性にそんな訳が分からない事を言われ、俺は困惑を通り越して混乱した。

もともと、混乱したからと言って、この状況が分かるわけではないので……

腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸。

……まだ混乱はしているが、思考出来るくらいまでは落ち着いた。

その仕草を見て、サヤと名乗った女性は、小さく笑い、

「ふふ。その癖を『直接』見るのは久し振りだね。夜衣斗は身体が大きくなっても、そう言う所は子供の頃から変わらないよね」

！？

確かに今の癖は子供の頃からしている癖で、自分を落ち着かせる時や考える前によくしている。

今のでますます混乱したが………落ち着け、とにかく、

「……何者なんだ？ あ」

「サヤ」

あんたと言おうとした俺の言葉を遮って、ちよつと怒った感じで自分の名前を言うサヤ……さん？

「さん付けはいいよ。ただのサヤでん？」

……今の思考、口に出したか？

俺の疑念に、サヤさ

「だから、サヤでいいって、昔もそう呼んでくれたでしょ？」

昔って……憶えが………って、そんな事より！ まさか！？ 本当に心が読めるのか！？

俺の心の問いに、サヤは頷き、

「ようやくサヤって思ってくれた」

微笑んだ。

超能力者か？

「違うよ」

じゃあ、魔法使い。

「それも違う」

それも違うって………本当に、何者なんだ？

「ん………何者って言われても………」

俺の問いに、頬に人差し指を当てながら腕を組み、困った様な表情を見せ、

「私は『夜衣斗のサヤ』だもの」

と訳が分からない事を言う。

俺のサヤって……

「ふふん♪ ちよつと嬉しいくせにい」

……勝手に心を読むな……

からかう様に言うサヤに、俺は少しげんなりした。

……まあ、少なくとも俺に悪意あるわけじゃないようだが……—

体ここはどこなんだ？ 俺はサヤに誘拐でもされたのか？ だとしたら、何の目的で？

その俺の矢継早な問いに、サヤはキョトンとした顔になり、少し間を空け、

「うふふ。確かに私が夜衣斗をここに連れてきたから、『ある意味』誘拐かな？」

ある意味？

「だって、ここは『夜衣斗の心の中』だもの」

……………はあ？

「だから、夜衣斗の身体は何処にも行っていないの」
俺の心の中あ？

サヤの電波発言に、疑問より戸惑いを感じたが、
「電波は酷いつて」

こう実際に心の中を読まれていると言う事は、ここが俺の心の中と言う裏付けになる……………か？

……………まあ……………つまり、何か？ 俺は夢を見ているって事か？
「うん」

事も無げに同意するサヤに、俺は何とも言えず黙るしかない。いや、元から喋ってないが……………

「もちろん普通の夢じゃないよ。私が夜衣斗の意識をここに連れてきたからね」

連れてきたって……………あの睡魔とは違う意識の薄れか？

「納得した？ 理解した？」

……………そんな事を言われてもな……………夢と言う割にはあまりにもリアルな感じがするし、起きている時以上に意識がはっきりし過ぎている……………んゝそれに……………

どうも釈然としないので、俺は周囲を見回す。

何度見ても、どう見ても、見覚えのない公園。

これが俺の心の中だと言うのなら、何かしらの見覚えがあってもいいはずだと思っんだが……………

「仕方がないよ。だって、夜衣斗はまだ忘れてるんだもの」
「忘れている？ 何を？」

「色々。重要な事から、他愛のない事まで、何もかも………ついでに私の事もね」

「………ちよつと待て！ そんな記憶の欠如があるのなら、いくらなんでも記憶の不自然さ気付くだろ！？」

「忘れている事は、日常生活に關係ない事だから、忘れていても不自然にならなかつたんだよ」

「日常には關係ない？」

「うん。『非日常』の記憶をね」

「非日常……何を指して非日常とするか……」

「まず思い浮かべるのは、漫画やゲームなど非日常。」

次に思い浮かべるのは、暴力や欲望が支配する非日常。

色々と考えはするが、俺の記憶の中にそれらと繋がり思い起こすものはなかつた。

俺の今までの人生は、少なくとも非日常と呼べるものと関わりを持った事がない………良い人生を歩いているとは言えないが、『ある意味』普通の人生のはずなのだが……

「大丈夫。徐々に思い出すよ」

そう言つてサヤは俺の後ろを指差した。

「だって、『閉じられてたもの』が、開き始めているんだもの……だから、いずれ『思い出せざる得なくなる』」

「閉じられていたもの？ 思い出さざる得なくなる？」

サヤの言葉に眉をひそめつつ、指差す方向を確かめる為に後ろを振り向くと……

「……なんだありや……」

思わずそうつぶやいてしまうほど異様な光景があつた。

それは巨大な……円状に集まつた宙に浮く黒い枝の塊。

見上げてみようやく全体像が見えるくらい巨大なそれは、俺の見える前ではるぼろと枝を落としていた。

落としていると言っても、それらの音は聞こえない。

つまり、それだけ離れていると言う事であり、見えている以上にそれはでかいと言う事になる。

……まあ、俺の心の中だと言うここに、通常の物理法則が存在しているならの話だが……って言うか、ここが俺の心の中なら……あんなのがある心って……俺、大丈夫なのか？

そんな事を思っていると、更に変化が起きた。

枝が一つ一つ落ちる度に、枝が落ちた場所から水のような物が噴き出す。

これが何を意味しているのか分からず、サヤの方を再び見ると、サヤは最初に見せた悲しそうな表情を浮かべていた。

「今の夜衣斗だと疑問は尽きないと思う……でも、全部思い出せば、その疑問も全部晴れるから……」

思い出せば……って言われてもな……

もう何が何だか訳が分からず、ひたすら困惑したその瞬間、背後で何かが弾けた様な強烈な音がした。

慌てて振り返ると、黒い枝の集まりのほんの一部が吹き飛んでいて、そこから大量の水が噴き出……？ ……え！？

公園の中にあるブランコに、幼い頃の小さい俺が座っていた。

そして、その目の前に……サヤがいた。

「ねえ。名前を付けてよ」

そう言うサヤに、小さな俺は小首を傾げた。

「おねえさん、名前ないの？」

「そうだよ。理解した？ 納得した？」

「う、うん？」

「だから、付けて」

「うん……わかった」

催促するサヤに、小さな俺は頷き、いつもの癖で腕を組んで手で口を塞ぎ、一生懸命考え始める。

少しして、

「ん〜……じゃあ……お姉さんは僕の

なんだから……

…サヤ。サヤって名前はどうか？」

小さな俺のその提案に、サヤは少し苦笑して、小さな俺の頭を撫でた。

「ありがとう。今日から私はサヤね。そして、夜衣斗。今日からよろしくね」

そう言っ て微笑んだサヤに、小さい俺は微笑み返した。

唐突に思い出した幼い頃の記憶。

一部欠けている部分があったみたいだが……あまりの唐突な思い出し振りに、それを気にしている余裕はなく、思わずサヤを見る。

「思い出した？」

そう言っ て微笑むサヤだが……そのサヤの姿は、『幼い頃に見たまま』だった。

どれくらい幼い頃の記憶なのか、前後の記憶があいまい過ぎて、定かじゃない。

だが、少なくとも視線の位置からしてその姿は間違いなく小さく、かなり幼い。

だとすると、十年以上前なのは間違いなく……つまり、普通の人間ならそれ相應の変化がないとおかしいのに、サヤにはその変化が一切見られなかった。

……まあ、そもそも、ここが実際に俺の心の中なら、生身の人間がいる方が不自然だよな……つまり、精神体……幽霊？ 取り憑かれていたのか？ 十年前から？

サヤは何も言わない。

だが……当たらずも遠からずっ て感じ……なのか？

何故かサヤが幽霊と言う考えに、絶対的に違っ と俺の心が否定していた。

確証はない。

だが、確信がある。

そんな訳が分からない心の状態に戸惑っていると、

「夜衣斗」

真剣な面持ちで俺を真つ直ぐ見詰めるサヤに、俺は戸惑い、目線を反らしたいのに反らせなかった。

人の視線は苦手なんだが……

「夜衣斗には、これから『死の運命』が待っているわ」

……？ ……死………はああ！？ ……なんだそりゃ？

「『今の』私にはどうする事も出来ないけれど……これだけは憶えていて」

サヤは胸に手を当て、

「私は、夜衣斗の『運命を変える選択』」

運命を変える選択？ ……俺の？

「夜衣斗が望むなら、死の運命だつて『変えてみせる』」

変えて見せるって言われても……

「今は私の言葉を信じられなくてもいいわ」

………

「でも、もし、その時が来たら選んで、運命を『変えるか』、『変えないか』」

不意に視界がかすみ始め、

「……でも叶うなら、そんな時が来ない事を祈るわ」

その言葉と共に、俺の意識がブラックアウトし――

再び気が付いたら電車は星波駅に着いていた。

しかも、発車ベルが鳴り出したので、俺は大慌てで電車から降りる。

………何………今の？

一瞬、日頃からしている想像……妄想？ ……が悪化でもしたのかと思ったが……記憶に残る公園やサヤの存在感が、それを否定した。

あまりにも日常からかけ離れた出来事に、俺はしばらく呆然とし

ていたが、不意に携帯電話がなったので、特に考えもなく出ると、

「……はい」

「「いやゝごめんね夜衣斗ちゃん。お姉さんすっかり忘れていたわ」」

つい数日前に聞いた事がある叔母の声だった。

どうやら、叔母からの電話だったようだが……

「……忘れてた？」

「「ここ最近、締め切りに追われててね。多分、それで忘れちゃったんだわ」」

「……」

「「しかも、今現在も追われている最中でね。お迎えに行けないのよ」」

「……はあ？」

「「そんな訳だから、自力で家まで来てね。住所は知ってるでしょ？」」

「……はあ……まあ」

「「あ！来る途中でプリン買ってきてくれると嬉しいな。でっかい奴ね。お姉さんそれが大好物なの」」

「……まあ、美味しいですよね」

「「そうなのよ。あのプルプルが堪らなくて……うふ」」とにかくそう言う事だから、それじゃあねえー待ってるよぉー」」

「………な………なんじゃそりや！……！」

プロローグ『選択の武霊使い』 3

怒りより……疲れが出てきて、俺は深い溜め息を吐いた。
とりあえず、駅前のコンビニでつかいプリンを二つ買う。

駄目な部類だと聞いてはいたが……まあ、これぐらいは予想の範囲内だと言えないくないが……予測の範囲内でも疲れが出てくるのは抑えられない。

……初っ端からこんなんでやっていけるんだろうか？
もう一回、深い溜め息。

訳分らない目に遭ったばかりなの……これはない。

……とにかく、今は訳が分からない事を考えるより……とつとと叔母さんの家に着いて、落ち着きたいな……まあ、携帯とかで地図を見れば、何とかなるか？

そう思っただけ俺は叔母の家に向かって歩き出した。
歩きつつ、これから住む町の様子を見る。

ん……普通の町かな？ 当たり前だが……

などと思っていると、奇妙な光景が視界に入り、思わず歩みを止めた。

スピーカーだ。

それも、電信柱に一本一本あると言っただけいいほどスピーカーがある。

……海の直ぐ傍にあるから、津波対策とかそんなんでか？ ……
それにしても過剰なほどある様な……あれか？ 所謂、役所の無駄使って奴か？

そんな事を考えていると……不意にスピーカーからけたたましいサイレン音が流れ出した。

何だ！ 何だ！？ 津波か！？

俺は驚いて携帯電話を取り出し、地震でもあったのかと確認するが……特に警報らしきものを受信していない。代わりに叔母からの

着信があり、サイレンが収まるのを見計らって、出る。
すると、

「「いい！？ 夜衣斗ちゃん！ 今から流れる放送にちゃんと聞いて、その指示に絶対に従って！」」

などと言ってきたので、俺は困惑するしかない。

そして、更に困惑させたのが、

「「「自警団から緊急警報。海側『はぐれ』発生ポイントにて『はぐれ』発生。外に出ている住民の方は至急避難マニュアルに沿って避難を始めてください。また、この放送に戸惑っている方は住民の避難誘導に従ってください。なお、『昨日』発生しているので訓練だと思っ方もいると思いますが、これは訓練ではありません。繰り返します。これは訓練ではありません——」」」

この放送内容だった。

「……何です……これ？」

そう俺が口にするが、周囲の無数のスピーカーから発せられる放送に俺の声がかき消されたのか、

「「とにかく、今は何も考えずに避難して！ 訳は後で説明するから！」」

そう言って通話が切られた。

??????

さっぱり訳が分からず、携帯電話を暫く見続けるが……

（夜衣斗）

わ！……え！？

唐突に頭の中に響く様に聞こえてきた声に、俺は一瞬パニックになり掛けるが、

（何？ もう私の声を忘れちゃったの？）

サヤ！？ な！ あ！ って、心の中に住んでるんだっただな……

（やっと私のいる所まで『繋がっちゃった』からね。今はこちらから声を掛ける事も出来るよ）

そう言うサヤの声に……やっぱり夢じゃなかったのか……いや、

まあ、夢だったのだろうけど……

（現実逃避したいのは分かるけど、これは現実。理解した？ 納得した？）

……まあ……な……

頭の中に響く様に聞えるサヤの声に、俺は言葉にもならない色んな感情がぐるぐる。

サヤの声が起きてから聞こえたと言う事は、まず間違いなくあれは夢であっても現実で起きた事と言う事になり……ちよつと完全な夢だったんじゃないかと思ひ始めていた矢先だったので、心境複雑と言つか……と言つか、それ以前に……声を掛けられて改めて気付いた事なんだが……十年も俺の心の中に住んでたと言う事は……

サーと自分の顔が青ざめて行くのが分かる。

俺も一端の男であり、それなりの目覚めをしちゃっているわけで……それ以外にも、色々と知られたくない事や、隠している事が全部……

（うん。私には全部筒抜け）

……

サヤの同意に、一瞬、思考が止まる。

（もう！ 固まってる場合じゃないって夜衣斗！ さつき私は言ったよね。これから夜衣斗に死の運命が訪れるって！ もしかしたら、今起こっている事がそれ『かもしれない』のよ！ 早く逃げなきゃ！）

……かもしれないんだろ？

（夜衣斗の叔母さんが真剣な声だったでしょ？ それに町のこの様子。そうだとしか思えないじゃない）

と言う事は、サヤ自身は俺に降り掛かると言う死の運命を具体的に知らないわけか……

（私が知っているのは、『夜衣斗が私に接触出来る様になったら、夜衣斗の身に死の運命が降り掛かり始める』って事だけ）

なんだそりや……って！ 降り掛かり『始める』！？

俺がそう驚いた時、

ズツチャつと音を発てて目の前に何かが落ちてきた。

一瞬、『それ』が何なの俺は理解出来なかった。

「ああああああおん」

それは歓喜だろうか？ 俺を見て空気が震えるような遠吠えを『それ』がした。

それは『犬』だった。

ただし、『全身からまるで肉の代わりの様に炎を噴き出す骸骨の犬』。

あまりの出来事に、俺は身体のみならず、思考も止まってしまっただ、ただ、

（夜衣斗！ 逃げて！ 早く）

そう叫ぶサヤの声だけが、頭の中を駆け巡った瞬間、骸骨犬が俺に飛び掛かってきた。

それは俺にしては、俺にしては上出来過ぎる反応だった。

俺は手に持ったコンビ二袋をそいつに向かって投げ付けた。

狙いも定めず、反射的な行動だったが、投げられたコンビ二袋は骸骨犬の顔面に当たり、それが横に避ける隙を作った。

自分のこの反応に軽く驚きつつ、俺は全速力で駆け出す。

駆け出したはいいが、どう考えても俺の走る速度じゃ、あつと言う間に追い付かれる。速度もそうだが、持久力も、全くと云っていいほど俺はないから……

骸骨犬を避けた時、感じた炎の熱は現実で……そうなると、あからさまに鋭い爪と牙は俺を簡単に引き裂くのは間違いない。

背後に明確な死の気配。

これが死の運命だと言うのなら……サヤ！

心の中で強く呼び掛けるが、何故かサヤは一言も発しなかった。

さつきは呼んでもいないのに喋り掛けてきたくせしてえええええ！ 思わず恨み事を心の中で絶叫しながら走り続けた。

とは言っても、俺にずっと全力疾走をし続けるほどの体力はないので、直ぐに息切れを起こし、苦しくなる。

だが、背後から振り向かなくても分かるぐらい骸骨犬の足音はつきりと聞えてきた為、足を止めるわけには！

足音の距離と、自分の速力・体力から数秒後に追いつかれると判断した俺は、賭けに出る事にした。

さっきの放送の中に、住民の避難誘導って言葉が在った。

それはつまり、この『町の住民』なら何とか出来る。もしくは『何からの手段』を持っていてるって事。

そこまで考えた時、一際大きい足音がした。

飛び掛かってきやがった！

そう判断した次の瞬間には、俺は咄嗟に近くの家飛び込んでいた。

玄関前に転がり込む様に入ると同時に、背後から熱気を感じ、着地音が聞こえる。

こけそうな体勢を無理矢理戻して玄関に飛び付き、ドアを叩こうとして……気付いてしまった。

玄関の郵便受けに溢れるほど手紙やら新聞やらが詰まっている事に……

そして、振り返ると……そこには当然、骸骨犬がいて飛び掛かるタイミングを計るかのようにつろつろして……とても逃げれる距離じゃなかった。

今までの人生の中で一度も経験した事がない状況に、俺の動悸は更に激しくなり、頭がくらくらし出す。

正直、現実感がない。だが、骸骨犬から発せられる炎の熱気、アスファルトが焦げる臭いが、否応無しに俺をこれが現実だと自覚させようとする。

吐き気がする。

死。

『久し振り』に実感したその言葉。

もつとも、『前は自ら望んで』だったが……今は……そんな気はさらさない！

……だが……骸骨犬の鋭い牙は勿論、その足先にある鋭そうな爪、全身から出ている炎、そのどれもが喰らえば大怪我……いや、絶対にそれだけでは済まない。殺され……きつと喰われる……

……そんなのは……絶対に……嫌だ！

だからこそ、俺は覚悟を決めた。

いや、ただの逆切れなのかもしれない。

理不尽で、唐突過ぎる死と言う現実。

それが『昔の記憶』と重なって、噴き出した過去と現在の怒りが混ざり合い、いつもの俺なら絶対にしない事を決意させた。

腕一本を犠牲にして、骸骨犬を壁に叩き付ける！

明らかにキレた思考を理性が抑えるより早く、骸骨犬が足に力を溜め……飛び掛かって来た！

狙いは明らかに俺の喉元。

だったら！

喉の前に左腕を出し、前に突き出そうとした次の瞬間。

地響きを立てて何かが俺と骸骨犬の間に着地した。

そして、

「やれ、剛鬼丸」

と頭上から聞こえると共に、目の前の何かが動き、再びの地響き。……えっと……？

何が起こったか分からず、突き出した腕を啞然としながら俺は降ろした。

俺の前には、教科書とかで見る戦国武将が着ている様な鎧甲冑があった。

しかも、二メートル以上はあるとんでもない大きさなので……腕を地面に突刺している様だった。

その周囲には、炎を纏った骨が散らばっていて……つまり……この鎧甲冑が骸骨犬を殴り潰してくれたって事か？

俺が唐突な出来事とその鎧甲冑に戸惑い始めると、鎧甲冑がゆっくり地面から腕を抜き、振り返った。
目に映ったその顔は、何処をどう見ても『鬼』の顔だった。

プロローグ『選択の武霊使い』 4

あまりも鬼らしい鬼の顔に……思わず、
これって……助かったんだよね？

と思っってしまったが、振り返った視線の先は俺ではなく、俺の
丁度真上、家の屋根の方だった。

「よくやった剛鬼丸」

再び声がすると同時に、屋根から誰かが降って来て、剛鬼丸と呼
ばれている大鬼に一旦受け止められて着地した。

降って来たのは、短髪で、若干強面の成人男性。

その腕には、『星波町自警団』と書かれた腕章を付けていた。

……つまり、この人はさっきの放送をした自警団の団員？

「君、大丈夫かい？」

近付いて来た自警団員の人は、顔付きとは違い気さくに話し掛け
てきてくれたので、

「……はい、大丈夫です」

頷いて、そう応えようと、自警団員の人は困った様に笑って、

「放送、聞いてなかったのか？」

「……聞いてはいたんですけど……その、周りに住民の人がいな
くて……戸惑っている内に襲われてしまって……」

俺の返事に何か納得した様に頷き、

「なるほど、君、この町初めてだね？」

？

「……ええ、今日、引越してきたばかりですけど……」

「今日！？」……それはまたツイてないな……何もこんなイレギ
ユラーな日に……」

イレギュラーな日？……そう言えば、『昨日』発生しているの
で、とか言ってたよね……と言うか発生？……一体

「……一体——」

今のは、目の前のは、何なんですか？

そう言おうとした時、周囲に何かが着地する音が聞こえた。それも複数。

反射的に視線を向けると、そこには倒された骸骨犬と全く同じ骸骨犬が何匹もいた。

「っち。他の連中は何やってんだ」

自警団員の人は俺を庇う様に動き、腰に付けていた伸縮式警防を構えた。

「蹴散らせ、剛鬼丸」

自警団員の人の命令に、剛鬼丸は最も近くににいる骸骨犬に突撃し、拳を振るう。

その素早い拳撃に、骸骨犬は避けられず、吹き飛び、たった一撃で全身が粉碎された。

それを見た他の骸骨犬は、ターゲットを剛鬼丸だけにしたのか、一斉に剛鬼丸に襲い掛かる。

剛鬼丸は、襲い掛かってくる骸骨犬に対して……何もしない！？当然、骸骨犬の爪や牙が剛鬼丸の鎧に突き刺さる。

思わず自警団員の人を見るが……その表情は余裕だった。

その余裕さに疑問符を浮かべながら視線を剛鬼丸に戻すと、攻撃を全身に受けている剛鬼丸は平然としている。

それどころか、肩に牙を突き立てている一匹の頭部を無造作に掴み、握り潰す。それに危機を感じたのか、一斉に剛鬼丸から離れようとする骸骨犬だが、何故か剛鬼丸から離れる事が出来ない。よく見ると、爪や牙が突き刺っている鎧が急速に修復されて、まるで鎧に掴まれているか様な状態になっていた。

そして、剛鬼丸は逃げられない骸骨犬を一匹一匹確実に握り潰し

……全滅させた。

随分あっけない……だけど……今度こそ、本当に助かったのか……最後の一匹が握り潰された所で、俺はそう思い、ホッとしてしま

それで、張っていた緊張の糸がぷつぷつと切れたのか、玄関にもたれかかる様に座ってしまった。

かなり情けない自分と安心感に、俺は思わず深い溜め息を吐き、項垂れてしまう。

その俺の様子に自警団員の人は、

「だらしないな。お前、それでもおと——」

不意な小さな爆発音。

その音を疑問に思うより早く、自警団員の人の言葉が不自然に途切れたので、反射的に顔を上げると……見て——

……最悪だ。

と思った。

何故なら、男性は驚愕に目を見開き、自分の『腹を貫通した骨』を凝視していたからだ。

自身の腹に刺さった自警団員の人を押さえ、少し振り返って後ろを見る。

それによって俺に自警団員の人の背が露わになり……炎が縄状になって繋がっている骨が突き刺さっているのが見えた。

炎の縄は剛鬼丸に最初に粉々にされた骸骨犬の頭部の方へと繋がっていて、同様の炎の縄がばらばらになった周囲の他の骨にも繋がっている様だった。

全身から出る炎を爆発させて、骨を撃ち出した？

そう理解した時、炎の縄が一気に収縮し、ばらばらになっていた骸骨犬の骨が一気に集まり、元の形に戻ってしまった。

条件反射的に、自警団の人を見ると、腹に刺さった骨が戻らない様に剛鬼丸に骨を掴ませていた。

医学とか詳しくないから分からないが、骨が引き抜かれたらどうなるかぐらい俺でも分かる。

大量の出血を起こし……死ぬ。

ぞっとした。

自分の死を覚悟した事はある。

既に死んでいる人を葬式などで見た事がある。

だが、死ぬかもしれない人を、目の前で、見た事など……

あまりの事に茫然としてみると、炎の縄が他の粉々になっている骸骨犬達にも起こり始め……瞬く間に復活した骸骨犬達に囲まれてしまった。

何のタイミングの悪さか、

「自警団本部から緊急連絡。今回はぐれは擬死をし、全身の骨を炎で飛ばす事が出来る模様。現在交戦中の『武霊使い』は十分に注意してください」

と言う町内放送が入ったが、その注意すべき人は、

「お、おせえよ」

既に脂汗を流し、身動き取れない状況になっていた。

背中から腹に貫通している骨を戻そうと、その骨の持ち主である肋骨が一本欠けた骸骨犬が飛び跳ねる様に繋がる炎の縄を引く。

剛鬼丸が掴んでいる為か、骨は一切動かない。

だが、

「つく！」

自警団員の人々が苦悶の声を上げる。

同時に、肉の焼ける臭いがし始め……想像したくないが……多分、突き刺さっている骨の温度がどんどん上がって、自警団員の人を内部から焼き殺そうと……ちょっと待て！ このまま自警団員の人死んだら……

剛鬼丸は、自警団員の人々の命令で動いている様だった。

命令なしでも動くようだが、自警団員の人に骨が刺さった時、骸骨犬を攻撃するのではなく、骨を安定させる様に動いた。

と言う事は、剛鬼丸の行動原理は、自警団員の人を中心と言う事。必ずしも俺を守る為に動くと言う訳でなく――

不意に、骸骨犬達が後足で立ち上がった。

肋骨をこっちに見せるその姿は、次に何が起こるか安易に想像させるものだった。

内部が焼かれる痛みと、巨体の剛鬼丸により視界が制限されている自警団員の人には骸骨犬達の行動は見えない。

かと言って、自警団員の人々が剛鬼丸に俺や自身を守る様に命令したとしても、周囲を囲まれている状況では、明らかに防ぎ切れない。
ああ……これで俺は死ぬんだ。

思わずそう思ってしまうほど絶望的な状況に、それを更に確信させる小爆発が、骸骨犬達から一斉に起こった。

プロローグ『選択の武霊使い』 5

「夜衣斗」

不意にサヤの声が背後から聞こえ、俺は反射的に振り返った。ん！？ 振り返った！？

気が付くと俺はまたあの身に覚えのない公園に立っていた。

振り返った瞬間に心の中に引き摺り込まれたって事か？ ……ま

あ、だから振り返れたんだろうが……

「これで少しだけ時間が出来たよ」

そう言って微笑む目の前にいたサヤ……夢の中の時間の流れを自由に出来るって事か……まあ、夢の中ならそれも可能だろうが……だが……何のつもりだ？ ……さっきは呼び掛けても出て来なかったくせに……

俺の問い掛けに、サヤはちょっと困った顔になった。

「夜衣斗。私は言ったよね……夜衣斗が私に接触出来る様になったら、夜衣斗の身に死の運命が降り掛かり始める……って」

それは……聞いたが……

「どうしてそんな事になると思う？」

どうして？

急な問い掛けに、俺は戸惑うしかなかった。

問い掛け自体も戸惑いの原因の一つだが、更に戸惑わせているのはサヤの悲しくも辛い表情だった。

それは俺に対しても向けられている表情にも思えるし、自分に対しても向けられている表情にも見える。

だからなのか、ピンと来るものがあつた。

……つまり、乗り越える為に……サヤは自分の事を『運命を変える選択』と言ったから、何かがあるのは間違いないだろうし……運命を変えられるほどの『何か』なら……『その力を借りれば、それが新たな原因になる』……そう言う事だろ？

俺の答えにサヤは……躊躇いながら頷いた。

「だから、まだ自力で助かる可能性がある内は……応えたくなかったの……でも、もう無理な状況だものね……」

そう言ってサヤは悲しげに微笑んだ。

俺は溜め息一つ吐く。

強い力には代償が付き物だとは聞いた事があるが、今の状況から逃れる為にはわざわざ新たな死の運命を呼ぶ力を借りなくてはいけない……か……どんな力か分からないが……サヤがああ状況を何とかしてくれるのか？

「私じゃないわ」

首を横に振り否定するサヤ。

「私はあくまで『運命を変える選択』で、ただの夜衣斗の『サヤ』だもの」

……それって、つまり……どう言う意味なんだ？

訳の分からない答えになってない答えに、俺は思わず聞き返すが、サヤは微笑むだけで、それ以上は答え様としなかった。

だが、代わりにサヤは両手をおわん状にして俺に差し出す。

条件反射的にその手を見ると……そこには……え？

「何とかするのは、この子」

そう言うサヤの両手には、いつの間にか……見覚えのある……いや、正確には、『いつも考えているもの』が在った。

俺は幼い頃からオリジナルの物語を作る事を趣味としていて、今まで拙い物から壮大な物まで、色々な物語を作っている。

その作った色々な物語の中で、最も古く、最も長い、今でも考え続けている物語。

それが『王継戦機^{おうけいせんき}』と名付けている物語。

ある理由で一度リセットされた地球を舞台に、リセットする前の地球で作られた騎士の様なロボット『守護機騎^{しゅごき}』の一機を主人公にした話。

そのロボットの名前は、『オウキ』。

創り出したいくつもの物語の中で、俺が最も気に入っているキャラクター。

そのミニチュアが、サヤの掌の上に在った。
鋭角的な騎士甲冑の様な全身白銀のその姿。

まさにずっと考え続けてきたオウキそのものの姿だった。

だが……どう言う事だ？ オウキはあくまで俺の空想の産物であって、実際に存在している訳じゃない。

それがあの状況を何とかする？

疑問と言うより、不信の目をサヤに向けると、

「夜衣斗。私は言ったよね」

微笑むサヤ。

「私は運命を変える選択だって」

ふと、骸骨犬と剛鬼丸を俺はイメージした。

そもそも、あんなもの、現実には存在している事はまずありえない。
あれが何なのか……骸骨犬の方は自警団の放送で『はぐれ』って
単語が出て来た事考えて、はぐれと呼ばれている物なんだろう。

そして、同じく放送で『武霊使い』って単語が出てきた事を考えると、剛鬼丸は『武霊』と呼ばれている存在。

両者とも全く別の行動原理で動いている様だったが、どちらも近い、同じ様な存在に感じられた。

何故なら、どちらも『人の空想の産物』の様な……空想の産物？

……まさか！

行き着いた思考の結論に、俺は驚愕で目を見開き、サヤを見る。

「ええ、そのまさかよ」

頷くサヤは、更に言葉を続ける。

「この子は『武装守護霊』。夜衣斗の『想像で武装し、夜衣斗を守護する霊体』」

……想像で武装し、宿り主を守護する霊体……だから武装守護霊。
だから武霊……

信じられない話だが、現に俺は骸骨犬と剛鬼丸と言う存在を目の

前で体感してしまっている。

信じるしかない。

信じられない。

信じたい。

期待や願望や不安や疑惑などの様々が現れては消え、ぐるぐると頭の中を回り、心をこれ以上に無いってぐらい掻き乱す。

混乱した思考のまま、身体？ …… 夢の中でも身体は身体か…… は心の奥底にある願望を体現しようとした。

オウキを、幼い頃から空想の産物だと思いながら、何度も欲し、空想の産物だと思いながら、何度も助けられた存在が、現実として、実体を持って現れる可能性がある。そんな可能性があるのなら、俺は……… 手に入りたい！

そんな願望が、俺の手を自然とミニチュアオウキに触れさせようとした。

だが、その瞬間、

「待つて！」

サヤに制止の言葉を掛けられ、俺は思わず手を止めた。

「この子を手に取ったら、夜衣斗はもう引き返せなくなる」

そう言うサヤに俺は眉を顰めた。

何故なら、引き返すも何も、俺に死ぬなんて言う選択肢はない。

俺は何度か自ら死を望んだ事がある。

理由は…… まあ、ある意味ありがちな『いじめ』によるもの…… 今でもその時受けた心の傷は癒えてはいないし、もし、完全犯罪が出来たのならきっと俺は迷わず、俺をいじめた奴らを…… 『殺す』。考えられる限りの無残で残忍な方法でだ……… それだけの事を俺はされ…… 追い込まれていた。

少し思い浮かべるだけで怒りと恐怖が入り混じって蘇り、思考を乱し…… 当時の思いを思い出す。

殺すと言う選択をした自分に絶望し、苦痛だけの世界に絶望し…… 死のうとした。

崖の上に立ち、落ちて死のうとした。

包丁を手首に突き付け、頸動脈を切って死のうとした。

首に電気コードを巻いて、首を吊って死のうとした。

風呂に水を溜め、ドライヤーを投げ込んで感電死しようとした。

その度に、死の恐怖に襲われ、哀しむ家族や親しい人の顔が浮かび……結局は……出来なかった。

運が悪いのか良いのか、俺は幼い頃から死に対して深く考え、死に対して恐怖心を強く抱いていた。

また、当時は家族や親しい人を大切に思う純朴な心が在って……だからこそ、俺は死ぬ事が出来なかった。

あの時は自分で死ねないほど弱い人間なのかとも思ったが……今は、死ななくて良かったと思っているし、自分で死ぬ人間ほど弱い者はないとも思っていて……死ぬ理由より生きる理由の方が今は多いだから、今は強く生きたいと思い、死にたくないと思う様になっている。

きっと、何度も本気で自殺しようとした事が大きく影響しているんだろうが……その過程と決着を十年以上も俺に憑いているサヤが知らないはずはないと思うが？

俺の問いにサヤは辛そうな顔になった。

「勿論知っているよ……あの時、私はどうしてここにしか居られないのかと……強く、強く思ったもの……でも、今はようやく夜衣斗の側に居られる。心の中じゃなくて」

片手でミニチュアオウキを持ち、そつと俺の頬に手を触れるサヤ。「こつやつて触れられる距離に私はいる」

……顔が赤くなっているのが分かるが、それを止められるほど俺は器用じゃない。

しばらく見詰め合った後、サヤは俺の頬から手を離し、ミニチュアオウキをぎゅつと胸に抱き寄せる。

「夜衣斗……人は死んだらどうなると思う？」

唐突な問いに、俺は再び眉を顰めた。

……『無』だろ？

それが、幼い頃から考え続け、導き出した答えだった。
死んだら何もない。

だからこそ、俺は死に対して強い恐怖を抱いている。

「それは確かに『ほとんど正解』」

ほとんど？

「うん。人はね……死んだら魂が世界から解放され、無に還る僅かな間だけ……自由になる」

それって……走馬灯？

首を横に振るサヤ。

「それは脳が起こす現象……私が言っているのは、無に還る僅かな間だけ、何でも出来るって事」

何でもって……

「現実で起こせる事全て、現実で起こせない事全て」

……それは凄いが……僅かな間しか続かないなら意味が無い
だろ？俺は刹那主義者じゃないし……それに、それだけ自由になる
って事は、意識すら自由になるって事じゃないのか？……そう
なれば、いくら自由になるって言っても……縛られていない意識が、
何かを持つなんて事はないよな？結局意識は、何か、肉体や世界
などに縛られ、抑え込まれているから生じるものだろうし……つま
り、結局は何もできない。

「そうね……普通ならそう。それは霧散する過程の朧でしかない。
自由があっても、自由を感じる自由が無く、自由にはなれない……
でも……」

でも？

「今の夜衣斗には私がいる」

それは……つまり……

「……私なら自由になった魂を長時間維持出来るわ……」

……

「夜衣斗」

サヤが浮かべたその微笑みは、俺の人生の中でもっとも優しい微笑みだった。

「……………一緒に死にましょ？」

プロローグ『選択の武霊使い』 6

それは、ぞつとするほどの誘惑だった。

イマジネーションが自由であるのなら、魂だけの存在になり、物理の檻である世界から離れれば、無限の自由が得られる。

それは死を考えていた時に考えた一つの答え。

だが……魂が肉体により固着され、世界によって安定させられて
いるのなら、魂だけの存在になった場合、魂は無に対して無防備に
なると言う事。

結局は個人と言うものがなくなり、無限の自由意味はあまりない。
……でも、もし仮に無防備になった魂を守る事が出来る技術があ
るなら……

そんな事も考えた事もあったが……どれも仮定の話であり……最
終的には自分で自分を馬鹿にして考える事を止めたんだが……

思わず空を見上げるが……当然そこに何かがあるわけじゃない。
運命を変える選択。

……確かに……サヤが関われば死の運命は変わる。

死ぬ事を選べば、くだらなくてままならない世界から解放され……
……きつと、何にでもなれ、何でもできる様になるんだろう。

酷く魅力的な選択肢だが……

生きる事を選べば、オウキの姿になった武装守護霊が得られ……

新たな死の運命を呼び込む。

酷く理不尽な選択肢だが……

どちらもサヤが一方的に言っている言葉に過ぎないが、現に武霊
と言う非日常に触れ、それによって死にかけているのは……夢であ
るなら覚めて欲しいが……そうやって現実逃避出来るほど俺は器用
じゃない。

………時間は、

「え？」

時間は後どれくらいあるんだ？

「夜衣斗が望むならいくらでも……」

そう言った後、力無く笑うサヤ。

「って言いたいけど……この状態はあまり長く維持出来ないわ」

……まあ、そりゃそうだろうな……今はまだ肉体を持つている身ならば、魂は肉体に準ずる……人が永遠と夢を見続けられない様にいつかは目が覚めるのは当たり前だし……何より、今は起きている状態なわけだから……どれだけの負担が肉体・精神に掛っているか……

溜め息一つ吐き、俺は空を見上げるのを止め、サヤを見た。

……サヤはどっちを選んで欲しんだ？

「私は……」

俺の、答えが分かり切った問いに口ごもるサヤ。

……まあ、一緒に死のうって言ったんだから……サヤの気持ちは明白だよな……

「もう」

じんわりと目じりに涙を浮かべるサヤ。

「もう夜衣斗には辛い思いをして欲しくないの……もう二度と夜衣斗に……あんな思いは……」

サヤはそう言って、涙を流し始める。

……ここが俺の心の中であるなら、いじめを受けていた時……死を望んだ時……ここにどんな変化があったんだろうか？……いや、そうでなくても、ここで全てを見て、全てを感じていたみたいだし……

俺は何とも言えない感覚になった。

喜ぶべきか、恥ずかしがるべきか、怒るべきか、悲しむべきか……色んな感情がごちゃまぜになって自分を押し上げる。

……そんな……よく分からない自分の感情だけど……
……ありがとう。

「え？」

俺の唐突な礼にキョトンとするサヤ。

……いや、そこまで俺の事を思ってくれる人？ は、サヤが初めてだからさ……

「……うふふ。何それ」

おかしそうに笑うサヤに、俺も釣られて笑みを浮かべる。

そんな俺に、サヤは再び優しい笑みを浮かべ、

「……………ごめんね……………夜衣斗を惑わす様な事を言っ……………」

私は、夜衣斗が例えどっちを選んでも……………夜衣斗の傍にいないからね。夜衣斗と言う存在がこの世界から消えるその時まで」

……………困るんだよね……………そんな事を言われてしまうと……………

死の自由の話と重なって……………死に対する恐怖が薄まる……………

……………

生きていても喜びと呼べるもののほとんどがアニメや漫画・小説などの空想の産物でしかなく、現実には辛いことや煩わしい事ばかり。それだけを考えれば、現実には何の価値も無い様に思える……………いや、実際に価値はない。価値は個人個人が後天的に付ける物だから……………今までの俺の人生の中で、現実には価値を付ける様な事柄を体験した事が無い。むしろ無価値・マイナス価値を付ける事が多かった。

両親の都合で幼い頃から引っ越しが多く、暗く引っ込み思案で恥ずかしがり屋な性格も災いして、引っ越す度に一人。

小学校に上がる前当たりで両親は一軒家に定住するが、仕事の都合でよく出張し、一人で過ごす事が年齢を重ねれば重ねるほど多くなり……………別に両親が居ない事に寂しさはそれほど感じなかった。出張の度に母親から電話が掛って来ていたし……………慣れていた……………ただ、定住しても友達と呼べる者はなかなか出来ず、出来たとしても直前の引っ越し続きの生活と生来の性格が災いして、どう接すればいいか分からず、自然と自己中心的な行動ばかりしていたと思う。

そのせいか、小学校高学年になる頃には俺をからかいの対象にする事が増え……………いじめとはいかないまでも嫌な事ばかりされ、僅かに出来ていた友達はそれを遠目から見ただけだった。

そのくせ、それが終わると友達のように接し……そんな行為が許せなかったが、それでも、その思いをぐっと堪えて、俺もそれを許容していた。

一人になる事が嫌だったんだと思う。

それは当時の俺には自覚の無い許容だったけど……今思えば、それは友達だったのか？とも思う。友達の形は人それぞれだが、俺の思う友達像は……少なくとも、互いのどちらかが困っていれば困っていない方が助ける……そんな関係を望んでいた。つまり、親友が欲しかったんだと、今は理解できるが……結局は親友なんて出来た事はなかった。

きつと俺が友達の作り方・接し方が分からなかったせい……中学に進学してからのからかいが発展したいじめが自他共に関係をより隔絶させた。

いじめられ、誰にも助けられず、友達と思っていた連中も小学校の時と同様に助けてはくれず、いじめていた連中がいわゆる典型的な不良だった為、周囲は寄り付きもなくなった。

追い詰められ、まともな精神状態を維持していたのか、今となつては疑問だが……結果、自殺を何度も試みてしまう。

最終的には、偶々遊びに来ていた……俺を兄と慕ってくれている両親の知り合いの娘さんが……いじめられている場面を目撃していたらしく、その子経由で大人にいじめが発覚し、大人達はいじめを何とかせざる得なくなり……いじめは終息した。

その後、いじめを受けていた時に一時的に不登校になっていた事が影響して、住んでいる場所から大分離れた県外の高校、しかも最低ランクの高校に進学せざる得なくなった。

最低ランクの高校なだけあって、大なり小なりほぼ不良か、いわゆる弱者しかおらず……また、いじめの影響で俺は他人対して自然と距離を取る様になる。

薄く接し、関わってこなければこちらから関わらず……おかげで去年は何もない一年だったが……一切記憶に残らない、思い出して

も何をしていたか思い出せない一年になっていた。

……こうして改めて自分の人生を思い起こして見ても……やっぱり価値を見いだせず……死の自由が酷く魅力的に思えてしまう。心の中で色々な思いがぐるぐると回る。

……だが、結局は昔と同じ、家族や親しい人の顔が浮かび……結局行き着いた思考は昔と変わらなかった。

俺の思考の、言葉にしていない部分も感じ取ったサヤは若干力無く微笑んだ。

「夜衣斗は……優しいね……」
俺が優しいね……

サヤの言葉に何とも言えない違和感を覚え、俺は苦笑した。
悪いなサヤ……こんなに心配してくれているのに、やっぱり俺にはどうしても死ぬ事は……もう二度と選べない。

そう心の中で決意を言葉にすると、

「うん……夜衣斗なら……きっとそう選ぶと思っていたわ」
悲しそうな笑顔を浮かべたサヤは、そう言ってミニチュアオウキを俺に差し出す。

「触って上げて」
サヤに促されて俺はオウキを……躊躇いがちに触った。
その次の瞬間、

小さな俺が誰かを見上げていた。

視界に入るその人の顔は、何故か霞みがかかっていて顔が分からない。

憶えていないんじゃない、思い出していない。
何故かそう感じた。

「一度しか見せないから、よく憶えているのだよ」
その人はそう優しく俺に言っ、数歩前に出た。
全体像と声からして、その人は男性。それもかなり高齢な人だと

分かるが……俺の知り合いに高齢男性がいた記憶がない。

その事実には戸惑いを感じていると、

「武装守護霊の基となったイメージを強く強くイメージして」
そう言った後、老人が呪文の様に言葉を紡ぎ出す。

「我が呼び声に応え、現れ、武装せよ。汝は

！武装守護霊　！」

何故か所々が聞こえない。

これも憶えていないんじゃないかと、思い出していないと感じたが

……

何故思い出せないのか、違和感を覚える忘却だが、どんなに思考を巡らせてもその部分は俺の中になかった。

不意に映像が途切れ、気が付くと、顔が見えない老人は同じ場所に立っていた。

何が変わっていると言う訳ではないが……

「これが武装守護霊の正式な具現化の仕方・『具現化トリガー』だよ」

そう老人が言った事で、時間が飛んだのは分かったが……？この記憶の不自然な欠如の仕方は……一体どう言う事なんだろうか？疑問が疑問を呼ぶが、過去の記憶なので答えが返ってくるわけじゃない、事は進行していく。

「これを君は、『君の言葉』で使いなさい」

俺の言葉で？

老人の言葉を思考するより早く、俺は記憶の世界から帰ってきた。そして、気が付くと手に触れていたミニチュアオウキが無くなっていて、どこにやったのかサヤに聞こうとした時、ふと背後に気配を感じ、振り返る。

そこには実物大？ になったオウキは片膝を付き、まるで本物の騎士の様に頭を俺に対して垂れていた。

これが俺の武装守護霊……

片膝を付いているとは言え、俺より大きいオウキに俺は少し圧倒された。

「呼んであげて」

背後からサヤがそう促す。

呼ぶ？

「夜衣斗の言葉で」

…… ああ…… そうか…… そうだったな……

さつき記憶の中で見た老人の言葉を思い出す。

所々欠けたその言葉が、何故か自分の中に、自分の言葉としてはつきりと在った。

その記憶の不自然さに強い違和感を覚えるが、

「大丈夫。それは夜衣斗が考えた自分の言葉だから」

そうサヤに言われると、自然と何故か納得出来た。

これが…… 俺の言葉…… オウキの具現化トリガー…… って、こんな長い言葉を言ってる暇ないぞ！？

「それも大丈夫。もう夜衣斗にはこの子の『守護』が付いているから」

その言葉と共に、

唐突に俺の意識は現実に戻された。

視界には、迫る無数の骨。

その光景に、俺は反射的に目を瞑ってしまい――

プロローグ『選択の武霊使い』 7

「な！」

自警団員の人が驚きの声を上げた。

……痛くない……

恐る恐る目を開けると……同時に、地面に落ちる骸骨犬達の骨。

？

「ば、『防御具現』！？ ば、馬鹿な！ き、君！ さっき、この町に！」

ちよ！ 何でそんな状態で驚愕しているんだこの人は！

「……初めてですけど……それがどうしたんですか？」

骸骨犬達の動きを警戒しながら、俺はとにかく自警団員の人を落ち着かせる為に、言葉を口にしながら、

「う、嘘だろ？」

？

「……そんな嘘を言う必要がどこにあるんです？」

骸骨犬達は、自分達の攻撃が防がれた事を警戒してか、慎重に発射した骨を引き戻し、周りをうろろし始める。

「ば、馬鹿な……武霊は、通常、い、一カ月以上この町に、いないと、憑かない、はず」

一カ月以上町にいないと憑かない？ ……なるほど、つまり、武

霊は『星波町限定な存在』って事か？ ……んゝもしそうなら、サ

ヤが捕まえたって事か？ ……何であれ、もし、本当に星波町限定

なら、『何らかの理由』で『武霊に関する事が町の外に出ない』？

……じゃなきゃ、こんなのが出て来るのに、日本、いや、世界中が大騒ぎしないのはあまりにも不自然過ぎる……不自然過ぎるが……

今は情報が少な過ぎて、何の予想も出来ない『何らかの理由』に、俺は底知れぬ不安を感じた瞬間、自警団員の人ガクリと膝を付く。

同時に、何故か剛鬼丸の姿が霧散し、消え去ってしまった。

俺は慌てて自警団員の人を支えようとするが、自警団員の方は手でそれを制して、

「と、とにかく、い、今は、い、今の武霊を使って、逃げる……で、出来るだけ、は、早く、と、遠くに」

そんな事を言いながら、ゆっくり地面に倒れた。

「うう！」

同時に、身体に突き刺さっていた骨が引き抜かれ、骸骨犬肋骨に戻ってしまう。

骨が引き抜かれた事により、大出血を想像したが……出血は一切なかった。

つまり、それだけ中が焼かれてしまったって事で……このままじやまずい！　だ、だが、ど、どうすれば！？

目の前に迫る他人の死に、俺が動揺した瞬間、骸骨犬達が一斉に俺に向かって襲い掛かってくる！？

その瞬間、オウキの腕だけが具現化し、骸骨犬達を殴り飛ばして、霧散した剛鬼丸同様に霧散して消えた。

な！？　え！？

今起こった事と、どう見ても死に掛けている自警団の人にパニックになるが、

（夜衣斗、落ち着いて）

サヤ！？

（思い出して、オウキは何？）

オウキは？　……そうか！　オウキなら！

一瞬だけ具現化したオウキに吹き飛ばされた事により更に警戒した骸骨犬達は、一斉に遠吠えをし出す。

その意味を考えるより早く、俺は思い出した具現化トリガーを使う為、

（夜衣斗、強く、強くイメージしてあげて、オウキの姿を、機能を、その全てを！）

イメージするのは、白銀の鋭角的なフォームの騎士甲冑！

人類を守護する為に造られた俺の物語『王継戦機』の主人公！

「我が呼び声に応え、現れ、武装せよ、今は名も無き守護霊！」

契約者の意志力をエネルギーやナノマシンに変える『ライオンハート機関』を持ち、そこから作られたナノマシンを血の様に体中に流し、機械でありながら生物の機能を持たせる『ナノマシンプラットフォーム』で構築された躯体を駆り、

「汝は機械の王にして、全てを守る王の騎士！」

自身のナノマシンを消費して自身武器と従者を作り出す守護機騎シリーズのアーキタイプ！

「武装守護霊」

汎用防衛型守護機騎ナンバー0

「オウキiiiiiii！」

その瞬間、俺の背後から飛び出し、俺を守る様に立つ巨人の背。

何度も、何度も思い浮かべ、想像してきた物語の主人公。

そして、何度も、何度も焦がれ、望み、心の支えにしてきた主人公。

度重なる引越しの時、両親の出張の時、いじめを受けて来た時、何も無くなった時、俺はオウキを主人公にした物語を考える事で何度も助けられた。

このオウキが、俺の思い描くオウキそのものではない事は……分かる。

別の何かが、オウキの姿になっているだけだと……だが、それでも……嬉しかった。

心の底から嬉しかった。

空想の存在が、現実目の前にいる。

そっとその背中に手を置くと……当たり前だが、触れる事が出来た。

ひんやりとした金属の感覚ではなく、僅かな温かみを感じる優しい感覚。

オウキは設定上ナノマシンにより構成された金属細胞で出来てい

る。

だから、生きている反応がある程度あって……ここまで再現されている……何とも言えない感情が湧きだし、今、俺が置かれている立場を一瞬、忘れてしまった。

そんな俺の耳に、

「は、早くに、逃げろ……は、『はぐれ化』が、は、始まってしまっ」

そううわごとの様に言う自警団員の人の声が入り、言葉の意味を理解しようとした瞬間、周囲に更に大量の骸骨犬達が降り立った。

つく！ こんなにいたんじゃ……

（夜衣斗！ まずはこいつらを何とかしましょう）

だが！

（大丈夫！ そう言う『設定』でしょ）

しかし！ ……ああ！ もう！ ええい！ つまり、『そう言う

のも完全に再現されている』んだよな！

（ええ、そうよ！）

なら！

「オウキ！ 弾丸セレクト！ 冷凍弾！ セレクト！ 二丁拳銃！」

俺の命令に、両腕内側の装甲が開き、二丁拳銃がそこから飛び出し、オウキの両手に収まった。

オウキの両肩・両腰・両腕には『簡易格納庫』と名付けているものがあり、それを使う事でオウキは体内のナノマシンを新たな武器・兵器・兵装に構築して出す事が出来る。

そして、腕の簡易格納庫は主に武器・防具を出す場所で、今出したのはオウキ専用の拳銃。

更にマガジンの中には、

オウキが二丁拳銃を手に収めると同時に、連射！？

装填されていた冷凍弾が骸骨犬に当たると同時に、弾頭が弾け冷凍ガスが四散し、瞬く間に骸骨犬を吹き出している炎ごと凍らせる瞬

間を、俺自身の視界以外の視界で見た。

な！　なんだ今のビジョンは！？　ってか、俺、命令してないぞ！？　どう言う事だ！？

（夜衣斗。この子と夜衣斗はもう魂と魂が繋がっているの。だから、夜衣斗の思った事はこの子に伝わるし、逆にこの子が思っている事も夜衣斗に伝わるわ）

俺の疑問にサヤが答えてくれたが……なるほど、さっきの視点はオウキから送られてきたもので、俺が口にするより早く行動したのはそう言う理由か……便利だが……サヤ同様にプライバシーが全く無いな……

（うふふ。平気よ夜衣斗。夜衣斗がどんな趣味でも私達は受け入れているから）

……随分寛容的な事で……

一瞬、自分の趣味などを思い浮かべ引きつった笑みを浮かべてしまったが……今はそんな場合じゃないよな……その話は後で十分に話し合うぞサヤ。

（もう。気にしなくてもいいのに……）

俺が気にするんだ！　とにかく！

オウキが次々と骸骨犬を凍らせているのに、次々と新たな骸骨犬が現れて、オウキだけでは撃ち切れないと判断。

「セレクト！　PSサーバント！」

俺の命令に、オウキの右肩装甲が開き、そこから小さな円盤が飛び出した。

両肩の簡易格納庫からは守護機騎シリーズ専用の半自立小型遠隔操作兵器『サーバント』を出す事が出来て、サーバントはその種類ごとに何らかの特化した機能・性能を持つ万能兵器。

そして、今出したPSサーバントは、『要人保護強化用サーバント』。

オウキから飛び出したPSサーバントは、そのまま俺の背中に移動し、くっ付いた。

くっ付くと同時に円盤の装甲が開き、そこから無痛針が付いたチューブが無数に現れ、俺の胸・首・手首・足首に刺さり、身体機能強化・機械同調用ナノマシンが注入される。チューブが出た場所とは違う場所から黒い液体の様なナノマシンが出て俺の身体を瞬時に覆い、着ている服を分解して、瞬間に俺の格好をマントとタイツとスーツが一体になった様な姿に変化させた。

これは一種のパワードスーツで、^{パワードスーツ}PSサーバントは内と外から装着者を強化し、オウキとオウキが出す機械と同調する事が出来る。これを使って、俺はオウキと同調。

「PSサーバント！ 弾丸セレクト！ 冷凍弾！ セレクト！
二丁拳銃！」

PSサーバントの機能を使って、両腕のスーツの一部を変化させ、二丁拳銃にし、構え、思考制御で自動射撃モードを起動。

その瞬間、俺の視界にターゲットサイトが無数に現れ、オウキが狙ってない骸骨犬にロックオン。

同時に手足が勝手に動き、普段の自分では絶対に出来ない動きでオウキと背中合わせに、回転し、共に連射。

互いの位置が入れ替わると同時に、オウキの弾丸が切れる。

オウキは素早く弾倉を地面に落とし、腕の簡易格納庫から新たな弾倉を出し、両腕内側を合わせる様に平行移動させ、弾倉を交換。

再びオウキが射撃に加わると同時に、俺の方の弾丸が切れる。

俺の方は腰の部分のスーツを弾倉に変化させ、素早く交換。

……普段の俺ではまずありえないなめらかで素早い動きに、自分の身体なのに、自分の身体じゃない妙な感じになり、眉を顰める。

これだけ動いているのに、息一つ切れていないのにも、激しく違和感を覚えつつ……さっきまでは、ちよつと全速力で走っただけで息が上がってたのにな……

そんな事を思いながら、PSサーバントとオウキの全身至る所に付いた極小カメラである『副眼カメラ』を思考制御で起動し、周囲を確認。

いきなり複数の視界が出来た事に、一瞬面食らうが、P Sサーバントを着ている影響か、特に違和感なく周囲を見れた。

ゴロゴロと転がる凍った骸骨犬達の上に、まだまだ途切れることなく骸骨犬達が降ってくるが、凍った骸骨犬達が邪魔で、新たに現れる骸骨犬達の動きが鈍くなっていた。

今がチャンス！

そう思った俺は急いで自警団員の人を確認。

弱弱しく息を吐いてはいるが、完全に意識を失っている様だった。本当に大丈夫なんだろうか？

そんな不安を感じながら、俺はオウキに『自警団の人を助ける為の命令』を出そうとした。

だが、その時、不意にぞくつとした気配を感じ、その気配のした方向に反射的に顔を向けると……直前まで副眼カメラで確認していた自警団の人が倒れている場所だった。

そこでは、倒れている自警団の人の背中から半透明の剛鬼丸がゆっくり姿を現していて……

唐突にオウキが拳銃を勝手に収納し、素早く振り返り、俺を抱き抱えた！？

あまりの唐突振りに啞然としてみると、オウキが膝を曲げ、ジャンプした。

しかも、家の屋根をあっさり越え、何倍以上の高さまで一気に上がる。

急激な上昇による強烈なGで一瞬くらつとしたが……続け様にオウキが俺にある装備のイメージを送って来た。

意味が分からないが、流石にこのまま落ちるのは嫌だったので、
「セレクト！ ウイングブースター」

ウイングブースターは、オウキの背中に簡易格納庫と同じ仕組みで収納されている飛行兼潜航用ブースターで、羽毛の様に細かく細かいブースターが本当の翼の様に付いているので、傍から見れば本当の翼がオウキから生えた様に見える。

ウィングブースターを展開したオウキは、上空に留まると同時に、足下で強烈な閃光が生じ、遅れて凄まじい爆発音と衝撃が生じた。激しい衝撃と爆風をオウキが上手くいなし、爆風がある程度収まるの見計らって足下を確認すると………え？足下に見えた光景に俺は絶句した。

プロローグ『選択の武霊使い』 8

先程まで民家が立ち並んでいたはずの場所に、巨大なクレーターが出来ていた。

……その中心に主人を踏み付けている剛鬼丸がいて……ど……どうなってるんだ！？ 剛鬼丸は自警団の人の武霊じゃないのか？

素直に自警団の人の命令に従っていた剛鬼丸と、今の自警団の人を踏み付けている剛鬼丸の、あまりにも差があり過ぎる光景に俺が激しく動揺したが――

ふと自警団員の人が倒れる前にうわごとの様に言った『はぐれ化』と言う言葉を思い出した。

もし、仮に、はぐれと呼ばれているあの骸骨犬が、オウキと同様に武装守護霊だったとするなら、その違いは、『人に憑いていない』事。

人に憑いていないから、人に憑く事が出来なかったから、人にはぐれてしまったから……はぐれ？

そう考えると、目の前で起こった剛鬼丸の姿と対応がしっくりくる。それに……

サヤ。

(何？)

武霊は何を糧に存在しているんだ？

(意志力じゃない？)

……意志力ね……要するに、人が何かを成そう・しようとする思いか？

(うん。多分、そんな感じ)

……何だか随分曖昧な感じだな……

(私は夜衣斗の運命を変える選択だけど、全部が全部知ってるわけじゃないし、言えない事もあるのよ？)

言えない事？

（言ったでしょ？ 私は運命を変える選択だから）

サヤの行動一つ一つが新たな運命を呼びかねない？

（そう言う事。理解した？ 納得した？）

まあな……ん？だとすると、人から武霊が離れば、あるいは人に憑いていなければ………当然、お腹減るよな？

（ええ、そうね）

じゃあ、骸骨犬達が襲い掛かってきたのは、俺を喰らって意志力を得る為？

（そうじゃない？）

……だよな……

サヤと心の中で会話中も、剛鬼丸はずっと主人である自警団の人を踏み付け………ゆっくり周りを見回していた。

じゃあ……

不意に、剛鬼丸がこっちを見上げた。

はぐれになったばかりの武霊は……

何だか剛鬼丸と目が合った気がした。

お腹が減ってるのか？

そう思うと同時に、盛大な嫌な予感に襲われた。

その瞬間、いきなりオウキが俺を空中に放り投げ、勝手に両腕の簡易格納庫から大きなレンズが付いた金属のリングを出し、リングは腕を回る様に出てきた腕の手首に装着。

装着と同時に、手首周辺に円形の僅かな空間の歪曲が発生し、両手首を自分の手前に合わせた。

その瞬間、空間の湾曲が一気にオウキを覆うほど広がり、瞬間、

俺の視界からオウキが……へ？ ……いなくなった！？

慌てて副眼カメラを起動させ、全方位を見ると、クレーターの中央には自警団員の人しかいなくなっており、剛鬼丸はいつの間にか俺より上空にいて、自然落下していた。

そして、オウキは俺から大分離れた場所で飛んでいたが………アイムシールドが壊れてる！？

オウキの両腕に装着されたリングは、『アームシールド』と名付けられたリングに付いたレンズから不可視の力場を発生させる事が出来る防具で、二つを合わせる事でより強力なシールドを張る事が出来るはずだったんだが……両方のアームシールドのレンズが粉々に砕け、空間の湾曲が無くなっていた。

な、何をされたんだ!?

あまりにも一瞬な事に、俺が驚愕していると、オウキの視点から見た剛鬼丸の行動が送られてきた。

魂? 経由ではなく、PSサーバント経由での映像だったので、俺は咄嗟にPSサーバントのクイックアップ機能を起動。

これにより、脳内に入ったナノマシンが一定時間思考速度を上げ、周囲の光景がスローモーションになった。

よし、この機能もちゃんと再現されてる……これで余裕を持って何が起きたか見る事が出来るが……

送られてきた映像を、副眼カメラとは違うPSサーバントの電腦空間を見せる『脳内ディスプレイ』で再生しようとしたが、何故か脳内ディスプレイの中が文字化けで一杯になっていた。

これでは脳内ディスプレイでPSサーバントの機能を細かく操作する為のアバターを、どこに動かせばいいかさっぱり分からない。

音声操作で操作し様にも、あくまで思考速度を上げているだけなので、喋る事が出来るわけなく……ど、どうしよう……と言つか、俺、こんな風に脳内ディスプレイが成っているなんて想像してないぞ? どう言う事だ?

(多分だけど)

うわ! 何で思考加速している状態で話し掛けられる!?

(何でって……私は夜衣斗の中にいるのよ? 夜衣斗の思考が加速すれば、私だって一緒に加速するのは当たり前じゃない)

……そういうものか?

(そういうものよ。理解した? 納得した?)

まあ……多分………っで? 何が多分なんだ?

（うん。多分だけど……『あの子』、コミュニケーション能力に『制限』が掛けられているんじゃない？）

制限！？ 何で？ 誰に！？

（さあ？）

さあ？ って……

（言ったでしょ？ 全部が全部知ってるわけじゃないって……でも、少なくとも『この町では』武霊はコミュニケーション能力に制限を掛けられてしまっているのは間違いないんじゃない？ 『あの子』、さつきから一言も喋ってないでしょ？）

そう言われてみれば……俺の作った物語の中ではオウキはちゃんと喋っているはずだしな……剛鬼丸だって喋れそんな人形なのに、自警団員の人の呼び掛けを動作で応えていたな……って、そんな事を冷静に分析している場合じゃない！ どうするんだ！？ 何されたか分からないくっちゃ、いや、それ以上に、『脳内ディスプレイがまともに使えないとなると、オウキの機能をフルに使えない』！（うん。それだったら大丈夫）

は？

不意に、脳内ディスプレイ内にサヤが現れ、何が書かれているか分からないボードを指差す。

（これが映像再生のボタンよ）

……本当に？

（私が夜衣斗に嘘を言っただけなのよ？）

……まあ……確かに……

俺が分からないのに、サヤが何で分かるのか疑問に思いつながら、思考制御で脳内ディスプレイ内のアバターを動かし、サヤが指し示すボードを押す。

すると、正しく映像再生ボタンだったのか、オウキから送られた映像が脳内ディスプレイ内に流れ出す。

（ほらね）

んー……何やら納得いかないものが多々あるが……とにかく、あ

りがとうサヤ。

（どういたしまして）

思考が加速している影響か、それともオウキが気を利かせたのか、
オウキから送られてきた映像はスローモーション映像で……うわ……
マジかよ……

ブローグ『選択の武霊使い』 9

俺をオウキが投げられた瞬間、剛鬼丸の背中の鎧が唐突に開き、ゆっくりと後ろに倒れる。

剛鬼丸の角度が丁度オウキを正面に捉えた瞬間、閃光が生じた。そして、とてつもない速さで剛鬼丸がオウキへと突撃。

ギリギリ展開し終えていたアームシールドと衝突。

ウイングブースターの出力を一瞬の内に越え、弾き飛ばされるオウキ。

何とか体勢を立て直せたが、超高速での突撃はあっさりアームシールドの防御力を越えたのか、直後にシールド発生装置であるレンズが両腕とも壊れた。

俺は思わず眉を顰めようとして、中々動かせない事に気付き、止め、思考の中で深いため息を吐いた。

何かの本で、宇宙船の推進力として光を使おうとしている研究がされているって読んだ事がある。

つまり、剛鬼丸の超高速突撃をする前に起きた閃光や、大きなクレーターを作った強烈な閃光は、剛鬼丸が鎧の下から発した『レーザー光線に近い光』って事なんだろう。

俺は副眼カメラをもう一度使って、自然落下中の剛鬼丸を見る。

丁度こっちに背を向けている体勢だったので、容易に開いた鎧の下を見る事が出来た。

鎧の下を確認して、俺はまた顰められない眉を顰めようとして、代わりに再び思考のため息。

剛鬼丸の背には、ちよつとグロテスクな目が在ったからだ。

それだけ見ると、軽いホラーだが……その目から閃光が発せられるのだろう。

そして、直ぐに再生する鎧は、その目の瞼の役割をしているって

事が……何だか、目からビームを出すアメリカンヒーローを思い出すな……って！ そんな悠長な事を考えている場合じゃないだろう！ 相手が高速、いや、光速の速度で突撃してくる上に、オウキのシールドをあつさり破られるなんて――

（あ！ その事なんだけど）

……今度はなんだ？

（あの子が出したシールドアームって、あの子が勝手に出したじゃない？）

？ ……まあ、確かにそうだったが……

（だから、具現化率が低かったんじゃないかな？）

具現化率？ ……つまり、俺がイメージしないでオウキ自身が具現化させたから、意志力が足りなくて完全に『俺のイメージ通りに具現化出来なかった』って事か？

（うん。その通り。どう？ 理解した？ 納得した？）

つまり……だ。

不意にクイックアップ機能が停止し、周囲の光景が元の速度で動き出す。

クイックアップ機能は使用者の脳に大きな負担を掛ける為、一定時間が過ぎると勝手に止まる様になるって設定だったが……まだ思考がまとまってない！

反射的に剛鬼丸の方を見ると、背中 of 鎧を閉じ。落下中でありながら器用に体勢をこっちの方に換え様としていた。

っげ！ 今度の狙いは俺！？ つく……させるかって！

「セレクト！ シールドサーバント八機！」

落下しながら出した俺の命令に、俺の下へ駆け付けようとしていたオウキの両肩が開き、そこからサーバントの一種・防御型サーバント『シールドサーバント』が八機飛び出し、剛鬼丸を囲む。

「キューブゲージ！」

剛鬼丸を取り囲んだシールドサーバントの装甲が開き、そこから巨大なレンズが露わになり、オウキ専用シールドと同じ性質だが遙

に威力が高く、範囲が広い力場のシールドが展開される。

そして、シールドとシールドが重なり合い、剛鬼丸を中心にした力場の檻が完成した。

瞬間、剛鬼丸から閃光が生じ、こちら側のシールドにひびの様な物が入り、中で反射しているのか、次々と別々の方向にひびが入る。つて！ サヤの言う様に大丈夫だったけど、それでも駄目じゃん！

（なら夜衣斗！）

分かってる！

「シールドモード変更！ 固体から気体に」

シールドの力場には三つのモードを設定していて、それぞれに液体・固体・気体とその特性を象徴した名前を付けている。

液体が、流動的に力場が展開されていて、力場が常に流れている。その為、柔軟性があっても脆い。だが、直に修復出来る特性があるので人を受け止めたり、柔らかい・脆い物を受け止めるのに適している。

固体が、展開されている力場が固定されていて、柔軟性は全くない。が、その分液体より硬く、対象を拘束するのに向いている特性がある。力場が固定されているので、破壊されるとガラスが砕けた様にひびが入ったりする。つまり、今使っている相手を取り囲むフオーメーション・キューブゲージで使われるのはこれ。

気体は、力場が常に放出され続けていて、最も強固な上に、攻撃されて力場が相殺されても、次々と新たな力場が展開されるので、よほど強力な攻撃でない限り、消える事はない特性を持っている。ただし、常に放出されている為、力場に触れると弾かれ、破壊されるので守る事にはあまり向いていない。

まあ、何と言うか……これを考えたのが、幼い頃だったの……色々足りない・デタラメな部分がある様な気がするが……それすら具現化してるんだよね……凄いと言うか、でたらめと言うか……キューブゲージのひびが一気に消え、弾かれるスピードが落ち、剛鬼丸の姿が視認出来る様になると……剛鬼丸はシールドに弾かれ

る度に鎧にひびが入り、砕け、その下の目が無数に生えている肉体が露わになり始めていた。

よし、これで少しは時間を稼げるはず……

「PSサーバント！ セレクト！ ウィングブースター！」

俺の命令に、PSサーバントのマントがオウキと同じ、ただしこっちは黒色のウィングブースターになり、俺の自然落下を止め、自分の目で自警団員の人の姿を探し、剛鬼丸が突撃した時の閃光で元いた場所からクレーターに落ちていた姿にぞっとした。

（夜衣斗！ 早く！）

分かってる！ 頼む！ 間に合ってくれよ！

「オウキ！ セレクト！ ヒーラーサーバント！」

プロローグ『選択の武霊使い』 10

俺の命令に、オウキの両肩からシールドサーバントより少しごてごてした感じの円盤・治療用サーバント『ヒーラーサーバント』が一对現れる。

治療用の名の通り、怪我人だけでなく、脳が壊れていない限り『死んだ直後の死人』も蘇らせる事が出来るんだが……

本当に治す事が出来るのか不安に思いながら、ヒーラーサーバントの動きを見守る。

自警団員の人の上に移動したヒーラーサーバントの片割れの装甲が開き、そこからシールドサーバントより小さなシールド発生装置であるレンズが現れると、自警団員の人の身体が浮き上がる。

浮き上がった事により開いた下に残った片割れが入ると、機体の各所から針が付いた細い管を大量に出し、自警団員の人の身体の各所に刺すと……頼む………あ！………おお！？

俺の見ている前で、自警団員の人の腹に開いた穴がどんどん塞がって行く。

更に止まっていた胸の上下もちゃんと動き出し………ほっとした。今までの人生で経験したことが無いほど、これでもかかって感じどほっとした………これなら自警団員の人はた――

助かる。

そう思おうとした瞬間、強烈な閃光が上空で発生した。

つく！ 最初に見せたクレーターを作った閃光！？

閃光が収まると同時に上空を見ると、全身の鎧を開いた剛鬼丸がこっちを見ていた。

その瞬間、ぞくつと、背筋が寒くなる。

「オ、オウキ！ セレクト！ ダブルアームシールド！」

俺の命令にオウキは壊れたアームシールドを投げ捨て、新たなアームシールドを両手に嵌め、俺と剛鬼丸の間に入った。

ほぼ同時に、剛鬼丸の鎧が閉じ、閃光！？

今度もオウキの姿が掻き消えるが、今回のアームシールドはサヤの言う様に壊れてはいなかった。

だが……

チラツと治療中の自警団員の人を見る。

腹に開いた穴はかなり塞がっていたが、まだまだ完治までには時間がかかる様に見えた。

ここじゃまずい……いつ、剛鬼丸のターゲットが自警団員の人に向かうか分からない……いや、それ以上に、あの全方位閃光に巻き込まれる可能性だってある。

副眼カメラには、周囲の町並みが映し出されており……さっきの家は留守だったみたいだから被害者は出てないだろうが……

心臓の鼓動が不意に早くなる。

さっきまではオウキが現実具現化した興奮と、剛鬼丸が襲い掛かってくる状況によって恐怖心を感じる暇はなかったが……これらの自分の行動に他人の命が関わってくる事に、それまで感じた事がない恐怖に近い感情が生じ……現実逃避したい。

（夜衣斗！　しっかりして！）

分かっている！　そんな事しない！　……ええい、これが俺に降り掛かる最初の死の運命なら！

思考制御でウィングブースターを操作し、フルパワー飛ばせる。

誰もいない海上へ！

自然落下中だった剛鬼丸は、その俺の行動に誘われ、慌てて閃光方向がこっちに向き切っていなかった為、方向は合っているが、大分離れた方へ閃光が走り、それがジグザクになって段々こっちに近付いてくる。

どうやら後ろの閃光で前に進み、前の閃光で急ブレーキを掛ける、を繰り返して空を飛んでいる様だった。

オウキへの突撃と言い……こんなでたらめな空の飛び方といい……
……とんでもない丈夫さだな……普通、あんな速度で動けば、五体が

バラバラにならないか？ …… まあ、何であれ…… このまま追って来い！

「オウキ！ セレクト！ シールドサーバントご！？」

剛鬼丸の誘導と邪魔の為にシールドサーバントを五十機出させようとした時、不意に意識の薄れを感じた。

原因が分からず一瞬困惑したが、

「五十機！」

強引に命令を口にし、五十機のシールドサーバントを、俺を守る様に追って来てくれているオウキから出させた。

シールドサーバント達が俺と剛鬼丸との間を邪魔する様に飛ぶ中、俺は必死に失いそうになる意識の薄れと闘い………何とか意識を正常に戻した。

……つまり、何かを具現化する度に意志力が消費されるわけか……それが例え、設定上備わっている装備とかでも………これは……かなりまずいな………だが、そうなると、逆に光明が見えたな……剛鬼丸がオウキと同じ武装守護霊なら、あの閃光もかなりの意志力を消費するはず………そうであるのなら、こっちが意志力を節約して逃げ切れば――

（んゝそれは多分、無理）

サヤの否定の言葉に、俺は眉を顰める。

（あの剛鬼丸は、この子と『具現化の仕方が違う』もの）

………どう意味だ？

（あのね。『この子』の『本体』は、今、『夜衣斗の中にある』の）

はあ？ 何言ってるんだ！ 現にオウキは俺の後ろに……

副眼カメラで後ろを見ると、確かにオウキはそこに飛んでいる。

（うん。でも、そこにいる『その子』は、映写機によって映し出される映像みたいなものなの）

映写機によって映し出される映像？ ………つまり、映写機がオウキの本体で、フィルムが俺で、スクリーンが現実で、映像が具

現化したオウキ？

（そうよ。理解した？ 納得した？）

理解はしたが……直ぐに納得は難しそうな話だな……それで？

剛鬼丸の場合はどう違うんだ？

（剛鬼丸の場合は、もう完全に本体が外に、あの剛鬼丸の中にあるみたいね）

本体が？

（うん。だから、『この子』と違って、具現化率百パーセントな上に、意志力消費も『今のこの子』より圧倒的に良いと思うわ……まあ、そうは言っても、意志力の供給源である武霊使いから完全に離れちゃってるから、その内霧散しちゃうのは間違ってるないけどね）
それでもこっちの意志力が尽きる方が早い可能性が高いわけか……
…間接と直接の違いによって生じる差か？ ……謎過ぎるな……
っ
て言うか、何でさっきからサヤはオウキの事をあの子だのその子だのこの子だの言ってるんだ？

（え？ だってそれは――）

サヤが何かを言おうとした時、丁度砂浜が見える場所に来た。
そして、視界に入った光景に、俺は思わず絶句してしまった。

プロローグ『選択の武霊使い』 11

眼下に見える砂浜には『現実では絶対に存在していないもの達』が激しい戦闘を繰り広げていた。

戦っている一方は、はぐれと呼ばれているであろう骸骨犬達だったが、もう一方の方が……もう、訳が分からないくらいぐつちやくつちや。

別に容姿の事を言っている訳ではなく、まるで統一性がないそれぞれがそれぞれ違った個体だったから思わずそう思ってしまったが……

様々な二次元作品に登場するキャラクターだったり、伝説とされる生物だったり、人より大きい動物だったり、何だか分からないものだったり……それらに命令しているっぽい人達が浜辺の近くの道路にわんさかいるし……なんじゃこりや!?

(武霊と武霊使いでしょね……)

それは分かるが……多くね!? 百は軽く超えてるぞ!?

(自警団が結成されてるぐらいだから、町の規模から考えたらこれでも少ない方じゃない?)

そうか! 自警団の人が町に一月以上とか言ってたもん……って事は、学園の方もか!?

(そう考えるのが自然よね)

……つまり、ゴールデンウィークが明ければこれ以上いる可能性が高いわけか……

とんでもない現実と可能性に呆然としながら、

……にしても何だか全員妙に疲れている様に見えないか?

(さっきの放送で昨日発生したって言ってたよね?)

ああ、なるほど、つまり昨日も似た様な事が起きていて疲れている訳か……そんなんで大丈夫なのか?

(人の心配をしている場合じゃないと思うけど?)

まあ、そりゃそうだが……

そんな会話を心の中でしながら浜辺上空を通り過ぎると、もつとも近くを飛んでいた『赤いドラゴン』に乗っている俺と同年代ぐらいのショートカットの少女がこっちに気付いた。

PSサーバントの視力調整機能を使っていなかったから顔は分らなかったが、どうやら驚いている様だった。

……そう言えば、自警団員の人も驚いていたな……

チラッと通り過ぎた浜辺の方を見ると、骸骨犬達が水蒸気を上げながら浜辺に上がる姿が見えた。

ここで戦っている人達は、海から来る骸骨犬達を迎え撃ってるのか……だとすると全員、自警団の人なのか？……自警団って名乗るぐらいだから、町の武霊とその武霊使いを覚えていって事か？（そうかもね……この子の『武装』は、とても目立つもの。知らなければ、当然気付くでしょね）

ん……まあ、今はそんな事を気にしている場合じゃないよな……

浜辺と人工島の上にある学園から十分離れた場所まで来た俺は、その場に急停止し、反転。

俺の視界に、シールドサーバント達に翻弄されながらこっちに近付いてくる閃光が入った。

……どうやらちゃんと追ってきているみたいだな……浜辺の武霊使いの人達に反応したらどうしようかと思ってたが……杞憂だったか？

（そうかもしれないけど……夜衣斗、本番はこつからよ？ 一体どうするつもり？）

どうするもこうするも……光の速度……まあ、実際にそこまで出ているかは疑問だが、少なくとも音速以上だよ……ふと思ったが、あの突撃、突風とか起こらないよな？

（何らかの力でキャンセルしてるんじゃない？）

だよな……じゃないと空気摩擦でとんでもない事になるだろうし

……つて事は、近くを通り過ぎてても何ともない訳か……突撃を直接喰らわない限り……なるほど……

俺は、空中に留まりながら、腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸すると同時に、再びクイックアップ機能を使用。

周囲がスローモーションになる中、剛鬼丸を倒す方法を考える。

オウキのシールドにぶつかっても、周りの鎧は壊れても、その下の肉体は傷付いている様子はなかった。

それはつまり、鎧の下の肉体はとんでもない硬さを持っているって事だ。

そんな硬い肉体を通す事が出来るオウキの武装なんてあったか？

……いくつか思い付くが、どれも動作が重い……あんなスピードで突撃してくる相手にどうやってそれを使う？それに、さっき意志力切れ？を起こしそうになった事を考えると、そうポンポン武装を出せる訳じゃない……だとすると、最小限の具現化で奴を倒さなくちゃいけない……考えろ、考えろ俺！こういう非日常の出来事を空想であろうと幾度となく考え、答えを作り出してきただろう？……俺なら、いや、オウキなら、きつと――

クイックアップ機能をフルに使い、俺は一気に剛鬼丸を倒す方法を考え付いた。

周囲の光景が元の速さに戻ると、

（夜衣斗……本気でそれをやる気？）

俺の思い付いた方法に、サヤは心配そうな声を上げるが……自分の身体が自然に震える事に、俺は苦笑し、

やりたかないが、今の俺にはこんな方法しか思い付かないんでな

……

（夜衣斗……まだ、選択の途中だわ……だから……）

躊躇うサヤが何を言わんとしようとしているか分かった俺は、

サヤ、悪いが、それはない。

（夜衣斗……）

生きられる可能性があるのなら、俺はそれに縋り付きたい。

こんな訳の分からない理不尽な非日常に襲われて、いきなり死ぬなんて冗談じゃない！

俺は、俺として、日常の中で、寿命を全うするって決めたんだ。まあ、そう決めた時は、色々な事への反発心とか、明確な理由はなかったが……いや、今も無いが……だが、それでも……

「生きたい！」

心の底から湧き上がる言葉を、中々震えが収まらない自分を奮い立たせる為に叫ぶ。

「ゴールデンウィーク明けに発売される雑誌を読みたい！」

「撮り溜めているアニメを見たい！」

「積まれているライトノベルを読みたい！」

「この間買った新作ゲームの続きをしたい！」

（夜衣斗？）

自分の中にある我欲を思い付く限り叫び、自分の気持ちを無理矢理上げる。

「なにより！ こうして目の前で現実として具現化した……俺のオウキの活躍を！」

小さく息を吸い、

「見たいんだああああああ！」

私欲我欲、見つともないっちゃありやしないが、今、俺に降り掛かっている死の運命は、俺のだけに向けられたもの。

自分を奮い立たせる理由に、自分以外を使うには向かないと思っただんが……そんな叫びを口にしながら、本当に心に浮かぶのは、家族や親しい人々。

死ぬわけにはいかない！

死んでしまいたいなんて思えない！

怖くても！

辛くても！

逃げ出したくても！

それでも！

戦え！

生きる事を！

『選択』しろ！

黒樹夜衣斗！

自分の心の中で自分の名前を叫んだ瞬間、ようやく覚悟が決まったのか、身体の震えが止まった。

（ごめんなさい夜衣斗。こんな時に惑わすような事を言ってしまった）

いいさ、結果、ようやく覚悟が決まった。

そう思いながら、唐突に自分の視界に目を隠している前髪が入る事にイラッとした。

俺は思わず前髪を掻き上げ、PSサーバントの頭部を守っているナノマシンで固定する様に思考制御。

クリアになった視界に、剛鬼丸が終に展開していたシールドサーバント達を抜けた瞬間が入り、

（もう私は何も言わない。ただ、これだけは言わせて……頑張つて夜衣斗！）

「ああ！ 頑張る！」

自然落下しながら剛鬼丸がこっちに身体を向けた。

プロローグ『選択の武霊使い』 12

剛鬼丸は飢えていた。

宿っていた主が死を迎えようとした為、糧となる意志力が途切れ
てしまった事により、恐慌状態になった剛鬼丸は、主の中から出て
しまい……そして、主の死の原因となったはぐれ達が周囲に沢山い
る事に気付いた。

自分の主を死へと追い込んだはぐれ達を見た剛鬼丸は、武霊が武
霊として持っていた本能が間違った形で爆発し、意志力を多大に消
費する必殺の全方位閃光を使ってしまった。

その瞬間、消費された意志力は一気に剛鬼丸の存在を維持する事
が困難になるほど消費される。

これによって、剛鬼丸の武霊としてのまともな思考は壊れ、ただ
ただ自らの存在を維持しようとする壊れた本能に支配され……剛鬼
丸は『はぐれてしまった』。

不幸なのか幸運なのか、剛鬼丸は自身が霧散する前に、全方位閃
光で倒した大量のはぐれ達の意志力を喰らう事が出来た。

それによって存在が安定したが、壊れた思考は、壊れた本能から
もたらされる『飢え』を満たそうと剛鬼丸を突き動かす。

意志力を多く喰らおうと、周囲を見回し……気付いた。

とてつもなく強大な、『意志力とは異質だが近い何か』を。

その『何かの気配』を感じるのには、空に二つ。

間を置かず片方に向かって本能的に突撃するが、防がれる。

閉じ込められ、防がれ、逃げられ、邪魔され、邪魔され、邪魔さ
れ――

もはや剛鬼丸の意識は、異質な何かの二つの気配しか追っており
ず、そして、それは『他のはぐれ』も同様だった。

剛鬼丸が突撃するより早くに、唐突に下の方から爆発音が聞こえ

た。

それも複数！？ しかも、途切れる事なく連続に！？

条件反射的に下を見ると、目の前に大きなあぎとを開けた骸骨犬が！？

だあああああ！？

咄嗟にウイングブースターの出力方向を変え、横に吹き飛ぶ様に飛び、回避。

だが、下から更に別の骸骨犬が迫っている事をオウキから送られてきたイメージで確認し、副眼カメラを使用し、思考制御でPSSバーバントの自動回避モードを起動。

副眼カメラに映る下の光景に、海が殆ど見えないほど飛んでくる骸骨犬達！？

ほとんどウイングブースターに振り回される様に避け続けるが、あまりの数に、自動回避モードにより回避し切れない骸骨犬が出てきて……その個体に警報のマークが付く。

俺は更に両手にずっと持っていた二丁拳銃を構え、自動射撃モードを起動させ、マークをターゲットサイトに変えてロックオン。連射して、冷凍弾で撃ち落とすが、副眼カメラで避けた骸骨犬達がこつちに向かって落ちて……じゃない！？ 全身から吹き出す炎でこつちに向かって飛んできている！？

気が付くと、下の海から次々と爆発する様に飛び出してくる骸骨犬と、上の空から炎で飛んでくる骸骨犬達に周囲を埋め尽くされていた。

そうなるともはや自動回避モードでもほとんど回避出来ない個体ばかりが出てきて、俺の腕がとんでもない速度で射撃・弾倉の入れ替えをし始める。

あまりの動きに、両腕に痛みを感じ始めた瞬間、閃光が走った。同時にオウキが剛鬼丸の光速突撃を防いだ事をイメージで教えてくれたが……しゃべれええええ！ いや！ 無理なのは分かっているけど！ とにかく！ 骸骨犬達ほとんどなく予定外だけ！

作戦通りに！

「セレクト！ ジャミングスモーク！」

俺の命令に、剛鬼丸の閃光突撃で錐もみ状態で吹き飛ばされていたオウキの肩・腰・腕の全ての簡易格納庫が開き、白い煙が吹き出し、一気に周囲を白一色の世界にした。

ジャミングスモークは、攪乱や妨害の為に使用するそれ専用のノマシンが含んだ煙で、この煙の中ではオウキに敵対している対象はあらゆる感覚・機能を阻害され、守護機騎やその守護機騎が守る対象の位置が分からなくなる。

そう言う設定だから……頼むから効いてくれよ……

そう祈る様に思いつつ、俺は次の行動に移った。

再びオウキにより突撃が防がれた事により、剛鬼丸は夜衣斗達から少し離れた上空で止まる事になった。

その為、オウキのジャミングスモークに巻き込まれる事はなかったが、それによって夜衣斗とオウキの位置を見失ってしまう。

一人と一体から発せられた『何か』の気配すら消えた。

それに一瞬動きを止めた剛鬼丸だが、すぐさまジャミングスモークの中に突撃。

全ての感覚が狂う事を感じながら、剛鬼丸はそれを特に気にせず、全方位閃光を放った。

強烈な閃光により、ジャミングスモークごと中にいた骸骨犬達も消滅。

ジャミングスモークが無くなった事により、感覚が正常に戻ると共に、前と後に『何か』の気配。

これによりどっちを狙うべきか一瞬の迷いで、動きを止めた剛鬼丸。

その隙を突いた前の夜衣斗と後のオウキが、一斉に二丁拳銃を撃つ。

撃ち込まれた弾丸は、狙い変わらず閉まろうとしていた鎧の隙間を

抜け、剛鬼丸の肉体に着弾。

だが、着弾した弾丸は、剛鬼丸の強靱な肉体に一切傷を付けず、ただ砕け、弾頭の『中身』を四散させるだけだった。

剛鬼丸は特にその事を気にせず、鎧を完全に閉め、狙いを前に居る夜衣斗に定め、突撃しようとした。

その瞬間、剛鬼丸は自身の鎧が開かない事に気付く。

剛鬼丸に打ち込まれた弾丸は、弾頭に強力な粘着性を出す液体が入っている『粘着弾』。

これが剛鬼丸の肉体と鎧の間に入り、ピッタリと動けなくさせていた。

鎧が開けなくなった剛鬼丸はもはや自然落下するしかなく、真逆様に落ちる。

骸骨犬と言うイレギュラーがあつたが、結果は作戦通り上手く行った。

剛鬼丸の光速突撃をオウキが防ぎ、ジャミングスモークで位置を分からなくさせれば、きつとジャミングスモークごと全方位閃光を放つ。そして、それによって開いた穴に粘着弾を打ち込めば、閃光を防ぐ事が出来、それによって『あの強固な肉体を通る攻撃』を使う事が出来た。

ちよつと上手く行き過ぎな感じがしなくもないが、これで！

俺が次の攻撃の為に行動に移ろうとした次の瞬間、

剛鬼丸が開かなくなった両腕の鎧を両手で握り砕き、掻き毟り、無数の目が付いた肉体を露わにさせた。

そして、両腕を広げ、閃光！？

瞬時に光の駒の様になった剛鬼丸が俺に向かってくる。

光による飛行ではなく、光によって回る自身の身体から生じる風力で飛んでいる様だったが……つく！早い！

俺が逃げようウイングブースターを操作するより早く、剛鬼丸が俺の眼前に迫る。

ほぼ同時にオウキが俺を助ける為に剛鬼丸の上に移動し、回転が最も弱い頭部へ拳を振るう。

拳が頭部に当ろうとした瞬間、剛鬼丸が回転を止めた!?

これによって剛鬼丸の位置が僅かにずれ、オウキの拳が空を切り、その勢いを殺せず、剛鬼丸の前に背中を向けて急降下。

オウキが自身の前を通り過ぎるのを剛鬼丸がただ黙って見ている訳なく、四肢を使ってオウキに抱き着く剛鬼丸。

閃光突撃に耐えられる身体から出される力は強烈で、瞬く間にオウキの装甲にひびが入る。

剛鬼丸はこれを狙い、俺に突撃してきたのだろっ。

何度もオウキに閃光突撃を邪魔され、全方位閃光を使えなくさせられたのだから、後はシールドが使えない接近戦しかない。

閃光独楽と言うべき回転には面を喰らったが、そっちの思惑通りに言っただのと一緒で、考えていた過程とは違うが、『結果は思惑通り』なんだよ!

オウキに抱き着いた剛鬼丸は、自身の剛力でオウキを抱き砕こうとした。

剛鬼丸の力は、岩を簡単に砕き、鉄すら引き千切るほど強力なもの。

そんな剛力に晒されれば、オウキの装甲はあっさりひびが入り、折れ曲がる。

剛鬼丸は勝利を確信した。

オウキを倒す事によって、剛鬼丸は意志力とは違う『何か』を喰らう事が出来る。

その『何か』は、喰らった剛鬼丸の力を更に向上させる。

そう剛鬼丸は『武霊としてのまだ壊れていない部分の本能』で感じていた。

力が向上すれば、例えば夜衣斗がオウキを『再具現化』しても、もはや剛鬼丸の敵ではない。

はずだった。

剛鬼丸は止めとばかりに、上体を反らし、折れ曲がったオウキの身体を引き千切ろうとした。

その瞬間、剛鬼丸の腹に何かが巻き付き、固定される。

剛鬼丸が自身の腹を確認するより早く、オウキと夜衣斗が唐突に『爆発した』。

至近距離からの二つの強烈な爆発に、何の抵抗も出来ず吹き飛ばされる剛鬼丸。

滅茶苦茶に身体が回りながら、剛鬼丸は自身の腹に巻き付いた物を確認する。

それはアームの付いた小型円盤で、剛鬼丸が見ている前で、その後ろに棒を形成し出す。

何をするつもりなのか剛鬼丸には分からなかったが、それに激しい危機感を覚え、腕から出力の小さい閃光を出し、体勢を整えると共に、取り憑いた小型円盤を引き千切ろうと両手を伸ばした。

だが、その手が小型円盤に届くより早く、剛鬼丸は背中に衝撃を感じた。

振り返って確認すると、湾曲した光景と直前まで剛鬼丸の行く手を邪魔していた小型円盤達。

シールドサーバント達によって多重に張られて造られたシールドの台。

そこに剛鬼丸は乗っていた。

更に横から他のシールドサーバント達が現れ、剛鬼丸の四肢を押さえ付ける様に多重シールドを発生させる。

これにより腹に付いている小型円盤に手を伸ばせなくなるが、剛鬼丸はそれでもいいと思った。

何故なら、剛鬼丸を身動きさせなくしている多重シールドは、触れているだけで剛鬼丸の鎧を削っている。

それはつまり、封じられた腕以外の個所の閃光が使える様になると言っ事。

なら、わざわざ抵抗する必要はない。

待てば、こんな奴らなんて一瞬で一掃出来る。

それが、剛鬼丸が剛鬼丸として培われてきた経験による、『油断』だった。

剛鬼丸の拘束が完了すると同時に、腹に取り付いた小型円盤も棒の形成が完了し、その瞬間、強烈な爆発が起きた。

ブローグ『選択の武霊使い』 13

剛鬼丸が自身の鎧が開かなくなれば、きつと自ら鎧を壊すと思っていた。

何故なら、剛鬼丸の鎧は超速再生が可能な鎧で、それは骸骨犬に襲われた時に確認出来ていたからだ。

なら、鎧を壊す事に躊躇いがあるわけがない。

だが、剛鬼丸が完全に鎧を元通りにするまでには時間が掛かる。

その間に、剛鬼丸は海に落ちるだろうし、そこに『ドッペルゲンガーサーバント』により作り出したオウキの『偽物』を差し向けるはずだったんだが……

ドッペルゲンガーサーバントはその名の通り、ドッペルゲンガーの様に指定した対象に化ける事が出来るサーバントで、化ける方法は主に二つ。一つは直ぐに化けられるが実体が無い立体映像。もう一つは、若干時間は掛るが実体もあるナノマシン。そして、今回はその二つを併用して使い、腹部のみを立体映像にし、そこにもう一つのサーバントを潜ませていた。

もう一つのサーバントの名前は『クラッシュアームCAサーバント』。

その名の通り、対象に取り付き対象を破壊するサーバントで、円盤にクワガタの角の様なアームがあり、それで対象に取り付いた後、強力な推進力機関が付いた杭を生成し、爆発する様に取り付いた対象に杭を打ち込む。

その二つのサーバントは思惑通りの結果になったが、いきなり空中で自身の腕の鎧だけを取り、独楽みたいに回ってくるとは流石に思い付いてなくて……慌てた『ステルスサーバント』で姿を消していた本物のオウキが俺の基に駆け付けようとした為、俺も慌てて偽物を差し向ける様に思考で命令。

ステルスサーバントはその名の通り隠密専用のサーバントで、自身だけでなく周囲の物体も任意にその姿を消す事が出来る機能を持

つていて、不意打ちを成功させる為に本物を隠していたのに、いくら事前に考えた作戦違う事になったからと言って、本物が現れたら全てが駄目になる。

その意図が通じたのか、オウキは駆け付けける事をぐつと堪えた……武霊の感情も武霊使いに伝わってくる事にちよつと面食らいながら、俺は剛鬼丸に気付かれない様に素早く『自分の偽物』から離れた。

ジャミングスモークを使って隠れると同時に、俺はオウキにCAサーバントと『二機』のドッペルゲンガーサーバントを出させ、それぞれの偽物の後ろから接着弾を撃っていた。

俺の偽物はほぼ念の為で、オウキの偽物だって、ただ単に気付かれないタイミングで偽物を作ったに過ぎなかった。

まあ、結果、俺の下に本物のオウキが駆け付けなかった理由が出来……それがなかったら駆け付けていた感じだったな……何か俺の考えていたオウキと『性格が違う』感じた。物語の方のオウキはどんな時でも冷戦沈着な性格だったはずなんだが……やっぱり中身は別物って事か？……まあ、とにかく、オウキの偽物による不意打ちは成功。

更に、自爆機能があるドッペルゲンガーサーバント二機の自爆で剛鬼丸を吹き飛ばし、作り始めていたシールドサーバント達の多重シールド拘束台の上に上手く落とす事が出来た。

そして、拘束台が完成すると共に、CAサーバントの杭が爆発する様に推進力機関を起動。

杭が一気に剛鬼丸の腹に打ち込まれるが、杭が半ばまで喰い込んだ所で……推進力機関が唐突に停止。

燃料が切れた！？

俺がそう思った瞬間、剛鬼丸は腕の閃光を放ち、拘束していたシールドを吹き飛ばし、両腕を自由にする。

そして、腹に巻き付いているCAサーバントに拳を放ち、壊すが、杭は既に半ばまで喰い込んでおり、剛鬼丸が引き抜こうとしてもビ

クともしない。

だが、剛鬼丸の剛力から考えて、そのまま放置すれば、いずれは抜ける。

なら！ 更に喰い込ませるだけだ！

「オウキ！」

俺の呼び掛けに応え、オウキが既に両腰出していた巨大なハンマー『ブーストハンマー』を振り上げ、剛鬼丸に向かって急降下。

落下とウィングブースターの推進力が加わった打撃が、狙い違わず剛鬼丸に打ち込まれた杭に当たる。

初めて聞く剛鬼丸の苦悶の叫びに……少々面食らいつつ、

「ブーストハンマー！ 最大ブースト！」

俺の言葉に反応したブーストハンマーが、打撃面の逆に付いた推進力機関を爆発させる様に起動させる。

そのあまりの威力に、剛鬼丸の身体が沈む！？

拘束台を作り出しているシールドサーバント達が、新たに加わった負荷に耐えられず、次々と霧散化し、終には全てのシールドが消滅し、剛鬼丸は海へと叩き付けられた。

……これじゃあ、どこまで杭が喰い込んだかわかんねえじゃん……もう少しシールドサーバントを増やすべきだったか？

そんな事を思った時、不意に意識の薄れを感じた。

しかも、シールドサーバントを大量に出した時の比ではないほどの薄れで……その影響か、唐突にオウキの姿が霧散する。

まずい！ 今、具現化が解ければ！？

そうは思っても、意識の薄れはどうしようもなく、終にはPSSサーバントまで霧散化し、元の格好に戻ってしまう。

当然、真つ逆様に落下し始める。

しかも、タイミング悪く、

真下の海で、丁度剛鬼丸が落ちた場所で、強力な閃光が生じた！？

ブーストハンマーにより海に叩き起こされた剛鬼丸は、海水で幾

分か速度が落ちはしたが、そのまま海底に叩き付けられる。

腹部には全て内部に喰い込んだC Aサーバントの杭。

もつとも、喰い込んではいても、剛鬼丸の身体にそれほど支障はなく、直ぐに体勢を立て直し、海底に立った。

そして、閃光を全て使える様にする為に全身を叩き始める。

ほどなくして、全ての鎧にひびが入り、後は掻き取るだけの状態になった時、不意に剛鬼丸の周囲に黒い球体が次々と発生した。

発生した黒い球体は直ぐに消滅したが、その後には、骨だけの骸骨犬。

はぐれが発生した瞬間だった。

つまり、夜衣斗はわざわざ『はぐれが生じるポイント』の上空に来てしまっていたと言う事。

それによって、夜衣斗は生じたばかりの骸骨犬達に襲撃される事になったのだが、今生じたばかりの骸骨犬達は、何故か夜衣斗ではなく、剛鬼丸に襲い掛かる。

牙が、爪が、骨が、剛鬼丸のひび割れた鎧に突き刺さるが、当然、その肉体には一切の傷を付けない。

はぐれ化を起こす前の剛鬼丸がした様に、はぐれ剛鬼丸も一体一体握り砕こうとした。

だが、星波海岸の方から、町に向かっていた骸骨犬達が現れ、更に剛鬼丸に襲い掛かってきた事により、そのあまり数の多さと密度で、身動きが取れなくなる。

夜衣斗とオウキから発せられる意志力とは違うが近い『何か』気配に、剛鬼丸同様に誘われ、ここまで戻ってきたのだが、その直前で、オウキは霧散化し、夜衣斗から『何か』の気配消えてしまった。これにより、剛鬼丸同様に飢えている骸骨犬達は、手近な意志力の塊である剛鬼丸に襲い掛かる。

まるで骨の団子になった剛鬼丸は、その状況から抜け出す為に、全方位閃光を放った。

これにより『今日発生した全ての骸骨犬』は消滅するが、その代

償として、剛鬼丸の全身は焼け爛れ、全ての目が潰れてしまう。

剛鬼丸の鎧は、防具として存在している訳でなく、その下の目から生じる閃光を制御する為に在った。

その為、鎧の内側は剛鬼丸の閃光を弾く様になっており、例えひび割れていたとしても、その機能が失われる事無く、結果、放った閃光の半分以上が自身に返って来ていた。

ぼろぼろになった剛鬼丸は探す。

全方位閃光によって倒した骸骨犬達の意志力を喰らったが、それによって身体を回復させられるほどの意志力は得られず、これまでに、まるで渴くほどに飢えた。

閃光により消滅した部分を補う為に周囲から海水が迫る中、渴くほど飢えた事により鋭敏になった感覚が、自分の方に向かって落下してくる夜衣斗の存在を気付かせる。

僅かしか感じられない意志力だが、そんな事は今の剛鬼丸には関係ない。

ただ、飢えを満たす為に、早く飢えを満たす為に、足に力を込め、飛び上がる。

夜衣斗を殺す為に。

閃光が消えた真下の海は、閃光によって海水が蒸発したのか、海底がむき出しの状態になっていた。

露わになった海底に、剛鬼丸が立っていたが、その姿は鎧の全てを無くし、爛れた全身を見せている。

その姿から、もう閃光は使えないだろうが……そんな状態になっても、身体活動に一切の影響がないらしく……落下する俺を見上げ、足を屈めて、飛び掛かってきた。

オウキも、PSサーバントも霧散化した俺に、それに抵抗出来る手段は無かった。

サヤの話が本当なら、オウキを再具現化させる事は出来るはずだが……もう……オウキを具現化させるほど……意識を集中させるほ

ど意志力が……ない。

絶望的な状況。

それを覆す新たな手段もない。

閃光を出す目が潰れていても、あの剛腕ならたった一振りの拳で俺は死ぬだろう。だが、

夜衣斗に迫る剛鬼丸が、

そんな状況なのに、

拳を、

俺は、

振り被り、

勝利を確信していた！

放った。

「CAサーバント！ ブレイク！」

プロローグ『選択の武霊使い』 14

夜衣斗が叫んだ瞬間、剛鬼丸の腹部に『霧散せずに残っていたC Aサーバントの杭』が爆発した。

C Aサーバントの杭には撃ち込まれた対象内部で爆発し、ダイナマイトで岩石を爆破して砕く様に、名の通り対象を破壊する杭だった。

更に剛鬼丸の身体は、確かに肉体は硬かったが、内部は通常の生物同様に柔らかい内臓が再現されて具現化しており、杭の爆発によって一瞬の内にして剛鬼丸の内部は掻き乱され、硬い肉体によって圧力が高められた爆発は、剛鬼丸の身体を瞬く間に四散させ、飛び散った肉体は霧散。

剛鬼丸は確かに夜衣斗の作戦通り倒す事が出来た。

だが、それによって生じた爆発は、至近距離まで迫っていた夜衣斗を木の葉の様に吹き飛ばしてしまう。

残った意志力を全てC Aサーバントの杭に注ぎ込んだ俺は、杭の爆発で生じた爆風で吹き飛ばされても、勢いを失い自然落下し始めても、一切の抵抗する気力を失っていた。

抵抗したからと言って、もはやオウキをイメージする事すら出来なくなっていた俺に、もはやどうする事も出来ない。

確かに剛鬼丸には勝利した。

そして、死ななかった。

つまり、死の運命を乗り越える事が出来た。

出来たが………っは……

力なく俺は笑う。

このままでは結局、海に叩き付けられて……死ぬ。

それほどの高さから俺は落ちていた。

剛鬼丸が関わる死の運命は退けたが、それによって別の死の運命

が生じたって事か？

早過ぎだろ……退けて即って……

薄れつつある意識で、そんな事を考えている俺の目に、海面が入り、迫るか――

軽い衝撃。

明らかに海面にぶつかった衝撃ではなく、目の前には、高速で動く海面？

ぐるっと回る感覚と共に、その慣性を利用して、抱き直される感覚？

「大丈夫ですか？」

掛けられた声に、俺は反応する事は出来なかった。

もう、意識が、身体を動かせるほど……ハッキリして……なく……無反応な俺に、声の主が顔を覗き込んだ。

薄れゆく意識の中で、はつきり鼓動が高鳴ったのを感じ……見るからに活発そうで可愛らしい顔付きの……弩スト――

自分の腕の中で意識を失ってしまった自分と同年代ぐらいの少年に、赤いドラゴンの武霊使いは困った顔になった。

「えっと……どうしよう？」

自分がその背に乗っている赤いドラゴンの武霊にそう声を掛けるが、赤いドラゴンは困惑のイメージを送ってくるだけだった。

「ん……それにしても、こんな凄い武霊使い、町にも、学園にもいなかったよね……今日覚醒した？……でも、それにしてはとも覚醒したとは思えない動きだったような……」

そんな事を呟きながら、少女はまじまじと少年の顔を見た。そして、

「あ！この人もしかして……黒樹……や……夜衣斗さん！？」
少年の名前を口にした。

プロローグ『選択の武霊使い』終了

剛鬼丸と死闘を演じた夜衣斗とオウキの戦い。

その様子を星波町に隣接して存在する星降り山中腹に建てられている廃校屋上で見ていた少年少女がいた。

「あは♪ とおゝても凄い武霊が現れたね♪」

「うん……でも、お姉ちゃんが欲しがってた武霊が……」

「いいのいいの。代わりにあんな凄い武霊が現れたんだから……うふふ……ホント、優しい弟だね」

そう言った姉と言われた少女は優しくに微笑み、弟と呼んだ少年の頬に手を当てた。

二人は姉弟と互い呼びながら、全く似ていない。

異様なほど色白で、見惚れるほど綺麗な腰まである長い黒髪に、見る者に戦慄を感じさせるほど妖艶な容姿の姉。

線が細いが健康的な肌の色をした美少年の分類に入る弟。

少なくとも血の繋がりが無いと分らせるほどに十分な違いが二人にはあり、普通の姉弟のではない事をうかがわせるのに十分だった。

だからなのか、弟の頬に手を当てていた姉は、不意に笑みの質を変える。

「欲しいの。とても……とても渴くほど、欲しいの……」

それまで妖艶ではあっても幼げな雰囲気を出していたのに、笑みの質が変わった瞬間、成人の、しかもより妖艶な雰囲気になり、弟

の唇を奪った。

されるがままの弟を姉はそのまま押し倒し、抑えられない『渴欲』を満たす為に――

激しい戦闘音が鳴り止むと同時に、男は数字を数え出した。

星波海岸に近い場所にある星波警察署。

その留置所にその男はいた。

武霊封じの文字で埋め尽くされたその留置所で、男はただ数字を数え続ける。

ぼさぼさ頭の髪で顔の大半が隠されている為、その表情は伺いしれない。

だが、この場所にいる事と、暴力だけで発達したと連想させる細身だが凶暴な身体付きを見れば、十分危ない人種だと理解出来る。

男の口元は歪み、数える速度がどんどん速くなった。

まるで暴れ回る『本能』を、数字と言う理性で抑え込んでいるかのように――

星波海岸の星波山側にある廃工場地帯で、その男は鎖でつながれ、冷たいコンクリートの床に倒れ伏している少女を見てにやついていた。

二メートル以上ある筋骨隆々の男のその後ろには、男の手下らしき者達が大勢おり、男と同様ににやついている。

そんな男の所に、外にいた手下の一人がやってきて、ビデオカメラを渡した。

男は無言でそれを受け取り、撮られている映像を再生。

そこには剛鬼丸と死闘を演じている夜衣斗とオウキの姿が映し出されていた。

「いいね……こういう強力な武霊が現れるのを待ってたんだよ」

男はそう言っ、ビデオカメラを持ってきた手下に投げ返し、

「こいつを徹底的に調べとけ」

鎖に繋がれた少女に近付き、鎖を持って強引に少女を立ち上げらせた。

「なるべく早く調べ上げろよ。暇潰しのこいつが完全に壊れちゃう前にな」

それまで、そして、これからも男達の『快樂』のはけ口にされるであろう少女は――

星波学園大学部校舎内の一室で、その男は思考に耽っていた。

異様に細い目に、常に微笑んでいるその男は、星波学園の生徒のみで構成されている学生自警組織『武装風紀委員会』・通称『武風』の委員長をしている男だった。

その男が思考に耽る少し前に、部下の武風委員が今回のはぐれ発生が終息した事を伝え、同時に新たな武霊使いが生まれた報告してきていた。

（二日連続ではぐれ発生に加え、まるでそれに呼応したかの様に現れた強力な武霊使い……『いよいよ』と言う事か？……だが、そうなる予想より少し早い……こちらの準備はまだ終わっていないと言うのに……）

そこまで考えて男は、部屋の窓を開け、そこから見える星波町を、いや、正確には山中にある廃校と、海岸にある廃工場を見た。

（不確定要素が強過ぎるが……この際、準備の足りない分を補う為に、利用出来るものは利用すべきだな……）

男はそう思い、先程の彼の部下から渡された新たな武霊とその武霊使い・オウキと夜衣斗の写真を見た。

写真を見る為に僅かに開かれたその目には、何ら感情が籠っておらず、それはまるで『支配』者の様な冷徹な目に見え――

星波学園小中高大統合部活同好会棟群の一つ、漫画同好部の部室で二人の少年が安堵のため息を吐いていた。

直前にはぐれの発生が完全に終息したと言う校内放送があったのだが、片目を髪で隠した少年が直ぐに表情を安堵から激怒の表情に変える。

「くそ！ 俺も武霊を具現化出来たら！ 俺がはぐれを全滅させていたのに！」

「……うん。そうだね……」

強い口調で激怒する少年に、もう一人の目の下に隈を作っている少年は若干上の空で相槌を打つ。

上の空の少年は、三階にある部室から、双眼鏡を使って見る事が出来た、見た事のない武霊の姿を思い浮かべていた。

「誰だか知らないが！ あの白騎士みたいな武霊の武霊使い！ ぜってえ調子に乗ってんよ」

「……………そうかな？」

嘲る少年に聞こえないぐらいの小声で否定の言葉を口にした少年は、その武霊の、やはり見た事がない武霊使いの必死な表情を思い浮かべ、

（あれだけ強くて見た事が無いって事は、今日初めて具現化出来たって事だよな……それなのにあんな強力なはぐれを倒しちゃうなんて……羨ましいけど……でも……）

比較的好意的な表情と感情を浮かべていた少年の顔と心に、僅かながらの『恐怖』が現れ――

星波町にあるマンション最上階の一室に、二人の男女がいた。

男は野性的な雰囲気を持つアイドル風で、女は凛々しいと言う言葉を体現したかの様な容姿。

そんな二人の前には、いくつもの鏡が浮かんでおり、さきほどまでオウキと剛鬼丸との闘いを映していた。

「……よかったね。今回も幼なじみちゃんが無事で」

そう力無く笑う女の視線は、赤いドラゴンに乗り、夜衣斗が海に叩き付けられるのを防いだ少女に向けられていた。

男は手を振り、浮かんでいた全ての鏡を消すと、無言で女を抱き寄せる。

女は特に抵抗せずに男の肩に頭を乗せ、

「……どうするの？ ……あの新しい武霊も？」

そう男に問うが、男は答えず、窓の外を見る。

その瞳は、決意に満ちており、大切なものを守ろう、何に変えても守ろうと、『守護』の決意に満ち溢れていた。

だが、その瞳の奥には――

星波駅近くにある第二地下避難シェルターから一人の少年が出てきた。

若干浅黒く、猫目な彼は、携帯電話で時間を確認し、

「やば！ バイトの時間に遅れちまう！ いそがねえと！」

そう言つて駆け出そうと携帯電話をポケットに仕舞おうとした時、携帯に着信が入った。

着信相手が誰か確認した瞬間、彼は電光石火の早さで出る。

「やあ。元気だったかい？」

少年がその声を掛けると、通話相手は苦笑したようだった。

「え？ そりゃ、俺は元気一杯さ……ん？ こっちの様子？ ……」

……そうだな……相も変わらず騒がしいよ……そう言えば……」

少年は先ほど見ていた地下シェルターの外部モニターに映っていた同年代ぐらいの新たな武霊使いを思い出し、

「すげえ奴が転校してくるみたいなんだよ……いや、学年はまだわかんねえけど……ん？ いや、バイトは」

電話相手にバイトの時間を聞かれたらしく、少年は悩んだ。

相手に断つてバイトに行くか、それともバイトの事は無視してこ

のまま会話を続けるか、彼はどちらを『択一』しようか逡巡し――

次章

第一章『渴欲の武霊使い』

小さな公園。

その場所で、幼い頃の小さな俺はブランコに乗りながら……泣いていた。

泣いている理由は……思い出せない。

とにかく辛い事があったのか、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながらブランコを小さく揺らし……終には揺らす事すら止めて俯き、地面に跡を作る。

どれだけ泣いた後か、ふと気が付くと、隣の空いていたブランコに誰かが乗っているのに気付く。

反射的に誰かを確認し様と顔を向けると、そこには某チキン屋の老人を彷彿させる白髪で立派な白髭を生やした老人がいた。

「何か悲しい事でもあったのかい？」

そう優しく語り掛けてくる老人。

普通なら警戒心を抱きそうな現れ方だったが、不思議と小さな俺は警戒心を抱かなかった。

幼かったせいか、それともその老人の優しい雰囲気のおかげ、とにかく俺はその老人に対して何があったか喋った……のだと思う。上手く思い出せていないのか、小さい俺の言葉は聞えず、ただ、老人の相槌の為に頷く姿のみが見える。

「大変だったね。でも、それに耐えた君は偉いよ」

小さい俺の話を聞き終えた老人はそう微笑んで、小さい俺の頭を撫でた。

その瞬間、老人の目が驚愕で見開かれる。

「な！……これは……そうか……君があの子達の……
なのか……だとすると、この出会いは……」

茫然とつぶやく老人。

意味が分からずきょとんとする小さい俺に、老人は再び優しい笑みを浮かべ、何かを言おうとした瞬間、映像が消え、ただ、声だけが聞こえた。

願わくば

君に与えた運命を変える選択が

あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を……

ブローグ『選択の武霊使い』 15（前書き）

現在、再リメイクを実施中です。

ここから先はまだ再リメイクをしていない一度目のリメイク版です。再リメイクの第一章が完成するまでしばらくお待ちください。

プロローグ『選択の武霊使い』 15

赤井 美羽

夜衣斗さんの提案に、美羽は驚いていた。

だって、いきなりはぐれとか訳からない化け物に襲われて、何でかは分からないけど武霊使いになっちゃて、味方だと思った剛鬼丸に今度は襲われる……美羽だったらきつとパニックになってる。

なのに、夜衣斗さんはパニックになるどころか、自分の武霊をあっさり操った上に、冷静に自分の置かれた状況を考えて、剛鬼丸を倒す為の作戦を考えちゃった。

なりたてなのに、何も知らないはずなのに、凄い……凄い『武霊使い』。

そう思うと、驚きを通り越して……憧れてしまいそう……やだ！
何考えているんだろう美羽は……

美羽は思わず顔を赤くしながら、夜衣斗さんの指示に従ってコウリュウを剛鬼丸の前に移動させる。

後は……

「行くよコウリュウ！ ……レベル2！」

飛矢折 巴

黒樹君の提案は、とても武霊使いになり立とは思えないほど自身の武霊を理解しているものだった。

それだけ武霊の基になったオウキと言うイメージに思い入れがあるって事なのだろうけど……黒樹君は怖くないのだろうか？

こんな状況に、あんな訳が分からないものに取り憑かれて……逃げられない、戦わなくちゃいけないこの状況を……

そう思っただけで黒樹君を見ると、黒樹君は両手を強く強く握っていた。まるで恐怖で震えそうな手を必死に抑えているみたい……そうよね……いくらありえない速さで武霊使いになったからと言って……

…黒樹君は男の子だものね……怖くても、あたし達の前でそんな姿を見せたくはないよね……そう言う男の子の部分を除いても……黒樹君は強い『人』だな……あたしなんかより……

あたしは黒樹君の背中を見ながら苦笑した。

あたしだつたら今の状況をこんなに直ぐに受け入れられないし、冷静に分析出来ない。

身体の動くまま、条件反射的に攻撃するのが関の山……

本当に、凄いな………そう言えば………こんな風に男の子の事を思ったのって……初めてかも……

そんな事を思っていると、唐突に黒樹君が振り返り………目が合った。

思わず心臓が高鳴り、つい視線を外してしまい………顔とか赤くなつてないかな？

そんな心配をしていると、コウリユウが剛鬼丸の前に移動し終わり、赤井さんの言葉と共にコウリユウの姿が変化した。

黒樹 夜衣斗

自分の考えた作戦を確実に実行する為に、冷静になろうとすればするほど、段々と恐怖が蘇ってくる。

さっきまでは立て続けに命の危機やオウキの具現化・剛鬼丸のはぐれ化などが起きたので………正直、冷静じゃなかったし、恐怖を感じる余裕なんてなかった。

だが、今は剛鬼丸が拘束から逃れるまで多少の時間がある。

現状を考えれば考えるほど、自分が考えた作戦の結果を予測すればするほど、不安がじわじわと心の中から湧き出し、恐怖感が増していく。

自分から『あんな作戦』を言い出した手前、恐怖で震える姿を二人に見せるわけにはいかない。

それが最善だと思っていながら、なんであんな事を言い出したのかと後悔する自分がいる事に気付いて、恐怖・不安にプラスして情

けなさも感じ始め……このままじゃ心の負のスパイラルに陥りそうだった。

武霊は武霊使いのイメージによってその姿を具現化させている。それはつまり、武霊の具現化率は武霊使いがどれだけ強くその武霊の姿をイメージするかによって決まると言う事。

実際、試しに少しだけオウキをイメージする事を止めたら、オウキの姿が少し薄れたので……これは間違いないと思う。

だとすると、俺の心が余計な事に囚われれば囚われるほど、オウキは弱くなると言う事……何と言うか、自分の精神力・意志力に自信なんか持てない俺に……この条件は正直きつい……最小限の意志力消費で行う作戦を立てたつもりだが……果たしてちゃんと持つんだろうか？ いや、そもそもちゃんと出来るんだろうか？

（大丈夫。夜衣斗なら出来るよ）

ふと背後にサヤの気配を感じ、つい振り返ってしまい、後ろにいた飛矢折さんと目が合った。

だけど、直ぐに視線を反らされ……ちょっと……いや、かなりシヨック……

そんな風にシヨックを受けていると、コウリュウが予定の場所に移動し終わり、美羽さんの声に応えて……レベル2になった。

どうも武霊には具現化段階と言うものがあるらしく、レベルが一段階上がる度に、その強さが増し、意志力の消費が激しくなるこの事。

レベル1が、基となったイメージより若干大きくなって具現化する『通常具現』。

今のオウキの事なのだろうが……イメージより若干人に近い大きさになるらしいが……変な話だよ……俺のオウキは『イメージ通りの大きさ』な気がするんだが……まあ、それを聞く時間はないが……

そして、今美羽さんが行ったレベル2は、通常具現化の何倍もの大きさにして具現化する『倍加具現』。

レベル1からレベル2には大きな隔たりがあるらしく、武霊使いだからと言ってレベル2の具現化が出来るとは限らないとか……つまり、そのレベル2の具現化が出来る美羽さんと一緒に居るのはかなりラッキーだったと言う事なんだろうが……前提が前提だからな……素直に喜べないと言うか……

そんな事を考えていると、コウリュウの姿がどんどん大きくなり、全長三メートルぐらいの大きさから十メートルぐらいの巨体へと変化した。

……なんか、現実にこんな巨大な生物を見た事が無いから……聞いてこうなると分かつてはいても……驚かざる得なくて……ふと海の方に大きな砂埃が上がっている事に気付いてそっちの方を見ると、砂埃から巨大な白犬が飛び出してきた。

……あれ……どう考えても武霊だよな……あんなのがこの町にはごろごろいる……ってわけじゃないのか……ん……今は深く考えない様にしよう。と言うか……

視線を剛鬼丸に戻すと後もう少しで鎧が完全に消滅する所だった。……もう、他がどうこう考える余裕はないな……出来れば、この最初の一撃で倒せる事を祈るばかりだが……

（油断は禁物よ夜衣斗。これは夜衣斗の死の運命。乗り越えるには）

オウキで乗り越えるしかない……だろ？

サヤの忠告に、俺はそう思いつつ溜め息を吐こうとした瞬間、剛鬼丸の鎧が完全に無くなり、無数の目を全身に生やした大鬼の姿が露わになった。

「美羽さん！」

赤井 美羽

夜衣斗さんの合図と同時に、剛鬼丸の全身の目が輝き出して、美羽達は全員目を瞑った。

剛鬼丸の後ろは海。

この位置ならコウリユウは最大攻撃力のブレスを吐ける！

「コウリユウ！ レーザーブレス！」

「え！？ レ？ ちょ！」

え？

美羽のコウリユウへの命令に、夜衣斗さんが驚きの声を上げ、制止の言葉を言おうとしたけど、その時には剛鬼丸が全方位閃光を放ち、コウリユウはレーザーブレスを吐いていた。

全方位閃光で周りのシールドサーバントと言う円盤達を消滅させた直後に、コウリユウが吐いたレーザー光線が直撃。

レーザー光線によって後ろへと一気に押される姿をコウリユウの目から確認した美羽は、これなら剛鬼丸をこの一撃で倒せるかもって思ったけど……直前の夜衣斗さんの驚きと制止の声が気になって……美羽には夜衣斗さんが何に驚いたのか分からなかったからだけ……その理由は直ぐに分かった。

だって、このまま『武霊の活動限界領域』の外まで押し出せるか、倒せるかと思ったレーザー光線が海の途中で止まって……まるで何かに吸い込まれるかの様に消えたから……えっと……どう言う事？

「美羽さん！直ぐにレーザーブレスを止めてください！」

「え？」

「早く！」

「は、はい！」

物凄く焦ってる夜衣斗さんの声に、美羽はコウリユウにブレスを吐くのを止めさせた。

そして、光線が完全に消えて現れた剛鬼丸は……

飛矢折 巴

コウリユウの光線攻撃を受けて海の半ばまで吹き飛んだ剛鬼丸は、全身の目をさつきとは比べ物にならないぐらい光輝かせながら落下していた。

……これって……もしかして、コウリユウの攻撃を吸収した！？

コウリユウの光線を吸収した剛鬼丸は、海に落ちるより早く鎧を急速に修復し、海に落ちた。

事前に聞いた黒樹君の作戦では、コウリユウの攻撃で剛鬼丸を倒せなかった場合、海の方まで押し出せていたのなら海に落下するでしょう。って予想していた。鎧が無いと閃光の放出方向を限定出来ないからって話だったけど……本当に言った通りになった……だとすると、この後は……

黒樹君が予想した次にかかる事を思い浮かべながら、剛鬼丸が落ちた海上を見ると、黒樹君の予想通り、海から無数に上がっていた水蒸気の柱が続々と剛鬼丸が落ちた場所に向かい始めていた。

はぐれは、その性質から意志力の強い相手を選んで襲うらしく、人が近くに居れば意志力がより強い人、人の近くに意志力の塊である武霊が居れば武霊を優先的に襲う事が多いって美幸に聞いた事がある。

黒樹君はその事を知らないはずだけど、剛鬼丸がはぐれ化した際に犬の骸骨達が一斉に剛鬼丸を襲っていたらしくて……それをオウキから見せて貰って、そこからはぐれの習性を予測してみたみたい。

……なんだろう……この短い間によくここまで考えられて、気付けると言うか……ほぼ直情型のあたしには出来ない芸当だな……

そう黒樹君の事を感じしていると、海上に上がっていた全ての水蒸気の柱が集まり、巨大な水蒸気の柱になった。

そして、さきほどよりとんでもなく強烈で威力のある閃光が発生。同時に生じた衝撃波で、コウリユウが体勢を維持出来なくなり、錐揉み状態で吹き飛ばされる！？

???

レベル2になり巨大化したコロ丸を駆り、星波海岸を駆け抜ける美春と東山。

巨大化したコロ丸から伸びる無数の体毛が骸骨犬達に絡まり、空中に引っ張られる。

レベル2になった影響か、それとも燃えなくしているのか、絡まったコロ丸の体毛は一切燃えず、骸骨犬達は幾らもがいても逃れる事が出来ない。

ほどなくして海岸に上がって来た骸骨犬達全てを捕まえ、コロ丸の後方に集められると、その骸骨犬達に向かって東山は十字銃を構える。

東山はコロ丸がレベル2になった時点で、十字銃の銃口が大きくなる様に銃身を開き、銃身に光を溜めていた。

光輝く十字銃のトリガーを引いた瞬間、それまで放っていたレーザー光線とは比べ物にならないほどの巨大な光線が放たれ、一ヶ所に集められていた骸骨犬達をコロ丸の体毛ごと消滅させる。

「次は海だ」

そう言ってコロ丸を海へと進ませようとした美春は、不意にふら付き東山に支えられた。

「美春……あまり無茶をするな……ただでさえ昨日は『レベル3』まで具現化させているんだ」

そう言って心配する東山に、美春は辛そうにしながらも笑みを浮かべる。

「馬鹿を言うな。この程度、無茶の内に入らない」

「そう言う事を言ってるんじゃない……剛鬼丸とコウリユウは相性が悪いのは美春も知ってるだろ？ 勿論、俺の十字銃とも相性が悪い……今、この町の武霊使いの中で剛鬼丸を倒せる可能性があるのは美春だけだ」

そう悔しそうに言う東山に、美春は何かを言おうとした。

その瞬間、上空に光が走る。

美春達はその光に見覚えがあった。

何度となく見た事があるコウリユウのレーザープレス。

「何でよりによってレーザープレスを使う！」

美春は思わずそう叫んでしまった。

自警団団長である美春は、自警団員の武霊の特性などを詳しく知

っていた。

当然、メンバーである田村聖の武霊・剛鬼丸の特性も熟知している。

剛鬼丸は、『光を糧にする鬼を模した生物兵器』と言う設定がある為、あらゆる光は剛鬼丸の糧になり、光を取り込めば取り込むほど力が増す。

つまり、コウリユウのレーザーブレスは倒すどころか、逆に力を与えてしまったと言う事であり、その力に引き寄せられはぐれたる骸骨犬達が剛鬼丸に集まるのは簡単に予想できた。

当然、その後に起るであろう事も。

だからこそ、剛鬼丸が海に落ち、海上に上がっていた水蒸気の柱が一ヶ所に集まり出した時、

「自警団本部へ緊急連絡！ 海岸にいる武霊使い達を全員退避させろ！」

そう命令したが、町内放送が入るより早く、剛鬼丸は自分の周りに集まった骸骨犬達を一掃する為に全方位閃光を放った。

プロローグ『選択の武霊使い』 16

???

強烈な光と共に、巨大化したコロ丸を吹き飛ばすほどの爆風が、

「……………え？」

来なかった。

美春が周囲を見回すと、爆風で吹き飛んだであろう海岸付近の家々の惨状が見られるが、海岸にいた美春達を含めた武霊使い達は全方位閃光が放たれる前の場所におり、美春達同様に自分達には何も起つてない事に啞然としていた。

「何だこれ？」

そんな声を上げた東山を美春が見ると、東山は上を見上げていた。美春も同じ様に上を見上げると、円盤の様な小さな物体が浮遊しており、改めて他の武霊使い達の頭上を確認すると同じ様な円盤がその頭上に浮遊しているのに気付く、同時に周りの光景が奇妙に歪んでいるのに気付く。

「誰かの武霊能力だよな……」

そう判断するしかない東山だったが、

「こんな武霊能力を持つている奴いたか？」

その疑問に全ての武霊使いとその武霊を知っているはずの美春は答えられず、困惑しながら剛鬼丸が吹き飛ばし空けた大穴に海水が流れ込む光景を見て、更に困惑する事になった。

何故なら、穴の中心にいる剛鬼丸が自らの鎧を砕くほどの勢いで胸を叩いていたからだ。

黒樹 夜衣斗

コウリユウの姿がまるつきりドラゴンだったので、てつきり炎のプレスとかを吐くのかと思いついていた。

剛鬼丸は、あの姿と閃光を放つ能力から考えて、光に強い体勢を

持つ可能性が高く、それどころか光を吸収するんじゃないか？　と俺は考えていた。

だから、貫通威力のあるレーザー兵器を使う事を頭の中から除外して作戦を組み立てたんだが……まあ、確認を取らなかった俺の過失だが……聞いたけばよかったと思っても後の祭り。

どう見てもパワーアップした感じに光輝きながら海に落下した剛鬼丸を見て、俺は慌てて海岸を確認した。

海岸には海から現れている骸骨犬達を戦っていたであろう武霊使いらしき人達と、その武霊らしき姿をかなりの数確認。

剛鬼丸が集まってきた骸骨犬達を閃光で倒すのは、最初の全方位閃光を使った時……背後とか機体の至る所にカメラがあるオウキから見せて貰った直前の光景では、俺に襲い掛かってきた骸骨犬達が一斉に剛鬼丸に殺到していた。その事から考えて……同じ様な状況になれば、同じ様な事をする事はまず間違いない。

そうになると、その際に生じる爆風は……パワーアップした事も含めて考えると……生身で耐えられるか！？

そう考えた瞬間、俺は無謀だと分かっているながら、心の中で

セレクト！　現在確認出来る海岸付近にいる人間と同じ数のシールドサーバント。同時にその人間一人一人にシールドサーバントを急行させ、フルパワーでシールド展開！　急げ！

と命令していた。

オウキから一瞬戸惑いを感じたが、それでも直ぐにオウキはシールドサーバントを大量に放出。

同時に、今まで感じた事が無いほどの感覚で意識がグラつき、気を失いそうになるが、俺の異変に気付いた美羽さんが何故か俺に抱き付いて来た。

意味が分からず、また、あまりにも唐突かつ初めてされた行為に頭の中が大混乱になる。

「ごめんなさい夜衣斗さん。嫌かもしれないですけど、今は」
そう囁く美羽さんの言葉は途中で剛鬼丸が閃光を放った事により

言葉を続けられなくなり、同時にコウリユウが爆風に吹き飛ばされ、俺達が飛ばされない為か見えない何かによりコウリユウの背中に押さえ付けられる。

そのせいで俺が上になって美羽さんを押し倒す形になり……ああ！！！！ヤバいつてこの格好だとむ……心頭滅却心頭滅却心頭滅却だ……………

赤井 美羽

夜衣斗さん不意にふら付いた時、美羽のせいで夜衣斗さんに余計な意志力を使わせちゃたつて気付いた。

上空で待機している夜衣斗さんの武霊からさつき出した数よりとんでもなく多い円盤が飛び出して、海岸の方に飛んで行くのをコウリユウが目撃してて……美羽は咄嗟に夜衣斗さんに抱き付いた。

睡眠を取る事以外での意志力の回復方法の一つに、他人と身体を触れ合うつて言うのがある。

他にも会話をしたり、文字を書いたり、とか色々手段はあるけど、触れ合う方が一番意志力の回復が早いって話で……よくは分からないけど、心をより強く動かしたりすると意志力が少し回復出来て、コミュニケーションを取るとその相手から少し意志力が貰える……って聞いている。だから、その両方を兼ね備えている抱き付きをしたんだけど……いきなり抱き付いたりしたら夜衣斗さん嫌な思いをするよね。ちゃんと説明しないと……

そう思つて夜衣斗さんに説明しようとした時、剛鬼丸が今まで見た事が無いほどの物凄い威力の全方位閃光を放った。

その影響でコウリユウが体勢を維持出来なくなって、美羽達が空中に吹き飛ばされない様にコウリユウが美羽達への念動力を強める。その影響で夜衣斗さんに押し倒されちゃって……えつと……

深く考えない様にしよう……夜衣斗さんだつてこんな貧相な身体の子を押し倒しても……いやいや、考えない考えない……ううゝ

美羽が頭の中でちよつとパニックになり掛けた時、

「セ、セレクト！ スナイパーライフル。弾丸セレクト、接着弾！」

夜衣斗さんが耳元で必死に『予定通りの命令』を口にした。

???

海に落ちた剛鬼丸に殺到する骸骨犬達を全方位閃光で一掃した剛鬼丸は、再生した鎧を閉じようとしていた。

その瞬間、上空でウィングブースターを最大出力にして爆風を耐えていたオウキが、夜衣斗の命令により右腰から出した長大な狙撃銃を剛鬼丸に向けて構え、撃つ。

撃ち出された弾丸は、狙い変わらず鎧が閉じようとしていた剛鬼丸の胸に当たり、弾丸に入った液体を鎧内部に四散させた。

直後に鎧が閉まり、剛鬼丸は閉まった胸に違和感を覚えるのか、自身の胸を見る剛鬼丸。

少しの間見続けた後、不意に剛鬼丸は自身の胸を叩き出した。その威力は自身の鎧にひびが入るほどで、叩く度にそのひびは細かく多くなった。

だが、いくら叩いても鎧が剛鬼丸の胸から離れる事はなく、終には手で引つ掻き出すが、それでも取れない。

それで胸の鎧が取れなくなった事を悟ったのか、それ以上は胸を叩かず、剛鬼丸はゆっくり上空を見上げる。

剛鬼丸が上空に飛ぶオウキを確認したその瞬間、後ろに倒れ込み、接着弾が着弾していない背中の鎧を開き、飛行の為の閃光を放った。

飛矢折 巴

ほどなくしてコウリユウが安定した飛行を取り戻し、少し黒樹君の事が心配になって黒樹君がいた方向に顔を向けると……………

「…………この非常時に何をしているの？」

何故か黒樹君が赤井さんを押し倒している場面を目撃して、思わずそう言ってしまった。

あたしの声に、瞬間的に身を震わせて、大慌てで黒樹君は赤井さんから離れる。

「……いや……その……決してやましい気持ちで」

そう言い訳を黒樹君が赤面しながらしどろもどろにし始めたので、思わず小さく笑い、

「分かってるって。偶然そうなったのでしょ？」

「え？ ……まあ……はい」

？ ……なんか……妙に歯切れが悪くない？

赤井さんも何だか妙なから笑いをして明後日の方向を見ているし……何なの？ ……って！ そんな事気にしている場合じゃない！

「黒樹君！ 剛鬼丸が来るわ！」

剛鬼丸の強い気配を感じ、あたしがその気配の方向に振り向くと、丁度オウキに剛鬼丸が衝突し、弾かれる所だった。

だけど、今回はそれだけで終わらず、弾かれたオウキから離れた場所に姿を現した剛鬼丸は、開いていた背中中の鎧をすぐさま閉じ、開いた。

次の瞬間、何とか体勢を立て直したオウキの背後に剛鬼丸が現れ、肩を掴んだ。

これじゃあ『次の作戦の為のサーバント』が出せない！

そう思ったあたしは思わず黒樹君を見ると、笑みを浮かべていた！？

黒樹 夜衣斗

かかった！

オウキが剛鬼丸に捕まった瞬間、俺は思わず笑みを浮かべてしまった。

剛鬼丸を倒す為には幾つか何とかしなくちゃいけない事があった。

一つは、周囲を一瞬で消滅させる全方位閃光。

これを封じる為に閃光に指向性を持たせる役割がある可能性が高い鎧を復活させ、開かせない様にする必要があった。

その為の条件を揃える為に、美羽さんに骸骨犬が発生し続けると言う海の方にプレスで吹き飛ばす様に頼んだ。そうする事により、気体モードのシールドで鎧が無くなってる剛鬼丸は海に落ちるしかなく、海に落ちれば……俺に襲い掛かっていた骸骨犬達とはぐれ化した剛鬼丸にターゲットを変えた事から考えて……骸骨犬達のターゲットが剛鬼丸に集中し、否応なしに回復したての鎧を全開放して閃光を放つと予想した。

……まあ、それは大体予想通りになったが……まさか美羽さんのコウリユウがレーザーを吐けるとは予想外だった……なるべく威力があつて、可能ならその一撃で倒せるほどのプレスをつて頼んだのがいけなかったのかもしれないが……

もう一つは、閃光による光速突撃。

一定方向しか出来ないみたいだが、あの感じだと連続使用は無理だと判断してたが……コウリユウのレーザープレスで閃光の為の光は十分に得られているだろうから、もしかしたら連続使用が出来る様になっているかもしれないと考え、俺は咄嗟に罠を用意する事にした。

本来は、キューブゲージによる部分拘束で光速突撃を止めるつもりだったが……結果的に罠を追加してよかったと言う事が……

そして、最大の問題・鎧の下が強固な肉体。

これを何とかする為に……

「ドッペルゲンガーサーバント！ ブレイク！」

俺の命令に、オウキに化けていた不形のサーバントが自爆。

オウキだと思って殴ろうとしていた剛鬼丸を吹き飛ばし、同時にドッペルゲンガーサーバントの中にひそませていたもう一つのサーバントを剛鬼丸の腹に掴ませる。

ドッペルゲンガーサーバントはその名の通り、ドッペルゲンガーの様に指定した対象に化ける事が出来るサーバントで、化ける方法は主に二つ。一つは直ぐに化けられるが実体が無い立体映像。もう一つは、若干時間は掛るが実体もあるナノマシン。そして、今回は

その二つを併用して使い、腹部のみを立体映像にし、そこにもう一つのサーバントを潜ませていた。

もう一つのサーバントの名前はC Aサーバント。クラッシュヤーアームその名の通り、対象に取り付き対象を破壊するサーバントで、円盤にクワガタの角の様なアームと棒がその反対側に付いている形をしており、そのアームが剛鬼丸の腹にがっちり掴まっている。

自分の腹に何かが掴まっている事に気付いた剛鬼丸は、両手を上げ、振り下ろそうとした。

させるか！

「穿て！ C Aサーバント！」

プロローグ『選択の武霊使い』 17

赤井 美羽

夜衣斗さんの命令に反応して、剛鬼丸に取り付いたサーバントの棒が爆発した。

とは言っても、さっき剛鬼丸を吹き飛ばしたほどの大きな爆発じゃなくて、小さな爆発。

だから剛鬼丸はその爆発を気にせずに上げた両手を振り下ろし、取り付いていたサーバントをあつさり壊した。

だけど、バラバラ落ちるサーバントの後には、剛鬼丸の腹にしっかりと食い込んだサーバントの棒が突き刺さって……

「美羽さん！」

あ！ そうだった！

夜衣斗さんに呼ばれ、美羽は慌ててコウリユウに命令した。

「行くよコウリユウ！ 防御鱗！」

命令に応えたコウリユウの背中の鱗がぼろぼろ落ち出して、新しい鱗がその下から生えてくる。

そして、落ちた鱗をコウリユウが念動力で剛鬼丸に向かって飛ばす。

取り付いていたサーバントが壊れた事で、落下し始めていた剛鬼丸は、殺到する防御鱗に対して無造作に両腕を広げた……って！

まずい！？ あの体勢は閃光独楽の体勢じゃない！？ お願い間に合って！

閃光独楽は、剛鬼丸の閃光を利用した超高速回転攻撃。

それをやられたら、夜衣斗さんの作戦が！

そう思った瞬間、剛鬼丸の後ろにオウキが突然現れ、剛鬼丸の両腕を掴んだ。

そのオウキの頭の上には、半透明な円盤が浮いていて……あれがオウキの姿を隠していたの？

黒樹 夜衣斗

ドッペルゲンガーサーバントによってオウキの偽者を作り出した後、本物のオウキの姿を消す為に、ステルスサーバントを出させていた。

ステルスサーバントはその名の通り隠密専用のサーバントで、自身だけでなく周囲の物体も任意にその姿を消す事が出来る。

その機能を使って隠れていたオウキの方に偶々剛鬼丸が飛んで来ていた。

本来は、コウリュウの防御鱗で動きを封じた剛鬼丸に対して、Cサーバントを使い、剛鬼丸の防御力から考えて完全に内部まで食い込んでいないであろうCサーバントの杭をオウキで更に内部まで叩き込む予定だったんだが……どうも最初に言っていた作戦と違う事を俺がしてしまったせいで美羽さんが防御鱗を出すタイミングを失ってしまった……結果、剛鬼丸を抑える役をオウキがする事になってしまった。

まあ、こうなってしまったのなら！

「美羽さん！ 防御鱗を剛鬼丸の杭に！」

飛矢折 巴

「え！？ あ！ はい！」

黒樹君の予定とは違う指示に、赤井さんは少し驚きながら従った。剛鬼丸のお腹に喰い込んだ杭に、コウリュウから離れた鱗達・防御鱗が次々とぶつかる。

その衝撃を杭に全て与える為かオウキが背中中の翼を大きく広げ、羽根が大きく広がった。

苦しいのか、防御鱗が当たる度に剛鬼丸が暴れ、それを抑える為に防御鱗がまだ自由な足に殺到。

両手足を押さえ込まれた剛鬼丸に、全ての防御鱗が当たり、少ししか喰い込んでいなかった杭が半ば以上まで喰い込んだ。

それを確認した黒樹君が新たな命令を口にしようとした瞬間、剛鬼丸の押さえられていない部分の鎧が唐突に開く。

「っな！ つく！ オウキ！ シールド展開！」

黒樹君が反射的に違う命令を口にしたのとほぼ同時に、閃光が剛鬼丸から放たれた。

眩しさと衝撃に襲われる。

ほとんどの鎧が開かない状態になっていたおかげで、コウリユウは体勢を崩す事はなかったけど……刹那、ぞくつとするほど嫌な予感に襲われ、あたしは反射的に黒樹君と赤井さんの襟首を掴み、後ろに倒し、前に出た。

視界は閃光のせいではほとんど効かないけど……あたしには分かった。閃光によって砕け、吹き飛ばされた防御鱗の一部がこっちに来ている事を。

その防御鱗の破片は、コウリユウの念動力の影響か、近くに来たと同時に少しだけ速度が緩んだみたいだけど、まず間違いなく生身で受けたら怪我どころじゃない速度。

しかも、物凄く細かい。

そこまですぐに理解したあたしは、覚悟を決めた。

連続で矢投げを放ち、後の二人に当たる破片の半分を散らし、身体を広げ、身体を固くする矢不通しと、身体を重くする『矢不動』を使い残り半分を身体で受け止める。

鈍い音と身体に破片が入り込む感覚。

そして、少し遅れて体中を駆け巡る激痛。

……未熟なあたしじゃ……これが……限……界——

黒樹 夜衣斗

剛鬼丸が閃光を放った次の瞬間、飛矢折さんが唐突に俺の襟首を掴み、後ろに倒した。

あまりに唐突な事に激しく驚いたが、閃光の影響から視力が回復するかしないかのタイミングで俺の上に倒れ込んできた飛矢折さん

の身体に受け止めた時……ぬるつとした感覚と鉄錆の匂いを感じ、理解した……飛矢折さんの行動の意味を。

回復した視力で飛矢折さんを見ると、身体の至る所から血を流しており、意識を失っている様だった。

俺は咄嗟に血が一番多く流れているお腹に手を当てるが……血が流れている場所が多過ぎて……

「え？ ……飛矢折先輩？」

美羽さんも視力が回復したのか、俺に抱えられて全身から血を流している飛矢折さんを見て顔を青ざめた。

「ど、どうしてこんな事に……」

うわ言の様にそう呟く美羽さんを気にしながら、俺は剛鬼丸を見た。

僅かに残った防御鱗に支えられ、落下せずにいる剛鬼丸は、自身の腹に深々と刺さった杭を抜こうとしている様だった。

「……多分、閃光によって破壊された防御鱗の破片から俺達を守ってくれたんでしょう……」

「防御鱗が？」

「ええ」

そう会話しながら、俺は続けてオウキの状態を確認する。

防御が少し間に合わなかったのか、左肩と左翼の一部が削れているが……これなら！

「セレクト！ ヒーラーサーバント」

無事な右肩からヒーラーサーバント達を出させ、急いで飛矢折さんの治療を始めさせる。

俺が抱えたままなので、一機が俺ごとシールドを発生させて、止血。対のもう一機が機体内から無痛針が付いたチューブを無数に出し、患部付近に次々と刺して治療用ナノマシンを送り出す。

すると、見る見る間に傷が塞がり、傷口から防御鱗の破片らしき物がぼろぼろと出てくる。

「う……」

体内から何かが出てくる違和感が、傷が急速に治る違和感が、あるいはその両方かにより目を覚ました飛矢折さんは俺を見て、

「黒樹君……怪我は……ない？」

真っ先に俺の心配をした。

……さつき会ったばかりなのに……何でこの人は……飛矢折さんだけじゃない、美羽さんだって、俺をこんなに助けようとしてくれるんだろうか？

そう思わず思った時、視界の隅に杭を何とか抜こうとしている剛鬼丸が入り……ぶちつと来て、不意に視界に常に入っている前髪が鬱陶しくなった。だから、

「……庇ってくれてありがとうございます。このまま治療を続けますから動かないでいてください」

そう言いながら、心の中でオウキに命令した。

赤井 美羽

妙に感情の入っていない言葉を飛矢折先輩に言った夜衣斗さん。

「う……ん？」

飛矢折先輩も夜衣斗さんの雰囲気が変わった事が気になったのか、困惑した表情で頷いた。

もしかして……怒ってる？

そう思った時、

「え？」

思わず美羽は声を上げてしまった。

だって……夜衣斗さんの前髪が手も当ててないのに自然に後ろに掻き上がって……初めて夜衣斗さんの素顔が……どうしよう……何だか物凄くカッコよく見える……

飛矢折 巴

多分、今あたしの身体を優しく包んでいる力場を使って黒樹君は自分の前髪を後ろに掻き上げさせて固定させたのだと思う。

そして、露わになった黒樹君の素顔は、目付きがやや鋭い……抱き支えられて、助けられている今の状況のせいか、とても整った顔付きに見えた。

……何だろう？ ……よく分からないこの感じは……

不意に、しかも初めて感じた妙な違和感の正体が分からなくって戸惑っている、視界の隅で赤井さんが顔を赤らめて惚けているのに気付いて……唐突に理解した。

でも……え？ ……いやいや、おかしいでしょ？ ……あれ？ あれ？

黒樹 夜衣斗

クリアになった視界で、俺は剛鬼丸を睨み付ける。

杭は十分に剛鬼丸の腹に喰い込んでいて、剛鬼丸がいくら引つ張っても抜けない様だった。

CAサーバントの杭には二つの機能が付いている。

一つは対象へある程度喰い込むと棘が出て抜けない様にする機能と、

「CAサーバント……ブレイク！」

俺がそう命令した瞬間、剛鬼丸に喰い込んだ杭が爆発した。

生じた爆発により吹き飛ぶ剛鬼丸。

硬い岩盤などを壊す場合、その岩盤に穴を空けてそこにダイナマイトなどを刺し込んで爆発する。つまり、硬い相手には内部から一気に爆発させるのが一番効果的だと言う事。

実際、爆煙の中から飛び出してきた剛鬼丸は腹に大穴を空けていた。

……倒したか？

そう思った時、

「まだです夜衣斗さん！」

と美羽さんが叫んだ瞬間、剛鬼丸が動き、俺を見た。

赤井 美羽

武霊が倒れる時、本当はいない存在だからなのか、その姿は霧の様に霧散して消える。

美羽はそのシーンを何度も見えているから武霊を倒したか直ぐに分かるけど、夜衣斗さんは当然そんな事は知らなくて、剛鬼丸にダメージを与えたのを見て油断したみたいだったから、美羽は思わず叫んでいた。

だけど、美羽の注意に夜衣斗さんが答えるより早く剛鬼丸が背中の鎧を開いてしまう。

そして、閃光。

次の瞬間、コウリユウが苦痛の咆哮を上げた。

送られて来るコウリユウの感覚通りに右の翼を見ると……無くなってる！？

コウリユウは翼だけで飛んでるわけじゃないけど、翼が無いと体勢を維持出来なくなつて……お……落ちちゃう！

そう思った美羽は反射的に夜衣斗さんに抱き付いた。

黒樹 夜衣斗

いきなり美羽さんに抱き付かれた俺はコウリユウの翼が剛鬼丸により吹き飛ばされた事を一瞬忘れるほど驚き、思考が止まった。

俺の思考が再開するより早く、コウリユウがバランスを崩し、錐揉み状態で落ち始める。

コウリユウが俺達を落とさまいと念動力を強めるが、今度は下の方から強い衝撃が起き、コウリユウから吹き飛ばされた。

離れた場所から何が起きたのかを見ていたオウキから、翼を吹き飛ばした剛鬼丸がコウリユウの腹部に突撃している映像が送られて来る。

俺は反射的に美羽さんと飛矢折さんを強く抱きよせ、散り散りにならない様にヒーラーサーバントの力場を強めたが、それでも吹き飛ばされた勢いは殺せず、ぐるぐると空中で回りながら飛ばされ続

けてしまう。

そんなとんでもない状況の中、俺は必死に思考を巡らした。

コウリュウの片翼を吹き飛ばした時、剛鬼丸は間違いなく俺を狙っていたはず……なのに、俺ではなくコウリュウ翼を吹き飛ばした。つまり、腹に大穴が空いた影響で狙いが定まらなくなっていると言う事。続く二撃目もオウキの目は剛鬼丸の閃光が不自然に曲がるのを見ていたので、それは間違いない。なら、いくらでもやり様はある、だが、その前にこの状況を何とかしないと……流石に三人となるとヒーラーサーバントの出力では支えられない様だし……なら！

「セレクト！ P S サーバント！」

プロローグ『選択の武霊使い』 18

黒樹 夜衣斗

俺の命令にオウキが今までのサーバントより小柄な円盤を出した。その円盤は、オウキから出ると一気に俺に近付き、回転している俺に合わせて、背中にくっつく。

くっ付くと同時に装甲が開き、そこから無痛針が付いたチューブが無数に現れ、俺の胸・首・手首・足首に刺さり、身体機能強化・機械同調用ナノマシンが注入される。チューブが出た場所とは違う場所から黒い液体の様なナノマシンが出て俺の身体を瞬時に覆い、瞬く間に俺の格好をマントとタイツとスーツが一体になった様な姿に変化させた。

これは一種のパワードスーツで、パワードスーツPSサーバントは内と外から装着者を強化する要人保護強化用サーバント。

オウキの目を通して自分がPSサーバントを着ている事を見ると……感無量と言うか……これを着る事はない夢だと思ってたんだが……まあ、今はそんな事を思っている場合じゃない！

「PSサーバント！ 飛行モード！」

俺の命令に反応して背中のマントが黒いウイングブースターになり、落下し始めていた俺達を空中に止めた。

「……え？」

「や……夜衣斗さん？」

回転と落下が唐突に止まった事により、俺の変化に気付いた二人が驚きの声を上げたが、二人に説明する余裕は無かった。

オウキとPSサーバントには複数のカメラが身体の内からこちらに付いている。

オウキから送られて来る映像のいくつかはそのカメラから送られて来るものであり、今の俺は複数の視界を有してて……慣れていないせいか、若干気持ち悪く、集中しないとあつと言う間にパニック

になりそうだった。

そんなカメラの一つが、コウリユウがまるで霧の様に霧散して消えるのを捉えたので……なるほど、武霊は倒れるとああなるわけか……

コウリユウが完全に霧散すると、その下から落下中の剛鬼丸が現れ……こっちを見ていた。

……これは完全に俺をターゲットにしているな……だが……なんでだ？ さっきまではオウキをターゲットにしていた様な気がしたんだが……

飛矢折 巴

黒樹君の姿が変わってから……うん。違う……多分、それより少し前から、黒樹君からまた奇妙な気配が少し出始めていた。

その影響なのか、さっきまでサーバントを出す度に辛そうにしていた黒樹君は、今は新たに出現しても平然としている。

さっきもそうだったけど……もしかして、この奇妙な気配にはぐれは誘われている？ ……剛鬼丸もこの気配が始めてからあからさまに黒樹君を狙う様になったみたいだし……一体……なんなの？ この気配。

赤井 美羽

コウリユウが霧散した次の瞬間、落下する剛鬼丸にオウキが突撃した。

「セレクト！ ブーストハンマー！」

夜衣斗さんの命令にオウキが腰から長い棒を出すと、先端から液体みたいなのが出てきてあっという間にハンマーみたいになった。

けどオウキが剛鬼丸にハンマーを振るより早く剛鬼丸の背中が開くのが見えて……こっちを見てる！？

「ブースト！」

剛鬼丸が閃光を放つと同時に、夜衣斗さんが叫んだ。

その瞬間、オウキが振るったハンマーの後ろが開いて、ロケットみたいに火を噴いた。

ハンマーが消えて、剛鬼丸も消えると、物凄い金属音が聞こえて、海面に大きな水柱が出来る。

……えっ！……と？

何が起こったのか分からなくって、オウキを見ると、オウキの手には棒だけになったハンマーを持って……叩き落としたの！？
あんなに速いの？

黒樹 夜衣斗

剛鬼丸は閃光を使うと確かに目に見えないほど速い。

だが、いくら速いと言っても、直線限定。

なら、何をターゲットにしているか分かり、十分に接近し、タイミングさえ合えば……そう思ってオウキにロケットブースター付きのハンマー・ブーストハンマーを使わせたんだが……こうまでうまくいくとは思わなかった。

水柱が消え、大きな波紋を見せる海を見ながら、俺は大きく息を吐く。

ブーストハンマーは壊れたが、これで倒せなかったとしてもかなりのダメージを受けているはずだ。

正直拍子抜け感が強い気がしないでもないが……とにかく、今の内に二人を安全そうな所に降ろしておかないと……

そう思った時、不意にぞわつとする様な寒気を感じた。

しかも、剛鬼丸が落ちた場所から……何だ！？ 何なんだ？

そう疑問に思うと、

「うそ……この気配……またはぐれが発生した？ ……なんなの今日は……」

そう茫然とつぶやく美羽さんの声が耳に入った。

……？

はぐれ武装守護霊が発生するポイントは二カ所ある。

一つは星波山中腹。

もう一つは今回発生している星波学園より更に陸地より離れた海中。

その二つのポイントには視覚的には何もない。

ただ、武霊使いがそのポイント内に入ると形容し難い不快感に襲われ、人によつては原因不明の体調不良になる。

そんな場所に、剛鬼丸は閃光で突撃すると同時にブーストハンマーで叩き落とされていた。

海中に漂う剛鬼丸は、直前まで暴れ回っていたのが嘘かの様にピクリとも動かない。

閃光による超加速。ブーストハンマーのブースト。その二つの威力が相乗効果を呼び、更にハンマーが叩き込まれた場所が運悪く丁度大穴が空いた腹部だった為、剛鬼丸の身体には腹部の穴から生じる幾つもの大きな亀裂が出来ていた。

その亀裂が海中に漂う間も急速に広がっていく。

亀裂が全身に回ると同時に、身に纏っている鎧がぼろぼろと崩れ出し、剛鬼丸の身体が霧散し様とした瞬間、

『それ』は起った。

小さな漆黒の球体が、唐突に剛鬼丸の間近に現れた。

その球体は急速に大きくなり、瞬く間に霧散し掛けていた剛鬼丸を飲み込み、更に大きくなり、唐突に止まる。

直径十メートル近い巨大な球体となったそれは、まるで卵が羽化するかの様にひびが入り、割れ、落ち始め、瞬く間に霧散して消える。

そして、漆黒の球体が消えた後には、一体の巨人がそこいた。

飛矢折 巴

ヒーラーサーバントの治療のおかげで、あたしの怪我はいつの間にか全快していた。

いえ、むしろ怪我をした前より調子が良い様に感じて……感覚も鋭くなっていて……力強く抱き寄せてくれている黒樹君の腕を……何だか妙に意識してしまう……って、そんな場合じゃないでしょ巴！状況を考えない事をあたしが考えている間、事態はより酷い状況になろうとしていた。

今日二度目のはぐれの発生を示す、はぐれ発生時の独特な気配。それを海中から強く感じる。

しかも、この感覚はレベル1のはぐれじゃなくて……

ゆつくりと海の中から巨大な何かが出てくる。

まず見えたのは巨大な犬の骸骨。

そして、次に見えたのは剛鬼丸の顔。

姿を現したのは、犬の骸骨を身に纏ったレベル2の剛鬼丸だった。

赤井 美羽

今日はとんでもない事が何度も起きてる。

はぐれは二日続けて発生するし、自警団ナンバー2田村さんの剛鬼丸がはぐれ化しちゃうし、町に初めて来たはずの夜衣斗さんが武霊使いになっちゃうし……今度は三度目のはぐれ発生かと思ったら……何これ？　こんな事初めてなんだけど……

美羽も初めて見る目の前で起っている事に、美羽は啞然としちゃって、

「……美羽さん」

「ひゃい！？」

唐突に夜衣斗さんに呼ばれて、また変な返事をしちゃった……ううゝ何やってるんだろう？　恥ずかしい……

「……コウリュウはまだ出せますか？」

ちよつと長めに間を空けて夜衣斗さんがそんな事を聞いて来た。

……昨日もコウリュウのレベル2を使ったから……今のこの感じだと……

「後一回はギリギリ出せると思います」

そう美羽が答えた時、上半身まで海から出た剛鬼丸（？）が美羽達の方を見て、全身の骨の鎧を開いた。

「ぎゃあ！？ 全方位閃光！？」

「出てきてコウリユウ！」

美羽の呼び掛けに、半透明なコウリユウが美羽の背後から現れ、美羽達と剛鬼丸（？）との間で具現化。

「レベル2！」

一気にレベル2にして……あ……ちょっとクラって来た……でも、美羽、負けない！

「防御鱗！」

コウリユウの全身の鱗がぼろぼろ落ちて、あっと言う間にコウリユウと剛鬼丸（？）の間に鱗の壁を作った。

その瞬間、とんでもなく大きな爆発音が聞こえて、防御鱗の壁に何かが当たって、防御鱗の壁の端から炎が見え……あれ？ ……炎？

「……やっぱり性質が変化しているか……」

ぼそつとそうつぶやく夜衣斗さんの声が耳に入って、美羽は思わず夜衣斗さんの顔を見ると、夜衣斗さんが丁度美羽の方に顔を向けたタイミングで、目が合った。

そんな場合じゃないと分かっているけど……ちょっとドキツとしちゃう。

だって、夜衣斗さんが真剣な表情で美羽を見詰めてくるんだもの

……

「……美羽さん。何とか時間を稼いでくれませんか？」

「え？時間を？」

何をするんだろう？ よく分からないけど、夜衣斗さんなら何とかしてくれる。そんな気がするけど……でも、

「コウリユウじゃあ……」

「……あれはもう光を吸収出来ないと思います」

そう夜衣斗さんが言った時、防御鱗の壁を避けて、剛鬼丸が美羽達の真横に現れて、空中で止まった！？

飛矢折 巴

黒樹君が言う様に、剛鬼丸はその姿の変容と共にその性質を変化させているみたいだった。

今まで閃光を放出していた鎧の下の肉体から炎を放出し、その推進力であたし達の前に浮いている。

骨の鎧の下がどうなっているかは分からないけど、炎を放出しているって事は……あの光速突撃が出来なくなっていると共に、光を使った攻撃が有効になる……って事？

黒樹君の言いたい事をそう考えると、剛鬼丸が背中中の炎を増大させてこっちに突撃してくる。

だけどその速さは閃光を使った時より明らかに遅くて、

「コウリユウ！」

赤井さんの命令に応えたコウリユウがあっさりあたし達と剛鬼丸の間に入り、片手で突撃を受け止める事が出来た。

剛鬼丸の体中から出ている炎が、受け止めているコウリユウの身体を焼く。

だけど、コウリユウは大して効いていないのか、残った手を握り、殴り掛かる。

顔を殴られた剛鬼丸。

身に纏っている骨の鎧は砕けても、その下の肉体の強固さは変わっていないのか、平然とし、殴り返してきた。

コウリユウは、その拳に向かって短いレーザーブレスを吐き、吹き飛ばす。

吹き飛ばされた剛鬼丸の腕は、黒樹君の言う様に光を吸収出来なくなっていたのか、骨の鎧は無くなり、焼きただれていた。

効いている！ でも！

骨の鎧が無くなり露わになった鎧の下には、目の代わりに大きな穴が空いていて、そこから炎が噴き出している様だった。

そして、その噴き出る炎を抑える役割があつたであろう骨の鎧が

無くなった事で、腕の炎が他の場所とは比べ物にならないくらい噴き出し、炎の柱を作った。

その炎の勢いにより捕まえているコウリユウごと剛鬼丸が回転しながら落下し始める。

「コウリユウ！ 頭を狙ってレーザーブレス！」

赤井さんの命令で、コウリユウが剛鬼丸の顔に向かってレーザーブレスを吐く。

光線で剛鬼丸の顔が見えなくなるけど、これも大して効果が無いのか、剛鬼丸は残った手でコウリユウの首を掴んだ。

喉を抑えられたせいでレーザーブレスが止まり、剛鬼丸はそのまま喉を握り潰そうとした瞬間、海に二体は落ちた。

生じる大きな波と大量の水蒸気で二体の姿が見えなくなる。

コウリユウの攻撃は確かに効く様になっているけど……どう見ても僅かしか損傷を受けていない……このままじゃ……

「黒樹君！」

思わず黒樹君を見上げると、目を瞑り必死な表情を浮かべていた。

プロローグ『選択の武霊使い』 19

黒樹 夜衣斗

飛矢折さんが俺の名前を呼んだ。

声からしてかなりヤバい状況なのは分かるが……俺はそれに応える余裕は無かった。

美羽さんが時間を稼ぐ為にコウリュウを出した瞬間、俺はPSサバントの機能を使ってオウキにアクセスした。

何故か性質が変化し、レベル2になった剛鬼丸。

理由も、原因も、一切分からないが、それを考えている暇はないと判断した俺は、直ぐに倒す方法を考えた。

見た目がほぼ剛鬼丸であるのなら、あの骨の鎧の下は変化前と同様に強固だと考えるのが自然。だとすると、ダメージを与える為には、打ち込み杭系の武装を使うしかない……だが、今のオウキと剛鬼丸の体格差から考えて、オウキの通常兵装では決定打を与えられとは思えない。なら、それ以上の攻撃を？……だとすると……

『あの兵装』を使うしかない！

そう考えた俺は、『今のオウキ』では使う為に色々と制約がある『兵装』を使う為にオウキにアクセスした……んだっただが……非常に困った事になった。

何故なら、俺の脳裏に現れたオウキの電腦空間が……ほとんど『文字化け』で表現されていたからだ。

……確かに、コミュニケーション能力に制限が掛けられているとは聞いたが……何でこんな制限が掛けられているんだ？……まあ、そんな疑問は後回しにして……これはどうする事も出来ない……今から俺がやろうとしている事は、『オウキ単体では本来使えない兵装』の封印を解く為の解除作業。

なのに、こんな状態ではどれをどうすればいいかさっぱり分からず、電腦空間に作られた自分のアバターを操作して手当たり次第色

々と触ってみるが……エラーばい表現ばかりが出てくる。

……これ、かなり不味くないか？

物凄く冷や汗が出てきて、必死にどうするか考えるが……どう考えても何も浮かばない。

別の手段を考えるか？ ……いや、だが、それだとあの防御力を突破出来る攻撃をする為には……『諸刃の切り札』を使うしかないのか？

（確かにそれならあの防御力を突破出来るかもしれないけど……きつと今の夜衣斗だと倒し切る前に意識を失っちゃうわよ？）

唐突なサヤの声に、俺は眉を顰めた。

今のね……まるで時間が経てば平気になるみたいな言い草だな……（とにかく、今はこの状況を何とかするのが先でしょ？ 色々な疑問は後で）

……まあ、そうだが……何とか出来るのか？

（もちろん！）

そう言ったサヤが唐突に電脳空間の俺のアバターの前に現れた。

そして、サヤにつこり笑い、文字化けしている文字の一つを指差す。

……なるほど……色々と疑問は尽きないが……

俺は特に何も言わず、サヤの指し示す場所に近付き、王継戦機内の一シーンを思い出し、それを口にした。

赤井 美羽

「オウキの主たる黒樹夜衣斗は、通常兵器による攻撃対象の撃退を不可能と確認」

飛矢折先輩の呼び掛けに夜衣斗さんは応える代わりに、まるで呪文の様に呟きだした。

「また、支援機存在を確認する事が出来ず、通常運用による『共鳴兵装』の使用も不可能と断定。以上の状況から、緊急共鳴兵器使用プログラムの使用を申請」

夜衣斗さんの目の前に『武霊特有の文字化け』した画面が現れる。

「申請承認確認。セレクト共鳴兵装『黒虚こくきょの刀かたな」！」

夜衣斗さんの命令に、両腰が開いて黒い靄が出て、そこに両手を突っ込むオウキ。

力を入れてゆつくりと両手を引き出すのと一緒に、両腰からバチンバチンと音がし始めて……黒い靄に包まれた両手をオウキがバチンって合わせるのと同時に、両腰が爆発して壊れて、黒い靄が刀の柄みたいなの……え？ 柄だけ？

思わず驚いてしまうけど、

「両腕部緊急部分オーバードライブ！」

と夜衣斗さんが叫ぶと、柄を持っているオウキの両腕装甲が開いて、そこから柄を出した時とは違う黒い靄が出てきて、両腕を覆い始め……バチバチって音が両腕からもし始める。

「黒虚の刀起動！」

夜衣斗さんが言うと共に、オウキの両腕から出た黒い靄が柄に吸い込まれて、それと一緒に柄から黒い刀身が生えてきて、どんどん長くなって……レベル2を真つ二つにする事が出来るぐらいまでの長さになった。

飛矢折 巴

その長大な片刃の刀身を見た時、あたしは寒気を感じるほどの禍々しさを覚えた。

ただ純粹に破壊だけを求められて作られた長大な刀。

そう思わせる長大な刀をゆつくり振り上げるオウキ。

振り上げ終わるのとはほぼ同時に、水蒸気が上がっている海面で爆発が起きる。

「コウリュウ！？」

赤井さんが声を上げると共に、立ち上がる水蒸気の中から剛鬼丸だけが出てくる。

そして、体中から小さな炎を小刻みに吹き出しながら、剛鬼丸が

こつちを見上げた。

来る！

そうあたしが思うと同時に、

「オウキ！」

黒樹君の呼び掛けに応じて、オウキが長大な刀を振り下ろした。

飛び上がるうとした剛鬼丸が、振り下ろされる刀に反応して、拳を振り上げる。

剛鬼丸の拳とオウキの刀が激突。

次の瞬間、思いもしない事が起った。

赤井 美羽

海中で剛鬼丸と戦っていたコウリユウが、剛鬼丸の全方位爆発に巻き込まれて霧散して美羽の背後に戻ってきた。

申し訳なさそうな感情をコウリユウが送ってきたので、美羽は慰めの言葉をコウリユウに送るっていると、その間に剛鬼丸に対してオウキが出した黒虚の刀を振り下ろす……え？

次の瞬間に起った事に、美羽は固まった。

……だって、切り札として、夜衣斗さんがあんなに必死に出した黒虚の刀が……剛鬼丸の拳に触れた瞬間……粉々に砕けちゃったんだもの……どうしよう……これで、打つ手はなくなっちゃったんだよね……

あまりの事に茫然と夜衣斗さんを見上げると……夜衣斗さんは笑みを浮かべていた！？

飛矢折 巴

砕け舞い散る黒い刀身。

あまりにもあつさり、砕けた事に一瞬固まってしまったけれど……本体から離れて壊れれば直ぐに霧散するはずの……砕け散った刀身が直ぐに消えずに剛鬼丸の周囲にゆっくり散っている事に気付いた。

その瞬間、
「黒虚崩来！」
こっきょほうらい

黒樹君がそう叫ぶと同時に、砕け散った無数の刀身が次々と黒い球体に変化し、一気に膨張した。

そして、剛鬼丸の身体が膨張した黒い球体に触れ、一瞬後に消える。

黒い球体が消えた後には、強烈な空気の流れと、身体の至る所に穴が空いた剛鬼丸。

その様子はまるで黒い球体に周囲の空気と一緒に剛鬼丸の身体が吸い込まれたかのように見えて……

抵抗する様にまだ破片の刀身に腕を振るった剛鬼丸だけど、触れた瞬間に黒い球体と化した破片達により、腕を振り切った後には腕の大部分が無くなっていて、手の一部が霧散しながら海に落ちた。

コウリュウのレーザーブレスすら耐え抜く身体をこうもあっさり

……
啞然とするあたしの前で、剛鬼丸は全身の骨の鎧を開き、大爆発を起こさせる。

こっちにも届きそうなくらいの大爆発だったけど、爆炎が届く事はなく、新たに变化した黒い球体達に吸い込まれた。

そして、爆発に反応したのか残っていた破片達が一齐に黒い球体になって剛鬼丸を一瞬の内に覆い隠し……黒い球体が消えた後には、嵐の様な空気の流れと激しく荒れ狂う海面のみだった。

赤井 美羽

……倒した……駄目だと思ったら、倒しちゃった!?

凄い！ 凄い！ コウリュウでさえ倒せなかったはぐれ化した剛鬼丸を、こんなに一瞬で倒しちゃうなんて、ほんとお~~~~~に凄い！

その思った事を美羽が口にしようとした時、上空から物凄い爆発音がした。

慌てて上空を見ると、オウキの両手が無くなって……え？ もしかして……刀が爆発した！？ 何で？

刀と一緒に手が爆発したと分かった次の瞬間、今度は腕がバチバチ言って……大爆発した！？ しかも、まるで全てのエネルギーを使い切ったみたいにオウキは動きを止めちゃって、背中の翼も消えちゃって、ゆっくり落下しながら霧散しちゃった。

さっきの攻撃って、そんなに無茶な攻撃だったの？ ……じゃあ、夜衣斗さんは！？

黒樹 夜衣斗

共鳴兵装『黒虚の刀』は、膨大なエネルギーを消費して重力子で出来た刃を形成する兵器で、出来た刀身はそれ自体強力な切れ味を持つ刀だが、その真価は刀身が砕けた後に発揮する。正確には本来の機能を使う事が出来る状態になる。共鳴兵装はどれも強力過ぎる為、安全装置としてオウキとの契約者が起動キーワードを言わないと本来の機能が起動しない様になっている。そして、黒虚の刀の本来の機能は、解放された重力子を使ってマイクロブラックホールを精製する事。つまり、剛鬼丸は砕けた刀身の数だけ発生したマイクロブラックホール達に巻き込まれて消滅させたんだが……共鳴兵装は本来オウキ以外の守護機騎と共鳴する事で初めて使う事が出来る兵装である為、オウキ単機で使うと必ず使用した共鳴兵装とその部位が壊れる上に、全エネルギーを使い切ってしまい、王継戦機の中では単機で共鳴兵装を使ったオウキは長い眠りに付く事になっていた。

だから、オウキが一気に壊れ、霧散してしまったのは当然で……とうとう俺の意志力もとうとうもないぐらいまで消費してしまっただのを感じた。

この、どうしようもないくらい……意識の薄れが……駄目だ！
こんな上空で意識を失う訳には……

PSサーバントのおかげで僅かにしか感じないが、自分の両腕に

は確かに二人の女の子の荷重が掛っている。

二人を……

PSサーバントに薄れる意識で指示を出しているせいか、ふらふらと海岸に向かって下降し始める。

脇の二人が何かを言っている気がするが、聞いている余裕がなく……だから気付くのが遅れた。

「黒樹君！」

飛矢折さんの必死な叫びと、共に何故か急激に飛矢折さんが重くなり、バランスが崩れ、一瞬だけ急激な下降を起こした。

すぐさまPSサーバントの自動制御により安定したが、その瞬間、直前までいたほんの少し上に熱波が通り過ぎたのを感じて、PSサーバントで追加された視界に意識を向ける。

そこには剛鬼丸の手だけが！？ ヤバい！

危機感を感じると同時に、剛鬼丸の手が炎を吹き出しながらこっちに突撃してきた！

飛矢折 巴

あたしがそれに気付いた時、黒樹君は意識を朦朧とさせながら何とかあたし達を海岸まで運ぼうとしていた。

だから、

「黒樹君。まだ剛鬼丸の気配が消えないわ」

「え！？ それは本当ですか！」

「ええ、ほんの僅かだけど……警戒した方が……黒樹君？」

そのあたしと赤井さんとのやり取りも聞こえていなかったみたいで、ぞくつと殺気を感じ、下を見た瞬間、剛鬼丸の手だけがこっちに向かって突撃してきた。

「黒樹君！」

あたしの必死な叫びにようやく気付いた黒樹君だけど、間に合わない！

そう判断したあたしは咄嗟に、自分の体重を重くする矢不動を発

動し、あたしの加重で少しだけ落下させた。

僅かな落下だったけど、そのすぐ上を剛鬼丸の手が通過。
ギリギリ当たっていた位置だった事に冷や汗が出るけど、危機は終わっていない。

剛鬼丸の手が、あたし達に向かって突撃してくる。

「コ」

赤井さんがコウリユウを具現化しようとするけど、限界なのか、名前を呼べず、半透明なコウリユウが赤井さんの背中から出るだけだった。

打つ手がない。

迫る剛鬼丸の手があたし達に……不意に、急激な落下を感じた。
それが意味する事をあたしが気付くより早く、あたしの目の前で黒樹君と剛鬼丸が衝突。

黒樹君が……あたし達を放して……

ようやく何が起こったか理解して、愕然とするあたしの横を剛鬼丸の手と共に黒樹君が通り過ぎ、海面に激突する音が聞こえた。

赤井 美羽

夜衣斗さんが美羽達を助ける為に、美羽達を放して、剛鬼丸の手と一緒に海の中に落ちちゃった……夜衣斗さん……夜衣斗さん！
もう一度コウリユウを具現化しようとするけど、集中するだけで意識が薄れて、コウリユウを具現化させるまで至らない。

このままじゃ、夜衣斗さんが！ 夜衣斗さんが……

どうする事も出来ない美羽に、海面が迫って、強い衝撃を覚悟して、美羽は思わず目を瞑った。

………？………あれ？

だけど、いつまで経っても強い衝撃は訪れなくて……恐る恐る目を開けてみると、目の前に波打っている海面があった。

……宙に浮いてる？………あ！ 腰に何か……

美羽は腰に巻き付いている白い毛の先を見ると……美春さんの武

霊・コロ丸がいた。

そうだ！ 美春さんなら！

「美春さん！ 夜衣斗さんを！」

そう美羽が叫んだ時、海が爆発した！？

???

見知らぬ武霊と剛鬼丸との戦いを見守っていた美春と東山は、はぐれ化した剛鬼丸の変化と言う、またしても今までにない現象に驚愕したが、それ以上に驚愕したのが、身体を破壊されたと言うのに剛鬼丸の手が美羽達を狙って突撃した事だった。

物理法則に囚われない武霊とは言え、完全に物理法則から外れているわけではない。

特に人の形に近い武霊は、はぐれであろうと頭と胸のどちらかが失われれば、身体を維持出来ずに霧散する。

例え攻撃が武霊の核を壊していなかったとしてもだ。

なのに、剛鬼丸の手は霧散せずに美羽達に襲い掛かり、一人を巻き込んで海に落ちた。

まるで『誰かの意思』によって剛鬼丸の霧散が留められ、彼女達を襲う様に仕向けた様に見える事に、美春は戦慄する。

もつとも、その戦慄の理由を深く考える暇はなく、美春はコロ丸に指示を出し、空から落ちてきた美羽と巴を海に落ちる前に体毛で受け止めさせた。

「美春さん！ 夜衣斗さんを！」

受け止めた美羽が、聞いた事がない名前を口にした時、剛鬼丸の手が落ちた海面に爆発が生じた。

美春は慌てて受け止めた二人をコロ丸に引き寄せさせ、海岸から飛び退かせる。

ほぼ同時に爆発によって生じた津波が海岸を襲い、引いた海岸に、「夜衣斗さん！」「黒樹君！」

二人の少女の悲鳴に似た声に、美春は慌てて二人が見ている場所を見る。

そこには海岸にあったテトラポットに引っ掛かる様にして打ち上

げられている少年の姿があった。

「春香さん急いで夜衣斗さんを病院に！」

「分かつてる！」

意識を失った夜衣斗を毛で持ったコ口丸が町を疾走する。

その様子を星降り山中腹に建てられている廃校屋上で見ていた少年少女がいた。

「あは♪ とおくても凄い武霊が現れたね♪」

「うん……でも、お姉ちゃんが欲しがってた武霊が……」

「いいのいいの。代わりにあんな凄い武霊が現れたんだから……うふふ……ホント、優しい弟だね」

そう言った姉と言われた少女は優しくに微笑み、弟と呼んだ少年の頬に手を当てた。

二人は姉弟と互い呼びながら、全く似ていない。

異様なほど色白で、見惚れるほど綺麗な腰まである長い黒髪に、見る者に戦慄を感じさせるほど妖艶な容姿の姉。

線が細いが健康的な肌の色をした美少年の分類に入る弟。

少なくとも血の繋がりが無いと分らせるほどに十分な違いが二人にはあり、普通の姉弟ではない事をうかがわせるのに十分だった。

だからなのか、弟の頬に手を当てていた姉は、不意に笑みの質を変える。

「欲しいの。とても……とても渴くほど、欲しいの……」

それまで妖艶ではあっても幼げな雰囲気を出していたのに、笑みの質が変わった瞬間、成人の、しかもより妖艶な雰囲気になり、弟の唇を奪った。

されるがままの弟を姉はそのまま押し倒し、抑えられない『渴欲』を満たす為に――

激しい戦闘音が鳴り止むと同時に、男は数字を数え出した。

星波海岸に近い場所にある星波警察署。

その留置所にその男はいた。

武霊封じの文字で埋め尽くされたその留置所で、男はただ数字を数え続ける。

ぼさぼさ頭の髪で顔の大半が隠されている為、その表情は伺いしれない。

だが、この場所にいる事と、暴力だけで発達したと連想させる細身だが凶暴な身体付きを見れば、十分危ない人種だと理解出来る。

そんな男が思い馳せるのは、留置所にある僅かな窓から一瞬だけ見えたコウリユウに乗っていた飛矢折巴。

その姿を思い浮かべた瞬間、男の口元は歪み、数える速度が速くなった。

まるで暴れ回る『本能』を、数字と言う理性で抑え込んでいるかのように――

星波海岸の星波山側にある廃工場地帯で、その男は鎖でつながれ、冷たいコンクリートの床に倒れ伏している少女を見てにやついていた。

二メートル以上ある筋骨隆々の男の後ろには、男の手下らしき者達が大勢おり、男と同様ににやついている。

そんな男の所に、外にいた手下の一人がやってきて、ビデオカメラを渡した。

男は無言でそれを受け取り、撮られている映像を再生。

そこには変化しレベル2となった剛鬼丸を倒すオウキの姿が映し出されていた。

「いいね……こういう強力な武霊を待ってたんだよ」

男はそう言っ、ビデオカメラを持ってきた手下に投げ返し、

「こいつの武霊使いを徹底的に調べとけ」

鎖に繋がれた少女に近付き、鎖を持って強引に少女を立ち上げら

せた。

「なるべく早く調べ上げろよ。暇潰しのこいつが完全に壊れちゃう前にな」

それまで、そして、これからも男達の『快樂』のはけ口にされるであろう少女は――

星波学園大学部校舎内の一室で、その男は思考に耽っていた。

異様に細い目に、常に微笑んでいるその男は、星波学園の生徒のみで構成されている学生自警組織『武装風紀委員会』・通称『武風』の委員長をしている男だった。

その男が思考に耽る少し前に、部下の武風委員が今回のはぐれ発生が終息した事を伝え、同時に新たな武霊使いが生まれた報告してきていた。

（変化したはぐれ発生に加え、まるでそれに呼応したかの様に現れた強力な武霊使い……『いよいよ』と言う事か？……だが、そうなると予想より少し早い……こちらの準備はまだ終わっていないと言うのに……）

そこまで考えて男は、部屋の窓を開け、そこから見える星波町を、いや、正確には山中にある廃校と、海岸にある廃工場を見た。

（不確定要素が強過ぎるが……この際、準備の足りない分を補う為に、利用出来るものは利用すべきだな……）

男はそう思い、先程の彼の部下から渡された新たな武霊とその武霊使い・オウキと夜衣斗の写真を見た。

写真を見る為に僅かに開かれたその目には、何ら感情が籠っておらず、それはまるで『支配』者の様な冷徹な目に見え――

星波学園小中高大統合部活同好会棟群の一つ、漫画同好部の部室で二人の少年が安堵のため息を吐いていた。

直前にはぐれの発生が完全に終息したと言う校内放送があったのだが、片目を髪で隠した少年が直ぐに表情を安堵から激怒の表情に

変える。

「くそ！ 俺も武霊を具現化出来たら！ 俺がはぐれを全滅させていたのに！」

「……うん。そうだね……」

強い口調で激怒する少年に、もう一人の目の下に隈を作っている少年は若干上の空で相槌を打つ。

上の空の少年は、三階にある部室から、双眼鏡を使って見る事が出来た、見た事のない武霊の姿を思い浮かべていた。

「誰だか知らないが！ あの白騎士みたいな武霊の武霊使い！ ぜってえ調子に乗ってんよ」

「……………そうかな？」

嘲る少年に聞こえないぐらいの小声で否定の言葉を口にした少年は、その武霊の、やはり見た事がない武霊使いの必死な表情を思い浮かべ、

（あれだけ強くて見た事が無いって事は、今日初めて具現化出来たって事だよな………それなのにあんな巨大なレベル2のはぐれを倒しちゃうなんて………羨ましいけど………でも………）

比較的好意的な表情と感情を浮かべていた少年の顔と心に、僅かながらの『恐怖』が現れ――

星波町にあるマンション最上階の一室に、二人の男女がいた。

男は野性的な雰囲気を持つアイドル風で、女は凛々しいと言う言葉を体現したかの様な容姿。

そんな二人の前には、いくつもの鏡が浮かんでおり、さきほどまでオウキと剛鬼丸との闘いを映していた。

「……よかったね。幼なじみちゃんが無事で」

そう力無く笑う女の視線は、コロ丸の背に乗る赤井美羽に向けられていた。

男は手を振り、浮かんでいた全ての鏡を消すと、無言で女を抱き寄せる。

女は特に抵抗せずに男の肩に頭を乗せ、

「……どうするの？ ……あの新しい武霊も？」

そう男に問うが、男は答えず、窓の外を見る。

その瞳は、決意に満ちており、大切なものを守ろう、何に変えても守ろうと、『守護』の決意に満ち溢れていた。

だが、その瞳の奥には――

星波駅近くにある第二地下避難シェルターから一人の少年が出てきた。

若干浅黒く、猫目な彼は、携帯電話で時間を確認し、

「やば！ バイトの時間に遅れちまう！ いそがねえと！」

そう言って駆け出そうと携帯電話をポケットに仕舞おうとした時、携帯に着信が入った。

着信相手が誰か確認した瞬間、彼は電光石火の早さで出る。

「やあ。元気だったかい？」

少年がそう声を掛けると、通話相手は苦笑したようだった。

「え？ そりゃ、俺は元気一杯さ……ん？ こっちの様子？ ……」

……そうだな……相も変わらず騒がしいよ……そう言えば……」

少年は先ほど見ていた地下シェルターの外部モニターに映っていた同年代ぐらいの新たな武霊使いを思い出し、

「すげえ奴が転校してくるみたいなんだよ……いや、学年はまだわかんねえけど……ん？ いや、バイトは」

電話相手にバイトの時間を聞かれたらしく、少年は悩んだ。

相手に断ってバイトに行くか、それともバイトの事は無視してこのまま会話を続けるか、彼はどちらを『択一』しようか逡巡し――

黒樹 夜衣斗

小さな公園。

その場所で、幼い頃の小さな俺はブランコに乗りながら……泣いていた。

泣いている理由は……思い出せない。

とにかく辛い事があったのか、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながらブランコを小さく揺らし……終には揺らす事すら止めて俯き、地面に水跡を作る。

どれだけ泣いた後か、ふと気が付くと、隣の空いていたブランコに誰かが乗っているのに気付く。

反射的に誰かを確認し様と顔を向けると、そこには某チキン屋の老人を彷彿させる白髪で立派な白髭を生やした老人がいた。

「何か悲しい事でもあったのかい？」

そう優しく語り掛けてくる老人。

普通なら警戒心を抱きそうな現れ方だったが、不思議と小さな俺は警戒心を抱かなかった。

幼かったせいか、それともその老人の優しい雰囲気のせいか、とにかく俺はその老人に対して何があったか喋った……のだと思う。上手く思い出せていないのか、小さい俺の言葉は聞えず、ただ、老人の相槌の為に頷く姿のみが見える。

「大変だったね。でも、それに耐えた君は偉いよ」

小さい俺の話を聞き終えた老人はそう微笑んで、小さい俺の頭を撫でた。

その瞬間、老人の目が驚愕で見開かれる。

「な！……これは………そうか……君があの子達の………
なのか……だとすると、この出会いは………」

茫然とつぶやく老人。

意味が分からずきよんとする小さい俺に、老人は再び優しい笑みを浮かべ、何かを言おうとした瞬間、映像が消え、ただ、声だけが聞こえた。

願わくば

君に与えた運命を変える選択が

あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を……

プロローグ『選択の武霊使い』終了

次章

第一章『渇欲の武霊使い』

???

全ての成り行きを空き家の屋根の上から見ていたその女性は、常に視線の中心にしていた黒樹夜衣斗が無事だった事に安堵した表情を見せた。

だが、すぐさま表情を暗くし、天を仰いだ。

「ここしかなかったとは言え……まさかこんなに早く……こんな事になるなんて……お姉ちゃん……私、これからどうすれば……」

そう呟いた女性は、仰ぐのを止め、自らの右手を見る。

すると、その女性の右手に黒い木刀の様な短刀が、まるで生える様に現れた。

「……やるしかないんだよね……きっと……きっと、守って

見せるから……」

不安と動揺によつて塗り潰されていた瞳に、決意の炎を宿し、右手を振るつた。

右手が振るわれると同時に、『周囲を取り囲んでいた』はぐれ・骸骨犬達が一斉に襲い掛かったが、襲い掛かるタイミングと軌道を讀んでいたかの如く、女性の無造作に振るわれた黒い短刀に切り裂かれ、普通は霧散するはずのはぐれの姿が、切り裂いた黒い短刀に吸い込まれる。

それを確認した女性は、ため息一つ吐き、近くを飛んでいた烏を見た。

見られた烏は、何故か女性の近くに降りてきて留まる。

そして、

「今ので最後よ」

まるで人が喋るかの様に喋った。

「そう……みんなにはご苦労様って伝えて……後、『夜衣斗ちやん』に関しては詳しい事が分かってからみんなには伝えるから……」

喋る烏に特に驚きはせず、女性はそう言つて、屋根から降りようと歩み始めた。

その背中に、烏は心配そうな視線を送り、

「……大丈夫？」

「……………」

掛けられた言葉を手だけで応え、女性は屋根から飛び降りる。

残された烏は、暫く屋根に留まっていたが、不意にそれまで出ていた『人間臭さ』が消え、キヨロキヨロと周りを見回したかと思うと、どこぞへと飛び去り、屋根には骸骨犬が存在した焦げ跡を残して誰もいなくなつた。

第一章『渴欲の武霊使い』 1

そこは日本のとある港に寄港している外国籍の大型タンカーの船底。

名目上は日本に食料品などを輸入する為に寄港しているが、その実体は……

「……君の目が見えなくてよかったと思ったのは初めてだよ……」
そう高木弥恵に言ったのは、先日籍を入れたばかりの彼女の幼馴染・鋼。
はがね

僅かにある光源で見る彼の視線の先には、裸にさせられ、鎖に繋がれ、虚ろな目で小さな鉄格子の檻に入られている人種年代様々な男女。

その誰もが目を引く美男美女であり、鎖が繋がれた首輪には、まるで家畜の様に番号札が付けられている。

目が見えなくても、周囲の光景を視覚以外の感覚で感じ取る弥恵は、湧き上がる感情を抑える為に、ぎゅっと自らが持つ盲目者用の杖を握り、

「……………渴欲の悪意の果て……………」

「え？」

弥恵の呟きに、鋼は聞き返す。

「師が言うには、ここは渴くほどに欲した者達によって利用された者達の果て……………が集められる場所だって……………」

「……………これも『ヴァルキュリア計画』の一端だって言うのか？」

「……………こんな……………非道が……………」

呆然自失に近い呟きを口にしながら、鋼が一番近くの檻に近付いた時、その檻の少女が鋼を見た。

そして、鉄格子にぶつかる様な勢いで鋼に手を伸ばし……………」
聞くに堪えかねぬお願い』を鋼にする。

まるで獣の様に舌を出しながら、恥も外聞もなく、涎を垂らしな

がら、お願いする。

そしてそれは全ての檻に伝播し、ある者は犬の様に、ある者は豚の様に、ある者は、ある者は……………そこに……………人間はいなかった。そうする様に調教された、人だった者達。

ここは、ヴァルキュリア計画と呼ばれる計画の為に誘拐され、『用済みとなった者達』を計画の資金などに変える為に用意された『移動式奴隷市場船』の船底。

あまりの光景に、意識がぐらつくようなショックを覚え、鋼は吐き気を必死に抑えた。

吐いている暇なんて鋼にはない。

これから、鋼は、いや、弥恵は彼らを救わなくてはいけない。そのサポートをする為に、鋼はここにいる。

「弥恵……………行こう……………一刻も早くここを潰さない……………」

鋼は決意を込めて弥恵を呼ぶが、

「弥恵？」

弥恵は杖を自分の正面に持ち上げ、

「止せ！ 弥恵！」

鋼の制止の声より早く、杖を『抜いた』。

神速と呼べるほどの仕込み杖の抜刀。

そして、鋼が気付いた時には、納刀され、同時に周囲が静かになっ
っていた。

慌てて周りを見回すと、鋼の予想に反して、檻に入れられた者達
は意識を失っているだけだった。

「私がこの人達を殺すと思った？」

弥恵の苦笑交じりの問いに、鋼はばつの悪そうな顔になって、
「何したんだ？」

問いに問い返した。

「彼らの身体にあつた『誘拐されてからのあらゆる事象を斬った』
のよ」

「……………は？」

言われた意味を理解し切れなかった鋼に、弥恵は微笑んで、

「彼らが何事もなく日常生活に戻るって事……まあ、誘拐されていた期間とその間の記憶の喪失は多少の障害になるでしょうけど……さっきの状態より遥かにましでしょう？」

「そりやそうだが……そんな事」

鋼は改めて近くの少女を見る。

お願いをしてきた時、見えた無数の打撲痕や裂傷痕。それらが消え、年相応の穏やかな寝顔を見せていた。

「……可能なのか？」

弥恵が言った通りなっていると確信しながら呆然と着てきた鋼に、弥恵はにっこりと笑って、

「言ったでしょ？ 私は」

不意に眩しいぐらいの光が灯った。

思わず目を瞑る鋼の前に、光の影響を受けない弥恵が出て、仕込み杖を居合。

複数の金属音がし、光に慣れた目を鋼が向けると、地面にクナイがいくつも落ちていた。

「すまない弥恵」

「いいのよ。バックアップをお願いね」

「ああ」

そう短く言葉を交わし、弥恵が虚空に仕込み杖を抜刀すると、刃の先が通った場所に裂け目が出来、そこからライフル銃が現れた。ライフル銃を受け取った鋼は、近くの誰も入っていない檻を倒し、その陰に隠れ、構える。

構えた先には、この場の出入口らしきドアと、その前にいる忍者姿の数人の男女。

「……どうやってこの場に入り込んだのかと思えば……」

現れた者達の中で唯一着物姿の女は、その手に持つキセルを吸い、煙を吐き出してため息を吐いた。

「『次元切断』なんて初めて見たよ……噂には聞いちゃいたが…

…あんだ。シエルトンⅡシルベリアの弟子か？」

女の問いに、弥恵は頷き、

「はい。私はシエルトンⅡシルベリアが一番弟子。高木弥恵と申します。短い間でしようが、お見知りおきを」

そう丁寧にあやされ、キセルの女は驚きの表情を浮かべ、一服して天を仰いだ。

「よりによつて『七猿』の『見えざる』が来るか……まあ、実戦データを取るには最適の相手か……」

七猿と呼ばれた事に弥恵は眉を顰める。

「七猿と言う呼び方は、あまり好きではありません」

「知ったことかないね」

煙草の煙を吐きながら、無数にある檻を見回す。

「……人の商品に何をした」

「なかった事にさせていただきました」

弥恵の言葉に、再び檻を、彼女の商品だった者に視線を向け、その身体に起きた変化を確認。

鋼と違いその言葉の意味を瞬時に理解した彼女は、深いため息を吐いた。

「まったく、今日が競日だつて言うのに……あそこまで調教するのにどれだけ時間と労力を掛けたと思ってるんだい？」

キセルの女の言葉に、弥恵は再び眉を顰める。

今度はより深く。

「あなたは……何とも思わないのですか？ 人が、あんな風になつた姿を見て」

言つても意味がないと思つていながら、それで口に出さずにはいられなかった弥恵の言葉を、キセルの女は鼻で笑う。

「生憎、あたいは物心ついた時からこつちの業界にいてね……あんたが言っている意味が分からないね……逆に聞くけど？ これがどうなつたら何か思うんだい？」

そう本気で問い返して来るキセルの女のアまりにも違つ『違い』

に絶句する弥恵。

その弥恵の反応にキセルの女はつまらなそうに一服し、袖から拳銃を取り出し、

「こうなったら」

一番近くの檻にいる女性に銃口を向け、

「あたいでも何かを思うのかい？」

引き金を、

「止めなさい！」

あまりにも唐突な行動に弥恵の動きが鈍り、仕込み杖を抜刀するより早く、忍者達が弥恵に殺到した。

鋼はキセルの女の拳銃を撃ち落とそうとライフルを撃つが、忍者の一体によって身体で受け止められてしまう。

忍者が殺到した弥恵は、反射的に抜刀を放つが、普通なら視認出来ないほどの抜刀を忍者達は避ける。

もっとも完全には避け切れなかったのか、身に纏う忍び服が切れ、その身体が露わになり、

「冗談だろ？」

思わず鋼にそう言わせる『本物の獣』の身体が出てきた。

ある者は猿。ある者は犬。ある者は獅子と、人の形をしているのに獣の身体。

「ああ、言い忘れたが、こいつらはヴァルキュリア計画の過程で造られた『戦士の実験体』だそうだ」

そんな事を言いながら、キセルの女は、あっさり引き金を引いた。特に抵抗らしい抵抗も、感情らしい感情も無く、まるで機械が引き金を引いたかのように。

生じた銃音に、

「人としての存在を奪った上に！ 命まで奪うのか！」

鋼は怒りにまかせ、ライフル銃をキセルの女に向けて連射するが、全て忍者によって銃弾を受け止められる。

だが、弥恵の方は怒りを浮かべるより、疑問符を浮かべた。

何故なら、拳銃を撃ったキセルの女が撃ったまま動きを止め、撃った檻を見たまま絶句しているからだ。

「……………な！　ちょ！　やめ」

不意に驚き制止の言葉を口にし終えるより早く、何かがキセルの女の顎をかち上げ、倒した。

それに反応した銃弾を受け止めていた忍者も、唐突に現れた『巨大な白い腕』に吹き飛ばされ、天井にぶつかり、檻の上に落ち、動かなくなる。

すると小さくなる白い腕の先には、『眼鏡を掛けた白熊の人形』がいた。

もつとも、巨大な腕が小さくなっている事から分かる様に、それは人形ではない。

腕がその小さな身体に合う大きさになると、もう一方の腕を振るう。

すると弾丸が床に落ちた。

それにはっとした弥恵は、慌てて銃弾が撃ち込まれた檻の気配を確認すると、檻の中の女性は無事。

どうやら撃ち込まれた瞬間に眼鏡の白熊人形が間に割り込み、銃弾を受け止めた様だった。

「ありがとう」

ほっとした弥恵がそう眼鏡の白熊人形に言うと、眼鏡の白熊人形は照れたように頬を掻こうとして、

「って言いたいけど！　危ないからきちゃダメって言ったでしょ！」

怒られ、委縮。

更に何かを弥恵が言おうとするより早く、忍者達が弥恵達に襲い掛かってくる。

「弥恵。来ちゃったものはしょうがないって！」

弥恵が抜刀し、それを避けた忍者に向かって弾丸を撃ち込みながら、鋼はそう言い、眼鏡の白熊人形は同意する様に頷く。

「……………もう！　後で師に怒って貰うからね！　いい！」

弥恵の言葉に、眼鏡の白熊人形は激しく頷く。

「行くわよ二人とも！　さっさとここを潰して、全員を家に帰しに行きましょう！」

その日、日本のとある港で、外国籍の大型タンカーが一隻謎の沈没を遂げた。

もっともそれが世間を騒がせる事はなく、代わりに騒がれたのは、大量の失踪者が失踪していた間の記憶を失って、無事に家族の下に帰ってきた事だった。

武装守護霊

第一部『七人の宿悪の武霊使い』

第一章『渇欲の武霊使い』

そこにあるのは毛布と一台のテレビのみ。

何の衣服も身に付けていないその少女は、毛布に包まりながら、テレビに映るアニメをずっと見ていた。

彼女の一日は単純。

アニメ見て、『仕事』をする。

それだけで、彼女は彼女として成立してしまう。

何故なら、彼女が行う『仕事』は、他者の渇欲を満たす為の仕事。

お客と一緒に、お食事し、

お客と一緒に、お風呂に入り、

お客と一緒に、寝て、

お客と一緒に、お客と一緒に、お客と一緒に、お客と一緒に、お客と一緒に、

そこに彼女の意志はなく、当然、彼女の彼女したらしめる自我も希薄。

お客の望むままに、あらゆる欲に、行為に応える。

きっと普通の人間ならとうに壊れている様な状況だが、最初から壊れている彼女には、壊れる何かもない。

そんな彼女が唯一、自分らしい、自我らしいものを得られるのは、テレビ画面に映されるアニメ。

彼女は、そのアニメの登場人物を、まるでコピーしているかの様に、口調を、仕草を、人格を模倣した。

それによって彼女が何かを主張したわけではないが、その様子を面白がった彼女の客達が、彼女がもつとも模倣していたキャラクターの設定通りのものを与え始める。

服、食事、家具……そして、

「あなただあれ？」

「初めまして……………お姉ちゃん」
弟。

第一章『渴欲の武霊使い』 2

黒樹 夜衣斗

気が付くと、真つ白な天井があつた。

? 夢オチ?

..... そうだよな..... あんなラノベみたいな展開、普通以下の俺に起こるはずないよな..... あはは、馬鹿みたいだ。

そんな事を思いながら上半身を起こし、周りを見回すと.....
明らかに病院ぽい所だった。

..... 何で病院にいるんだ?

(意識を失つてたからに決まってるでしょ?)

そりゃそうだよな..... って!? サヤ!?

(ええ..... 夢だと思いたいののは分かるけど.....)

..... そつか..... まあ、あれだけの事があつて、夢オチにするのは..... 無理があるよな.....

(夜衣斗.....)

心配そうなサヤの声に、俺は苦笑した。

平気だよ。今は..... まあ、まだ現実を把握していないってのもあるかもしれないが..... 俺にはオウキがいるんだろ?

そう思うと同時に背後に何かを感じ、振り返るとそこには半透明なオウキがいて、俺を見ていた。

..... なるほど、これが具現化していない武霊の状態か.....

これからどんな事態になって、どんな生活になるか一切分からなくって、考えれば不安になるが..... オウキを見ると何とかなる様な気がしてきた。

..... これからよろしくな..... オウキ。

そう思うと、オウキが嬉しそうに頷き、俺の背中に消えた。

しばらくオウキが消えた場所を見た後、首が痛くなったので正面に首を戻すと、向かい側に田村さんと美羽さんが言っていた自警団

の人がいる事に気付いた。

静かに寝息を立てているのを確認して、俺はほっと一息。

ヒーラーサーバントの治療が間に合った事に安心したのだが、ふと疑問に思った。

……なんで俺は助かってるんだ？

起きたばかりで記憶の混乱があるのか、気を失う前の事をつさに思い出せず、そう疑問に思ったが……少し考えると徐々に思い出し始めた。

剛鬼丸の手に突撃された時、俺は咄嗟に抱き抱えていた二人を落とした。

狙いが俺なら、二人を放せば少なくとも二人は助かる。

そう反射的に思ってたの行動で、実際にその通りになった。

そして、剛鬼丸の手に押され、俺は海中に落とされる。

もがく気力もない状態でなんの抵抗も出来ず、そのまま海底に叩き付けられ、がっしりと背の砂と一緒に俺は海底に押し込まれ、固定されてしまう。

俺を固定し終えた剛鬼丸の手は、急激に膨張。

自爆！？

そう思った俺は、何とか抜け出そうとするが、身体が異様なほど重く一切動かない。

オウキを具現化しようにも集中が出来ないし、間に合わない！？あがくにもあがけない状況に、何とかならないかと自分の目とP Sサーバントのカメラが自然と目まぐるしく動き………不自然な光景をとらえた。

それは、『電動車椅子に乗った中年の男性』！？

中年の男性が車椅子に乗って、俺から少し離れた場所に居て、俺の視線に気付いたのか、人差し指を唇の前に当てた。

そのジェスチャーの意味を理解するより早く、

男性の背後に半透明の武霊が現れる。

剣と銃で構成されたかのようなロボットの様な武霊。

それが一瞬の内に具現化し、男性がこっちを指さすとともに、全身の銃口をこちらに向け、俺が驚くより早く撃った。

瞬間、剛鬼丸の手が浮き、俺との間に隙間が出来た瞬間、何からの力で一気に俺の身体が引き抜かれる。

ほぼ同時に、剛鬼丸の手の膨張が限界に達し、爆発の勢いによってぐちゃぐちゃに吹き飛ばされ……………

気が付いたら病院にいた。

…………あのジェスチャーはどう見ても…………黙っててくれ…………か？

（確かにそう見えなくもないよね）

色々と考えられなくもないが…………それが一番しっくりくるし…………だとすると理由はなんだ？

（情報が少なすぎるから、考えても無駄だと思うけど？）

それもそうだな…………ん……………

????

幾何学的な模様が宙に無数に浮いている空間に、六人の男女が集まっていた。

四十から五十ぐらいの年齢の彼女らは、特に何かを話し合っていると言っ訳ではないが、少なくとも互いに警戒し合い、けん制し合っている様だった。

六人は円形に並び、互いが互いの視界に入るような微妙な距離で立っているが、六人で作る円にもう一人入りそうな間が空いており、そこに

「「すまない。遅れた」」

電気車椅子に乗った男性が唐突に現れ、車椅子に備え付けられているノートパソコンが男性の代わりに喋った。

「っは、ずいぶん。おっせええとうじょうだあな」

眼鏡を掛けた男性が、声の強弱がバラバラな口調でそう言い、車

椅子の男性を睨む。

「「どうしも外せない個人的な用件があつてね」」

「よおけんだあ？」

目を合わせ、互いに何かを探り合う車椅子の男性と眼鏡の男性。
僅かな睨み合いの後、

「……………つち……………まあ、いいさ……………」

眼鏡の男は車椅子の男をそれ以上問い詰めず、七人の中で両脚が機械化している白人男性を見た。

「つで、こうして集めたのはどういうわけんだ？　くだらねえ事なら……………わかあつてんだろうな？」

眼鏡の男の恫喝めいた言葉に、機械義足の男性は嘲りの笑みを眼鏡の男に向ける。

「私が皆を集めた要件……………本当に分からないのか？」

「……………『主人公』の事でしよう？」

機械義足の男性の問いに答えたのは、チャイナドレスを着た黄色人女性だった。

チャイナドレスの女性の答えに、機械義足の男性は頷き、

「その通り。師から見せられた予知夢の条件と、今の我々はまさしく合致している」

そう語ると、他の何人かが眉を顰めた。

「ふむ……………つまり、我々は完全に『宿敵』になったと？」

両腕が機械義手になっている白人男性の問いに、大きなサングラスを掛けて杖を持つ女性がため息を吐き、

「何を今更……………」

そう言つて六人に背を向けた。

「まだ話は終わっていませんよ？」

機械義手の男性がサングラスの女性に静止の言葉を掛けるが、サングラスの女性は再びため息を吐くと共に、

「……………これ以上ここにいと……………私はあなた達を殺してしまいたいが……………」

四人がぞつとする様な殺気を出して、

「よろしいですか？」

杖に手を掛けた。

特に何も感じていないのは、先程から一切の表情の変化を見せていない鼻マスク・長手袋を付けた白人女性と、唯一殺気を向けられていない車椅子の男性のみだった。

「……では、失礼します」

誰も何も言わないので、サングラスの女性は、車椅子の男性が現れた時同様に唐突に消えた。

再び六人になったこの場を仕切る為に、機械義足の男性は咳払いをして、

「……とにかく、我々の宿敵化が避けられないのは……『あの時』から……互いが互いの『目的』の為に動くとした時から、決まっていた事実だ。ならば、我々が懸念すべき最大の事項は、『我々に対応した主人公』の出現」

そう語るが、それに機械義手の男性は眉を顰める。

「ですが、『あの時』から今日まで、『他の主人公』の出現は確認されても、我々に対応した主人公の出現は確認出来てはいないのでは？」

機械義手の男性はそう問い、他の者達を見る。

特に反応らしき反応は返ってこないが、問いを肯定しているのはありありと感じられた。

「だからこそ、これからは連絡を密にし、主人公に関する情報『だけは』共有化をするべきだと、俺はここに提言したい」

機械義足の男性のその提案に、拒否をする者はこの場には居なかった。

だが、それぞれの心の内では、それぞれ提案とは別の思惑を考えている事は、この場の誰もが確認せずとも分かることだった。

誰もいなくなつた幾何学的な模様が宙に無数に浮いている空間に、

不意にサングラスの女性が戻ってきた。

「どうしても外せない私用って言うていたけど……あなたが私より遅く彼らの前に現れるなんて……一体、何をしていたの？」

その独り言の様な問いに、同じく不意に戻ってきた車椅子の男性は苦笑した。

「「気になりますか？」」

「ええ。タイミングがタイミングですからね」

「「…… かないませんね」」

車椅子の男性は、そう言わせて苦笑し、少し考える仕草をして、ノートパソコンを打った。

「「実は……『我々に対応するかもしれない主人公候補』を見付け、助けてきました」」

車椅子の男性のそのノートパソコンに喋らせた内容に、もし仮にこの場に他の五人がいたとしたら、驚くどころの騒ぎでないのだが、サングラスの女性は驚きもせず、代わりにため息を吐いた。

「あなたの事だから、誰よりも早く見つけるとは思っていたけど……少し早すぎる気もするわね……」

そのサングラスの女性の疑問に、車椅子の男性は意味心な苦笑を浮かべる。

「ああ……なるほど、ある程度目星を付けていたわね」

「「ええ、『偶々支援していた他の主人公の一人』が、『彼』にそっくりでしたので」」

その車椅子の男性の発言に、サングラスの女性は眉を顰めた。

「あなた……予知夢で主人公の顔が見えていたの？」

「「ええ」」

頷く車椅子の男性に、サングラスの女性は呆れた顔になり、

「「…… あきれた…… あなたはあの時から『こうなる事』を見越していたの？」」

「「いいえ……ただ、私はあなたほど彼らを信じられなかったので……」」

「……………そう……………今となつては、それが正しい選択だったのかもね……………」

ため息を吐くサングラスの女性に、車椅子の男性は首を横に振る。
「「どうでしょう？　もしかしたら、私が彼らを信じなかったからこそ……………」こうなつてしまった」のかもしれない」

「ふふ……………これでは、いつもの水掛け論ね……………止めましょう。不毛だわ」

疲れた様に笑つてサングラスの女性は、少し考え、

「……………それで、その子はいつ主人公になるの？」

その問いに、車椅子の男性は少し困つた顔になつた。

車椅子の男性のその態度に、サングラスの女性が嫌な予感を覚え、
「まさか……………」彼』は、『私達と同じ』……………」運命選択付与者』
？」

ありえないと思いつつそう口にすると、車椅子の男性は頷いた。

「そんな！……………だって、それを出来る師は……………」

「「どつという経緯で、いつ付与されたのかは不明ですが……………少なくとも『世界拒絶者』である事は間違いない様です」

「『無の祝福』は？」

首を横に振る車椅子の男性。

「そう……………なら間違いないわね……………でも、どうするの？　世界拒絶者で運命選択付与者と言う事は、『私達より確率が低い』とは言え、『私達と同じ様に負ける』可能性もあるつて事よ？　そうなら……………」

「「ええ、ですから……………少し、無茶なお願いがあるのですが……………」

躊躇いがちな車椅子の男性の提案に、サングラスの女性は少し驚いた。

何故なら、車椅子の男性が、サングラスの女性に頼みをした事など、出会つてから二十数年一度もないからだ。

「言つて御覧なさい」

サングラスの女性が苦笑しながらそう促すと、車椅子の男性は意外な、だが、考えてみれば当然な願いをし、

「それは……なんの皮肉なのかしらね？」

そう自嘲めいた笑みを浮かべさせた。

第一章『渴欲の武霊使い』 3

黒樹 夜衣斗

病院に入院した経験が無いので、最初の内はベッドで上半身を起こしたままキヨロキヨロしていたが、正面以外はカーテンで区切られていた為、直ぐに飽きた。

かと言って、ベッドから出て勝手に病室から出るのは……まずいよな？

（まずいんじゃない？）

だよな……

手持ち無沙汰になった俺は、どうしても思考を巡らしてしまう。そして、当然。

………何で………

（え？）

何で俺なんだ？

（夜衣斗………）

俺の心の底からの力無い疑問に、

気が付くと、また心の中の公園に俺は居て、目の前でサヤは悲しげな表情を浮かべた。

「それは………それが『夜衣斗の宿命』だから………」

俺の宿命？………運命の次は宿命かよ………

「夜衣斗の死の運命は、『世界の拒絶』」

？………拒絶？しかも世界の？………ちょっと待て！？そんなのから拒絶されているのなら………どう足掻いたって………

愕然とする俺に、サヤは首を横に振る。

「だから、夜衣斗が死の運命から逃れる為には、夜衣斗は『主人公』になる必要があるの」

はぁ？主人公？

次々と出てくる普段聞けば中二病かと確実に引く言葉に、俺は状況が状況だけに戸惑うしかない。

まあ……………額面通りの言葉の意味じゃないよな……………この場合……………

「ええ」

ならどんな意味が？

その問いにサヤは苦笑に近い微笑みを浮かべ、答えない。

……………なるほど……………その答えもサヤの制限に引つ掛かるわけか……………

……………そもそも、何でサヤに制限が掛けられているんだ？

「それは……………私が余計な事を教えて、夜衣斗に余計な運命を呼び寄せさせない為」

？……………ああ、そう言えば、サヤも運命を変える選択だったな……………つまり、サヤの存在自体も、オウキと同様に死の運命を呼び寄せる要因になると言う事か？

(……………多分)

多分？

(私もどこからどこまで影響が出るか分からないの)

それもサヤ自身に掛けられている制限のせいかな？

(違うわ。本当に知らないだけ)

……………ん……………まあ、とにかく、サヤから得られる情報は、俺が思い出すか、自分で調べるしかないわけか……………

「いえ、調べるのは止めといた方がいいと思うわ」

？

「今の夜衣斗は、色々な他の運命を引き寄せやすいから」

それは……………世界が……………俺を殺そうとしているからか？

頷くサヤ。

ため息を吐く俺に、

「だから、どこに何があるか分からない今の状況で、夜衣斗が自分から何かをするのは止めた方が良さと思う」

なるほど……………つまり、サヤは『今の事』は何も知らないわけか

……
「え？ええ」

……まあ、十年ぐらい俺の中にいたわけだから、それは当然か
……それにしても……そうなると、俺から何かをするのは、どんな事でも危険になるって事だよな……まあ、俺から何かをするのは、俺の性格からして想像しがたいが……それでいいんだろうか？
普通、物語の主人公は、何かしらの行動を起こすものだろうし……
まあ、主人公の意味が通常の意味で使われる場合はだが……いや、
そうじゃない巻き込まれ型もあるか？

「……夜衣斗」

考え込む俺の名を呼び、優しく微笑みかけるサヤ。

「夜衣斗、まだ選択の途中だわ。だから」

一緒に死にましようってか？……悪いが、その選択肢は……正直
ない。例え、魂の自由を謳歌出来ようと、その自由は全て独り善がりな自由だろ？自分に無いものを自由になんて出来ない。そうだろ？

「……ええ」

俺の問いに、サヤは躊躇いがちに頷いた。

人は一人だけじゃ生きられないってよく言われるが……それは
きっと物理的な意味合いだけじゃなくって、精神的な意味合い、文化文明、人が人として存在する為に必要なありとあらゆるものに言える事で……仮に魂の自由を得る事が出来たとしても……俺の自由はそう長くは続かないだろうな……俺の精神力が、魂の自由……要するに俺だけの世界？……に耐えられるとは思えない。

「……私じゃ不足？」

悲しそうに言うサヤに、俺は首を横に振った。

サヤがどんな存在なのか分からない時点で決めつけるのはなんだが……サヤが俺の中に十何年もいたわけだろ？

「ええ」

それってつまり、俺と同じ事を体験し、俺が知っている事以上の事をそう多くは知っていないって事でもあるんじゃないか？なら、

サヤが俺だけの世界に加わったとしても、そう多くは世界の広がりを持たせられないと思うんだが……

「そう……かもしれない……でも」

これから俺が待っている過酷な運命よりまし……か？

頷くサヤ。

だけどさ、その……主人公ってやつになれば、死の運命からは解放されるわけだろ？

その俺の問いに、サヤは困った表情になる。

「確かに、世界の拒絶はなくなると思う」
は？

「でも、例え主人公になったとしても、死よりも過酷な運命に晒される可能性が高いわ」

……だから、主人公にどんな意味が？

「それもいずれ思い出すわ」

思い出すって言われもな……よく分からない事を判断材料には出来ないし……過酷と言われても……いまいちピンとこない。

「きつと後悔する……そして、例え激しく後悔して……死を

望んだとしても……『主人公になったら夜衣斗は死ねなくなる』」

死ねなく……なる？……不老不死にでもなるのか？

「場合によつてはそうなるかもしれない」

？

「不老不死に自らなつた主人公もいるって話だから……それは夜衣斗の選択次第」

その言い草だと主人公つてのは過去にも現在にも複数いるってみたいだな……まあ……とにかく……言葉振りからすると、主人公になると、『死んではいけない存在になる』って事か？

俺の問いに頷くサヤ。

「主人公は……主人公としての役目を終えるまで、死んではいけない、『そう言う存在』なの」

……死んではいけない存在……それはどう言う存在

なんだろうか？……思い付くのは、空想の物語ばかりだが……
……死にたくても死ねない。あるいは死んではいけない……
か……

「……あるいは……主人公じゃなくて」
じゃなくて？

呟く様に言ったサヤの言葉に俺が反応すると、サヤははっとなつて、慌てて首を横に振った。

「うん！何でもない！気にしないで！」

妙に必死に否定するサヤ。

……滅茶苦茶気になる反応なんだが……

無言になるサヤ。

しばらくの沈黙の後、不意に、

「あれ？夜衣斗さん！？」

と言う美羽さんの声が聞こえ、

気が付くと病室に戻っていて……目の前に美羽さんが居て、俺の顔を覗き込んでいた！？

思わずびくつとすると、美羽さんもびくつとした。

「だ、大丈夫ですか？何だかばーとしてみたいですけど……」

「だ、大丈夫です……ちょっと考え事をしていたもので……」

「そ、そうなんですか……よかった……」

ほっとした様子の美羽さんの全身を俺は素早く確認。

……どこも怪我はなさそうだ……うまく海に落ちたのか、誰かに治療してもらったのか……

そんな事を考えていると、

「ほほう。さっそくボディチェックですか……流石私の甥っ子。抜け目がないわね」

などと言うどこかで聞いた事がある声が聞こえ、

「でも残念。美羽ちゃんのボディはちょっと残念なのよねえ」

あまりの発言にどこで聞いたか思い出すより早く、声の主には俺は

視線を向ける。

そこには母親に写真で見せて貰った叔母黒樹　春子^{はるこ}さんが居て、
にやにやしていた。

「は・る・こ・さ・ん！」

残念と言われた美羽さんが怒った表情を叔母さんに向けるが、叔
母さんは、

「んふふ。いいじゃない、そう言うボディも需要があるわよ？」

「そう言う問題じゃありません！」

……………なんなんだこの人……………本当にうちの母親の妹か？母親と
は全然違うんだが……………

そんな事を思っていると、

「ちなみに、私の事は叔母さんじゃなくて、春子さんって呼びな
さい。年齢的には姉さんより、夜衣斗ちゃんの方が近いんだからね」

……………そう言えば、年の離れた妹だつて言つてたっけ……………まあ、
確かに若く見える。少なくとも二十代後半か？……………なんであれ、
年相応の人物ではないのは間違いないな……………

にやつと笑っているお……………春子さんから何となく視線をずらすと、
春子さんの後ろに気まずそうな飛矢折さんがいた。

飛矢折さんは俺の視線に気付くと、ちよつと困った様に微笑んで、

「……………ちよつと場違いかな？」

「……………いえ、そんな事はないと思いますよ」

「そう……………かな？」

俺の言葉にちよつとほつとした様子を見せる飛矢折さん。

「おやおや……………んふふ」

俺と飛矢折さんの様子を面白そうに見ていた春子さんが、
「夜衣斗ちゃんも隅に置けないわねえ」。町に来てまだ二日目だ
つて言うのに、こんな美人ちゃんと知り合いになるなんて

「び、美人？」

春子さんの言葉に戸惑う飛矢折さん。

……………まあ、その事については同意だが……………二日目！？

「ん？もしかして、丸一日寝ていた事に気付いてなかった？」
……………まじで？

赤井 美羽

意志力の回復には個人差が結構あって、大体限界まで意志力を消費すると意識が目覚めるまで二三日は掛かる事が多い。

特に武霊を具現化出来る様になったばかりの武霊使いが限界まで使っちゃうと、一週間以上目覚めない事がほとんどで、長い人は半年以上意識不明になっちゃう事もあった。

武霊の扱いに慣れている美羽だって、大体三日ぐらい掛かるから……………夜衣斗さんは武霊もそうだけど、そう言う所でも普通じゃないみたい。

その事を夜衣斗さんに言うと、夜衣斗さんは腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸……………何を考えてるんだろう？

何故か春子さんも珍しく難しい顔をしていて、美羽の視線に気付くと、慌てて、

「と、とにかく、夜衣斗ちゃんは何とも無いみたいだし、これから町の案内でもしてあげれば？その間に、夜衣斗ちゃんの歓迎会の準備をしておくから」

とか言っただけ……………

「準備って……………ほとんど家のお母さんがしますよね？」

じとーっと春子さんを睨むと、春子さんは渴いた笑い声を上げてそっぽを向いた。

……………まあ、いつもの事だからいいんだけど……………

「じゃあ、そう言う事でいいですか夜衣斗さん？」

美羽の問いに、夜衣斗さんは頷いた。

第一章『渴欲の武霊使い』 4

???

「……………それで、検査結果はどうなの？」

星波総合病院診察室にて、黒樹春子は夜衣斗達の前で見せた表情とは全く違う真剣な面持ちを、ドイツ人らしいメガネを掛けたきつめの美人女医に向けていた。

「……………残念だけど……………」

問われたドイツ人女医が躊躇いがちにそう答えると、春子は深いため息を吐き、

「そう……………やっぱり、私が何とかするしかないのよね……………」
自分の手を見た。

その視線の意味を知っているのか、ドイツ人女医は心配そうに春子を見て、

「出来れば手伝いたいけど……………」
「あれ』は私達では手に負えないものだから……………」

気遣うドイツ人女医に春子は微笑む。

「分かってる。これは私の役目よ……………」
でも……………気が重いわ……………」

……………『私程度』ので何とかなる崩壊具合だったらしいけど……………」

「それでも、何とかしないと『彼ら』に『いい口実』にされるわよ？」

「そんな事……………言われなくても分かってるわ……………重々ね」

再び深いため息を吐く春子は、窓の外を見る。

外にあるのは星波町。

「……………『ここしかなかった』とは言え……………軽率だったのかな？」

誰にともなく口にした問いに、ドイツ人女医はため息一つ吐き、

「誰もこうなるとは予測出来なかったのだから……………仕方がないわ」

「仕方がないって言葉で済めばいいけど……………姉さんになんて報

告しよう……………」

本気で困り果てている春子に、ドイツ人女医は何とも言えない表情になる。

しばらく無言で何事かを考えていた春子は、ふと思い出したかのように、

「とにかく、みんなには改めてより気を付けるように言っというくれる？」

「ああ、それだったら、もう既に『沙羅ちゃん』から伝令済みよ、ドイツ人女医のその返答に、春子は目を瞬かせて、

「……………ほんと、私なんて必要ないわね」

苦笑。

「否定は出来ないわね」

「否定してよ……………」

飛矢折 巴

星波病院での念の為の診察で異常なしと診断された黒樹君は、病室での話通り赤井さんの町内案内を受ける事になった。

あたしは居てもしょうがないので……………昨日今日の出来事だったし、心配で様子を見に來ただけだったのだけど……………病院前ではったり赤井さんと春子さんに会って、そのまま強引に黒樹君の病室まで一緒に連れられちゃった上に、

「あなたも一緒に案内しちゃったら？」

と面白半分に春子さんに言われ、黒樹君にも、

「……………結局、昨日お礼が出来ませんでしたから……………よろしかったら」

そう言われ……………物凄く緊張した黒樹君のその様子に断るに断れなくて……………結局、今、黒樹君の隣にいる。

もちろん、黒樹君を挟んだ隣には赤井さんがいて、若干不機嫌そうに感じた。

「……………昨日も着ていましたけど……………その制服って、星波学園の

制服ですか？」

赤井さんの不機嫌に気付いているのかいないのか、黒樹君はそんな事をあたしに聞いてきた。

「ええ、高等部女子の制服で………ちょっと用があつたから着ているの」

思わず美幸の事を省いて説明すると、赤井さんが黒樹君越しにあたしを睨んだ。

黒樹 夜衣斗

………これは………何かあるな………触れない方が賢明か？

(賢明でしようね)

………だよな………

美羽さんに町内の案内をして貰う事になった時、春子さんがふざけてなのか、飛矢折さんにも話を振って……その飛矢折さんが困った様子で俺を見た時、ふと結局お礼を出来ていない事を思い出し、思わず誘ってしまったのだが………思い出してみれば、飛矢折さんと美羽さんって何らかの確執を持つてるぽかったよな………今だつて美羽さんは微妙に不機嫌そうだし……飛矢折さんは休みだと言うのに学校の制服を着てるし……起き抜けだからと言って、思った事を口に出し過ぎだったよな………今更な反省だが………

そう思つて俺が口をつぐんでいると、

「えっと、とりあえず、大まかな町の区分を説明しますね」

美羽さんは若干の不機嫌さを吹っ切るように笑顔を俺に向けた。

「まず、この星波町は星降り山と星波山の二つの山と海に囲まれ町です。星取町側にあるのが星降り山。星渡町側にあるのが星波山と呼ばれている山です」

そう言つてそれぞれの山を指さして、星波山の空に指先を移動させ、

「ちなみに、昨日出たはぐれの発生ポイントは、海以外にもありまして、あそこら辺が山側の発生ポイントです」

はぐれって……昨日襲ってきたあの骸骨犬の事か？

「はぐれについては後で説明しますので、とりあえず、先に役場で武霊使いの公式登録を済ませておきましょう」

そう言つて美羽さんが視線を向けた先には、確かに町役場があったが……武霊使いの公式登録？

赤井 美羽

武霊使いになった人は、まず最初に町役場で公式登録しなくちゃいけない。

これは町が武霊使いの数や能力を把握する事で、色々なケースに対応しやすくする為。

はぐれ発生で自警団だけじゃ対応しきれない時とか……武霊使いが犯罪を犯した時とか、その抑制とか……

そんな色々な思惑がある公式登録だから、当然登録する事に抵抗感を覚える武霊使いもいる。

だから、公式武霊使いになった人には様々なメリットが町から与えられる事になってて、その制度が取り入れられる様になってから公式武霊使いが急増したとか。

夜衣斗さんにそう説明すると、あっさり納得してくれたのか、素直に美羽と一緒に町役場に入ってくれたんだけど、

「……ゴールデンウィーク中でも役所が開いてるんですね……」
そう不思議そうに夜衣斗さんが言つたので、思わず立ち止まって首を傾げると、

「……普通、役所が休みの日に開いている事なんてないでしょ？」

「そうなんですか？」

「……テレビなどで見た限りじゃそうでしたが……まあ、武霊なんて言う特異過ぎる存在がいるのですから、休んでられないでしょうが……」

夜衣斗さんが不思議そうにそう言つた時、町役場から一人の女性

が杖を突いて出てきた。

美羽はその女性に見覚えがあつて、美羽が声を掛けるより早く、
「あら美羽さんに、飛矢折さん。こんな所で何をなさっているのですか？」

そう言つた大きめのサングラスを掛けた着物姿の女性は、美羽が所属する部活顧問の先生。

「そう言つ先生こそどうして役場に？」

「私は夫にお昼ご飯を届けに来たのですよ」

美羽の問いに、微笑みながら答えてくれ、そのまま美羽達に近付き、夜衣斗さんの前で止まった。

「転校生の方ですか？」

「え？……ええ」

弥恵先生に問い掛けられて、戸惑いながら頷く夜衣斗さん。

戸惑う夜衣斗さんに弥恵先生は微笑んで、

「私は星波学園高等部教師・高木^{たかぎ} 弥恵^{やえ}と申します。こちらの赤井美羽さんが所属する部活の顧問と、飛矢折巴さんのクラスの担任をしているので、思わず声を掛けてしまいました」

飛矢折 巴

丁寧に黒樹君に挨拶する高木先生に、黒樹君は戸惑つた様子を見せた。

「……俺は黒樹……夜衣斗です」

「はい。これからよろしくね」

何故なら黒樹君の視線は高木先生が掛けているサングラスの横から僅かに見える傷に向けられていて……黒樹君の視線に気付いた高木先生は、

「気になりますか？」

「………すみません」

「ふふ、慣れていきますから構いませんよ」

謝る黒樹君に高木先生は微笑んで、

「私、幼少の頃に両目の視力を失うほどの事故に遭ってしまって……この下にはとてもこの場では見せられない様な傷痕があるのですよ」

そう説明したけど、黒樹君は困惑した様子を見せた。

その困惑も高木先生は慣れっこなので、

「両目を失ったと言っても、私は特殊な訓練を積んでいますので、気配などで……視力以外の五感で人物を特定し、ある程度空間を把握することが出来るのですよ」

そう言つて、黒樹君の頬に触れるか触れないかの位置に手を移動させて、撫でる様に動かし、黒樹君を驚かせた。

驚く黒樹君に、悪戯っぽく微笑んだ高木先生は、

「さきほど夫の休憩が終わった所ですから、武霊使い登録は直ぐに終わると思いますよ」

そう言つて黒樹君から離れ、

「それではみなさん学校でお会いしましょう」

そう言つて町役場から離れて行った。

その歩みは、とても盲目だと思えないほどしつかりした歩みで……

……黒樹君には言えないけど、多分、高木先生は、あたしと同じ『気を使う武術』を習得している。

そうじゃないと盲目であんな動きは出来ないだろうし……『あんな武霊』も使えないと……あれ？そう言えば、なんで高木先生は黒樹君がまだ登録していない武霊使いだって分かったのだろう？昨日の今日で???

???

町役場から少し離れた、夜衣斗達から見えなくなった所で、高木弥恵は不意に立ち止まり、近くにある誰もいないバス停に顔を向けた。

「……何をしているの？そんな所で、
何もない空間に弥恵が声を掛けると、

「「かないませんね」」

何もないはずの空間から人工音声が発せられた。

「私に隠形系が意味のない事を分かっているのでしょうか？」

「「ええ」」

弥恵はため息一つ吐き、

「彼が？」

そう問い掛けると、

「「はい」」

と同意され、弥恵は眉をしかめた。

「……………この事をあなたの『お気に入りの主人公』は知っているの？」

「「まさか……………伝えられるわけがないでしょ？」」

「知らないわよ？後で激怒されても」

「「それは怖い」」

弥恵は再びため息を吐き、

「……………今はまだ主人公とはとても言えない彼よ……………ほどほどにね」

「「ええ」」

黒樹 夜衣斗

星波町の町役場は、それなりの大きさがあつた。

今日はゴールデンウィーク最終日な為か、人もそれなりに中におり、役場の人間がそこそこ忙しそうにしていた。

そんな中を、美羽さんは福祉課と書かれているカウンターの前に行くと、そこには一人の女性とその女性に対応している福祉課の人が居て、

「あ！」

と美羽さんが驚きの声を上げた。

その声に気付いた二人がこっちを見ると、女性は美羽さんを見て力なく微笑み、俺を見て少し驚いた様子を見せた。

「えっと……夜衣斗さん。この人は……昨日……」

何故か言いにくそうな美羽さんの隣に女性は移動して、真っ直ぐ俺を見て、

「私は田村遼の妻です」

そう言った。

？……あ！田村って、剛鬼丸の……

「今朝、夫のお見舞いに行った時には寝てらしたのに……もう回復なさったのね……少し驚いたけど、ある意味、丁度良かったかしら」

言葉の最後は呟く様に言って、福祉課の人を見た。

福祉課の人は、携帯電話を……昨日美羽さんが使っていたのと同じ奴だ……それをパソコンに繋いで何やら操作している。

今気付いたが、胸に付けている名札に高木^{たかぎ} 鋼^{はがね}と書かれていた。

……なるほど、この人が高木先生の旦那さんか……なんだかほんわかした癒し系デ……ふくよかな容姿をしているな……そんな事を思っていると、作業が終わったらしく、高木さんが俺を見る。

「黒樹夜衣斗君だね？」

そう問われたので、俺は頷くと、近くにいた他の職員が一斉に俺を見た。

な！……何なんだ？

俺が困惑していると、高木さんは苦笑して、

「昨日の今日だから自覚はないだろうけど、君はもう既にかなりの有名人だよ」

へ？俺が？有名人？

第一章『渴欲の武霊使い』 5

赤井 美羽

弥恵先生の旦那さんの言葉に、夜衣斗さんは物凄く困惑していた。実は、美羽が今朝起きた時には、星電で見る事が出来る動画サイトに昨日の夜衣斗さんの活躍がアップされてて……美羽は多分、夜衣斗さんがかなり有名になってるんじゃないかと思ってた。

星電は正式名称『星波町限定携帯電話』と名付けられている『星波町内で全てが完結している携帯電話』で、登録武霊使いに町から貸し出されているものなんだけど……星波町は、『ある現象』のせいで武霊に関する知識とか物証とか持ち出せないから、はぐれ発生とか武霊によって起きた町の状況の変化とかを武霊使いに知らせる為に、星電みたいな特殊な通信手段が必要で……その星電で使える専用の動画サイトは、星電で撮った映像とかを直接投稿出来るサイトだから、夜衣斗さんの事みたいに、何か大きな事があるとプライバシーとかそう言うのが関係なく出回っちゃう事がよくあって、その事で最近色々と問題になってる事はなってるんだけど……でも、そのおかげで色々な情報が一日も経たない内に町の人に伝わるって言う利便性があるから……まあ、だから、隣町に住んでて武霊使いじゃない飛矢折先輩は知らなかったわけだけど……ん………

飛矢折 巴

「……………星電ですか……………」

黒樹君は自分が有名になった原因である動画サイトを赤井さんの星電で見て、複雑そうにつぶやいていた。

赤井さんの星電に映っていたのは、はぐれ化した剛鬼丸と戦っている時の姿。

あたしと赤井さんはもう既にある程度有名だからか、黒樹君と才

ウキがメインに映っている動画ばかり……そんな動画ばかりが投稿されているせいか、近くの職員が騒ぐだけでは留まらず、役場に來ている人達も黒樹君に視線を向け始め……黒樹君は困惑と共に恥ずかしそうにしていた。

それにしても……役場だけでこの注目度だと、町じゃ……ううん、星波学園に黒樹君が通い出したらどうなるのだろう？……間違いなく大騒動になるよね……『あれ』もあるし……

そんな事をあたしが思っていると、周囲の視線を意識しない様にか、自分の映っている映像を凝視していた夜衣斗君はまたあの仕草、腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸をして、

「……色々なアングルから撮られていますね……武霊使いて町全体に結構な数いるんですか？」

そんな質問を高木先生の旦那さんにした。

「大体千人ぐらいかな？公式登録しているのは」

「……星波町の今の人口は約一万人ぐらいでしたよね」

「よく知っているね」

「……引越す前に町のホームページを見ましたから……十分の一と言う割合は幾分少ない気がしないでもないですね……」

後半は呟く様に言った黒樹君の言葉に、高木先生の旦那さんは苦笑した。

「まあ、確かに武霊使いになった人全てが武霊使いになったと公言してくれるわけじゃないからね……人によつてはもう千人ぐらいいるんじゃないか？つて言っている人もいるよ」

確かに、全員が全員、公式登録しているわけじゃないって話は美幸から聞いた事がある。

公式登録すると、色々と利便もあるけど、その分、面倒な事があるつて言つてはいたけど……武霊使いじゃないあたしにはよく分からない話。

「……それに武霊使いの数で言ったら、星波学園の方が圧倒的に多いからね……」

そう複雑そうな表情で赤井さんを見る高木先生の旦那さん。

視線を受けた赤井さんは、同じ様に複雑そうに頷いて、

「ええ、星波学園は教職員を併せて大体三千人ぐらいですけど、その内の半分が武霊使いですから……」

高木先生の旦那さんと赤井さんの町と学園を分けた説明に、黒樹君は少し考えて、

「……町と学園は対立関係にでもあるんですか？」

そんな事を聞いてきたので、赤井さんは慌てて、

「い、いえ、別に対立してるってほどの対立はないんですけど……公式登録だつて、ちゃんと町が出張してやってますし……」

「……出張ですか……微妙な関係と言ったところですか……」
そう言った夜衣斗君は、何を想像したのか、大きなため息を吐いた。

黒樹 夜衣斗

武霊使いの公式登録は、思いの外簡単に終わった。

俺とオウキの写真・現住所の確認・他の武霊使い（赤井さん）の証明。そして、星電の付与。

「星電はその限定性から町の予算のみで完全に作らなくちゃいけないものでね。年々増加傾向にある武霊使いの数に常に在庫不足だね」

そう言いながら、田村さんの星電だった星電を俺用に設定してくれた高木さん。

「だから、今回の様に武霊使いではなくなった人から返却の際は、返却者から新たな付与者を指名してもいいことになっていてね」

その高木さんの言葉に、田村さんの奥さんを見ると、奥さんは微笑んで、

「あなたが武霊で治療してくれたから、夫が死なずに済んだわ。だから、あなたに夫の星電を受け取ってほしかったの……きっと、夫も目を覚ましたらそうしたと思うから……」

そう言っていた。

赤井さんが次に案内してくれると言う場所に向かいながら、俺は貸された星電をいじりつつ、田村さんの奥さん言葉を少し考えていた。

で、

「……………昨日のはぐれ……………発生でしたっけ？」

「え？あ！はい」

俺の唐突な言葉に、美羽さんは少しびっくりした様子を見せ……………
…そんなに驚かなくても……………何か考え事でもしていたのだろうか？

赤井 美羽

夜衣斗さんの動画が動画サイトに投稿されている事は知っていたけど……………今朝見た数時間でその投稿数と視聴数が何十倍にもなった。

……………これってそれだけ夜衣斗さんが注目されているって事だよね……………
……………考えてみれば、今日はゴールデンウィークの最終日だから、実家から帰ってきた星波学園の寮生達もいるものね……………そう言えば、夜衣斗さんの場合って『あれ』はどうなるんだろう？まさか直ぐにするって事はないよね……………でも、夜衣斗さんみたいな武霊使いは前例が……………

そんな風に、明日夜衣斗さんの身に起きるであろう事を考えていたら、不意に夜衣斗さんが話し掛けて来たので、ちょっとびっくりした。

えっと……………

「ええ、はぐれ発生でいいんですよ。それがどうかしましたか？」

「……………昨日、はぐれが二日連続で発生した事がないって聞きましたが……………もしかして、それで治療系の能力を持つ武霊使いが足りなくなってるんですか？」

えー！？

「ええ、確かに、医療系の武霊使いは足りてませんけど……………」

美羽が夜衣斗さんの質問に戸惑っていると、

「…………… ゴールデンウィークで人が大分出ているみたいですからね…………… さっきの田村さんの奥さんが、夫が死なずに済んだって言った事を考えると、そう考えるのが自然だと思ひまして……………」
そうなの？

「…………… 田村さん以外の重症者は大丈夫だったんですか？」

「あ、はい。なんとか軽度な人や辞退した人以外は何とか足りたみたいです」

「…………… そうですか……………」

何だか心配そうに押し黙る夜衣斗さん。

…………… もしかして、自分で治療しようとか考えてる？んゝ昨日今日で武霊使いになった夜衣斗さんにそんな無茶はされるわけには…………… 意志力だつてまだ完全に回復してないだろうし……………

「えっと、多分ですけど、昨日治療できなかった人も、医療系武霊使いの意志力が回復次第治療されると思ひますし、今日星波町に帰ってくる人だっていますから、夜衣斗さんはそんなに心配する必要はありませんよ」

「…………… そうですか、それは良かった」

前髪で目を隠しているからよく分からないけど、ほつとした様子の夜衣斗さん。

…………… それにしても、何で前髪で目を隠しているんだろう？……………
… 恥ずかしがり屋さん？

そんな事を思っていると、美羽達の前に星波海岸から二番目にある星波大橋が現れる。

星波町の真ん中には星波川と言う名前の川が流れていて、そこには五本の橋が架けられて、山に近い小さな橋が星波橋・次に星渡線の鉄橋・その次のがそこそこ大きい星降り橋・その次の次が結構大きな星波大橋で、最後が星波海岸沿いにある星波海道の星波海岸大橋。の五つ。

橋だけに限った話で言えば、星波学園と町を繋ぐ学園大橋がある

けど、それはとりあえず後回しにして……………橋の説明をしつつ、星波大橋のちょうど真ん中ぐらいで立ち止まる。

不思議そうな二人を……………何で飛矢折先輩まで不思議そうな顔に……………って、考えてみれば、町の外から学園に通っている飛矢折先輩がここの事を知ってるわけないか……………

「この星波大橋って結構な大きさがあるでしょ？だから、ここからなら町の主要施設の大体が見えるんです」

そう言って、美羽は主要な施設を指差して説明。

「進行方向上にある建物が町民センターで、その左側にあるのが保健センター。その手前の星波川沿いにあるのがスポーツ公園。保健センターより更に左側にある建物が福祉センター。そのもっと奥の方にある鉄塔が海側のはぐれ発生ポイントを監視する為のはぐれ監視塔。その更に奥にある建物がリサイクルセンター。向こうに見える線路を越えてもつと左側、星降り山の手前に焼却場。その更に奥の星降り山の中腹に廃校が見えますけど、ここに危険な人物が二人住み着いてますので、無暗に近付かないでくださいね。って、振り返って、後ろにさつき行った町役場に、左側に郵便局・手前の星波川近くに下水処理場。その左側に星波警察署。役所の右側に戻って、スタート地点の星波統合病院。そのさらに右側にそこその品揃えの星波デパート。そのちよつと右に星波駅。線路を越えた先に見えないけど、星波幼稚園とちよつと離れて星波保育園。星波駅のこつちから見たらちよつと奥に星波商店街。ここで大体の物は揃いますよ。その左側のちよつと行った先に星波神社。その更に左側に星電専用基地局。連絡の拠点ですから、はぐれとか戦う時にここを壊されてない様にしないといけません。その更に左に星波公園。この公園より更に左に美羽と春子さんの家があつて、その更に左側星波海道に面して消防署。その更に奥に昔自動車工場があつた廃工場地帯と、星波海道を挟んで向かい側にその廃工場の倉庫と港。ここにはちよつとガラの悪い連中が溜まってますので、無暗に近付いちゃダメですよ。って、廃工場の右側ちよつと行った所に山側のはぐれ

監視塔。その向こうに見える星波山には星波森林公園って言うのがあるけど、それは星波山にはぐれ発生ポイントがある事が発覚してから閉鎖されてて……あ、これは余計か………んゝざっとこんなものかな？ざつと説明しましたけど、よく行く利用する場所とかは後で詳しく案内しますから………？………どうしました？」

気が付くと、夜衣斗さんがちよつと困った雰囲気になっていた。

「……………いや……………ちよつと情報量が多過ぎて……………その、いっぺんに喋って疲れませんでしたか？」

「いえ？」

「……………そうですか……………」

「……………んゝよく分からないけど……………とにかく、

「じゃあ、次に行きましょうか？」

そう言つて、歩き出す美羽に、夜衣斗さんが

「……………あの、次はどこに行くんですか？」

「……………あ！言い忘れてた。

夜衣斗さんの困った様子の質問に、美羽は次の目的地の事を言つてない事に気付いた。

「えつと、夜衣斗さんにはとりあえず、星波町が抱えている『最大の問題』を体感して貰おうと思つて、星取町側のトンネルにこれから向かおうと思つてます」

「……………トンネル？」

第一章『渴欲の武霊使い』 6

飛矢折 巴

あたしが町の案内に付いて行っても特にする事がないのは明白で、ちよつと所在なさげな感じがしなくもなかったけど……考えてみれば、あたしは星波学園には高等部からの編入で、それまで星波町には通り過ぎる事があっても降りた事がなかった。だから、あたしの知っている星波町の範囲は通学路とはぐれ発生時の避難経路・星波学園の一部ぐらいで……ほとんど黒樹君と変わらない状況だった。

だからか、そんなに苦も無く、赤井さんの案内に付いて行っているのだけど……どこからどう見てもただのトンネルよね……

目の前にあるのは、星取町へと繋がる海外沿いのトンネル。

ゴールデンウィークの旅行から帰ってきた人が多いのか、それなりの車がトンネルから出てくる以外、特に気になる所も無いのだけど……

赤井さんはこっちの戸惑いを気にせず、トンネルの中に入ってしまふ。

……そう言えば、美幸がトンネルの中に何かがあるって言っていた気がするけど……なんだっただけ？

一年ほど前に一度聞いたか聞いてないかの記憶を探り当てるより早く、赤井さんがトンネルの半ばで止まった。

「これを見てください」

そう言つて赤井さんが指し示した先には……地面から天井にぐるりと描かれている太くて赤い線だった。

あ！思い出した！確かこの線って、

「これはここから先に進むと『忘却現象』が起きると言う目印です」

そうそうそう言っていた。

「…………つまり、その忘却現象と言うのが、武霊に関する記憶とか、証拠を町の外に持ち出せないと言う原因ですか……………」

そう言えば、昨日、犬の骸骨の邪魔が入って、忘却現象の事を説明し切れなかったっけ……………」

「え？…………あれ？美羽、夜衣斗さんにその事を言いましたっけ？」

忘却現象の事を少し知っていた黒樹君に、驚く赤井さん……………ちよつと嫌な予感。

「…………昨日、逃げていた時に、飛矢折さんに少しだけ聞きました」

「へえ…………飛矢折先輩に……………」

何だか赤井さんがこつちを微妙な雰囲気に向けている気がするけど……………」

「…それで、忘却現象と言うのは、具体的にどんな現象なんですか？」

「あ！はい。ちよつと待ってください」

赤井さんが何かを言う前に、黒樹君が質問したので、赤井さんは服のポケットから何かを取り出そうとする。

言葉の間の開け方が少し早かったから、黒樹君が気を使ってくれたのかもしれない……………心の中で黒樹君に感謝。

赤井さんがポケットから取り出したのは、小さなデジタルカメラだった。

「おいでコウリユウ」

赤井さんの呼び掛けに応え、赤井さんの武霊・コウリユウが半透明な姿で赤井さんの背後から出てくる。

あたしは思わず黒樹君の背中に少し隠れてしまうと、赤井さんが少し反応したけど、赤井さんは特に何も言わず、コウリユウを具現化させた。

具現化させたとっても、その姿は手乗りサイズで、

「これは具現化レベル0・5の『制御具現』。通常具現を加減し

て、その大きさを通常の以下にする具現化で、多分、夜衣斗さんも武霊に慣れれば直ぐに出来る具現化だと思いますよ?」

そんな事を言いつつ、赤井さんはパタパタと赤井さんの目の前に移動したコウリユウをデジカメで撮る。

そして、その撮ったコウリユウの姿を黒樹君に見せる。

「写ってますよね?」

頷く黒樹君を見て、赤井さんは慎重に赤い線に近付き、デジカメを持った片手だけを赤い線の上に移動させ、直ぐに戻して、デジカメを確認。

「美羽は何も弄ってませんでしたよね?」

そう言いながらデジカメの画面を黒樹君に見せると、そこにはコウリユウの姿だけが綺麗に消えている写真画面があった。

黒樹 夜衣斗

目の前で美羽さんが見せてくれた実演に、俺は眉を顰めるしかなかった。

確かに赤井さんはデジカメを何の操作もせず、ただ赤い線の上に通しただけだった。

ただそれだけの動作なのに、まるで綺麗に加工したように写真からコウリユウの姿が消えていた。

「…………この現象は、どんな情報媒体でも起きるんですか?」

俺の問いに、美羽さんは頷く。

「動画でも、絵でも、文字でも、武霊に関する事なら全部同じです。ここを」

赤い線を指差す美羽さん。

「少しでも超えれば、全部消えてしまいます」

全部消える……………ん?それは……………

「…………それは人の記憶もですか?」

俺の当然の質問に、美羽さんは少し首を横に振った。

「少しだけ違います。人の場合は、いったん忘れるだけです。町

に戻ってくれば、直ぐに思い出します」

「……………なるほど、だから忘却現象ですか……………原因は分かっているんですよね？」

「はい……………武霊が発生する様になってからも『十年以上』経ってるんですけど、一向に武霊も、この現象がどうして起こるのか、一切分かってないんです」

つまり、分かっているのは、経験則で導かれた物ばかりって事か……………それにしても、十年もこの町は武霊と言う存在と付き合っているのか……………ん？十年？……………サヤが取り憑いたのもそれくらいだよな？

俺の心の中の問いに、サヤからの反応はない。

……………だんまりか？……………まあ、いい……………とにかく、線路のトンネルで見かけた赤い線が同じ意味なら、俺が感じた違和感は、忘却現象の何かかって事だったんだろうか？

「ちなみに、この線は……………コウリユウ」

美羽さんの指示で、小さなコウリユウがパタパタと赤い線を越えようとする。

その瞬間、コウリユウの姿が唐突に霧散し、美羽さんの背後に半透明のコウリユウが現れた。

「この線は武霊の活動限界領域も示しています」

そう言えば、剛鬼丸を倒す作戦を話している時にそんな言葉を言ってたな……………つまり……………

「……………武霊は人の記憶を基にその身体を構築しているのなら、武霊に関する記憶が忘却されてしまう忘却現象の影響で、その武霊を構築している記憶と武霊の繋がりが断たれてしまうんでしょうね……………武霊が武霊を構築している記憶を使っていると言う記憶を……………デジカメなどの電子情報も忘却してしまうなら、光伝達……………こうして見ている光景も、武霊に関しては向こうからは見えていないと考えるのが妥当でしょうね……………そうになると、武霊が起こしている現象は……………その現象自体も武霊そのものと言えるでしょうから、そ

れもここから先は霧散して消えてしまう……………なら、間接的な現象はどうなんですか？」

……………？

返答が無いので美羽さんを見ると、美羽さんは何故かぽくんとしていた。

えっと……………

「……………美羽さん？」

「あ！はい！えっと……………こっちに来てください」

そう言つて美羽さんはトンネルの外に出て、海側の山の方を指差した。

「あそこの木、倒れている所、倒れていない所があるじゃないですか」

……………確かに指差した所には、倒れている所と倒れていない所があるが……………ふむ……………つまりあれは……………

「……………昨日の剛鬼丸のですか？」

「はい。物凄い爆発が何度もありましたから、ああやって木が倒れちゃってるんですけど……………どう言う訳か、武霊が起こした現象で起きる間接的な現象も領域の外に出る事がないんです」

なるほど……………あれだけのエネルギーも武霊が関わっていれば外に出る事が出来ないのか……………まるで町全体が夢の中にあるみたいな現象だな……………ん？待てよ？

「……………そうなると、武霊によって治療した人はどうなるんですか？」

「えっと……………確か、大丈夫なはずでしたよ？美羽も何度か武霊に治療して貰ってますけど、この通り全く平気ですし、普通に町から出れます」

「……………つまり、物理現象として定着した武霊現象は、武霊の力が・影響が加わってない限り、忘却現象の影響を受ける事がないわけですね……………そうなると……………武霊によって壊された物も同様つて事ですよね？」

「え？……ええ、そうです」

「……ただし、『何らかの武霊の力が働いている』と、いや、『働いている間は町を出ることが出来ない』。と言う事ですよね」

「は、はい」

何だか戸惑いながら頷く美羽さん。

「……武霊の力そのものは町から出る事は出来ないが、武霊で既に起こしたものは出る事が出来る。ただし、武霊の存在を示すものは、忘却されてしまうので、外から武霊の事を認識される事はなく、それを証明する事象も認識されてない……まとめるとそんな所でしょうか……」

「それで間違っていないと思います」

ん……そう言えば、飛矢折さんはこの町に住んでないんだっ
たよな……

飛矢折さんの方に視線を向けると、飛矢折さんは興味深げに剛鬼丸によって……考えてみると、オウキも結構凄い衝撃を出していたよな……き、気にするのはよそう。うん。そうしよう……倒れた木々を見ていた。

「……飛矢折さん」

「ん？何？」

小首を傾げる飛矢折さんに少々どきつと来たが……平常心平常心

……

「……飛矢折さんは星波町から出る時、来る時に何らかの混乱に陥った事がありますか？」

その質問に、飛矢折さんは少し考え、

「……そう言えば……混乱した事は……ないかも」

……なるほど……俺が記憶の欠落に長年気付かなかった……いや、
今でも違和感を覚えていない様に……

「……非日常の記憶だからでしょうね……武霊の記憶は……だから、日常で記憶の欠落があっても何の影響もなく、唐突に思い出しても同様なんでしょう」

「確かに日常ではありえない事だものね……武霊は……」
納得した様に頷いた飛矢折さんは、何かを思い出したかの様に少し暗くなった。

これは気付かない様にした方がよさそうだな……それにしても……随分都合がいい現象だよな……まるで星波町と言うフランスコを誰かが振っている様にも感じられなくもないが……もし仮にこれが誰かの手によって振られている事なら、もっと星波町の外にそれらしき何かが起きている気がするな……『去年は結構な騒動が全国的に起きてはいた』が……仮にそれが武霊関連だった場合、昨日の実体験からしても、被害はあれだけじゃすまなかっただろうし……ん……ふと思ったが……

「……もしかして、武霊が言葉や文字でコミュニケーションが出来ない様にせ」

（夜衣斗）

ん？サヤ？

（私から得た情報はあまり公言しない方が良いわ）

？……ああ、そう言えば、サヤも運命を変える選択だったな……

……だとするとサヤから得た情報を軽々しく口にするのは危険か……

……途中で言葉を止めた俺を不思議そうに見る美羽さんに、少し咳払いをして見せて、

「武霊が直接的なコミュニケーションを取れない事も忘却現象に関係ありますか？」

武霊使いが自身の武霊に指示を出している姿を見たのは、今の所剛鬼丸とコウリュウしかないが、その二体とも武霊使いの呼び掛けに言葉で返していなかった。

そこから考えると、他の武霊使いも、制限が掛けられているかどうかは別にしても、少なくとも言葉は喋れないと言う事になり、サヤからの情報ではなくなる。

「え？……えっと……さ、さあ？」

？

「……………武霊は喋れないですよね？」

「ええ。でも、それが忘却現象のせいかって言つと……………」

「……………分かってない事は大分多い様ですね……………」

「えつと……………すいません」

「いえ、謝る必要はありませんよ……………武霊は根本的に存在の仕方が違うようですから……………今現在人類が持つているアプローチ方法では、武霊の全てを理解するのは簡単ではないでしょうね……………」

武霊に制限が掛けられているのなら、何によつて制限が掛けられているかによつて……………色々と問題の質と深刻さが変わるんだがな……………」

……………待てよ？考えてみれば、俺のオウキはイレギュラーな形で発現したよな……………」

「……………美羽さんのコウリユウはどんな形で発現したんですか？」

俺の唐突な質問に目をパチクリさせた美羽さんは、ちよつと考え
て、

「……………夜衣斗さんと同じですよ。はぐれに襲われた時に、いきなり具現化したんです」

「……………他の人もですか？」

「……………ええ、大体そうみたいですよ？」

……………なるほど……………いきなりね……………俺みたいにサヤの様なのに渡されたわけじゃないわけだ……………もしかして、俺の武装守護霊は根本的に何かが違うのか？どうなんだサヤ？

またしても俺の心の中の問いに答ええないサヤ。

ん……………もしかして、サヤが言う制限と言つのは、忘却現象の影響なんだろうか？……………何にせよ確かな情報が少なすぎるな……………」

……………まったく、これは本当に迂闊な事は言えない……………とにかく、

「……………武霊の活動限界領域はどこからどこまでと言つのは分かつて
るんですか？」

「え？あ、はい、領域の詳しい情報は、星電で見る事が出来ますから、後でゆっくり見ておいてくださいね」

第一章『渴欲の武霊使い』 7

???

星降り山の中腹には、町に最も近い武霊活動限界領域があり、その近くには元町立星波高校の廃校があった。

星波高校が廃校になった理由は、町の主要産業であった工場の閉鎖に伴い、人口が急激に減った事による町の財政悪化と生徒数の減少。

元々高度経済成長期に大規模工場の建設に伴って、工場従業員の子供達の為に町が優遇して立てた学校である為、生徒の親のほとんどはその時期に町の外からやってきた者達ばかりであり、多くが故郷を別にしていた。

その為、不景気になり、工場が閉鎖すれば、必然的に何の地域産業もない星波町に留まる理由は彼らにはなく、職を求めて故郷へ帰る者達が続出し、そうなれば子供達も必然的に転校せざる得なくなつた。

小学校・中学校、そして、高校と次々と廃校が決まり、生徒数の減少が著しかった町中にあった小学校・中学校の校舎は早々に取り壊され、生徒は近隣の小学校・中学校に移り、いよいよ高校も廃校になると決まった頃、星波学園の創立の話が持ち上がる。

星波学園の創立に、財源を求めていた星波町は飛び付き、近隣に高校がなかった事もあり星波高校の地元の生徒達の多くはそのまま星波学園に転入する事になった。

星波学園の校舎が完成し、いよいよ星波高校が廃校になる。

そんな時期に、武霊は発生した。

突然現れるはぐれ。

次々と目覚める武霊使い。

助けを求める為に町の外に出ようとしても、何故か町からある程度離れると、助けを求める理由のみならず助けを求めること自体を

忘れてしまふ。

そんな大混乱の中、当時星波高校の生徒会長を務めていた幸野美春がある事に気付いた。

自分達が通っている星波高校校舎に何故か化け物達（当時とはぐれとは呼ばれていなかった）が近付かず、自分達から現れる謎の存在（武霊も同様）も近付く事を忌避する。

その事に疑問に思った美春が校舎の周りを調べると、校舎の直ぐ近くに謎の存在が存在出来なくなる、その存在の事を忘れてしまう境界線がある事を発見。

後に武霊活動限界領域と名付けられる星波町を囲む様に存在しているその境界線を利用し、星波町各所に避難シエルターが出来るまでの間、学校施設を利用した避難所として使われる事になった。

これにより直ぐに取り壊されるはずだった校舎は残され、避難シエルターが出来た以降も、避難シエルターが使えなくなる万が一を考えて取り壊さない事になる。

だが、その事により、廃校は『ある二人』の格好の住処になってしまう。

武霊活動限界領域近くにあるが故に、その二人を捕まえようとするれば領域の外に逃れられ、強力な武霊使いであった彼らに対抗する為には、それなりの武霊使いの数が必要であった為、廃校に武霊使いを常駐させるのは難しく、気が付くとまた住み着かれてしまふ。

そんな事を何度となく繰り返した結果、廃校は完全に彼らの物になり、校舎内は彼らの私物で埋め尽くされる事になった。

そんな廃校の元教室の一つに、無造作に服が置かれた場所がある。服は全て女物であり、その持ち主である少女は今、元教室の中央に置かれた姿見を見ながら服を選んでいた。

その姿は下着すら付けていない状態で、少女は全てを晒しながら周囲に無造作に散らばる様々な服を自分に当てている。

背後ではその少女の弟を自称する少年がにこにこしながらその様子を見ており、そこに邪な気持ちはない様に見えなくもない。

「ねえ、どれがいいと思う？」

「お姉ちゃんならどれでも似合うよ」

「もう！そればっか！ちゃんと見てよ」

「見てるよ」

傍から見れば確かに姉弟の様な振る舞いではあるが、あまりにも『姉弟過ぎる』様にも見え、人によつては何とも言えない気味悪さを感じさせる光景だった。

「ん……お姉ちゃん。僕そろそろ行くね」

いつまで経つてもなかなか服を決めない少女に、少年はそう言つて立ち上がった。

「え〜？」

「え〜つて……そろそろ準備しないと……」

抗議の声に少年は困惑した様子を見せると、少女はむくれる。

「もう！勝手にすれば！」

ぷいっとそっぽ向く少女に、困った笑みを浮かべながら、

「じゃあ、先に行つてるよ……」

少年は服が四散する元教室から出て行つた。

少年が出て行つた後、少女はしばらく怒った振りをしていたが、不意に表情を消し、それまで悩んでいたのが嘘の様に一番近くにあったワンピースと下着を手に取り、素早く着替えた。

それまで見ていた姿見すら目もくれず、少年の後を追つて元教室から出る少女。

寂れた廊下には、少年が元教室から出てさほど経っていないはずなのに少年の姿はどこにもなく、普通ならその事を疑問に思ふ状況のはずだが、それすら少女は無反応。

ただただ少女は、事前に少年から『お願いされた行動』を取る為に歩き出した。

赤井 美羽

あーびっくりした……夜衣斗さん。急に饒舌に、しかも難しい

ことをぼんぼんと言ったもの……武霊が発生してからずっといる美羽だっていまいち分かってない事を、美羽のまるまる受け売りの話だけであそこまで考えるなんて……流石、オウキみたいな『オリジナルタイプ』の武霊を具現化させる事が出来る人な事はあると言っか……

武霊使いの武霊には、はぐれとは別のタイプ分けがされてて、それは何がその武霊の身体の基になっているかで決められている。

美羽のコウリユウは、美羽が幼い頃によく見ていたお気に入りのお気入りの児童小説に出てくるドラゴンが基になっているから、小説タイプ。自警団団長の美春さんのコロ丸は、美春さんが子供の頃に飼っていたペットが基になっているからペットタイプ。みたいな感じで簡単に分けられているんだけど、美羽や美春さんの様に他の人が作った作品や現実にあった・いたものを基にしているタイプは、その作品やそのものに引き摺られるから、武霊能力に幅がなくて、応用が利きにくかったり、特定の条件を持ったり、苦手な事が出来やすく……コウリユウがどうしても広範囲攻撃になっちゃったり、コロ丸が空中の敵が苦手だったり……そんな感じなんだけど、夜衣斗さんのオウキや、田村さんの剛鬼丸の様な完全な創作物を元になっているオリジナルタイプは、オールマイティでオールラウンダーな事が多くて、物凄く強い。だから、どんな人がオリジナルの武霊を出しやすいか調べた人がいて……その人の話だと、幼い頃からよく物を考えている人が多いって話で……そう言えば、田村さんの仕事ってイラストレーターだとか言ってたかな……もしかして、夜衣斗さんも何か創る人なのかな？

その事を次の目的地に向かうがてら説明と一緒に聞いてみたら、
「……確かにそう言う区分で言うなら、オウキはオリジナルタイプだと思えます。オウキは……」

恥ずかしそうに、

「俺が子供の頃から考えている小説の主人公ロボットそのものですので……」

そう答えてくれたんだけど……その何が恥ずかしんだろう？
あんな凄いロボットが出てくる。武霊になるほど考えている物語って、どんな物語なんだろう？物凄く興味ある。

その事を正直に言ったら、夜衣斗さんは困った雰囲気になって、
「……………その……………まだ人に見せられるほど小説力が付いてませんので……………」

断られちゃった……………うゝん……………やっぱり恥ずかしがり屋さんなんだ……………そんな人を見せて貰うにはどうしたらいいんだろう。
「……………ところで」

話を変えたいのか、無理矢理真面目な雰囲気になった。

「武霊使いの武霊にタイプ分けがされていると言う事は、はぐれにもタイプ分けがされているんですよね？」

美羽はちよつとクスリと笑って、はぐれのタイプ分けの説明をした。

飛矢折 巴

はぐれは人に襲い掛かってくる為、発生して直ぐに対応出来る様に六つの区分を作り、分かりやすく細かくタイプ分けがされているって……………美幸に聞いた事がある。

その区分は、避難に集中しなくちゃいけない一般の人に余計な不安と憶測を呼ばせない為に、星電でのみ武霊使いに伝えられるものらしくて、赤井さんに聞くまであたしも詳しくは知らなかった。

その六つの区分は、『発生ポイント』『形態』『移動タイプ』『レベル』『発生パターン』『属性』。

発生ポイントが、『海』と『山』にある発生ポイントのどちらで発生したか。

形態タイプが、そのままその姿がどんな姿かで、今の所大きく五つのタイプに分けられている。

動物の姿に近い『動物タイプ』。ロボットの姿に近い『ロボットタイプ』。人の想像の産物に近い『幻想タイプ』……………これが一番多

く出るらしくて、昨日の犬の骸骨もこのタイプと認定されると思います。と言うのが赤井さんの話。人間の姿をした『人間タイプ』。そして、もう一つが『ダンジョンタイプ』…………滅多に出ないタイプで、一年ちよつとしか星波町に通っていないあたしは、これの発生に遭遇したことはないけど…………赤井さんの話だと、なんでもその『体内に迷宮を持っている』とか…………どんな姿なのか他の四つと違って想像しにくい…………

移動タイプが、言葉そのまま、そのはぐれがどんな移動方法を取るか。

陸上移動しか出来ない『陸』。海も移動出来る『海』。空も移動出来る『空』。地中を移動出来る『地』。全く動かない『固』。の五つの移動タイプが確認されているらしいけど…………固つて…………動かなくてどうやって人を襲うのだろう？

レベルは、そのまま具現化レベルで、はぐれのその性質から、レベル2までしかないって話で、それ以上の上の具現化はどうしても武霊使いの力が必要になるらしいのだけど…………そう言えば、話には聞いても、レベル3の具現化はまだあたしも見た事がない。美幸はレベル2までだったし…………

発生パターンが、どれだけの数が発生したかで、『単』が一体だけ。『群』が複数の発生で、群の後に『小』と付くと十体以下、『中』と付くと十体以上百体以下、『大』だと百体以上に付けられるみたい。

属性が、そのはぐれがどんなもので構成されているか、主要攻撃手段などで付けられるらしくて、炎を出していた犬の骸骨は炎系つて事になるらしいけど…………何だか家の兄達や弟達がやっているゲームみたい。

そんな事を思っていると、

「……………何だかゲームみたいなタイプ分けですね……………」

と黒樹君が感想を言ったのでちよつとびっくりした。

……………まあ、黒樹君は見た目からして…………見た目からって言う

のはちよつと失礼だけ……ゲームとかしてそうだし、そう思うのは自然だよな……多分。

あたしがちよつと動揺している間に、あたし達は星波商店街に着いた。

よく分らないけど、赤井さんは地元だから、星波デパートがあまり好きじゃないみたいで、星波デパート前を素通りして、ちよつと黒樹君を戸惑わせていて……好き嫌いがはっきりしていると言うか……その自分に素直で正直な所は……少し羨ましく思え……あたしはちよつと暗くなった。

???

「……ツチ。いい御身分じゃねえか」

夜衣斗達がいる場所から遙か上空に『彼』はいた。

『彼』は人が豆粒にしか見えない上空にいると言うのに、正確に夜衣斗達を視認できている上に、何も無い空中に立っている。

そしてその手には不自然に暗く不気味に輝くスマートフォンが握られており、同じ様な光が『彼』の瞳と両脚に僅かに宿っている様で、それが超常の視力と空中に立つ力を『彼』に与えている様だった。

「にしても邪魔だな……」

超常の視線を巴に向けた『彼』はそう呟き、

「ツチ。仕方がねえな……」

スマートフォンを操り、どこかに電話を掛ける。

ほどなくして繋がり、

「……ああ、悪いが予定を早めて欲しい。……そうだ」
見る者がいれば、ぞつとするほどの邪悪な笑みを浮かべた。

「前に依頼した通り、飛矢折巴を『壊してくれ』」

第一章『渴欲の武霊使い』 8

???

「うお！こつちに向かつてるてよ！」

白い帽子と白いスーツを着た探偵ばいイタリア男性が、携帯に送られてきたメールを見た途端叫んだ。

「当然でしょ？ここは商店街なんだから」

「でもお姉ちゃん、どうするの？」

「どうするもこつするもないでしょ？」

どこことなく獰猛な雰囲気醸し出している三つ子の姉妹達が口々にそう言い、

「そうね。平時なんだから、今日店を閉めるわけにもいかないでしょ？昨日ならまだしも」

片目を髪で隠し、床まで着きそうなほど長い髪を腰に巻いた女性はそうため息を吐き、

「……まあ、そうそうと俺らの店に用があるとは思えないから、店に籠もっていれば会う事もないんじゃないか？」

ロングヘアで顔のほとんどを隠している男がそう提案した。

「まあ、そりゃそうだが……」

イタリア男性がいまいち納得してなさそうに唸ると、それまで黙って本を読んでいた司書らしきスイス人女性がぼそっと

「……そもそも、彼は何も知らないのだから、普通にしていればいいのよ。普通に」

そう言うが、何人かが眉を顰める。

「だけど、彼は武霊使いになっちゃってるよ？」

「そうよね……武霊使いはある程度『こつち』に関する感も鋭くなっている事が多いものね……」

三つ子の三女だか次女だかがそう言うと、またしてもスイス人女性がぼそっと、

「それは少しの違和感程度でしょ？他の武霊使い同様に、予備知識も無しに気付くとは思えないけど？」

「……まあ、可能性を出来る限り排除すべきじゃないか？明らかに変化が起きつつあるこの町に、更に『余計な事』や『余計な連中』を呼び込むのは得策じゃない」

そうロングヘアの男性が纏めるが、少し間を置いて、深いため息を吐く。

「……全く、春子さんも何でこんな町に……」

「仕方がないでしょ？この町しか、『彼の安全を保障出来る場所がなかった』のだから……」

三つ子の長女らしき女性が言うと、イタリア人男性は帽子を深々とかぶり直し、

「……何も知らないとは言え……不憫な子だな……」

その言葉はこの場の全員の思いだったのか、重苦しい雰囲気がこの場を支配した。

「……ところで」

ふと何かに気付いた片目の女性は、まわりを見回し、

「……芸術馬鹿はどこ行った？」

「え？確か……何か降りてきたと言って……」

三つ子の三女らしき女性がそう言うと、全員が顔を見合わせ、

「……まずい！」「」

黒樹 夜衣斗

商店街に着いた途端、妙な人物が目に入った。

作務衣を着たフランス人ぽい人が、商店街の真ん中で奇声を上げながらでっかいキャンパスに向かって筆を殴り付けるように振るってたからだ。

「うわ……また降りてる」

降りてる？

美羽さんがフランス人ぽい人を見てそうつぶやくのを聞き……

まあ、普通に考えれば芸術家か？……と言つか、余所でやれよな……絵の具がキャンパスの周りに飛び散って通り抜けできないじゃないか……

そう俺が思っていると、芸術家ばい人の筆の動きが更に激しくなり、ついには自分に……多分、用意してあった墨汁を全身にぶっかけ……キャンパスにアタック……洋風な人間魚拓が出来上がり、芸術家っぽい人は満足そうに頷いた。

……面白い作品だが……面白さが先行して、芸術画として良いか悪いか……まあ、そもそもそう言う美術眼を俺は持ち合わせちゃいないが……

そんな風に思っていると、

「何やってるの！」

「アホかお前は！いや！アホだったな！すまん」

とか叫びながら七人ぐらいの男女が現れ、全員で芸術家っぽい人を囲み、

「オウ、ミナサン。ミテクダサイ。ヨイサク」

それ以上カタカナばい言葉を言わず、芸術家ばい人を持ち上げ、何人かがこつちを見て、

「すいませんでしたあゝ」

とか言って商店街の建物の一つに入って行った。

……何なの？

「えっと……あの人達は星波学園が出来てから商店街に来た人達で、ほとんど同時期に来たせいかな……妙に仲が良いんですね……」
……なるほど、星波学園が出来れば、必然的に若い購買層が増えるわけだから、そこをビジネスチャンスと捉えたわけかな……って事は、それまでここはシャッター通りだったのか？

……にしても……

「……あの人達も武霊使いだったりします？」

「え？えっと……確か全員武霊使いじゃないはずですよ」

武霊使いじゃない？……何となく普通の人じゃない様な気がし

たんだが……？……そう言えば、今朝起きてから、あの人達ほどじゃないが、何だか妙な感覚を感じる人達に時より遭遇するよな……美羽さんからもそんな感じがするから、てっきり武霊使い特有の気配か何かかと思っただが……

「んー多分ですけど……」

首を傾げている俺に、美羽さんはちよつと考える仕草をして、

「武霊使いになった人の中には偶に感が鋭くなる人がいるんです。第六感が鋭くなると言うか……っで、そんな人は最初、その感覚に慣れなくて、ちよつと勘違いしちゃう時があるそうなんです。きつと今の夜衣斗さんもそんな状態なんですよ」

……なるほど……勘違いね……んーだが、その割にははつきりと感じるような……待てよ……よくよく思い出してみると、その妙な感じを覚える人って人によってそれぞれ何か違いの様なものを感じるような……

そう思つて意識してその感覚に集中してい見ると、それまで特に何かを感じていなかった飛矢折さんからも美羽さんとは違う感覚を感じた……いや、違うな……何と言うか、普通の人からも同じ様な感じはするが、飛矢折さんから感じる感覚は……物凄く『整つた』感じがするな……

飛矢折 巴

なんだか黒樹君がこつちを注視しているみたいだった。

さっきの人達の気配に気付いたつて事は、黒樹君の感覚があたし達寄りに鋭くなっているみたい。それも武霊のせい？……だとすると、あたしの気の整調にも気付いたつて事かな？……まあ、気付かれても、技を直接見せなければ何の問題もないつて曾お爺ちゃんも言っていたし……それにしても、この町は妙に『あつち側の人』が多い様な……やっぱりそれも武霊の為？……確かにあの人達にとつて武霊は『対象』になるかもしれないけど……いくらあの人達でも武霊をどうこう出来るのかな？……いえ、出来てないの

か……星波学園が出来た頃に来たって事は、もう十年近く星波町に
いるって事だし……帰ったら聞いてみようかな？……って、ダメ
か武霊の事は忘れちゃうし……ん……

そんな風に思っている間も、赤井さんは商店街の説明を続けてい
て、

「ここ星波商店街は、星波自警団の本部がある場所で、酒屋を始
め、八百屋からペットショップや美容院まで、一通りの物はここで
揃いますよ……あ！あそこが自警団の本部です」

そう言っ指差したのは商店街の中頃の……？……何故か星
波自警団本部と書かれた看板が掲げられている場所を指差す途中で
指を止める赤井さん。

黒樹君も気になったのか、赤井さんが指を止めた先をほぼ同時に
見ると……喫茶店が在って……そこには……確か、あの時お世
話になった……自警団団長の幸野^{みはる}美春さんと、星波警察署武霊課
の東山^{ひがしやま}賢治さん……だったけ？
そう思っ首を傾げた時、赤井さんが猛然とした勢いで走り出し
た。

……？

商店街にある喫茶店で、幸野美春と東山賢治は向かい合っ座っ
ていた。

美春は昨日のはぐれによる負傷を治療しきれなかったのか、腕を
包帯で吊している。

武霊による超常的な治療が可能だと言っても、それには治療系の
武霊を使う武霊使いの意志力の限界と言う問題が当然あった。

その為、自分より重傷な怪我人の治療を美春は優先させ、結果、
自分は普通の治療しか受けられず、今に至っている。

もっとも、片手が使えないと言うのに、美春は平然と残った腕で
コーヒを飲んでおり、大して支障がある様には見えなかった。

コーヒを一口飲んだ美春は一息吐き、

「昨日のはぐれ発生……賢治はどう見る？」

「どうって？」

「……『人の意思が関わっていた』……そう見えなかったか？」
剛鬼丸の変化と、その最後のあがきに感じた戦慄。

その理由を考えていた春香のその結論に、二人は重苦しく沈黙した。

沈黙の理由は、賢治も同じ結論に至ったと言う事であり、美春はそれに深いため息を吐く。

これまで人の意思が介在していない様に見えた武装守護霊に関する現象に、人の意思が関わり始めた。

そう判断出来る様な事が何度も起きていた昨日のはぐれ発生。

二日続けての発生。囃を使つての町への侵入。擬死。はぐれ化した剛鬼丸の変化。大半を失つても霧散しなかった剛鬼丸の手。

それらは今まで起きた事がない現象であり、見方によつては人の意思が介在している様に見えた。

仮に本当に人の意思が介在しているとすると、それは最悪な事態を意味する。

武霊が発生するようになって十年。

今まで武霊に付いて星波町が分かっている事は、全て経験則によるもので、どれも確かなものはない。

それはつまり、武霊が何であるか一切分かってない事を意味しているのだが、その武霊の現象に人の意思が関わったと言う事は、星波町以外の何らかの組織・あるいは個人が武霊に付いて町が知りえない何かを掴んだと言う事。

何らかの組織・あるいは個人が、善意を持っているのならそれほど問題はないが、今回の事を見る限り、確実に悪意を持っている様に見える。

だとすると、悪意を持った人が関わって、事態が好転する事はまず考えられない。

ただでさえ武霊と言う常識外の事態は、発生してからこれまで、

安定化はしても、事態の根本的な解決方法が見付けられず、閉塞的な絶望感が町に漂い始めていた。

そこに悪意を持った者達が関わり始めたとは知られば、更なる絶望感に晒されかねない。

「まあ、あくまでそうかもしれないって段階だから、気にし過ぎもよくないと思うよ？本当に人が関わっていたか、確たる証拠が見付かったわけじゃないんだからさ」

「……………確かにそうかもしれないが……………」

再び深いため息を吐かざる得ない美春に、賢治は苦笑した。

「とにかく、今は最後の連休なんだかさ、デザートぐらい普段の口調に戻って食べなよ」

そう言う賢治と美春の前には、チョコパフェが置いてあり、賢治の方はある程度食べているが、美春の方はほとんど手を付けていなかった。

「んゝ片手で食べ辛いつて言うなら……………」

にやりと笑って、自分のスプーンで美春のチョコパフェをすくい、美春の顔の前に持っていていき、

「はい、あゝん」

瞬間、ぼつと顔が赤くなる美春に、賢治は更に何かを言おうとするより早く、音を立てて喫茶店のドアが開く。

あまりの音に賢治は反射的に入り口を見ると、そこには顔を引く付かせた赤井美羽がいた。

賢治はちらつと美春を見ると、美春はいつの間にか賢治とは対面にならない様に座り直し、素知らぬ顔でチョコパフェを食べており、

「東山……………お前は人のパフェまで食べるほど甘党だったか？」
などと言ってきた。

これには賢治も、

「あはは……………そうなんだよね……………あはは……………」
力なく笑ってしまうが、

「何笑ってんだこのストーカー刑事が！」

と背後に半透明のコウリユウを出され美羽に激怒されてしまった。

第一章『渴欲の武霊使い』 9

赤井 美羽

喫茶店に入った美羽達は、美春さん達が座っている隣のテーブル席に座った。

時間もお昼過ぎだった事と、美羽のおすすめの店だった事も合わせて、ここで夜衣斗さんのお礼を含めたお昼にしようって事になったからだけど……とりあえず寡黙なマスターに注文した後に、二人の紹介を夜衣斗さんにする事になった。

「えっと、実は昨日、二人は気を失った夜衣斗さんに会ってますから、夜衣斗さんの紹介は省きますね」

って言うのと、夜衣斗さんは少し驚いた様子を見せ、何やら気まずそうに頬を掻いた。

最初に東山さん。

「この人は、表向きは星波警察署の生活安全課刑事で、実際は武霊に関する事件を専門に扱っている武霊課のストーカー刑事・東山賢治さんです」

「ストーカーは酷いな美羽ちゃん。俺と美春ちゃんは仕事で」

「あ？」

「……ごめんなさい」

次に美春さん。

「こちらの幸野美春さんは、この星波商店街にある酒屋の看板娘にして、自警団団長にして初代星波学園統合生徒会長で、星波町と星波学園の対武霊対策のほとんどを美春さんが作ったと言っても過言じゃない凄い人です」

「み、美羽ちゃんほめ過ぎ……」

恥ずかしそうに俯く美春さんに……ん、~ 工作中じゃない美春さんのなんて可愛い事………と言うか、

「まだいるんですか東山さん」

「え？」

キョトンとする東山さんに、

「ストーカー被害で警察に訴えますよ」

「いや、俺はその警」

じろつと具現化してないコウリユウと一緒に睨むと、東山さんはガクリと頂垂れ、

「……………はい。直ぐに退散します……………またね美春ちゃん」

「あ？」

ひらひらと手を振りながら、へらへらと笑って東山さんは喫茶店から出て行った。

「まったく……………美春さんも美春さんですよ？美春さんならあんな男、簡単に一蹴出来るでしょ？」

美羽の苦言に、美春さんは少し苦笑して、

「仕事だから……………ね」

そんな事を言う。

東山さんは星波警察署の中でナンバーワンの実力を持つ武霊使いで、何人もの犯罪を犯した武霊使いを捕まえている人なんだけど……………いつもへらへらしてとても刑事だと思えないほど軽い性格で……………仕事を理由にやたらと美春さんに付き纏って……………美春さんは迷惑そうにしているけど、義務感のせいでちゃんと断れてないみたいだし……………む……………一度本当に被害届とか出した方がいいんじゃない？

「……………美羽さん」

「はい？何です夜衣斗さん？」

去って行った東山さんの後姿から、もくもくとチョコパフェを食べている美春さんを見て、

「……………ツンデレって知ってます？」

ツンデレ？

夜衣斗さんが変な事を言うと同時に、美春さんが唐突にむせた？

黒樹 夜衣斗

リアルのツンデレを初めて見たな……………そんな事を思いながら、料理が来るのを待っていると、

「黒樹君」

対面に座った飛矢折さんが俺の名を呼んだので、

「はい、何でしょう？」

と何も考えずに応えると、

「本当にいいの？今更な話かもしれないけれど、あたしとしてはお礼をされる様な事は……………うん。むしろ、あたしの方がお礼をしなくちゃいけないような気がするんだけど……………」

……………オウキによる治療の事を言っているんだろうか？

「……………あれは飛矢折さんが俺や美羽さんを庇ってくれた時の負傷なので、治療するのは当然ですし……………剛鬼丸の一件は俺がとろいせいで飛矢折さんや美羽さん……………そして、田村さんに余計な被害を与えてしまったわけですから……………むしろ、この程度のお礼だけで済ますのは心苦しく感じるのですが……………」

俺の返答に、飛矢折さんは目を瞬かせて、微笑み、

「あたし、余計な事を言っただけだね。ごめんね黒樹君」

「……………いえ……………」

……………口にしてみて改めて思ったが、昨日の出来事は俺が世界に拒絶されている事により発生した宿命から来る死の運命だったわけだよなサヤ？

（ええ）

だったら、そもそもなんで俺は世界に拒絶されているんだ？それに、世界に拒絶されているのなら、今の今まで……………平穏じゃなかったとは言え、昨日みたいに他の要因で死に追い詰められる様な事はなかったはずだが……………

（それは……………私の口からは言えないわ）

？……………どう言う事だ？それも制限が掛けられているって事か？

（私に掛けられている制限は武霊に関する事だけ……………後は私の

裁量に任されているけど……私は怖いの)

怖い？

(言ったでしょ？私から得た情報も、運命を変える選択。それが夜衣斗にもたらされる事によって、どんな影響があるか……)

……人の最大の幸福は知らない事……とか言っている人もいたよな……もっとも、この場合はその言葉に当て嵌まるかどうか……

(夜衣斗……)

いいさ……そう言う事も自ずと思い出すんだろ？

(ええ……でも、もしかしたら……)

もしかしたら？

(先に他から知る事になるかもしれない)

？……どうやって？

その俺の問いにサヤが答えるより早く、

「夜衣斗さん」

美羽さんに呼ばれたので、意識を心の中から外へ向けると、それまで何やら二人で話していた美羽さんとツ……幸野さんが俺を見ていた。

「意識ははつきりしてますよね？」

？

美羽さんの問いに疑問符を思い浮かべると、幸野さんが微笑んで、「昨日今日武霊使いになったあなたに頼むのは申し訳ないんだけど、私のこの腕をあなたの武霊で治してくれないかしら？」

そう言っって片腕のギブスを見せた。

……昨日のはぐれにやられたんだろうか……まあ、治療する事は構わないが……オウキを使っても大丈夫なんだろうか？

(昨日あれだけの事をしたんだから、今更少し使ったぐらいでオウキに関する影響は少ないと思うけど？)

それもそうだな……オウキに関する影響は……ね……ん？ちょっと待てよ？こんな所でオウキ具現化していいものだろうか？……

そう言えば、さっきレベル0.5具現化って言うのを美羽さんが見せてくれたよな……でも、あれぐらい小さいと治療し難いだろうし……待てよ？具現化率の調整が出来るなら……もしかして、こう言うのも出来るのか？

飛矢折 巴

なんて言ったらいいか……料理待ちの間が、自分に余計な事を言わせたと言つか……黒樹君が余計な気遣いをするって分かっていながら……

どうも美幸の事があってから、自分の制御が上手くいってないみたいで……落ち込むしかない。

そんな風にあたしが落ち込んでいる間、幸野さんの腕を黒樹君が治療する話になって、少し間を開けて、

「ああ、もちろんあなたが昨日武霊使いになったばかりなのは知っているから治療は、そ」

言い忘れた事を幸野さんが言い切るより早く、黒樹君は背後から半透明のオウキを出して、

「わ！夜衣斗さん待つて！」

赤井さんが思わず制止の声を上げるけど、黒樹君はかまわず、

「セレクト。ヒーラーサーバント」

命令した？オウキを具現化もしれないの？

そのあたしの疑問は直ぐに解決された。

何故なら、半透明のオウキの両肩から出たヒーラーサーバントだけが具現化したから……へえ…武霊使って、そう言う器用な具現化も出来るんだ……

思わず感心していると、あたしの耳に、

「うそ……」

そうつぶやく赤井さんの小声が耳に入った。

赤井さんの方を確認すると、赤井さんのみならず幸野さんまで驚いた表情になっており、その二人の反応に黒樹君は戸惑っているみ

たいたった。

「えつとですね……普通。武霊使いになっただけの人は、具現化のコントロールがなかなか出来なくって、具現化しても直ぐに霧散しちゃったり、一部が具現化出来なかったりするんですけど……夜衣斗さんが今やった『部分具現』なんて芸当は、美羽や美春さんでも難しいですよ……」

黒樹君の戸惑いの表情に気付いた赤井さんがそう説明した事に、黒樹君は困惑の雰囲気を出していた。

……どうも黒樹君にとって今のはそんなに難しいものじゃなかったみたい……彼個人の才能なのかな？……だとしたら、まるで『武霊使いになる為に生まれてきた人』みたい……

???

夜衣斗により腕の治療をして貰った美春は、治して貰った腕の調子を確認しながら喫茶店を出た。

ふと気が付くと、先に出ていた賢治が少し離れた場所で待っており、美春は思わず苦笑。

「さつさと仕事に戻ったらどうだ？不良刑事」

「ん？それでも仕事中だよ」

そう言っておどけた賢治の視線は、喫茶店で食事している黒樹夜衣斗に向けられていた。

美春が近付くと、賢治は美春だけに真面目な表情が見える様にして、

「……仮に人の意思が昨日はぐれ発生に関わっていたと考えたと発生したはぐれが執拗に狙っていたのは彼と言う事になる」

賢治が調べ、美春に報告した話によると、昨日のはぐれ発生により町内で出たはぐれによる怪我人は、そのほとんどが偶発的にはぐれと遭遇してしまった事によるものだった。

前日にはぐれが発生していた事もあり、普段より多い怪我人の数だったが、何故か死者は出ていない。

剛鬼丸の武霊使い・田村遼以外はだ。

怪我人の話を統合すると、遭遇してしまったはぐれは、一撃二撃攻撃するとすぐさまその場から離れた。

まるでターゲットを間違えたとも言わんばかりの行動。

ただ一人だけ、執拗にはぐれに追われたのが、黒樹夜衣斗だった。これではまるで、黒樹夜衣斗を殺す為にはぐれは発生し、その目的に田村遼が邪魔だった為に殺された。

そういう風に見える。

もっともそれは、本当に昨日のはぐれの発生に人の意思が関わっていた場合だが……

「美羽や春子から彼の話聞いたけど」

少し美春は苦笑して、

「……とてもはぐれ発生を操作出来る様な組織や人に狙われるような子じゃないと思うけど？」

「美羽ちゃんが嘘を吐いてとは思わないけど……春子さんはどうだろうね？」

「……あの人は、大分いい加減だけど、良い人よ」

「良い人だからと言って、真実を全て話してくれるわけじゃないでしょ？……少なくとも、彼は普通の武霊使いじゃないのは間違いないわけだから……彼自身に、もしかしたら『本人が知らない何か』があるかもしれないし……いや、少なくとも『何か』があるのは間違いないんじゃない？」

「……確かに、唯一確かな事は『彼の異常性』ぐらい……ね」

「そう。はぐれの発生に人の意思が関わっているのなら、彼が狙われたのはその異常性が理由である可能性が高いだろうし、関わってなければ、その異常性が発生したはぐれを呼び寄せたとも考えられる」

「今の所どちらとも取れるわけね……」

「そ、だから、彼をとりあえず見張るのは、どっちであるか調べる唯一の方法ってわけ。どう？これはれっきとした武霊課の仕事で

しょ？」

「……………まあ、今出来る事はそれぐらいしかないでしょうけど……
……どうなのかしら？」

振り返って、喫茶店で二人の女性に囲まれ、困惑と共に恥ずかし
そうに遅めの昼ご飯を食べている夜衣斗を見る美春。

「こうして見る分には……………普通の男の子なんだけどね……………」

そう言った美春が、少し懐かしそうな顔をした事に、賢治は何か
に気付いたのか、少し嘆息して、頬を掻いてあさつての方向を見る。

「ちよつと……………『彼』に似ているかも……………」

そう無意識の内に呟いた美春に、やっぱりかとも言いたげにた
め息を吐こうとした賢治のポケットが震えた。

賢治は少し眉を顰め、素早く星電に出ると、すぐさま目を見開く。
一瞬の内に、賢治の雰囲気が変わった事に気付いた美春は、その
緊迫度から何が起きたか察し、

「どつち？」

「廃校の方」

そう短い確認をした美春は、走り出し、自警団本部に飛び込んだ。

「連絡は来た！？直ぐに動ける団員を集めて！」

第一章『渴欲の武霊使い』 10

鼻歌を歌いながら、川辺で水を蹴るワンピース姿の少女。

その少女は、異様なほど色白で、見惚れるほど綺麗な腰まである長い黒髪に、見る者に戦慄を感じさせるほど妖艶な容姿をしていた。もし、彼女の事を何も知らない男がこの場に居れば、思わず凝視してしまうか、声を掛けてしまうほどの魅了だが、少なくとも星波町の住民の中で彼女に声を掛けようとする愚か者はいない。

何故なら、彼女は星波町に武霊が発生する様になって『初めて武霊を使った殺人を行った者』であり、今でも定期的に殺人を起こす連続殺人鬼と認識されているからだ。

武霊が星波町に発生するようになって十年。

忘却現象と言う武霊と同じく謎の現象のせいで町の外に助けを求める事が出来ない現状の中、幸野美春を始めとする星波町在住の武霊使いが中心となり、自警団や武装風紀委員会などの対はぐれの仕組みは比較的早い段階で出来ていた。

その為、星波町・星波学園に置いての根本的な混乱は一年未満で終息し、武霊を含んだ日常に戻る事が出来た。

だが、その直後から、町は新たな問題に直面する事になった。

それは武霊を使って犯罪を起こす者達の出現。

人の世の中から犯罪が絶えない事は分かり切っていた事であり、そう言う輩が出現するのはある意味必然だった。

それ故に、ある程度の犯罪は、事前の準備によってあっさり逮捕・解決する事は出来たのだが、殺人を始めとする重犯罪だけは自警団・警察・星波学園の三者の認識の違いから、対応が遅れた。

自警団は、優先すべきははぐれへの対応であり、今まで殺人事件などの重犯罪が起きた事がない星波町で、重犯罪など起こるはずがない。と言う油断。

警察は、武霊を使った犯罪を立件する為、外向けに起きた事件を『調整』しなくてはいけない為、仮に重犯罪が起きた場合、どうやって立件するか？と言う苦悩。

星波学園は、武霊使いの多くは、星波学園の生徒であり、子供。そんな彼らが重犯罪を犯すはずがない。と言う過信。

警察の苦悩は違えど、町と学園の油断と過信は、ある意味合っていた。

何故なら、武霊を使って重犯罪を起こしたグループと二人組は、その二つとも『町の外から町・学園には関係ない形でやってきた者達』だったからだ。

グループは近隣で暴れ回る『鬼走人骸きそうじんがい』と名乗る元暴走族の少年犯罪グループ。

廃工場を根城に、近隣で犯罪行為を犯しては、星波町に逃げ込み、彼らに恨みを持つ者達を武霊を使って撃退しており、今の所星波町への直接的な被害は少ないが、既に何人かの人殺しをしているのではないかと考えられている。

そして、現在最も星波町住民に恐れられているのが、姉弟だと名乗る決して姉弟には見えない二人組の男女。

彼女らが町に現れて数年、彼女達によって殺されたとされる武霊使いは、五十名にも及んでいるが、現在に至るまで彼女らを捕まえる事は出来ていないでいる。

彼女らの居住区は分かっているし、当然、警察・自警団共に何度も逮捕しようと動いた。

だが、警察・自警団の全武霊使いを投入しても、彼女らを捕まえるどころか、逆に参加した武霊使いや町に被害が出る事になった。

その最大の理由は、彼らが根城にしている廃校の立地と、彼女が使う特殊な武霊だと警察・自警団は考えているが……

星波川の土手に、川辺で遊ぶ少女から隠れるようにして三十人近い男女が集まっていた。

その集団の中心には、美春がおり、彼女を含む全員が自警団の腕章を腕に付けていた。

「近隣の避難は終わったか？」

その美春の問いに近くにいた自警団団員は頷き、

「はい、さきほど完了したと報告が来ました」

「包囲は？」

「こちら側に三十。向こう岸に四十配置しています」

そう答えた事に美春は頷き、

「全員そのまま待機……作戦通り、まずは私が彼女に接触し、今回のターゲットを探る」

少女に向かって歩き出そうとする美春に、別の団員が慌てて呼び止める。

「あの！星波学園に応援を頼むべきでは？」

部下の提案に、美春はため息を吐き、

「確かに今回は人員が明らかに少ないが……言っているだろ？……こんな危ない事に子供を巻き込むわけにはいかないって。特に町の外の子達にはな」

少女に向かって歩き出す。

武霊を使った犯罪は、町の外に出れば忘却現象により忘れ去られてしまう。

だが、忘れ去れてしまうとは言っても、心に受けた傷は残る様で、武霊犯罪に巻き込まれた結果、星波町から引越した家族、特に子供に『PTSDの様な症状』が見られるケースも報告されていた。

それらは星波学園に通う星波町外の生徒にも見られ、それを星波学園在学时に強く体感していた美春は、断固として星波学園を犯罪武霊使いに関わらせようとしていない。

その事に一部の者達は反発しているが、場合によっては町の外へと遺恨を残す可能性がある上に、はぐれ以上に『武霊による治療すら手に負えない負傷』を負わされる可能性がある犯罪武霊使いの対応に、子供を投入するのは大人の責務として無責任過ぎると思う考え

が最近までは町の大半を占めていた。

しかし、ここ数年継続している二つの問題がいつまで経っても解決しない事と、星波町・星波学園共に若干攻勢的なトップが現れた事で、少しづつ少しづつ子供を使っても犯罪武霊使いを捕まえるべきと言う考えが表に出始めている。

子供を武力に使う集団が、果たしてまともな集団なのか？

状況によっては許されるのではないか？

現実に出ている被害を大人だけで防ぎ切れていないじゃないか！
そんな議論が自警団・町・武装風紀の間で頻繁に行われてしまっていた。

（それもこれも私達が不甲斐ないせいよね……………）

『危うい方向』に変わりつつ星波町全体の考え方に、美春はそう嘆息しつつ、

（今日こそ、彼女達を捕まえて、その流れを変える！）

そう心の中で改めて決意した美春は、いつでも自身の武霊・コロ丸を出せる様にイメージを心の片隅に浮かべながら、少女の隣に立つ。

少女は隣に美春が立つても全く気にせず、水遊びを続ける。

声を掛けようとした美春だが、その前に身体が固まるほど驚かされた。

何故なら水遊びしている少女が座っているのは、身体を丸めてじっとしている少年だったからだ。

その少年こそが目の前の少女の自称弟なのだが、常に一緒に行動している二人の姿が見えないと思ったら、こんな所にいるとは、流石の美春も予想は出来なかった。

この二人の奇行は今に始まったばかりではないが、仮にも弟としている相手を、ごつごつした岩や石がある川辺で、普通は椅子代わりにしない。しかも、ご丁寧に岩の色に身体を塗ってだ。

（彼女達の奇行に一向驚いている場合じゃないでしょ美春！）

心の中でそう自分に言い聞かせて、美春は、

「高神 麗華」
たかがみ れいか

そう名を呼ぶと、初めて少女・高神麗華は水遊びを止め、美春を見た。

一瞬、人形の様な無表情を美春に向けた麗華だったが、すぐさま、「こんにちは」

とそれまで見せていた妖艶な雰囲気を一変させ、幼く人懐っこい笑顔を美春に向けた。

その笑顔だけを見れば、とても連続殺人を犯している様な人物には見えないが、直前の無表情と椅子代わりにされている少年の姿を見れば、邪気のないその笑顔すらぞつとさせる気味悪さを美春は感じてしまう。

美春は思わず出てくる逃げ出したくなる気持ちをぐっと抑え、

「……弟の礼治は平気なの？」

「うん。平気」

楽しそうに頷く麗華は、下の弟・礼治を見もしない。

下の礼治も特に反応らしい反応は見せず、姉とは違う気味悪さを美春に感じさせる。

だが、その礼治の反応は、美春にとってはある意味ありがたかった。

礼治は、麗華と違い、警戒心を持っている。

その為、姉の危機に繋がる様なあらゆる事を排除しようと動く。

しかし、姉のお願いで何かをしている時は、そのお願いに全力を傾ける為、

「……今日は、何をしに町に降りてきたの？」

そんな問いを問い掛ける事が出来る。

問い掛けられた麗華は、子供っぽい純粋で嬉しそうな笑顔を美春に向け、

「あのねあのね。とってもかっこよかったの」

喋り方までより幼く、まるで、心中は別にしても、優しく語り掛けてきた美春に合わせたように、

「ビューンって、ボシユボシユって」

そこまでまるで本当の幼子の様に喋った麗華は、急に女性である麗華すらぞくつとさせるほど妖艶な雰囲気になり、

「あのロボットの武霊使いはどこですか？」

その問いに真つ先に美春が連想したのは、黒樹夜衣斗の武霊オウキ。

タイミングからしてそうだろうと思っていたが、麗華が狙っている武霊は多く、美春自身も狙われてはいる。

もつとも麗華は、一度の行動で狙うのは『その武霊の特殊な能力』も相まって、一人しか狙わない。

だからこそ、美春が一人で接触し、あわよくばその興味を自分に向けようとしていた。

昨日今日で星波町の闇の部分で夜衣斗の接触させない為に。

美春は麗華に顔を向けたまま、右腕に手を添えた。

美春が待機していた場所の対岸で、美春が麗華と接触する様子を見ていた賢治は、美春の合図にすぐさま星電を取り出し、あらかじめ打っていたメールを美羽へと送った。

何も言わない美春に、麗華は今の雰囲気のまま艶めかしく立ち上がる。

その気がないはずの美春でさえ、ある種の衝動に駆られそうになったが、ぐつと堪え、

「ロボットの武霊使い？そんな武霊使いならいくらでもいるわよ？」

「うふふ。うそ」

自然な動きで、一步美春へ近付く麗華に、思わず一步下がる美春。「教えて？」

気を抜けば思わず教えてしまいそうになる様な酷く甘えた問い掛けに、再び一步下がる美春。

「教えて？」

妖艶かと思えば、唐突に子供の様な純真無垢の問い掛けをし、更に一步美春を下がらせると、急に無表情になり、

「教えろや！」

激昂して背後に半透明の赤いアメーバの様な武霊が現れる。

『いつもの様に』唐突に戦闘モードに入った麗華に、美春も自分の武霊コロ丸を背後に出し、

「現れなさい麗華の武霊！」

「行くよコロ丸！レベル3」

麗華が武霊をレベル1で具現化させると同時に、美春はコロ丸をレベル3で具現化させた。

第一章『渴欲の武霊使い』 11

赤井 美羽

丁度食事が終わった頃に東山さんから星電に送られてきたメールに美羽は度肝を抜かれた。

夜衣斗さんが高木姉弟の次のターゲット!?なんで!?って、昨日の戦いを見られてたんだ……そうだよなあれだけ激しく戦ってれば……

「……………一つ聞いていいですか?」

「え!?あ!ひゃい」

不意に夜衣斗さんに声を掛けられ、美羽はあまりの驚きに変な返事をしちゃった。

その美羽の様子に夜衣斗さんが物凄く困ってるのが分かる。

うううゝ恥ずかしい……………とにかく、今は自警団の指示に従って夜衣斗さんを高神姉弟から離さない……………

「えつと何でしょう?」

「……………制御具現とか、部分具現とか色々具現化に名前がある見たいですけど……………他にも名前の付いた具現化はあるんですか?」

……………よかった。美羽でも答えられる質問だ。んゝ

「武霊の具現化にはレベルがあるのは昨日言いましたよね?」

「……………確か普通に具現化する『通常具現』と武霊を何倍にも大きくするレベル2の『倍加具現』でしたね」

「はい。それとさっき美羽が見せたレベル0・5の『制御具現』に、レベル3の武霊を纏って具現化する『憑依具現』があります」

「……………憑依具現?」

「見て貰うのが一番手っ取り早いんですけど……………あいにく美羽はまだレベル3に達してません。あ!でも、さっき会った美春さんはレベル3の武霊使いなんですよ。今度見せて貰いましょう」

「……………いや、流石にそんな手間を掛けさせるわけには……………忙し

いでしょし」

「そうですか？……けっこう凄いなだけだな……」

???

美春の呼び掛けに、半透明のコロ丸が美春に覆いかぶさるように動く。

顔に顔が、手に前足が、足に後足が、まるで美春が半透明のコロ丸を身に纏っているかのようになる。

そして、半透明だったコロ丸の姿が、少しだけ濃くなると共に、コロ丸の足の分だけ美春の身体が宙に浮いた。

これがレベル3の具現化『憑依具現』。

名の通り、自分に取り憑いている武霊を更に身体に取り憑かせて半具現化する具現化。

これによつて投射されている武霊に直接武霊使いの意志力を送る事が出来る上に、より直接的に武霊を操る事が出来る。

通常具現や倍加具現の場合は、本体が武霊使いの中にあるとは言え、見ているもの・感じているものなどの違いがある為、どうしても武霊使いの指示・武霊の対応にタイムラグが生じてしまう。

だが、ほぼ直接操るレベル3にはそのタイムラグがなく、加えて直接武霊使いから意志力が送られている為、具現化率が、見た目が半透明であろうと非常に高くなり、普通のレベル1レベル2の具現化ではあつさり霧散させられてしまうほどになる。

それ故に対武霊使い戦に置いてもっとも強力な具現化だと言えるが、その分意志力の消費も激しく、身に纏っている故に武霊使いが直接ダメージを受ける確率が大幅に上がってしまう。また、

コロ丸を身に纏った美春は、後ろに飛び退き、両手を地面に着け、獣の格好になる。

こうして武霊の身体構造に武霊使いが合わせなくてはいけない為、人形ではない武霊だった場合、武霊使いへの肉体的負担も大きく、更に具現化の維持時間が短くなるなどの欠点があつた。

更に言えば、夜衣斗により身体の治療はされたとは言え、連日はぐれ発生に伴う意志力消費は完全回復まで至っていないのは確実で、美春は憑依具現をした時に軽い意識の薄れを感じていた。

更に美春の不利を付け加えるなら、麗華にはレベル3の優位性を覆す武霊能力を持っている。

麗華具現化レベルは本来なら、圧倒的な具現化率の差によって勝負にすらならないはずのレベル1止まり、それなのに未だに捕まえる事が出来ないのは、

具現化した麗華の武霊が激しく動き、小さく分裂して周囲に四散する。

四散した武霊の一部は瞬く間に大きくなり、それぞれが違った形に変化した。

変化した形はどれもどこかで見た事がある有名なアニメや漫画・特撮などの主人公達。

それらが五十体以上いきなり現れた。

これが麗華の武霊の武霊能力。

本体である赤いスライムの武霊が『取り込んで消化した武霊使いの武霊を奪い、奪った武霊を無制限に使役出来る』。

これが麗華を今まで捕まえる事が出来なかった最大の理由。

何故なら、武霊使いを捕まえる為には、その武霊使いの武霊が防御具現しない様に気絶させるか、意志力を使い切らせる必要がある。接近戦で気絶させようとすれば、麗華の武霊に取り込まれる危険性が、意志力を使い切らせようにもいくら奪った武霊の姿になっている麗華の武霊の分裂体を倒しても、それに対しての意志力消費が低いのか、それとも麗華の意志力が膨大なのか、意志力を使い切らせた事がない。

そんな相手を、本調子ではない美春が追い詰め切れるのかと不安が過り、未だに岩の振りをしている礼治に視線を向ける。

（少なくとも高神姉弟を『この場に閉じ込める』事は成功したのだから………後は！）

美春の心の気合いに応えるかのように、川沿いに次々と自警団員の武霊が具現化される。

さらにその武霊達の後ろから『封鎖』と言う文字が大量に現れ、麗華を中心としたドームが形成された。

文字を具現化させる武霊能力によるもので、これにより人は勿論、武霊現象まで現れた文字通りに一切の行き来が出来なくなった。

ただし、強力な武霊能力である為、意志力の消費が膨大。

それ故に、それほど長い時間この状態を維持出来る訳ではない。

「あは！武霊がいっぱい！」

周囲を取り囲む様に現れた武霊に、子供っぽい嬉しそうな表情を浮かべる麗華。

それと反比例して、分裂体達が戦闘態勢になる。

美春・自警団の武霊達はそれに応える形で身構え……………美春が飛び出すと同時に両者の戦闘が始まった。

星波町役所の町長室に、高木鋼が飛び込んできた。

町長室で執務を行っていた星波町現町長・尾口 晶は、おぐち あきひ執務の手

を止め、

「始めましたか」

そう言うと、鋼は頷き、

「先ほど武霊課から戦闘が始まったと言う連絡がありました」

「分かりました……………町民の避難率はどうなっています？」

「戦闘区域近辺は既に完了しています」

「……………流石は星波町自警団の皆さんですね……………仕事が早い……………

…これではまた私の支持率が下がってしまいますね」

そんな町長の個人的な呟きに鋼は何とも言えない表情になった。

晶が町長になって数年。

武装守護霊発生による町民の流出や武霊使いへの報奨金・星波町専用携帯電話の開発など、様々な要因による町の財源の悪化を晶町長の手によってある程度改善され、晶町長の支持率はそれなりに高

い。

だが、ここ一年、更なる財源の回復の為に、それまで優遇されていた武霊に関する財源までその改善の手を伸ばしており、町民から町長以上に支持率を持っている自警団から激しく反発されていた。

自警団は基本的に星波商店街メンバーを中心とした星波町の大人のボランティアで成り立っている。

だが、当然それぞれには家庭があり、仕事がある為、自警団活動だけに専念するわけにもいかず、常に人手が足りていない。

そこで町と自警団は話し合い、直接戦闘に関係ない様な比較的危险度が低い活動を、自警団に所属していない武霊使いをアルバイト・パートとして雇う事にした。

これにより、自警団の人手不足はある程度解消され、はぐれなどによる町民への被害も激減したが、一部の町民から過剰に予算が使われ過ぎているのでは？と言う声上がり、晶町長はそれに応える形で予算を削減。

直接命に係わる事に予算をケチるべきではない。と言う自警団。不要な部分を削るのは当たり前の話だ。とする町長。

その両者の支持派が大体半々で、町議会委員も半々。

これまでは晶町長の絶妙な交渉と駆け引きで、予算削減に関する議案は通されていた。

だが、つい最近行ったはぐれ監視塔に関するはぐれ発生法則に基づいた人件費の削減が、昨日裏目に出てしまった。

その為、ゴールデンウィーク明け以降の町議会での晶町長が提案する議案が通り難くなるのは間違いなく、場合によっては次の町議会選挙の晶町長派の当選は勿論、晶町長自身の再選も難しくなる可能性があった。

「……………せめて、『武霊裁判』に関する議案だけでも通って欲しいものです……………」

更に誰ともなくそうつぶやく晶町長に、困るしかない鋼は、とりあえず万が一に備えての指示と許可を仰いで退出した。

再び一人となった晶町長は、暫く無言で執務をこなし、不意に、
「さて、そろそろ行くか」

先程まで鋼の前で見せていた誠実な雰囲気から、酷く危険な印象を抱かせる獰猛な雰囲気になり、唐突にその姿が『消えた』。

飛矢折 巴

何だか……赤井さんが自分の星電に來たメールを見てから妙に緊張している。

しかも、黒樹君に武霊の具現化の説明をしながら、一定の方向、星波川の方を気にしている様だった。

あたしもその方向に僅かだけど剣呑な気配を感じているから……これは何かあったのは明白ね……

そんな事を思いながら、あたしは警戒心を強めた時、あたしは妙な気配……黒樹君の気配とは全く違う嫌な気の僅かな気配を感じ取った。

気のせいかと思えるレベルの気配だけど……気になって、あたしは黒樹君と赤井さんの会話を聞きながら、その気配の正体を探り出す。

「……それで、他には？」

「え？あ！はい。えっと……夜衣斗さんが出来ちゃった武霊の一部分を具現化する『部分具現』。武霊が武霊使いを守る時に勝手に具現化する『防御具現』。これは夜衣斗さんももう体感しているはずですよ？」

「……昨日のオウキを具現化する前の？」

「はい、美羽もよくは見えなかったですけど、骸骨犬の骨ミサイルを防いだのは間違いなくオウキの防御具現ですよ。あ！でも、あまりこれには頼らない方が良いですよ。武霊使いの意志で具現化してるわけじゃないですから、具現化率が一番低いからです」

「……なるほど……」

「あとは……名前を呼ばないで無言で具現化する『無音具現』。

これだと武霊の具現化に必要なイメージが薄くなっちゃうのか、通常具現より具現化率が低くなっちゃって、武霊が脆くなっちゃうんですよね……ですから、恥ずかしいかもしれませんが、具現化する時はオウキの名前を大声で呼んだ方がいいですよ」

やや躊躇いがちに頷く黒樹君。

……緊急時ならまだしも……確かに恥ずかしいかも……

そうあたしが苦笑した時、喫茶店の窓の外にサラリーマン風の男性が現れ、通り過ぎようとした。

瞬間、悪寒を感じるほどの殺気を『あたしだけ』に向けてくる。

整調された、それでいて狂気が混ざったような独特な気が含まれた殺気……まず間違はなく『気操術を身に付けた武術家』……

……何もこんな時に、こんな町で現れなくても……何であれ、『こつちの事情』に二人を巻き込むわけにはいかないよね……

あたしは思わず小さなため息を吐き、

「あ！」

何かに気付いたように声を上げ、こつちを見た二人に、

「ごめんなさい。あたし家の用事があるのを忘れていたわ」

「家の用事ですか？」

突然のあたしの言葉に赤井さんは少し小首を傾げたけど、

「……まあ、後は星波学園前まで案内するだけでしたから、丁度いいんじゃないんですか？」

「そうなの？」

「ええ」

……ん？なんか、あまりあたしの方に興味ないような感じね……

……まあ、何かが起きているなら、武霊使いではないあたしは邪魔でしかないでしょうし……

「……………」

ふと気が付くと、黒樹君がサラリーマン風の武術家が消えた方を見ていた。

あたしの視線に気付くと、あたしを見てから再びサラリーマン風

の武術家が消えた方を見て、あたしに視線を戻し……何か言いたげな雰囲気になった。

気配の違いに気付いたのかな……これも武霊の影響？

あたしはそう思いながら、

「黒樹君とは同じ学年だから、もしかしたら同じクラスになるかもね……もしそうならよろしくね」

そう黒樹君に微笑むと、夜衣斗君は何故かちょっと固まって、何か迷う様な雰囲気になった後、

「……………はい」

そう絞り出すように頷いてくれた。

第一章『渴欲の武霊使い』 12

黒樹 夜衣斗

ドキツとした。

さっきトンネルの前で向けてくれた微笑みとはどこか質が違う微笑み、何か決意した様な、氣遣う様な……強い女性の微笑み……そんな笑みを何故、彼女は浮かべたんだろうか？

さっき喫茶店の前を通り抜けた飛矢折さんと全然違うが、何故か似た感じがしたサラリーマンと……こうなんと言うか何か星降り山方面にざわざわとした様な感じがさっきからしている事と……タイミング的に何か関係あるか？……いや、何と言うか、それとはあまりにも質が違い過ぎる感じがするし……

そんな事を考えていると、

「夜衣斗さん！」

不意に美羽さんに呼び掛けられ、俺はビクツとして美羽さんの方を見ると、美羽さんは何故かむすーとしているかと思ったら、顔が赤くなった。

……………？

赤井 美羽

ぼーと飛矢折先輩が出て行った後を見ている夜衣斗さんに……何でか……むかむかつときた。

そのせいかちよつと夜衣斗さんと呼ぶ声が強くなつちやって……

…恥ずかしい。

「……………えつと」

名前を呼んでおきながら黙つちやった美羽に困った夜衣斗さんが、
「……………ちよつと思つたんですが、具現化率って言葉は武霊の大きき以外にも、武霊の再現率とか物理化率とかも含めて使われてます？」

そんな質問をしてきたけど……………

「とりあえず店から出ませんか？次に案内した場所に行くついでに説明しますから」

そう美羽が言つと、夜衣斗さんは頷いた。

よし、これで夜衣斗さんに気付かれずに高神姉弟から遠ざける事が出来る。

そう思つた美羽は、夜衣斗さんに気付かれない様にほつとした。

???

封鎖文字ドームの外側に、賢治を始めとする星波警察署武霊課メンバーが、初老の男性を守る様に円陣を組んでいた。

初老の男性が封鎖文字ドームを造り出している武霊の武霊使い。

その彼の武霊は、実はその封鎖文字ドームを造り出している文字そのもの。

通常の状態は様々な文字で体を構築した文字人間で、目的に応じて様々な形になる事が出来る。

（便利よね……………）

周囲を警戒しながら、武霊課の一人である婦警は小さくため息を吐いた。

（……………まあ、武霊は色々とでたらめだから仕方がないけど……………

…んゝまあ、そんな事より報告報告）

周囲だけでなく、同僚の視線を気にしながら、ボールペンとメモ帳を取り出し、鸚鵡と書く。

すると、鸚鵡と書かれたメモ帳の一枚が勝手に破け、瞬く間に紙で出来た小さなオウムになった。

「春子さんに伝えて」

そう小声で言つて、紙オウムの耳にごによごによと何事かを言つて、空に放つた。

放たれた紙のオウムは、普通のオウムではありえない速度で飛び、

星波図書館の一室に飛び込んだ。

その一室には、スイス人の女性司書と黒樹春子があり、何やら古い文献を凝視している所だった。

紙のオウムに気付いた二人は、顔を見合わせる。

「……………昨日の今日だと言うのに……………」

「……………別件かもしれないわよ?」

スイス人司書の言葉に、否定の言葉を口にしておきながら、春子は嫌な予感を感じつつ、手を差し出す。

すると、春子の手紙のオウムは止まり、

「高神姉弟が出現しました」

紙のオウムを造り出した婦警の声をそのまま喋り出し、

「現在、自警団と武霊課の共同作戦により、高神姉弟を星波川で隔離。戦闘を開始しています。更に戦闘開始直前の接触にて、今回の高神姉弟のターゲットが夜衣斗君である事が判明しました……………どうします?」

そんな事を言ったので、春子は思わず、残った手で頭を抱えた。

「……………どうやら武霊でも適応されるみたいですね」

その謎の言葉と共に、スイス人司書は古い文献に視線を落とす。その文献の表紙は、辛うじて『種無し』と書かれているのが分かるほど文字が擦れていた。

「……………どうします?」

「どうするもこうするも……………どうしよう?まさかこんなに早く……………」

酷く動揺している春子に、スイス人司書はため息を吐き、

「……………とりあえず、沙羅ちゃんに連絡しますね」

「……………お願い」

「……………ツチ……………あいつらも嗅ぎ付けやがったか……………しかたねえなあ……………ちよっと早い気がするが、俺も動くとするか……………」

黒樹 夜衣斗

具現化率は、予想通り身体の大きさ以外にも再現率・物理化率にも使われているようだが……どうも結構アバウトな感じで使われているようだった。

……まあ、全てが手探りの状態なら、そんな感じになるのは無理もない……か？……そもそも、武霊はその人それぞれのイメージによって構築されているのなら、個人個人によって個体差が在り過ぎるって事になる。だとすると……平均データとか取り辛いか……

歩きながら美羽さんの話を聞いた俺は、そんな事を考えながら、次の目的地である星波学園へと向かっていた。

星波町に来る前にネットで調べた事によると、星波学園は教職員を合わせて大体三千人。初等部が約500人・中等部が約700人・高等部が約800人・大学部が約1000人。

で、美羽さんの話によると、その内の武霊使いの割合は約半分の1500人で、年齢が上になればなるほど武霊使いは多くなっているとか……人口密度の割に武霊使いが町より多くいるのは、若者の方が武霊を受け入れる柔軟性が高いのと、多感な思春期である為意志力が大人より高い為ではないかとか言われているらしい……まあ、多分、間違っちゃいないだろうが……

つで、その星波学園の半分ぐらいの生徒が、地元の星波町から通っており、そのほとんどが県外からの寮。

元々、日本全国から生徒を集める仕組みが星波学園にはある為、生徒の半分が寮生になっているとか。それ故に、寮は星波学園内部と星波町内に五つほど分散して作られており、その六つの寮にはそれぞれ名前が付けられているんだが……星波学園にあるのが『専』残りが『花』『月』『雪』『星』『宙』なっている為、別名『ツカ寮』と呼ばれているらしい……まあ、何と言つか……まあ、

俺にはそれほど関係ないからいいんだけど……

苦笑するしかないそんな寮の事を聞いてから少しして、俺と美羽さんは学園大橋前に辿り着いた。

ネットで見た写真で大きい事は分かっていたが……実際に見ると少々面食らう大きさだった。

元々は空港建設の為に造られた人工島の上に星波学園が建てられている為、空港の為に用意された設備がいくつか残されているらしく、その一つがこの学園大橋。

上には何車線もある道路とその両脇には広い歩道。更にその下には、星波駅に繋がる専用の地下鉄が走っており……少々学校には過ぎた設備に見える。

まあ、元々が元々だから仕方がないが……

なお、地下鉄は空港が出来れば、星波駅以外の場所にも路線を伸ばす予定だったらしいが、計画が途中で潰れてしまった為、星波駅止まりになってしまっている。それ故に、滅多に使われず、使ったとしても、大量の備品などを運ぶ以外の使い方をされていないらしく、生徒は基本的に徒歩かバス。

勿体ない様な気がしなくてもないが……まあ、維持コストも使用コストも馬鹿に出来ないだろうから、当然と言えば当然か……そんな事を思いながら、美羽さんと学園大橋を渡っていると、妙な気配を感じ、思わずその気配がした方向・星波海岸に目を向けると………何だあれ？

そこには、小っちゃい髭のおっさんがいた。

いかにも大工ですって感じのおっさんが………大量に………

あまりの光景に固まっていると、

「あゝようやく出てきた」

美羽さんがのほほんとそんな事を言った。

？

「………えっと、あれっては何れじゃないんですか？」

その俺の問いに、美羽さんは困った顔になって、

「そうかもれませんし、そうじゃないかもしれません」

そんな曖昧な返答に俺は困惑するしかなく、その様子を見た美羽さんは慌てて、

「えつとですね。あれは源さんって呼ばれている武霊で、元々は星波町の大工さんの武霊だったんですけど……その人、レベル2のはぐれに食べられちゃって」

食べられちゃって!?

「その日からあやって武霊よって町が壊された次の日に現れる様になっちゃったんです。わらわらと」

……なんだそりゃ……

「見ててください」

そう言って、源さん達を指差す美羽さん。

美羽さんの指差した場所を見ると、源さん達が何かによってガラス状になっっている砂浜の一部に集まり、腹巻から自分の身体より倍の大きさのあるハンマーを取り出し、一斉に構えた。

まさか……

俺はある予感めいた予想をすると同時に、源さん達がハンマーを振り下ろす。

すると、一瞬だけ光が生じ、光が収まった次の瞬間には、ガラス状の砂浜が普通の砂浜に戻っていた。

「ああやって修復してくれるんです。大工さんがどうなったかは未だに分かってませんが、あの源さんがいなかったら、星波町はとっくになくなってたでしょうね……」

……なるほど、武霊で破壊されたところは何となく後で武霊使いが何らかの武霊能力で直すんだろな……って思ってたけど……
……まさかこんなはぐれ……もどき？がいるとは……ますます何なんだろつか武霊って……

改めて武霊に対して漠然とした疑問を感じた時、ふと気が付くと、源さん達が砂浜の修復作業を止め、一斉に海に向かって走り、飛び込み出した。

？……………何なんだ？まるで何かに怯えて逃げ出して

「夜衣斗さん！」

不意に美羽さんに突き飛ばされた。

思いつきり突き飛ばされた為、無様に学園大橋上に倒れてしまう。意味が分からず、突き飛ばした美羽さんの方に慌てて視線を向けるが、そこに美羽さんの姿はなかった。

あまりの事に訳が分からず視線をさまよわせると、視界の上の方に何かが見え、反射的にその何かに視界を合わせると……………そこに赤黒い竜がいた。

赤井 美羽

源さん達が逃げ出し始めた瞬間、コウリユウが美羽に警告の意志を伝えてきた。

咄嗟にコウリユウが警告した方向を見ると、見覚えのある赤黒い竜がこつちに向かって急降下してくるところだった。

しかも、狙いは夜衣斗さん！？

美羽は反射的に夜衣斗さんを突き飛ばすと、赤黒い竜の手が美羽を掴もうと襲い掛かるけど、その手が美羽に触れるより早く、コウリユウが防御具現。

だけど、その手の勢いは完全に防げなくて、学園大橋から吹き飛ばされ……………海！？

「おいで！コウリユウ！」

美羽の呼び声に応えて、コウリユウが美羽の背後で通常具現。

美羽を抱えて、コウリユウは一気に上空に上がる。

そして、空中で赤黒い竜……………連続武霊使い殺人犯高神麗華の自称弟・礼治の武霊『ブラックフラットBBドラゴン』……………武霊だけこつちに飛ばしたのかな？礼治自身は、よく分からないけど、岩になってるってメールに書いて……………え？

美羽は、BBドラゴンの背中に、麗華と一緒に星波川に閉じ込められているはずの礼治がいる事に気付いた。

しかもその礼治が、美羽の方じゃなくて、学園大橋にいる夜衣斗さんの方を見ていて……………あ！ヤバイ！

「夜衣斗さん！オウキを具現化して！」

黒樹 夜衣斗

美羽さんの警告が聞こえた時、地面に付いている手に何かの液体が触れた。

反射的に手を引こうとしたが、ねちよつとしてその液体は張り付いて来て……………何なのか確認すると、それは赤黒い、まるで血の様な粘性のある液体だった。

それが、俺の後ろにかなりの量広がっていて……………さっきまではなかったよな……………

「夜衣斗さん！」

美羽さんがコウリユウを急降下させてこっちに向かおうとしたが、その行く手を赤黒いドラゴンに阻まれる。

その美羽さんの反応に、俺は嫌な予感を覚え、オウキを具現化しようとしたが、それより早く俺の手にくっ付いていた赤黒い粘液に引っ張られた！？

？

そして気が付いたら、俺は……………戦場にいた！？

第一章『渴欲の武霊使い』 13

???

コロ丸を身に纏った美春は、直接麗華の武霊を攻撃せずに、分裂体に飛び掛かった。

某有名アニメの主人公ロボットだった分裂体がビームライフルを連射するが、美春は自在に動かせるコロ丸の体毛を地面に突き刺し、一気に縮ませて横に高速移動し回避。更に回避中に別の個所の体毛を伸ばし、ロボット分裂体の身体に巻き付けると、再び体毛を一気に縮ませ、今度は分裂体を自分の方に引き寄せる。

美春は地面に体毛を突き刺した場所に着地すると同時に、額の体毛を一気に伸ばし、剣状に変化させ、飛び込んでくる分裂体を一刀両断。

一気に霧散する分裂体を美春は見向きもせず、自分に向かって飛び蹴りを放つ某特撮ヒーローに向かって飛び、縦に高速回転して額の剣で切り裂き霧散させ、着地。

休む間もなく、分裂体の某アニメの獣人主人公と自警団の同じアニメの獣人主人公の戦いに割り込み、分裂体の方を切り裂き霧散させる。

麗華の武霊の分裂体は、赤いスライムから分裂している為か、全てが赤色。その為、混戦になっても見分けが付かない事が無いが……

(やっぱり不利な状況ね……………)

星波川を縦横無尽に疾走しながら、美春は戦況を冷静に見ていた。麗華の武霊の分裂体は、殺して奪った武霊使いから武霊の核ごと奪っているのか、麗華の指示にはぐれの様に自らの意志で行動する。それは基本的に武霊使いの命令で動く武霊には不利に動き、実際分裂体と同じぐらいの数いる自警団の武霊は始終押され気味であり、その内の何体かが霧散しているのを美春は目撃していた。

そんな中で唯一善戦しているのが、美春なのだが、

（剛鬼丸がいればまた状況も変わったでしょうけど……………無い物ねだりをしてしまうが面白いわね…………）

某特撮宇宙人の攻撃を避けながら、美春は嘆息した。

麗華の武霊も規格外の武霊だが、剛鬼丸もある種規格外の武霊だった。

自警団同士の模擬戦で、本気ではなかったとは言え、憑依具現している美春が勝つ事が出来なかった相手でもあり、あの強力な広範囲攻撃は、今までの対高神麗華戦で非常に強力な武器となっていた。

だが、そんな強力な武霊も、昨日はぐれ化し、失われてしまっている。

他にも強力な武霊使いはいない事はないのだが、自警団四天王と呼ばれている他三人は、未だに旅行から帰ってきおらず、予定では夕方には帰る事になってはいるが…………

（私が何とかしなくちゃいけないのよね…………）

美春は戦闘を繰り広げながら麗華の方に少し視線を向けると、麗華は楽しそうに分裂体と自警団武霊の戦いを見ている様だった。

更にその後ろでは、麗華の心を表しているかのように、踊る様に赤いスライムぶよぶよと踊っている。

もっとも多くの意志力を使っているはずの麗華の武霊に直接攻撃を出来れば、より効率よく意志力を削れるだろうが、厄介な事に、麗華の武霊は中途半端な攻撃を与えると、ただ飛び散り、そこから新たな分裂体が現れてしまう。かと言って、東山賢治の十字銃のレーザーの様な強力過ぎる攻撃を行えば、常に自身の武霊の傍にいる麗華をこの町ですら致命的なダメージを与えしまいかねない。

そして不気味なのが、

（さつきから一切身動きをしてない……………一体何を企んでいるのかしら？）

麗華に続き、礼治の方にも視線を向けると、礼治は美春がその存在に気付いてから今まで一切動いていない様に見えた。

周囲で姉に関する戦闘が行われていると言っているのだ。

あまりの無関心さに、礼治に対する警戒を強めたその時、礼治に変化が起きた。

ドロつと音を立ててそんなほどの勢いで岩色だった礼治が溶け、そこから赤黒い血の様な液体が川原に広がる。

その現象を見た時、美春は自分の考えの至らなさに歯が音を立てるほど噛みしめた。

礼治の武霊BBドラゴン、その名に血が入っている通り、自身の血を自在に操れる。

コロ丸の様に血を硬化する事も出来、それは毛と血の違いもあった。BBドラゴンの方が汎用性が高く、上手く操れば人そっくりにも作れる事は似た様な武霊能力を持つ美春は分かっていた。

だが、その操る物が血である以上、それによって誤魔化せるのは、視野の利かない夜ぐらいであり、実際何度か夜に使われた事がある。だからこそ、日中には使わないだろうと言う先入観が働き、礼治自身に似せて固められたBBドラゴンの血に『岩と同じ色が塗られて騙されている』とは思いつかなかった。

そして、この場の礼治が偽物であり、礼治が別の場所にいると言う事は、BBドラゴンの血のもう一つの能力を使って、

川辺に広がったBBドラゴンの血が急速に盛り上がる。

そして人ぐらいの大きさになった瞬間、BBドラゴンの血が吹き飛び、そこから現れたのはこの場にもっとも居て欲しくない人物だった。

黒樹夜衣斗をこの場に転送すると言う事。

赤井 美羽

夜衣斗さんがBBドラゴンの血だまりの中に引き込まれて消えてしまった。

BBドラゴンの血には、予め別の場所に溜めて置いた別のBBドラゴンの血へ物体を転送させる能力があるみたいで………多分、今、

夜衣斗さんは星波川に、高神麗華の近くにいます。

メールで礼治も閉じ込められているって聞いて、安心していた美羽のせいだ！……………どうしよう！？いくら夜衣斗さんの武霊が強力でも、あの高神麗華に武霊相手じゃ……………

美羽はぎゅっと拳を握って、

「コウリユウ！星波川に急いで！」

そうコウリユウに命令するけど、

「悪いけど、お姉ちゃんの邪魔はさせないよ」

そう言って礼治とBBドラゴンが美羽達の前に飛び塞がった。

「邪魔を……………するな！」

美羽の意志に承えて、コウリユウが炎のブレスを吐く。

BBドラゴンは血を吐き出し、自分の前に血の盾を造って炎ブレスを防いだ。

美羽はBBドラゴンが炎のブレスを防いでいる間に、コウリユウの手の中から背中に移動して、がっちりと背にしがみつく。

「行つてコウリユウ！」

美羽の合図に、コウリユウは一気に急降下して、海面ギリギリを飛んで星波川河口に向かう。

振り切った！？

そう思つて後ろを見ようとして、すぐ隣にBBドラゴンが飛んでいる事に気付いた。

その手にはBBドラゴンの血で造られた剣が握られてて！？まずい！

「コウリユウ！逆鱗剣！」

美羽の命令に、コウリユウは自分の喉元の逆鱗に手を置くと、鱗が次々と繋がって生え変わって一振りの剣になる。

出来上がったばかりの逆鱗剣で、回転して斬り掛かってくるBBドラゴンと、同じく回転して防御。

何回か切り結んで、飛ぶ事を止めた為に海に落ちそうになったけど、コウリユウとBBドラゴンがほぼ同時に急上昇したおかげで落

ちずに済んだ。

だけど、そのせいでBBドラゴンに先回りされてしまった。
どうしよう……………どうか無事でいて、夜衣斗さん！

飛矢折 巴

はぐれ発生ポイントがある星波山の中腹に、今は使われていない森林公園がある。

美幸の自宅から少し離れた場所にあるから、そんな公園があるって聞いた事があった。

なんでもはぐれ発生ポイントに近いのに、町の事情を知らない外から人間が来るような施設があるのは危険過ぎるって理由で閉鎖されたらしく、同様の理由で星波海岸も遊泳禁止になっているらしい。そんな場所に、あたしは誘導された。

閉鎖されているせいか、草などが伸び放題に放置された森林公園内を進み、星波町を見渡せる丘の様な所に、サラリーマン風の武術家が……………何故かスーツを脱いで、丁寧に折り畳んでいた。

……………これから起こる事を考えれば服が破けるのは間違いないだろうけど……………あれだけの殺気に向けておいて、普通、その相手を目の前にしてする行動？

流石に呆気にとられたあたしはしばらく黙って武術家の行動を見ていたら……………ちょ！？

「ちよつと！」

「あ、もう少しで終わりますから」

そう丁寧に言いながら、武術家は下着まで脱ぎ始めた。

呆気どころか絶句。

「あー窮屈だった。やっぱり人間は生まれたままの姿が自然ですよね？」

……………

にこやかにそう問い掛けてくる武術家は、丸裸の身体を隠しめせず、むしろ見せ付ける様にこっちに……………まあ、別にそれを見

せられたからと言って、どうこう思うあたしじゃない。兄二人第二人に挟まれているから、幼い頃から見慣れている……と言ったら語弊があるけど……特にこれから戦おうとする相手の前で動揺を見せるほど普通の女じゃない………じゃないはずなのだけど………

脳裏に美幸を傷付けてしまった事件が浮かんた。

『あいつ』に似ていない。似ていないはずなのに………駄目。今、動揺したら気が乱れる。

「わたくしは、業いづの捌はち拾しゅう陸りく」

業？………え！？

「岩いづみの高原坂 耕治と申します」

見た目の変態さに反して丁寧に自己紹介する高原坂と名乗る武術家に、あたしは二重の意味で動揺しつつ、

「あたしは飛矢折流飛矢折巴………一応武術家の端くれですが、未だ学生の身ではありません。ですので飛矢折流への挑戦なら、あたしではなく、現当主飛矢折小次郎にしてくれないでしょうか？」

そういつも通りの事を言った。

もっともそうは言っていて、それで引いてくれた飛矢折流への挑戦者はいないし………それに相手は、業と名乗っている………いつもと明らかに違うよね………

あたしは曾祖父である現飛矢折流当主から次期当主として公言されている。

公言されているとは言っても、武術家、しかも気操術が使える特殊な武術家の間の事で………そんなレベルに達している武術家の人達は、常に自分の力を試そうと相手を探している。そして、困った事に気操術が使える武術家はそう多くなく、名のある武術家は大体流浪の旅に出ていたり、修行場に籠っていたりして、見付けるのが難しい。だけど、そう言った武術家の中で飛矢折流は名も知れている上に、普通に町に住んでいるから………もう嫌ってぐらい頻繁に挑戦者が現れる。

しかも、その大半は飛矢折流を倒したと言う事実が欲しいだけだから、色々な武勇伝がある現当主より、特に活躍らしい活躍をしていないあたしを狙ってきて……まあ、多分だけど、曾お爺ちゃんには、そうなる事を想定してあたしを次期当主に指名したのだろうけど……良い修行になるから……そりゃいい修行にはなっているけど……女子高生の日常じゃないのが悩みの種。

そんな感じの毎日を送っているから、てっきり今回もその手の武術家だと思ったのだけど……相手が業って事になると……ただ単純に挑戦者かどうか……

曾お爺ちゃんから聞いていた業と言う武術家集団の話思い出したあたしは、より警戒心を強めながら光源坂の返事を待つ。

高原坂はにつこりと笑って、

「いいえ。わたくしは飛矢折流への挑戦者ではなく、飛矢折巴さん。あなたを滅茶苦茶に『壊して欲しいと言う依頼』の為に来ました」

な!?

第一章『渴欲の武霊使い』 14

???

星波森林公園の近くにある電柱の上に、一人の女性が立っていた。どこか愁いを帯びた彼女の髪は異常に長く、足元まで垂れ下がり、電線に巻き付いている様だった。

しかも、その電線に巻き付いている髪をよく見ると、まるで電気その物の様に光り輝いている。

髪先が電気の様になっている影響か、女性は感電している様子はなく、腕を組み、頬に片手を当ててため息を吐いた。

「うふふ、全くあの子は直ぐに裸になって……うふふ、しょうがない子」

喋っている内容は子供を叱る様だが、その表情は薄ら笑みを浮かべている。

その視線は森林公園の丘に向けられており、そこからは見えなはずの高原坂耕治を確実に視界に捉えている様だった。

「……それにしても……うふふ、随分面白い町ね……」
そうつぶやきながら星波海岸の方へ目を向けると、真紅のドラゴンと赤黒いドラゴンが空中戦を黒広げている。

更に星波川の方に目を向けると、文字のドームがあり、その中では架空であるはずの様々なキャラクター達が戦いを繰り広げていた。

「うふふ……本当に面白い町……あの飛矢折流の次期当主が『強姦されかけた』って聞いた時は、何の冗談かと思ったけど……うふふ。確かにここなら彼女でもそんな目に遭いそうね」

何が楽しいのか、薄ら笑い浮かべながら、再び巴達の方に視線を向けようとした時、文字のドームが『いきなり弾け飛んだ』。

流石の彼女も少し驚いて、文字のドームがあつた場所に目を向けると、

「うふふ……大変」

普通の人間なら『驚愕しそうな光景』が展開されていると言うのに、彼女は全くそう思ってたなさそうな事を口にした。

黒樹 夜衣斗

一体自分の身に何が起こったのか理解するより早く、俺の身体に半透明の毛が巻き付き、一気に引つ張られて空中に舞った。

急激なGに目を白黒させる間もなく、何か柔らかい物の上に落ちると、更に毛が身体に巻き付き、その何かが急激な速度で上に横にと動き出す。

訳が分からずされるがままにされながら、周囲を何とか見ると……どうやら川辺のようで……何だか全身が赤いアニメやら特撮やらのキャラクターが、同じくアニメやら特撮やらのキャラクターと戦っていた。

引つ張られる一瞬前に見た戦場と思つた光景を脳内で再確認して、考える。

特撮やアニメやらのキャラクター達はどうか考えも武霊で、赤い方は普通じゃない感じがするから、普通の？ 武霊は……自警団の武霊か？ ……と言う事は、赤いのははぐれ？ ……いや、警報はなかったから……警報が使えない相手って事だよな……なるほど、だとすると相手は犯罪武霊使いか？ そうなると……美羽さんが言っていた廃校舎と廃工場に住み着いているどっちかだよな……どっちだか分からないが……あの赤黒いドラゴンはその仲間で、血みたいな奴を自在に操れる上に……こっちに來た直後に視界の隅に見た赤黒い欠片から考えると……事前に設置した同じ血みたいな奴へ転送出来るんだろうな……って、俺が狙われた……って昨日今日でまた狙われているのか……だとするとこれも死の運命なんだろうな……サヤはどう思う？

（武霊が関わってるなら、その可能性が高いと思うわ）

そつだよな……オウキが切っ掛けで呼び込まれた死の運命なら、同じ武霊が関わってくるのは自然だよな……

（夜衣斗……………今の私は頑張つてとしか言えないわ……………）

ああ……………つて今の状況じゃ俺もどうしようもないんだが……………

そんな事を思った時、不意にそれまで動き回っていた何かが動きを止め、同時に周囲に自警団の武霊らしき武霊達が集まって防御陣形になった。

……………えつと……………

とりあえず自分を背負っている何かを確認しようと下に視線を向けると、半透明な白い体毛の下に女性の背中があった。

？……………何か見覚えがある様な……………あ！

誰か気付いた瞬間、少し俺を固定している体毛が緩んだので、上半身を起こし、跨った状態になると、跨っている物の頭部が見えた。すると、その頭部が振り返り、白い犬の頭部の中に幸野美春さんの顔があつて……………

思わず自分が跨っている物の全体を見ると、半透明の白い犬の……………多分、武霊の中に幸野さんが入っている状態で……………さつき赤井さんから聞いた自身に憑依させる具現化レベル3・憑依具現だと分かった。

まさかこんなに早く……………こんなに近くで見る事になるとは……………聞いていた時には思いもしなかったが……………確かに凄い感じがする。周りの武霊なんかより圧倒的に存在感があると言つか……………何となく具現化率が高い気がする。半透明だけ……………

「夜衣斗君。無事か？」

白い犬の武霊の中で幸野さんが俺の安否を確認してきた。

「……………ええ、まあ……………」

そう答えながら前を見ると、赤い武霊達がずらりと並び……………その中心に……………？……………あれは……………あゝなるほど……………

「……………高神麗華か」

思わずそうつぶやいてしまうと、何故か幸野さんが驚いた表情になった。

???

唐突に現れた夜衣斗に、麗華と美春はほぼ同時に動いた。

麗華は自身の武霊で夜衣斗を取り込もうと自身の武霊を動かし、美春は夜衣斗を救おうと走ると同時に肩の体毛を伸ばす。

一瞬早くコロ丸の体毛が夜衣斗の身体に巻き付き、走りの慣性と体毛の縮小を合わせ、一気に夜衣斗を引っ張り、宙に舞わせる。

その直後に夜衣斗が直前までいた場所に麗華の武霊が音を立てて落ち、

「ううゝ邪魔しないで！」

と麗華に子供の様な駄々をこねさせた。

当然美春はそれを無視して、周囲の武霊にアイコンタクトを送りながら夜衣斗を背に乗せさせ、襲い掛かってくる分裂体を霧散させつつ麗華から距離を取る。

アイコンタクトを自身の武霊を通して間接的に見た自警団員達は、アイコンタクトを受け取れなかった他の自警団に美春の指示を間接的に伝え、美春が動きを止めると同時に、一斉に美春の周りに武霊を集めさせた。

自警団の武霊達が防御陣形を取った事により、分裂体達は一斉に動きを止め、麗華の周りに集まる。

それが麗華の指示だったのかは不明だが、麗華は何故かにここにしており、じーっと夜衣斗を見ていた。

その視線に気付いた夜衣斗は麗華の不自然さに気付いたのか、困惑の雰囲気を出しているが、それ以上に困惑しているのは美春だった。

レベル3の憑依具現は、武霊を身に纏っている為か、武霊との感覚をより共有している。

その為、身に纏っている武霊がダメージを受ければ、武霊使いもダメージがある程度受けてしまうリスクもあつたりするが……

その強化された共有感覚による犬の聴覚で、美春は夜衣斗の呟きを聞いた。

ただ高神麗華の名前をつぶやいただけだが、昨日来たばかりの彼にその名前を知っている事に驚き、一瞬、美羽が教えたのかとも思ったが、来たばかりの者に美羽がいきなり配慮無くこれから住む町の暗部を教えるとは思えず、困惑するしかなかった。

何故何も知らないはずの彼が、高神麗華の名前を知っていたのか？その疑問を問うより早く、

「ねえ」

麗華が夜衣斗に話し掛ける。

甘える子猫の様な声で、

「あなたの武霊。私に頂戴。あなたよりカッコよくなつてあげるから」

そう夜衣斗にお願いする。

対するお願いされた夜衣斗は、頬を掻き、

「……そこまでそっくりにするか……随分マニアックな子だな……」

と美春には訳が分からないつぶやきを口にした。

訳が分からないが、とにかく伝えなくてはいけない事を伝えなくてはいけない。

本当なら怖い思いをせずに、彼を遠ざけるつもりでいたが、文字ドームで隔離されているこの場ではもはや逃がさせてあげる事も出来ない。

外に連絡して文字ドームを解除させる事は可能だが、そうならば麗華の武霊達が町に解き放たれる事になってしまう。

それだけは避けなくてはならないが、

（そこまで見越して自らの偽物を作ったのかしら？……だとすると、一番厄介なのはやっぱり弟の方かもしれないわね……）

そんな事を思いながら、

「夜衣斗君。落ち着いて聞いてくれ」

「？……はい」

美春の少し前にあった時とは違う男口調に戸惑った感じになる夜

衣斗を無視して、

「今、目の前にいる女の子は、武霊の力で五十人以上の武霊使いを殺し、その武霊を奪った凶悪な犯罪武霊使いだ」

「……高神麗華が連続殺人？」

美春には分からない引つ掛かりを感じている夜衣斗に危機感はない。

若干美春は苛立ちを感じつつ、

「今回は君が狙われている。必ず守るからしばらく私の背中に居てくれ」

その言葉に夜衣斗は腕を組み、口に片手を当てて何事かを考える仕草を少しして、

「……分かりました……ですがその前に、少し試させてください」

「試す？ 何を？」

「……直ぐ済みます」

そう言った夜衣斗は、集中の為か少し目を瞑り、

「我が呼び声に応え、現れ武装せよ！ 今は名も無き守護霊！」

再び疑問符を浮かべさせる様な言葉を唱え出す。

「汝は機械の王にして、全てを守る王の騎士！ 武装守護霊オウキ！」

夜衣斗の呼び掛けに応え、白銀の騎士の様なロボットが夜衣斗の背後から飛び出す様に具現化し、自警団の防御陣形を飛び越え着地する。

目の前に現れたオウキに、

「そっかぁーオウキって言うんだぁーきみいー」

何故か舌足らずな感じで嬉しそうに手を叩く麗華。

（……これは……どう言う事？）

オウキの具現化に、美春は少し困惑した。

美春が今まで見てきた武霊使いは、基本的に名前だけを呼んで具現化している。

武霊発生当初から暫く、より具現化率を上げる試みの中で、名前

に言葉をプラスしてみた事もあった。

だが、どんな言葉を使っても具現化率に差はなく、やがて名前だけを呼ぶ事に落ち着いたのだが……何故か今具現化されたオウキと言う武霊は、レベル3の憑依具現を行っている美春だからこそ分かる感覚で、通常具現より遥かに具現化率が高い事を感じさせた。

増々夜衣斗に対する謎が増えた事を美春が感じる中、

「セレクト！ スピーカーサーバント！」

夜衣斗がオウキに命令を出すと、オウキの肩が開き、スピーカーの様な円盤が飛び出した。

スピーカーの様な円盤は夜衣斗の前まで素早く移動し、

「……あー……あー……」

とつぶやく夜衣斗の声を拡張。

意味が分からず美春のみならず、麗華も呆けた様に夜衣斗を見ていると、不意に、

「あー……ん？ お？ 出来る」

夜衣斗の声が、麗華の声になった。

流石の美春もそれに驚くが、更に驚いたのが、

「な！ 止める！」

と麗華が叫んだ事だった。

「自爆コード。高神麗華は嗤う」

麗華の謎の制止を無視して、夜衣斗がそう言った瞬間、分裂体のみならず、麗華の武霊が『爆発した』。

第一章『渴欲の武霊使い』 15

飛矢折 巴

曾お爺ちゃんの話だと、気操術を身に付ける過程の修行で、時折心を壊してしまう者も出てしまうらしい。

そんな者達は大抵犯罪者になって、『ある人達』に退治されるのだけど……中には同じ心が壊れた者同士で集まり、組織として活動する者達もいる。

組織として活動するから、その分厄介で中々退治する事が出来なくて……そんないくつかある彼ら心の壊れた気操術師達による組織の中で、最も有名なのが『業』と名乗る組織。

『業』と名乗る男が作り出した組織で、他人の命令など聞きようもない心の壊れた者達を纏めるどころか、闇社会と繋がり、彼らからの依頼を受けて依頼にあつた者達を派遣している……って話だった。

だから、目の前にいる高原坂があたしに対する依頼を受けてやってきたのは、何ら不自然な事じゃない。

きつと、あたしが撃退したどこかの武術家が依頼したのだろうって、業つて名前を聞いた時に思ったけど……

「あー楽しみです。僕のビックマグナムがああ飛矢折流を貫くかと思うと……フォー……！」

唐突に奇声を上げて興奮し、腰を振り出す高原坂。

普段なら、こんな変態どうって事ないけど……

再び自分の気の流れが乱れ始めているのが分かり、あたしはぎゅつと両手を握り締めた。

あたしは、多分、心のどこかで自分の武術は武霊になんか負けないうって思っていたのだと思う。

実際、何度か武霊使い『は』倒している。

武霊を具現化させる前に、武霊を避けて……

それが勘違いの素だった。

あたしは……そのどれもで『直接』武霊を倒していない。

生身の人間では……いえ、あたしの力量ではまだ武霊を倒せない。それぐらい分かっていたはずなのに……これまで積み重ねてきたあたしの修練が、たった一か月この町にいただけで越えられてしまう。そんな事実を、あたしの薄っぺらな自負が認める事を拒否していた。だから、ゴールデンウィークに入る前、親友の美幸の家で遅くまで遊んだ帰り。

送ってくれると言う美幸の申し出を断らせ、結果……
……あたしは……『あいつ』に……『連続婦女暴行魔の武霊使い』に襲われた。

武霊を使った連続婦女暴行魔の話は、美幸から聞いてはいたし、学園からも注意喚起はあった。

それでも何とか出来ると思っていた。

例えばどんな相手であろうと、あたしは例え倒せなくても、逃げ切る事が出来る。

そう思っていた。

だけど、『あいつ』の武霊は、気操術を使って強化されたあたしの足にあっさり追い付き、強化されている骨を折り、気を込めた拳をあっさり砕き、あたしを一瞬で身動きを取れなくさせた。

あまりにも呆気なく、何の抵抗も出来ず、武霊に押さえ付けられ……あまりの出来事に……あたしは折られ・砕かれた痛みより、その出来事に呆然自失になった。

そんな中、『あいつ』は服を脱ぎ、下半身を露わにした。

動揺しているあたしは、あたしの人生の中でそれまで一度もしたことがない悲鳴を上げてしまい、その事実により更に打ちのめされ、動揺が自分でも信じられないほどの混乱を呼んで……あたしは曾お爺ちゃんに、未熟なあたしではまだ使つのが早いと『禁じられていた奥義』を使ってしまった。

そして、気が付いたら……あたしは……美幸をその手に……
後で聞いた話では、あたしの事を心配した美幸が奥義を発動した
直後に駆け付けていて、あたしは奥義によって『あいつ』の武霊と
相打ちになりながら『あいつ』を行動不能にしていた。

そして、霧散しかけている『あいつ』の武霊に止めを刺して……
不完全な奥義を発動しているあたしに、美幸は近付いてしまった。

あたしが使った奥義の名前は『武心^{ぶしん}』。

名前の通り己の心すら武器と化す……一種の自己暗示闘法。

事前に設定した事、例えば相手を無力化すると設定した場合、武
心発動後、あたしは相手を無力化する事だけを考え、自分の持つて
いる全ての技術を最適なタイミング・状況・環境で使う。当然、余
計な事を考えていないから、普段はされている全てのセーブが外れ、
技の威力と精度は、普段の何倍以上にもなる。

とてつもなく強力な技。

だけど、反面、事前設定を間違えたり、中途半端に武心を使つて
しまうと、自分の身体の限度を超える力を発揮し過ぎてしまい、自
傷してしまったり、設定した対象以外に対して攻撃してしまう事
がある。

そう曾お爺ちゃんから聞かされていたのに……なのに、混乱した
あたしは混乱から立ち直る為に武心を使つてしまい……結果、事前
設定を間違えたのか、武心が中途半端だったのか、あるいはその両
方か、武心は暴走し……自分の身体の限界を無視して『あいつ』
を倒す事が出来た。だけど、そのせいで、美幸を……心配して駆け
寄ってきた美幸を攻撃してしまった……のだと思う。

正直、不完全な武心を使っている間の記憶は、あたしにはない。
気が付いたら、両手足は信じられないほどぐしゃぐしゃになって
いて、近くで美幸が倒れていた。

その胸をまるで刀に斬られたかのように血でぬらして……

幸いな事なのか、美幸に手を掛けるまでに、あたしの身体は既に
ぼろぼろで、硬気功と柔気功を組み合わせた手刀『矢斬り』も武心

を使ってもなお全力には程遠い程度になっており、美幸は即死する事はなかった。

だから、激しい戦闘を聞きつけた人の通報で救急車が呼ばれ、武霊による治療であたしも美幸も助かった。

だけど、これ以降、美幸はあたしに会ってくれなくなった。

嫌いになるのは……うん、怖くなるのは……当然だと思っし、それを否定する権利はあたしにはない。

美幸が望むなら、転校だつてする。

だけど、その前に一度だけ……一度だけ、謝らせて欲しくて……ずっと美幸の家に通っているのだけ……

「イキますよ！ イキますよおおおおお！」

高原坂があたしに向かって突撃してきた。

男性の大事な所を突き出して！？

一瞬、そのまま蹴り付けてやろうかとも思っただけど、あたしはほぼ直感で横に避けた。

あたしの後ろには大きな木があり、高原坂はそこに突っ込んだ。男性の大事な所を先頭に……

ぴつたりと木に抱き着く様に止まっている高原坂。

……自爆？

そうあたしと思うと、

「ふおおおおおおおおお！」

高原坂はいきなり腰を振り回しながら、木に沿う様にして回り、一周して離れた。

すると、高原坂に抱き着かれていた木の丁度高原坂の大事な部分が当たった場所だけ、まるでドリルで穴を開けられ細くさせられたかの様になっており……音を立てて、木が倒れる。

……正直、こんなバカな攻撃方法はない。

本来なら急所であるはずの部分を最大の武器に使う。しかも、とてつもない威力。

場合によってはそれ一突きで殺されかねないほどの威力だけ……
……冗談じゃない。そんな死に方、色んな人に顔向けが出来なくなる。

そうは思っても、あたしの不調は変わらず、むしろ悪化しているのが自分でもありありと分かった。

木から離れた高原坂は、足に力を溜め、爆発する様にあたしに突撃してきた。

今度は急所を前ではなく、両拳を挟み込む様に振るってきた。
今のあたしでは避けられないと判断したわたしは、腕に『矢滑り（肌の摩擦力を限りなく低くして敵の攻撃を滑らす技）』を使い、迫る拳を滑らして、高原坂の背後に回り背中を使った打撃、俗に言われる八極拳の技・貼山靠てんさんこうを打ち込む。

普通の相手ならこれで吹き飛ぶ事が多いけど、高原坂は僅かに前に飛んだだけ終わった。

それどころか攻撃をしたあたしの背中の方に痛みを感じるほど、高原坂は重く、硬い。

それだけ高原坂の重気功と硬気功の練度が高いという事だけ……
……これでは……

あたしは続く高原坂の攻撃を警戒して、距離を取ると、素早く振り返ったあたしに対して、高原坂は今の攻撃であたしと自分の実力差が分かったのか、余裕を持ってゆっくりと振り返る。

「……物足りないですねえええ」

そう言いながら腰を振る高原坂。

「やっぱり、貫くなら武術家がいい。それも飛び切り強い武術家が」

不意に高原坂が動きを止め、肩を落とした。

「なのになんですかあなたは……そんなのでは僕のビックマグナムが萎えてしまいます」

そう言って、下を指差す高原坂だけど……見られているのかしら？

「分かっていますか？ 僕は『岩の』と名乗ったのですよ？ 僕のビックマグナムはまだまだこんな硬さじゃありません。そんなのでは、僕のビックマグナムを満足させずに死んでしまいますよ」

「…………… 本心に心が壊れているのね…………… ここまでの変態…………… 見た事がないわ……………」

「そうだ！ 噂に名高い、飛矢折流の奥義『武心』を使ってくださいよ」

「！？」

「それだったら、僕のビックマグナムも満足…………… おや？ どうしたんです？ そんなに気を乱してしまつては、もはや一般人と変わらないですよ？」

高原坂が言う様に、武心と言う言葉を高原坂が発した瞬間、あたしは完全に気を整調する事が出来なくなつた。

不意に、曾お爺ちゃんが言っていた言葉を思い出した。

「それは武術を身に付ける者が誰しも通る道だが…………… お前は才能がある分、いささか遅かつたな……………」

その言葉を言われた時、星波町の隣町にあるあたしの家だったから、忘却現象の影響でよく分からなかったけど…………… こうしてこの町にいて、改めて自分ではどうしようもない不調を体感して分かつた。あたしは、『あいつ』や武霊の事で不調になっているわけじゃない。

美幸を殺しそうになつた『自分の未熟な武術』が…………… 『怖い』のだ。

だから、その時を連想させる様な事を聞いたり、感じたり、相対したりすると…………… 駄目になる。

ようやく不調の原因が分かつた。

でも、今分かつて…………… どうすれば……………

「つまりませんね……………」

そう言いながら、高原坂は近くにあった大人ぐらいの大きさがあ
る岩に近付いた。

目的は分かっている。

高原坂が自分の事を『岩』と名乗ったのなら……

「本意ではありませんが、全力でさっさと依頼を終わらせてもら
います……私、早いのは嫌いなんですけどね……」

そうつぶやきながら岩に触る高原坂。

その瞬間、岩がまるで高原坂に吸い込まれるように動き、高原坂
も岩に触れている部分からその姿がまるで岩の様に変化していき……

……高原坂は『岩の怪人』になった。

第一章『渴欲の武霊使い』 16

赤井 美羽

B Bドラゴンの全身から血が吹き出し、それが鋭い針となった。それを見た美羽は慌てて、

「防御鱗壁！」

指示すると同時に、血の針がコウリユウに向かって射出された。

コウリユウの背中の鱗が一気に剥がれ、コウリユウの前に移動して鱗の壁を作る。

血の針は防御鱗に邪魔されてこっちは届かなかったけど、いつかの針が防御鱗を貫通して、半ばで止まっていた。

うわ！ まずい！？ コウリユウ！ 急上昇！

コウリユウに指示を出すと同時に、防御鱗を貫通した血の針が形を失い、急激に膨れ上がる。

多分、貫通しなかった周りの血の針を吸収して大きくなってるんだろうけど……

コウリユウが翼を更に羽ばたかせ、上空に上がろうとした時、膨張した血が薄く広がって、そこからB Bドラゴンが飛び出してきた。夜衣斗さんを送ったと同じ血の転送ゲートで防御鱗を抜けてきたB Bドラゴンが、血の剣を出てきた勢いのままコウリユウに突き刺そうとする。

コウリユウは上昇を止め、回転して剣突を避け、B Bドラゴンの首を逆鱗剣で斬り付けた。

だけどB Bドラゴンは急降下して逆鱗剣を避け、反転して口をこっちにむける。

「コウリユウ！」

美羽の呼び掛けに応え、コウリユウが口を開き、アイスブレスを吐く。

同時にB Bドラゴンが黒い炎のブレスを吐き、二つのブレスがぶ

つかり合い、爆発！？

強烈な爆風で吹き飛ばされるコウリユウと美羽。

コウリユウが何とか体勢を立て直すけど、翼と足に黒い炎が纏わり着いてしまっていた。

B Bドラゴンのプレスは、その血を燃やした粘着性のある炎のプレス。

水に付けても燃え続けるプレスだから、アイスプレスで防ごうと思ったんだけど……急激な温度差でかえって爆発しちゃったって事？ ……とにかく、

「コウリユウ。一瞬だけ具現化を解くよ」

美羽はそう言って、コウリユウの具現化を一瞬だけ解いて、直ぐに具現化。

それによってコウリユウの身体にくっ付いていた黒い炎が身体から離れる。

こうでもしないとあの炎から逃れられないからだけど……参ったな……一昨日と昨日の具現化で結構意志力使ってるから……意志力が持つか……

そんな心配を美羽がしていると、不意に何かの影の中に入った。

反射的に美羽が見上げると……『ブルースター』！？

人型のドラゴンが美羽に拳を振り下ろしてきた。

一瞬の動揺。

美羽の指示が遅れたせいで、コウリユウは肩を殴られ、美羽はその衝撃でコウリユウの背中から吹き飛ばされた。

吹き飛ばされながら、美羽は思わず人形のドラゴンを確認すると

……違うブルースターじゃない……

美羽は一瞬ほっとして、直ぐに怒りを覚えた。

美羽達を上空から不意打ちしたのは、ブルースターと言う武霊に似せて作られたB Bドラゴンの血で……ブルースターは美羽と因縁がある武霊使いの武霊だった。

美羽には兄の様に慕っていた幼馴染がいた。

二個上の、母親同士が幼馴染で親友で、住んでる場所も近所だった関係で、ずっと一緒にいた人。

本当の兄の様に慕ってたけど………中学の時に好きだって気付いて、告白したけど断られた人。

そんな事があっても、変わらずに美羽に接してくれた優しい人………だった。

今年の春休み。

突然……お………『あの人』は、自分のブルースターを使って、自分と美羽が所属している部活の仲間を襲った』。

ブルースターは、高神麗華の武霊と同じ『武霊使いから武霊を奪う事が出来る武霊能力』を持っていた。

少し違うのは、麗華の武霊が武霊使いを殺して奪うのに対して、ブルースターはただ奪うだけ。

それでも、人の、例えばそれが武霊であっても、奪うのは犯罪行為。そう判断した武風と自警団は『あの人』を捕まえようとした。

美羽は、突然犯罪行為に走った『あの人』を止める為に、奔走して……誰よりも早く『あの人』の下に辿り着いて……訳を問い質して、止める様に説得した。

だけど、訳も話してくれなくって、止めるどころか、美羽のコウリウウを奪う為に襲い掛かってきて……美羽は仕方なく応戦してしまつて………町に甚大な被害を……源さんでも修復し終えるまで一週間近くかかるほど出して……相打ちになった。

上空で互いの武霊が霧散して、意識を失って地面に叩き付けられ……気が付いたら、美羽は病院のベッドにいて………『あの人』は行方不明になっていた。

それ以来、『あの人』に襲われた人も、目撃した人もいない。でも……『あの人』があれだけで諦めるとは、美羽は思わなかった。

理由も、目的も、何も分からなかったけど………あの時、美羽が見

た『あの人』の目は、強い決意を宿している様に見えたから……
だから、美羽は気に掛けていた。

『あの人』が、いつ現れても良い様に……今度こそ美羽が『あの人』を止める。

そう決めていた美羽の決意を……………利用された！

「コウリユウ！」

美羽の怒りに応えて、コウリユウが翼を無理矢理動かして、反転。血で出来たブルースターの偽物にレーザーブレスを吐く。

一瞬で真つ二つになった偽物のブルースター。

同時にレーザーブレスで蒸発しなかった残った血が広がり、そこからBBドラゴンが飛び出してきた。

BBドラゴンのその手には、血の槍が握られていて、レーザーブレスを吐いた直後のため硬直しているコウリユウに突き刺そうとする。

「その程度で！ コウリユウ！ レベル2！」

美羽の呼び掛けに応え、コウリユウが一気に倍加具現化。

倍加の膨張で弾かれるBBドラゴンを見捨て、コウリユウが落下している美羽をキャッチ。

その間にBBドラゴンもレベル2になってブレスを吐く。

コウリユウも迎え撃ち、アイスブレス。

お互いがレベル2だったから大爆発になったけど、同時に防御鱗も展開していたから、黒い炎が付く事はなかった。

だけど、レベル2・ブレス・防御鱗を連続して使ったせいで、美羽の意識が一瞬遠退いてしまう。

普段の美羽ならどうって事ない事なんだけど、連日の意志力消費と怒りに身を任せてしまったせいで、それが大きな隙を作ってしまった。

爆炎の中からBBドラゴンが現れる。

その両手には、血で作った巨大な爪が出来ていて、コウリユウに

向かって振りかざす。

コウリユウは一瞬具現化が解け掛けたせいで動きが遅れ、防御出来ずに爪を受けてしまう。

まともに爪で引き裂かれ、咆哮を上げるコウリユウ。

胸に多重の×傷が出来るけど、具現化が解けるほどのダメージじゃない。

その事に思わず疑問に思った瞬間、BBドラゴンが不意に離れた。

????

「一体なんです？ こっちはお楽しみの最中だったんですが」

「まずい事になった」

「……なんです？」

「今回のターゲットが高神麗華を『知っていた』」

「まさか……」

「弱点を突かれ、今、『最後の場面』だ」

「……ツチ。人形は所詮壊れていようと人形か……」

「どうする？」

「どうするもこうするもないでしょう……そろそろ『アレ』にも飽きてきた頃ですし……『餓鬼共』から『預かった奴』があったでしょう？ 『あれ』を使いましょう」

「……いいのか？」

「っは！ 言っただでしょ。飽きたと！……あなただって、『アレ』が無事に捕まると迷惑でしょ？」

「まあ、多少はな」

「だったら、都合が良いじゃないですか？」

「……それもそうか……では、使うぞ？」

「どうぞ」

黒樹 夜衣斗

「うふふ……結局……何も、何も手に入らなかった……」

そう言いながらへたり込む高神麗華……の振りをしている人。

あまりにも完璧な演技に、俺は思わず頬を掻いていると、

「や、夜衣斗君。何をした？」

動揺した感じの幸野さんがそんな事を聞いてきたが……何をしたのも何も……

「……武霊つて武霊使いの心の中にある『何か』を基にその姿を形作るんでしたよね？」

「ああ、それが？」

「……ですから、その基になった何かに弱点が設定されていれば、それがそのままその武霊の弱点になるんじゃないかと思って、それを実行してみたんです」

そう言いながら、俺はまだ高神麗華の最後の場面を演じている彼女を見て眉を顰めた。

……何か変な子だな……

「ちよつと待て、だとすると、高神麗華の武霊はオリジナルではないのか!？」

……と言うか、さっきから何で男言葉になってるんだ？……まあ、なんであれ……

「……ええ、違うでしょうね……あれは、どう見ても『高神麗華は嗤う』の主人公高神麗華が使っていた『ペット』でしょうし」

「高神麗華は嗤う!？ ペット!？ ど、どう言う事？」

「……放送されたのが二十年以上前で深夜の物凄くマイナーなアニメですから、知らないのは無理はありませんけど……さっきから彼女、そのアニメの最後の場面をずっとやってますから……まあ、間違いないんじゃないんでしょうか？」

もう一度彼女を見ると……まだやってる……そう言えば、あれって最後の場面は主人公の長いかつ訳が分からない独白シーンだったな……

「アニメ……あれが？………どんな内容なんだ？」

どんな内容ね……えっと……確か……

「……………大金持ちの令嬢・高神麗華が、その財力を使って話数ごとに色々な架空の作品の主人公からその服装と力とかを奪って、その主人公の代わりに大暴れする話……………でしたね……………で、あのスライムは、その主人公達から服と能力などを奪う高神麗華の名前のないペットでしたね」

「高神麗華の名前のないペット？……………ちよつと待て！　今、服と能力を奪うって言ったな！？　どういう事だ！？　彼女によって武霊使いが殺され、武霊を奪われているんだぞ！」

「……………ん……………」

「……………どんな風に武霊を奪われてました？」

「どんな風に？」

俺の問いに、困惑した様子を見せた幸野さんだが、

「……………スライムのような武霊に武霊使いが取り込まれ……………服が溶かされて、跡形もなく武霊ごと……………爆発してだ」

多分、その場面を何度も目撃しているのだろう……………幸野さんは辛そうに語ったが……………ん……………やっぱり……………」

「……………変ですね」

「変？」

「……………武霊は武霊使いのイメージを攻撃的な形で自身の姿にするって聞きましたが……………それはそのイメージの根幹をなす部分まで攻撃的にするものですか？」

俺の再びの問いに、幸野さんは驚いた顔をして、

「……………いいえ」

絞り出すよう否定した。

「……………だとすると、やっぱり変ですね。麗華のペットが出来るのは、主人公の服と能力を奪って、それを再現して麗華に身に付けさせるだけです……………それがアニメのメインと言えます。当然、殺すようなシーンはありませんし、跡形もなく溶かすようなシーンもありません……………そもそも、自ら自爆する様な行為は、いくら他人の武霊を奪う行為とはいえ、不自然過ぎると思うんですが……………」

「だが、実際に武霊を奪われた武霊使いは……」

重く押し黙る幸野さん。

幸野さんが嘘を言っている様には全く見えない。と言うか、嘘を吐く理由がない。だが、高神麗華のペットが武霊になったとしても、果たしてそこまで能力が変化するのだろうか？ ……ん？ ……なん

であれ……彼女が連続殺人犯とされていると言う事は、武霊が爆発後、武霊を奪われた武霊使いは一切見付かっていないって事だよな
……なるほど……

導き出された結論に、俺は思わずつぶやいてしまった。

「……つまり、彼女は『スケープゴート』なのか……」

第一章『渴欲の武霊使い』 17

黒樹 夜衣斗

「スケープゴート!？」

俺の思わずしたつぶやきが聞こえたのか、幸野さんが驚きの声を上げた。

……大分小さい声で呟いた気がするんだが……身に纏っている武霊の影響かな? ……まあ、とりあえず、

「……個人的な私見ですが……」
そう断ってから、

「……俺は、犯人は別にいると思います」
「別に?」

眉を顰める幸野さんに、俺はいつもの癖で思考を纏めてから、
「……例えば……『周囲の時間を指定した対象ごとに任意に操れる武霊能力』を持った武霊使いとか?」

「時間を? ……なんでそんな具体的な……」

「……ただ武霊使いだけが消えたのなら転移系の武霊能力が考えられますが……麗華の武霊がその武霊能力を発動した直後に爆発し、それ以外を目撃していないとなると、時間を操る能力が一番可能性が高いと思ひまして……」

「そう考える根拠は?」

根拠……ん……

「……時間の流れに落差があると言う事は、それだけ速度に違いがあると言う事です……周囲の時を止め、麗華の武霊が対応出来ない程度に時間の流れを戻し、掻き分けて武霊使いだけを攫えば……時間の落差によって生じた速度の差による衝撃で、麗華の武霊が爆発したように吹き飛ばんじやないんでしょうか?」

「なら……今まで殺されてきたと思っていた武霊使い達は……」

「……少なくとも、高神麗華になり切っているその女の子によ

って殺されてはないでしょうね……」

「だが……そんなとんでもない武霊が、本当にいるのか？」

……まあ、当然の疑問だが……俺としてはむしろ、

「……今までそんな能力を持った武霊がいない方が、不自然な気がするんですけどね……時に関係する能力を持ったキャラクターは結構いますし……某漫画の宿敵とか、某映画の主人公とか……少なくとも、そんな武霊がいないと言い切れないと思いますけど？」

「それは……そうだが……」

俺の話に動揺する幸野さん。

その動揺は俺の周りにいる武霊……と言うより、その武霊使い達にも広がっている様だった。

……まあ、今の今まで高神麗華と名乗っている女の子が犯人だと断定していたのだから……そうじゃない可能性の話に動揺するのは無理もないが……

「……事の真相がどうであれ、とりあえず彼女を拘束したらどうですか？ 警察や自警団が犯罪武霊使いを捕まえる事が出来るって事は、『武霊の具現化を無効化にする方法』があるって事ですよね？」

「ああ、武霊封じの文字が書かれている手錠があるが……」

武霊封じの文字？ ……んゝ武霊能力で書かれた文字か？ 文字に力を宿すってキャラクターは比較的ポピュラーだしな……多分。そんな事を考えていると、幸野さんは首を横に振った。

「いや、だが、彼女の武霊は下手に近付くと……」

……なるほど、取り込まれてしまう訳だ。武霊封じの文字がどれくらい有効なのかは分からないが……中々捕まらなかった理由の一つがそれなら、

「……例のアニメの最終回では、ペットの自爆コードが使われた高神麗華が、残りの時間ずっと謎の独白をしている場面で終わります」

「……何なんだそのアニメ」

俺の口にした内容が内容だっただけに、流石の幸野さんも呆れた表情を見せる。

「……まあ、最終回前に予算を使い切ったとか、色んな有名どころのアニメをパロディし過ぎて無理矢理終らされた仕返しだとか、色々と言われている問題作ですから……」

苦笑する俺に、何とも言えない表情になる幸野さん。

そんなわけ分からなさの一部のマニアに受けて、動画サイトにそのアニメ関連の動画が結構投稿されてたから、そんな俺が生まれる前に放送されていたマイナーなアニメを俺が知っていた訳だから……ん……

「……とにかく、あそこまで完璧に高神麗華を演じているのなら、暫くは動かないと思います。ですから、今の内に、と言おうとして、気付いた。」

高神麗華の最後の場面を演じている彼女の後ろに、いつの間にか『全身に時計を付けた怪人』がいる事に。いつ現れたのか分からなかった。

視線から時折外していたとは言え、警戒の為に常に視界の隅に彼女を入れていたし、オウキはずっと彼女を見ていた。

なのに、いつの間にかその時計の怪人はいた。

それが意味するのは……本当に時を操る武霊がいたって事か！？自分で話してはいても、あくまでそれは予想であって……まずい！このタイミングで現れたって事は！

「オウキ！」

俺の呼び掛けにオウキだけでなく幸野さんも反応し、オウキは両手に銃を、幸野さんは自身の武霊の肩の毛を伸ばして飛ばし、時計怪人の武霊を倒そうとした。

だが次の瞬間……目の前から時計怪人の武霊はいなくなっていた。空を切る幸野さんとオウキの攻撃。

「な！何なんだ！今のは！？」

驚きの声を上げる幸野さんに、俺は、

「……さつき話した時を操る武霊……かもしれません」
そう言いながら、眉を顰めた。

何故なら、彼女を攫いに来たのかと思ったのに、その彼女は時計怪人の武霊が現れた時と同じ場所に、同じ姿勢でいるからだ。

意味が分からず、彼女を注視しながら、

「……皆さん。全員無事ですよね？」

俺の問いに、幸野さんが周囲を確認するが、

「ああ、誰も倒されていない……」

一切何も起こっていない事に眉を顰める幸野さんは、

「仮に夜衣斗君の予想通りだったとして、今の武霊は何のために現れたんだ？」

そんな事を聞いてきたが……それは俺も知りたい……まあ、

「……少なくとも、彼女を救う為じゃなさそうですが……ん？」

「どうした？」

「……いえ……彼女が再現を止めてるようなので……」

俺の気付きに、幸野さんも彼女に視線を向ける。

彼女は黙ったまま、ぼーとしていた。

「……その最後の場面に、こんなシーンはあるのか？」

「……分かりません。俺も、ネットで調べただけで、直接全部を見たわけじゃありませんから……その、ネット動画でネタとして使われている部分部分を知っているだけと言つか……ただ、俺の知っている情報では黙るシーンはなかったはずです」

この場にいるほとんど武霊の視線が自分に集まっていると言つのに、彼女に反応らしき反応はない。

「……不気味な反応だな」

「……ええ」

この唐突な変化は……

「……少なくとも、さつきの武霊に何かをされたのは間違いないでしょう」

「証拠封じか？」

その幸野さんの言葉に、俺は再び眉を顰めた。

確かに今の彼女の状態は、そんな風に見える……とても嫌な感じがしたからだが……

「……それはどうでしょう？ 仮にさっきの武霊が真犯人だとするなら、彼女は利用されただけで、真犯人の事を何か知っているとはいえませんか」

俺の言葉に不思議そうな顔をする幸野さん。

「真犯人は知っていなくても、自分が犯人ではないと証言は出来るだろ？ そうなれば、スケープゴートが難しくなる」

確かにそうだが……

「……それはまともな人間がすればでしょう？ 幸野さんは、彼女の発言に信憑性があると思いますか？」

「それはそうだが……」

あまりの不気味さに幸野さんが対応を決めかねていると、不意に変化が起きた。

ぼーとしている彼女の背後に赤いスライムの武霊が出て来たかと思えば、彼女に……？

「レベル3だと！？」

幸野さんの言う様に、彼女は自身の武霊を身に纏い、幸野さんと同じ半具現化、憑依具現を無言で行った。

彼女の意識レベルが低いのか、彼女の身体は、されるがままの感じで、身に纏った武霊分地面から浮く。

……これじゃあ、武霊に取り込まれた様にしか見えないな……

「どういう事だ！？ 彼女は、レベル2にも達してない武霊使いだったはず！ それがいきなり！？」

そう驚きを口にし、戦闘態勢に入る幸野さん。

もちろん、オウキを含め、自警団の武霊達全員が戦闘態勢に入る。だが……いくら待っても彼女は動かない。

「……一体な」

なんなんだ？ と言おうとしたんだと思う。

だけど、それを幸野さんが口に出来なかった。

何故なら、唐突に彼女の身に纏っている武霊から、『武霊が溢れ出した』からだ。

???

時が止まった川辺の中で、唯一動けるその武霊は、主人から預かった小さな筒を取り出した。

それを、唯一時を止めていなかった高神麗華の首元に押し当てる。すると筒の内部に仕掛けられていた針が飛び出し、麗華の首の血管に突き刺さった。

ほぼ同時に、ガスが発生し、内部の薬品を押し出し、麗華の体内に薬品を注入する。

一瞬で内部の薬品を打ち終わった時を操る武霊は、機械式注射器をしまい、もう用済みとばかりに麗華の時を止め、その場から離れ、来た時と同様に文字ドームの文字がない部分を通ってドームの外に出た。

文字ドームは確かに内外を封鎖する力があるが、それはあくまで文字の部分だけの話で、文字に触れさえしなければ何の問題もなく行き来できる。

もっとも、それが出来ない様に、本来の文字ドームの文字は常に動いており、この武霊の様に時を止める等と言う反則技を使わない限り、この場所は封鎖され続けるはずだった。

だが、時を止める以外の脱出方法が、時が再び動き出したこの場で直ぐに起きる事になる。

溢れ返る『何か』、それを麗華は感じていたが、それを止める術も、止める意志も彼女にはない。

彼女は求め、求められ、ただ答えていただけ。
そこに彼女の意志はない。

ただ、まるで渴いた砂に水が吸い込まれる様に、欲している。

それ故に、彼女は相手の求める者に直ぐになつて見せ……今も、見せようとしていた。

彼女に溢れ返る『何か』は、彼女の身に宿る武霊に吸収される。そうしなければ、自身の宿り主が危険だと判断したのと、その『何か』が武霊にとつて酷く欲する『何か』だったからだ。

だが、吸収しても吸収しても溢れ返る『何か』に、彼女の武霊はその捌け口を求め、具現化した。

彼女から溢れ返る『何か』をより効率よく消費する為に、それまでした事がない憑依具現を自然に行い、武霊能力を行使した瞬間、限度を超えた。

それまで武霊にあつた武霊の意識が、取り憑いている主人たる武霊使いを守る本能が、自身に体现された能力を制御する理性が、吸収され続ける『何か』によって壊れる。

それは彼女の中に存在しながら、はぐれ化を起こしたかの様に、仮に彼女がまともな人間だったのなら、それをある程度抑えられたかもしれないが、生憎、彼女は全てを欲し、応えるだけの人形。故に、武霊の欲さえ受け入れ、応える。

それ故に、武霊は暴走。

武霊の中にある今まで奪ってきた武霊を次々に複製。

普通なら、そんな事をすれば直ぐに麗華の意志力は尽き、意識を失ってしまうはずだが、武霊は麗華の意志力を一切喰らつてなかった。

代わりに溢れ返る『何か』を激しく消費し、

瞬く間に『文字ドーム内を埋め尽くす』ほどの分裂体を作り出した。

第一章『渴欲の武霊使い』 18

???

「っな！ 何だこれは！？」

瞬く間に文字ドーム内が麗華の武霊の分裂体達に埋め尽くされた事に、驚愕で目を見開く賢治。

あまりの事態に、武霊課の面々が啞然としてみると、

「っく！」

苦悶の声を上げた初老の男性が、膝を付いた事に戦慄した。

それは文字ドームを作り上げている彼の意志力が瞬く間に消費されたことを意味する。

彼の意志力にはまだ余裕があり、内部の事態も今までの苦勞が何だったのかと思わせるほど呆気なく片付いていた。

だからこそ油断が武霊課の面々に生まれ、それが面々の反応を鈍くさせる。

戦慄した意味は分かっている。

だが、油断していた心では、次にどう対応すべきか咄嗟には浮かばない。

いや、仮に油断をしていなくても、こんな事態、一体どうすればいいのか？

そんな事を誰かが考えた時、文字ドームが弾け飛び、中にいた武霊が町へと散って行く。

それによろやくはつとした賢治は、

「とにかく倒せ！ 出来る限り町にこいつらを入れるな！ あと緊急警報！」

そう叫び、具現化していた自身の武霊・十字銃をいきなりレーザーモードで連射する賢治だが、倒しても倒してもどんどん溢れる分裂体に、それが不可能だという事をありありと分かせた。

（一体何が起きたって言うんだ！ 無事なのか！？ 無事でいて

くれ美春！)

その思いが絶望的なほど、分裂体が更に溢れ出し、武霊課の面々が見える範囲の空を埋め尽くした。

飛矢折 巴

気操術には、大きく分けて二種類ある。

まずは『基底^{きてい}気功^{きこう}』。

これは主に『身体に触れている・起きる現象を操る気操術』。

気を操れる様になった者なら誰で使う事が出来る基本的な気操術で、飛矢折流の矢と付く技は大体これを使っている。

そしてもう一つは、『万象^{ばんしょう}気功』。

これは自身の『周りで起きている現象を操る事が出来る気操術』。

とは言っても、操れるのはせいぜい一人に付き一現象ぐらいな上に、その現象と強く同調出来る才能が無ければ身に付ける事が出来ない為、その才能がない飛矢折家の者は、あたしも含め誰も使えない。

だから、こういうものは聞いてはいても、実際に目にするのは稀で、会う度に違う現象を操る上にその操る技量に大きな差がある。それは万象気功が、才能が無いと身に付ける事が出来ない上に、基底気功を身に付ける以上の厳しい修行が必要な為で、次期当主を倒して名を上げようなんて考える様な奴は大体その修行を途中で投げ出した奴が多かったからだけど……ここまで完璧に自身の万象気功を使いこなしている人は初めて見た。

万象気功を使う者は、自身が操れる現象に誇りを持っている為、名乗る際に何の現象を操るかご丁寧に教えてくれる。

高原坂は『岩の』と名乗っていたから、岩の万象気功を使うとは分かってはいた。

だけど、万象気功の最高位に位置する『同化術』を『全身に』使えるとは思わず、安易に岩に近付けてしまった。

森林公園にあった大岩と万象気功で同化した高原坂は、その一回

り大きくなつたごつごつした身体を見せ付け、

「どうです？ 美しいでしょう？ ああ、岩は良い。硬くて、硬くて、僕のビクマグナムもより一層硬く、ほら、立派になつたでしょ？」

などと言つてきたが…… やっぱり万象気功を身に付ける際の修行で心をやられたのかしら？ 気操術使いが最も心を壊しやすい修行は万象気功に関する修行だつて、曾お爺ちゃんは言つていたし……

「ああ、出来る事なら、武心を使ったあなたに僕のこの立派になつたビクマグナムを突き刺したかつたのに…… 残念です」

そう言いながら、両手を広げる高原坂。

広げられた両手の全ての指が、音を立てて鋭く、まるで獣の爪の様になつた。

「まずは依頼の為に、その両腕両足を使えなくしてあげましょう」その言葉と共に、高原坂の姿が掻き消え、気が付いたら、あたしの前に来ていた。

高原坂の足にも岩の爪が出来ていて、それが速力を上げただけでなく、あたしの気操術が乱れている為、普段なら捉える事が出来る速度すら捉えられなくなつていた。

その事に愕然としながら、矢不通しと矢乗りを同時使用。

高原坂の爪を両腕で受け、その威力を利用して軽くなつた身体を後ろにわざと吹き飛ばさせる。

それで距離を取つて、少しでも変調が戻る様に時間を稼ごうとしたけど、気操術が不完全だった為、あたしの両腕は深く挟られ、思つていたより吹き飛ば事が出来なかった。

両腕の傷は直ぐに気操術で止血して塞いだけど……

追撃してくる高原坂を、触れている大気の強度を瞬間的に強め、それを足場に空中でも跳躍する『矢越え』を使つて避けるけど、強化した大気の強度不足で跳躍が僅かに遅れ、片足に深く挟られてしまう。

着地し、構えるあたしに、高原坂は追撃してこない。

高原坂は分かっているのだ。

あたしの両腕・片足が、気操術で止血をしたとは言え、ほとんど使い物にならなくなっている事を……

悠然と近付いてくる高原坂。

……これじゃあ……まるで、あの時と同じじゃない……

そう愕然と思ったあたしだけど……今回はあの時は違う……誰も助けにこない……また、武心を使うしかないの？　こんな状態で？

追い詰められたあたしがそう思った時、とてつもない悪寒がした。昨日黒樹君から感じた気配に似た。でも、決定的に違う。恐ろしいほど何もない矛盾した強烈な気配。

不調のあたしが感じたのだから、高原坂はもっとその気配を感じたのか、

「っひ！　なんですか！？　これは！」

そう声を上げ、気配がする方向に顔を向け、絶句した。

あたしも高原坂に注意を向けつつ確認すると……何やら赤く巨大な噴水の様な物が視界に入った。

……星波川の方角よね……さっき赤井さんに来たメールと関係ある？

そう思った時、噴水の先端がこっちに近付いてきているのに気付いた。

嫌な予感を覚え、目の能力を強化する技『矢見取り』を使って、それが何なのかを見る。

そして、気付いた。

それが、幾度か学園の方から見た事がある高神麗華の武霊能力である事を。

分裂体と呼ばれていたそれが、まるで迫る水の様にこっちに、いえ、町中に広がっていた。

高神麗華の武霊能力って、こんなだったけ！？

そう思った時、迫りくる分裂体の先頭から、何かが発射された。

矢見取りで見たそれは、矢であり、弾丸であり、光線であり……
あらゆる飛び道具が撃ち込まれた！？

赤井 美羽

離れたBBドラゴンを警戒しながら、美羽はコウリユウに受けた傷を覆う様に防御鱗を展開させるように指示した。

その間に、BBドラゴンは何もしてこない。

唐突な無関心ぶりに、美羽が不振がっていると、不意にBBドラゴンが血を吐いた。

構えるコウリユウを余所に、自身の前に広げた血の円に飛び込むBBドラゴン。

また転送攻撃をしてくるのかと思ったけど………いくら待っても………こない？ ……まさか！ 姉の所に行ったの！？

そう思つて美羽、慌てて星波川の方を見ると、麗華を閉じ込めている文字ドームの方から物凄く嫌な気配を感じた。

コウリユウも不快そうなその気配が何なのか美羽が考えるより早く、異変が起きる。

美羽のしている前で、文字ドームの中が急に真っ赤になった。

あまりにも一瞬で真っ赤になったから、何が何だか分からなくてぽかーんとしていると、コウリユウが自分の目の映像を美羽に送つて………え？

文字ドームの中を真っ赤に染めたのは、麗華の武霊の分裂体だった。

うそ……あの文字ドームの中には……夜衣斗さんと美春さんが……麗華戦での自警団の戦い方は、レベル3の武霊使いである美春さんが戦闘兼囃を主に担当し、他の団員は安全圏から武霊を遠隔操作して美春さんをサポートする。

それが基本だからきつと、今回も……でも、なんであんな大量に……今までは奪った武霊は一体につき一体しか出す事が出来なかったはずなのに……

呆然とそう思っていると、文字ドームが弾け飛んだ！

弾け飛ぶと同時に、それまで文字ドームで押さえ付けられていた分裂体達が噴水みたいに町中へ飛び出し、ほとんど同時に東山さんの武霊・十字銃の光線が空に走る。

十字銃の光線はコウリユウのレーザープレス同様に物凄く強力だけど……分裂体のあまりの数に焼け石に水だった。

少し遅れて、見慣れた自警団と武霊課の武霊が分裂体を押し留めようと現れるけど……

「コウリユウ！」

美羽の叫びに応え、コウリユウが分裂体の大群に向けて飛ぶ。

夜衣斗さんと美羽さんの事は気掛かりだけど、今は！

「コウリユウ！ サンダープレス！」

分裂体にある程度近付くと同時に、美羽はコウリユウに電撃のプレスを吐かせた。

コウリユウから吐かれた電撃のプレスは、一番近くのロボットみたいな分裂体に当たると、その近くの分裂体達から更に別の分裂体達へ一気に伝わり、結構な数の分裂体を一掃した。

だけど、次々と現れる分裂体によって、あつと言う間にサンダープレスを吐いた時より多くなる。

こんなの……うそでしょ……どうすればいいのよ！

次々と美羽はコウリユウにサンダープレスを吐かせるけど、一向に分裂体が減る様子がない。

今の所、空中にいる武霊に気を取られてるみたいだけど……このままじゃ……

そう思った時、

「緊急放送！ 現在、高神麗華の武霊が暴れています！ 赤い武霊ははぐれではありませんので！ 町内の皆様は、緊急マニュアルに従って、至急近くの武霊使いのもとに避難してください。また、武霊使いの皆様は、町民の安全を確保しつつシェルターへ！ 繰り返しします！ 現在——」

そう放送が入るけど……そんなので守れるの！？　と言うか、下手に刺激しない方が良いんじゃない……

そんな美羽の不安は直ぐに的中した。

不意に、一部の分裂体が町に向けて下降し始めて、慌てて下降先に視線を向けると、誰かがサムライみたいな武霊を具現化しているのが見えて、やっぱりそうなる！？

「コウリユウ！　りんしゃけん 鱗射剣！」

美羽は慌てて、防御鱗を手裏剣状にして撃ち出す技を大量に出して、下降した分裂体達を霧散させる。

同時にコウリユウを下降させ、撃ち漏らした分裂体と戦う武霊使いの上に移動して、分裂体をコウリユウに握りつぶさせ、

「早くシエルターへ！」

武霊使いの人にそう叫んで、美羽はコウリユウに釣られて下降してきた分裂体達を迎え撃ちさせる。

シエルターの外装には武霊封じの文字が書かれているから、ある程度の武霊攻撃は効かない。

だから、放送のシエルターへ避難を誘導したのは間違っていない。

でも……これだけの数の分裂体にシエルターが攻撃されたら……見上げた美羽の視線の先では、大量の分裂体がどんどん現れ、星波町の空を埋め尽くそうとしていた。

第一章『渴欲の武霊使い』 19

???

「繰り返します！ 現在、高神麗華の武霊が暴れています！
赤い武霊ははぐれでは——」

緊急放送をしている星波商店街自警団本部では、ペットショップを
経営している三つ子の三姉妹がいた。

放送をしているのは、三姉妹の内の次女で、残りの三女は分裂体
によつて埋め尽くされようとしている空を警戒し、長女は携帯電話
で誰かと会話をしている様だった。

「……ええ、『私の』でも確認したけど……」

長女は片目を瞑り、

「もう一度確認したけど……やっぱり間違いないわ……ええ、
『^{むけつ}無穴』が開こうとしている」

無穴と言う言葉に、外を警戒していた三女だけでなく、放送を続
ける次女も長女を見る。

「原因は全くの不明だけど……そうじゃなきゃ、あれほどの具現
化なんて、いくら特殊な武霊使いでも出来ないでしょうね……ん？

……ええ、こっちのメンバーは全員所定の位置に配置させている
わ……ええ、既に気付かれない様に動いてもらってるけど……ちょ
っとギリギリね……みんな苦戦している……こんな状態で、も
し、無穴が開いてしまったら……な！ ちよつと待ちなさい！」

不意に声を荒げる長女に、何事かと顔を見合わせる三女と次女。

「自分が言っている意味を分かってるの！？ あなたの力じゃ……

……それはそうだけど……残される夜衣斗君はどうするの！？

……いえ、流石にあんな状態じゃ無事かどうかは確認出来てい
ないけど……」

眉を顰め、目を瞑り、天を仰ぐ長女。

少しの黙考の後、

武霊は武霊……ふざけた攻撃だと言うのに……なんて奴なのだろう

……

「ふおおおおおお素晴らしい！　素晴らしい！」

高原坂が分裂体達を引き付けてくれたおかげで、あたしの方には数体しか分裂体は来ていないけど……つく！さっき高原坂に受けた傷のせいで分裂体の攻撃を避けるので精一杯だった。

そんな状態でも否応なしに視界の隅に入る町の光景は、一瞬自分の窮地を忘れさせるほど……とんでもない状況になっていた。

空を分裂体によって埋め尽くされている。

そんなとんでもない状況下なのに、分裂体の雲の下では、レベル2の武霊が何体かが戦っていたけど……どう見ても圧倒的な不利な状態だった。

一体何が起きたと言うの？　……いえ、そんな事より、こんな絶望的な状況……一体どうすれば……

圧倒的な力で分裂体を倒し続けている高原坂だけど、その一切防御を考えてない攻撃方法の為か、徐々に徐々にその岩の身体に傷が付き始めていた。

あたしも、万全でない心と体で気操術を使い続けるにも限界が近い。

視界の隅に映る分裂体の雲も、町を見渡せる位置にいる為か、徐々に徐々に全体が下に下降しているのが分かり……その結果がどうなるかは、考えなくても分かる。

どうすれば！？　どうすれば！？

そう頭の中で考えるけど、今のあたしには……いえ、どんなあたしであろうと、こんな状況を覆せるはずが――

何故か不意に黒樹君の事を思い出した。

昨日会ったばかりの人だと言うのに、昨日武霊使いになったばかりの人だと言うのに、何故か、もしかしたらと言う思いが生じたその瞬間、

赤井 美羽

コウリユウのファイアーブレスで数十体ぐらいの分裂体を一気に霧散させた。

美羽の周囲には、自警団や町の人達の武霊が何十体もいて、一緒に攻撃してくれているけど……

その内の何体かはコウリユウと同じくレベル2になってて、上空を埋め尽くす分裂体達に向けて巨体を生かした攻撃を繰り返しているけど……どんなに分裂体を倒しても、未だに星波川の方から分裂体が空へと出続けていて……麗華が分裂体に指示を出せない状態なのか、一切それぞれの武霊能力を使ってないから簡単に倒せるけど……切りが無い……あー！！……イライラする！ イライラする！

あまりの状況に、美羽は恐怖よりも、怒りの方が段々強くなってきた。

おかげで少し意志力不足が補えたけど……見上げると距離感が可笑しくなりそうなほど分裂体に埋め尽くされた空。

……こんなの絶対に倒し切るまで意志力が持たない……おかしいでしょ！？ 普通、こんなに具現化なんて出来ない！なのに、いつまで経っても、麗華の武霊が消える様子が無くて……

もう一回、星波川の方を見る。

何度見ても、尽きることなく分裂体が溢れ出して……え？

ある事に美羽は気付いてしまった。

空を埋め尽くしている分裂体達の端の位置が、さっき見た時より山に近付いている事に……ど、どうしよう……こんな事を今、みんなに知らせても……何なの？……こんなの……ありえない……昨日から、星波町は一体どうしちゃったの？

自然と星波学園の方に目を向けるけど、そっちの方も大量に降下してくる分裂体を何十体もの武霊で対応していた。

その中のレベル2になっている十数体の内の一つ・フェニックス

の様な武霊に目が行き……美羽は首を横に振った。

『あんな奴』に頼れない。ううん。頼ったとしても、今の状況を何とか出来るなんて、何とか出来る人なんて――

何故か不意に夜衣斗さんの事を思い出した。

昨日会ったばかりの人だと言うのに、昨日武霊使いになったばかりの人だと言うのに、何故か、もしかしたらと言う思いが生じたその瞬間、

赤井美羽&飛矢折巴

強烈なビジョンに襲われた。

それは一人の少女が……少女が――

???

今は空き家となっている家の屋根に黒樹春子はいた。

その姿は何故か黒い巫女服で、夜衣斗に見せたふざけた雰囲気も無く、まるで『本職の様な雰囲気』を出し、目を瞑っている。

屋根と言う目立つ場所にいるせいか、分裂体が時折春子に向かって降下してくるが、そのどれもが春子に到達する直前で、カラスなどの鳥類に襲われ霧散した。

あまりにも不自然な光景だが、町民は既にシェルターに避難し終わっており、唯一外にいる武霊使い達も、地上の光景を気にしている者はいない。

いや、正確には、『気にする事が出来ない』だが――
不意に春子が目を開く。

その直後に春子の前に十一人の子供達がいきなり現れた。

全員、何故か手を繋ぎ、まるで歩いてきたかの様に足を出している。

「あゝ流石に十人一緒に『歩く』のはきついわあゝ」

十一人の先頭にいたシニヨンヘアの女子高生がそう言ってへたり込む。

「ご苦労様……って言いたいけど、何でこんなに来るの？」

少し困惑する春子にシニヨンヘアの女子高生は苦笑して、

「いーや、何か、いついかなる時も護衛するのが自分達の役目だ
って聞かない人達が多くて」

ちらつと何故か執事服を着ている男子高校生・留学生らしいアシ
メントリーな金髪金目の女子高生・同じく留学生らしいポニーテ
ルな銀髪銀目の女子高生を見るが、見られた彼らは護衛と言う言葉通
り、全員を守る様に近く家の屋根へと飛んでしまう。

「……まあ、来てしまったものはしょうがないけど……学園の方
はいいの？」

若干あきれ気味に了承しつつ、ゴシックローリータな格好でデディ
ヘアを抱き抱えている女子中学生に視線を向けた。

視線を向けられたゴスロリ中学生はこくりと頷き、

「はい。沙羅お姉さまと好美お姉さまが私達の分まで頑張ってく
れています」

そう言っただけでちらりと見た学園の方では、炎と氷の嵐が吹き荒れて
おり、その中心にフェニックスの様な武霊と雪女の様なレベル2武
霊二体が見えた。

「そう……」

少しだけほつとして様に微笑み、瞳に覚悟の意志を宿し、

「じゃあ、始めましょうか？」

何故かメイド服を着ている多少目付きが鋭い女子高生を見た。

春子の言葉に、この場にいる全員がはつと息を飲む。

「春子さん……」

メイド女子高生は躊躇いながら春子に近付く。

その手には長大なトランクが握られており、春子はそれに視線を
移す。

「……それが？」

春子の問いに、メイド女子高生は頷き、

「はい。『黒樹弓』です」

「そう……確かにそんな状態だつていうのに」
自分の右手を見る春子。

その手には黒い植物の芽の様な物が無数に生えだしており、この場にいる全員を驚かせる。

「……少し制御が難しくなってきたわ」

「やつぱり止めましょう！」

あまりの光景にメイド女子高生は後ろに下がり、トランクを春子に渡さない様に抱えた。

「馬鹿ね……『それ』を使わなくても、使っても、これからする事で私が『死ぬ事』は変わらないのよ？」

死と言う言葉に、この場の全員が沈痛な面持ちになる。

「夜衣斗君はどうするんですか！？ たった一人、こんな訳が分からない町に残されて」

「それはあなたに任せるわ。『従姉』なんだし」

従姉と言う言葉に、メイド女子高生は困った様に眉を顰める。

確かにメイド女子高生の目付きは夜衣斗にどこか似ていたが、

「『私達』の事を夜衣斗君に『下手に明かせない』のは春子さんだつて分かっているはずですよ！」

「そうね。だから、その事は隠して」

「それだけじゃありません！ 『修復』はどうするんですか！？ あれは黒樹家の人間でないと——」

「うん。だから」

不意にメイド女子高生の視界から春子が消える。

そして気付いた時には隣に立たれ、同時に激痛がメイド女子高生を襲い、トランクを奪われてしまう。

「この力を借りて、夜衣斗ちゃん『のも』一緒に『砕こう』と思っているのよ……あの柱の中にいるのは間違いないからね」

そう言いながらトランクを開け、春子は中から黒い弓を取り出した。

吸い込まれそうなほど黒く美しい弓。しかし、トランクの中には

弓が放つべき矢がない。

春子はその事を特に気にする様子もなく、弦の調子を確認。

「は、春子さん」

激痛と共に身体が動かなくなったメイド女子高生は、近くの学生達に慌てて支えられ、ゆっくり屋根の上に寝かされる。

そのメイド女子高生の視線の先、弓を持つ春子の手では、次々と生え、伸びる黒い芽が弓に巻き付き、同化する様に吸い込まれていた。

メイド女子高生を寝かせ終わると同時に、星波町に更なる異変が起きる。

武霊・分裂体のみならず武霊使い達までもが不意に『動きを止めた』。

その現象は、春子以外のこの場にいる者達の身にも起きたが、武霊使い達とは違い、一瞬だけ動きを止めただけだった。

その全員が眉顰め、不快そうな顔をして顔を見合わせる。

その様子に、この場で唯一何の変化もなかった春子が不思議そうな顔になった。

「どうしたの？」

春子の問いに、子供達は顔を見合わせ、

「うーん……どうも武霊が吸収し切れなくなってきたみたいです
ねえ、嫌なビジョンがバシバシ来ます」

シニヨンヘアの女子高生の言葉に、春子は眉を顰める。

「漏れ出たのが『精神系に変化』したって事？ 何の影響で？」

「ん、多分、夜衣斗君の影響じゃないですか？」

「夜衣斗ちゃんの？」

思わず夜衣斗がいる分裂体達の柱へと視線を向ける春子。

しばらく見続けた後、ぎゅっと弓を持ち、

「……急ぎましょう。みんな準備して」

そう春子が言うが、周りの子供達は不安そうな辛そうな面持ちを隠しめせず春子に向けてくる。

その子供達に春子は優しく微笑んで、

「大丈夫。みんなは事前に練習してくれた通りにしてくれれば、みんなには何の影響もないし……後の事は大人組が何とかしてくれるから」

そんな事を言う春子に、子供達は何か言いたそうな顔になりはしたが、黙って準備を始めた。

第一章『渴欲の武霊使い』 20

???

屋根の上で、何やら準備を始める春子達を、少し離れたデパートの屋上で見詰める者がいた。

電動車椅子に乗ったその中年男性は、武霊使いですら気付かせない『何か』を越え、正確に春子達を見ている様だった。

しかも、その当の春子達に気付かせずにだ。

電動車椅子の男性は、視線を分裂体達の柱へと向ける。

今は町全体を襲っている謎のビジョンの影響か、その動きは一切止まっていた。

だが、止まっている為なのか、空を覆う分裂体達の天井は下降を止めるどころか、少しづつ早くなっている様だった。

その早まる下降を電動車椅子の男性が確認した時、屋上の出入口から教師風の格好をした女性が現れ、その背後に立つ。

電動車椅子の男性は、背後を特に見もせず、電動車椅子に備え付けられているノートパソコンを自分の手前に移動し、キーボードを叩く。すると、

「『どうだった?』」

打った文字が音声としてノートパソコンから出る。

「マスターの言う様に、気付いている者はいませんでした」

「『『あいつ』もか?』」

「はい。まだ戻ってきてはいません」

「『『なら、もう暫く自由に動けるな』』」

その言葉に、女性は分裂体の柱へと視線を向ける。

「また助けに行くのですか?」

彼女の問いに、電動車椅子の男性は、首を横に振り、

「『昨日は既に『運命を変えていた』。だから助けたが……今日
は『まだ運命を変えていない』』」

「ですが……」

視線を分裂体の柱から、分裂体の天井へと移して、春子達を見た。
「よろしいので？ 彼女達の試みが成功すれば、彼は『力を失い』
。そうなれば、残りの死の運命のどれかによって殺されるのは確実。
かと言って、彼女達の試みが成功しなければ、この町は『あの子に
よって滅ぼされる』。どっちになろうと、彼はこれで終わってしま
いますか？」

彼女の問いに、電動車椅子の男性は苦笑し、

「まあ、その時はその時さ」

そう言わせ、夜衣斗がいるであろう分裂体の柱の方に視線を向け
る。

「……さあ、昨日に引き続き、これが『今回の死の運命』……
これくらい乗り越えて見せてくれ、君の可能性を、君の選択を見せ
てくれ」

そうノートパソコンに言わせ、暫くの沈黙の後、後ろを振り返り、
「……ところで今日はなんで教師風の格好をしているんだ？」
「星波学園が近くにありますが。教師のコスプレを試してみまし
た。どうですか？ 似合いますか？」

「お前な……… なんか、色々台無しだな………」

「えー？ そうですか？」

赤井 美羽

その少女は、食卓の上に乗せられていた。

身体の上、その表面全部に、色々な料理が乗せられていて……胸
の上には痛いぐらいの熱さが、お腹の上には熱いぐらいの冷たさが、
口の中には暴れ回る小さな何かが――

美羽は、食器として使われている少女になっていた。

乗せられている食材が、それを食べようと囲んでいる人達が、
気持ち悪い！

嫌だ！

気持ち悪い！

嫌だ！

気持ち悪い！

嫌だ！

気持ち悪い！

止めて！

気持ち悪い！

止めて！

誰かの箸が、誰かのフォークが、誰かのスプーンが、何かを摘み、何かを刺し、何かを救う度に、美羽は狂う様な思いだった。

なのに！ 何で彼女は！ …………… 何も感じないの！？

美羽がなっている少女は、食器になる前、僅かな何かを感じていた。

美羽には分からない。

美羽には理解できない。

何か。

そんな僅かな何かも、彼女の前に現れた着物を着てキセルを吸っている女性に、

「いい？ 今日のあなたは食器よ」

そう言われた瞬間、

彼女は何も思わなくなった。

まるで、本当に食器になったみたいに……………

ぞつとする様な、彼女の何も感じない感覚。

外から与えられる食べられる感覚。

内と外の狂気に、美羽は、美羽の心は……………これ以上……………

「ふむ。確かにこの料理は美味だが、物足りないな」

少女に乘せられている料理を食べている客の一人らしき声と共に、目の上に乗っていた食材が退けられ、目の前にフォークが！？

「これはいいのか？」

え？

「お気に召すかわかりませんが……どうぞ？」

キセルの女性の了承と同時に、フォークが、

「ふむ。私はこれに目がなくてね。いや、冗談ではなくてな」
目に突き――

やめてえ――

美羽は美羽の声ではっと気付いた。

気が付くと目の前にコウリユウの背中。

ばっと思わず自分の目を確認する。

無事な事にほっとして……何！？ 今の！？ 何！？

今思い出しただけでもぞっとするビジョンに……気持ち悪い……
気持ち悪いよ……

美羽は強い吐き気に襲われ、コウリユウが心配そうに美羽を見る。
意識を今見たビジョンから外そうとするけど、どうしても……ど
うしても……

ぐるぐると食器となった少女のビジョンが頭の中を巡る。

何なの？ 誰なの？ 一体、今は誰の……過去？

武霊の中に、テレパシーみたいな事を出来るのもいて、今見たの
はそれに近い感じだった。

誰かの過去を、その誰かの視線で追体験した。

そんな感じだったけど……本当に、誰？

そう思った時、視界の隅に分裂体の柱が見えた。

ビジョンを見る前は、尽きる事無く分裂体が湧き出していたけど

……今は全てが止まっている。

どうして……あれ？ そう言えば……あの顔って……

美羽は不意に気付いた。

ビジョンの中で、彼女に料理が乗せられる際に使われていたスプ
ーンに、一瞬だけ映った少女の顔が……高神麗華にそっくりだ
った事を……

そして、その事に気付いた事で、美羽は更に気付いてしまった。

高神麗華らしき少女に食器になる様に命令したキセルの女性が、高神麗華に似ている事に……まるで、母娘みたいに……似ている事に……

うそ……でしょ？ 母親が……娘に……あんなに幼い娘に……

……
あまりの事にショックを受け、愕然としてみると、また、別のビジョンが！？

？？？

金髪金目でロングヘアのその外国人らしき少女は、ぱつと見は貧弱だが、そこには異様と思えるほど綺麗な顔と身体付きがあり、まるで人形の様な、黙っていれば周囲を魅了し尽くすほどの容姿だった。

だが、

「うふふ。実は百合物にもちょっと興味があつたんですよ」

そう言いながら春子に近付く彼女に、春子は引きつった顔を浮かべ、

「ちょ！ ちょっと、私にはそつちの気はないわよ！？」

「え〜じゃあ、脳内変換しておと」

ぺしつと彼女の頭を叩く春子。

「いいから早くしなさい！」

「はい」

若干詰まらなそうに彼女は、春子の頬に顔を近付け、そのままキスをした。

その瞬間、春子の身体が薄ら光る。

数秒、春子の頬に口づけをし続けた彼女が、頬から唇を放すと、春子の身体から光も消えた。

「さ、流石に、春子さんにするのはきついですね」

何故か疲弊した様にそう言った彼女は、

「さ、次はあなたです」

髪も服装もぼろぼろだが、ちゃんとすれば確実に美人な、勿体ない女性に視線を向けた。

飛矢折 巴

その少女は走っていた。

先程見させられた食卓がある部屋とは違う、人工の植物が無造作に設置させられた大部屋の中を、

必死に、

必死に、

必死に、

……………見た目上は……………走っていた。

彼女に、今、自分が走っている理由に対する感情はない。

ただ、走る前に着物を着たキセルを持った女性に、

「今日のあなたは兎よ。ただただ逃げ惑いなさい」

そう言われ、ただ走っている。

あたしは今、彼女になっっているから、彼女が何も考えずに、何も思わずに走っている事をありありと感じる事が出来た。

それは、飛矢折流奥義・武心の様に強力な暗示によって目的以外何も考えず、何も思わない、それと似ていたけど……………武心と違うのは、心を無理矢理『そう』押さえ付けていないと言う事。

自然だった。

それが当たり前の様に、人なのに、人であるはずなのに、何も考えない、何も思わない。

暗示を掛けられている訳でもない。

ただ素直に……………いえ、素直と言言葉すら違うと感じさせるほど……………まるで無地の紙にスタンプを押し付けるが如く……………安易に、『そう』なっていた。

しかも、それは、

「あう！」

足をボウガンの矢で撃ち抜かれても、

「痛い！痛い！」

足を襲う激痛に襲われ、転げ回っても、

転げ回るその場所に、足を撃ち抜いたのと同じボウガンの矢が胸に刺さって動かなくなっている同年代の少女少女がいても、

「ぎやははは！ 随分生きが良いじゃねえか！ この兎わよ！」

そう言いながら近付いてくる粗暴な男の気配を感じても、

「ああ！ あああ！」

そう呻きながら這う様に逃げている時でさえ、

何も考えず、何も思っていないかった。

ぞつとした。

まるで、機械仕掛けの人形の様に、ただ、与えられた命令を忠実に実行し、再現している。

そんな恐ろしいとしか表現しようがない、彼女の行動と心情。

何なの！？ 一体！ これは何なの！？

あたしの絶叫は、声になっていない。

まるで夢の中の様に、身体が存在を感じず、ただ、意識のみが彼女になっていた。

這う彼女の背中が何かに踏まれる。

「あはは！ いいね！ その逃げっぷり、そそるね！ そそるね

！」

そう言いながら、彼女を踏み付けている男は、彼女の肩に何かを当てる。

「もつと！ もつと無様に！ 逃げてくれよ！ なああ！」

乾いた破裂音。

それと共に起きる肩の激痛。

撃たれた！

銃で撃たれた！

あまりの事にあたしが軽い混乱に襲われているのに、その痛みを伝える身体を持ち主の心は……………何もなかった。

何で！？ どうして！？ こんな！ こんな！

肩を撃たれた事で、痛がる様に暴れ回る彼女だけど、その心に変化はない。

そんな上辺だけの变化でも、撃った人間にはそれで十分だったのか、気付いていないのか、更に銃を撃つ。

何度も、何度も、何度も、弾切れになっても、弾倉を変え、何度も、何度も、何度も、

彼女の心に変化はなくても、彼女自身になっているあたしの心は悲鳴を上げる。

止めて！

撃たないで！

これ以上！

あたしに！

こんな物を見せないで！！！！

気が付くと、森林公園に、自分の身体に意識が戻っていた。

心が激しく拒絶する事で、さっきも戻って来られたけど……

周りを見回すと、さきほどと変わらず高原坂や分裂体達はその動きを止めている。

見させられているビジョンが高神麗華と言う人物の物であるのは、状況から考えてまず間違いないと思う。

だから、分裂体達が動きを止めているのはある程度納得出来るけど……高原坂はなんで動かないのだろうか？

その疑問に高原坂を見ると……高原坂は笑っていた。

意識を明らかにあのビジョンに囚われていると言うのに、笑っていた。

……つくづく変態みたいね……

高神麗華とは違う意味でぞっとしたあたしに、再び強烈なビジョンが襲った。

第一章『渴欲の武霊使い』 21

????

勿体ない美女は、キスされた頬を何とも言えない表情で押さえつつ、ポケットから木片を取り出した。

それは古い弓の一部で、それを握ると共に彼女は半眼になり、何故か小さな寝息を立て始める。

その彼女の隣に春子は移動し、彼女の前に黒い弓を差し出す。すると、彼女は自然な動きで黒い弓を持ち、弦を引く。

赤井 美羽

縄で縛り付けられ、天井から吊るし上げられる麗華。

その麗華に笑いながら鞭を振るう年配の女性に、それを懇願する。

????

「ナビゲートをお願い」

春子の声に、全体的にほわほわしているぬぼ〜とした感じの美女が勿体ない美女の隣に立ち、その間にゴスロリの格好をした中学生が入り、勿体ない美女の身体に手を触れながらほわほわ美女を見る。

「はじめま〜すう」

ほわほわ美女は、そう言うと、正面にある分裂体の柱を更にぼお〜となって見る。

同時に、ゴスロリ中学生の瞳に淡い光が宿り、眉を顰めさせた。

飛矢折 巴

赤ん坊の姿をした大男をまるで母親の様にあやす麗華。

体格差から、大男が駄々を捏ねる度に、骨にひびが入りそうなほど叩かれる。

???

「二人とも辛いだろうけど頑張って」

春子の応援に二人が応える余裕がないのか、無反応。

その変わりなのか、勿体ない美女が黒い弓を小刻みに動かし、不意にその動きを止めた。

赤井 美羽

バツティングの的にされ、硬式ボールを身体に何度も受け続けながら、笑う麗華。

???

弓の標準が定まるとほぼ同時に、

「時を止めて！」

ゴスロリ中学生が叫ぶと、春子の後ろ、屋根の頭に立っていたおどどした感じのツインテール小学生は、おどどを止め、目を大きく見開く。

飛矢折 巴

布製の拘束具を身体中に装着させられ、身動き出来なくされた上に、僅かに露出している部分に蠟を垂らされ、激しく抵抗する振りをする麗華。

???

瞬間、ツインテール小学生の視界に入る全ての動きが止まる。

まるで本当に時が止まったかのように、建物や、木々や、水の動きがある物全てが止まった。

赤井美羽 & 飛矢折巴

麗華が、麗華が、現れる全ての客の要望に応える。

延々と答え続け……不意に、目の前に着物を着てキセルを吸う女

性が、麗華の母親らしき人物が現れる。

「まだそこは未調教で使いもんになんないって言ったんだけどねえ」

ため息一つ吐き、

「……全く、未調教だからいいんだと抜かしやがる。このあたいの作品の何が不満なのか分からないが……まあ、いいさ。それなりの金は頂いたからね……」

キセルを吸い、煙を吐き、暫く考えた後、歪んだ笑みを麗華に向ける。

「ああ、そうか、そう言う需要もあるのなら……ふふ、全く、こんなものに何の価値があるんだか」

そう言つて麗華の下半身のある部分を触り、眉を顰める。

「……やっぱり未調教は駄目だね……」

ため息を吐いて麗華の部屋から出て行つた。

その代わりの様に、醜い、醜い、男性が部屋に入ってきて――

????

赤い粘液の中に浮かぶ麗華。

その近くには、夜衣斗も漂つており、その様子を美春は僅かに見える刃の乱舞の隙間から確認する。

麗華の武霊から大量に分裂体が出た瞬間、美春は全身の毛を刃と化し、まるでミキサーの様に刃を乱舞させて迫りくる分裂体全てを霧散させた。

おかげで分裂体に取り込まれる事はなかったが、背中にいた夜衣斗は背を占領されていた分、毛を刃に出来なかった事もあり、分裂体に飲み込まれてしまった。

そして、気付いたら周囲の分裂体は溶け、粘液と化しており、それが意味するのは、

（麗華の武霊に夜衣斗君が取り込まれた……夜衣斗君の話が本当だとすると……夜衣斗君の服と武霊が奪われる！？）

昨日と今日、三回見ただけではあるが、夜衣斗の武霊・オウキは非常に強力で汎用性が高い。

それが麗華の分裂体の中に加わる事がどれだけの脅威か。ぞつとした美春は、赤い粘液の外の様子も気になる事も重なって、夜衣斗を早急に助けようと動こうとした。

だが、美羽や巴のみならず、現在星波町にいるほぼ全ての人間が見ている同じビジョンに襲われ、身動きが取れなくなる。

もっとも、美春はその強靱な精神力で、ビジョンに襲われる度に自力で現実世界に戻ってきている為、全く動けないわけではなかったが……

（何なの！？ この最悪な……彼女の過去？）

途切れ途切れではあるが、見せられるビジョンが麗華の過去である事に美羽や巴と同様に気付いた美春は、思わず赤い粘液の中に浮かぶ麗華を見た。そして気付いた。

麗華にある変化が起きている事を。

（何！？ あれ……）

それは普通の人間にはあるはずのない角。

角らしきものは額・後頭部・側頭部・肘・膝など至る所から生え始め……美春は、それがまるでアンテナの様に見えなくもなく、自身を襲うビジョンがそこから発せられている様な気がした。

（これも武霊？）

そう思いはしたが、麗華から感じる何とも言えない警戒心と恐怖心が、それを即座に否定させた。

だが、否定はしても何であるか分からない事には変わりなく、

（……とにかく今は夜衣斗君を何とかしないと）

そう思った瞬間、時が止まった。

武霊も含め、美春ですら例外なく止まっていたが、唯一例外だったのが、『麗華』と『夜衣斗』だった。

気持ち悪い。

気持ち悪い！

気持ち悪い！！

ただただ気持ち悪い！

丁寧に丁寧に麗華の手を、

足を、

腹を、

谷間を、

喉を、

顎を、

頬を、

耳を、

髪を、

瞼を、

瞳を、

舐め回す！

そんな事をされていると言つに、何の命令も与えられていない麗華は、ただ立っていた。

その反応は初めてだったのか、常連客である醜い男は一瞬戸惑いながらも、

「そ、そこにね、寝ろ」

麗華はその要求に応え、そこに用意されたベッドに横になる。

まさか！？

や！

やだ！

こんなのって！

こんなのって！！

麗華に覆い被さった常連客は、下卑た笑みを浮かべ、下半身を見る。

「えへへ。そうでしたそうでした」

そんな事を言いながら、ベッドに備え付けられていた箆笥からボトルを取り出し、麗華の下半身に中身をかけた。

????

「『魔人化』を確認！ 魔人化を確認！」

不意に春子達の周りを飛んでいたカラスがそう報告する。

報告を聞いた春子は、目を瞑り、一回深呼吸をして、覚悟の光を宿した目を開ける。

「かしこみ、かしこみ、申し上げる」

黒い弓を持つ片手を離し、ゆっくり、

「我が身に宿りし『黒き大樹』よ」

ゆっくり、まるで矢を持って引く様に、ゆっくり後ろに手を引く。
「その身削りて矢となり」

すると、手を放した黒き弓の部分とその手から、メキメキと音を立てて、まるで黒き弓から生える様に矢が現れ始める。

「うつしよを砕かんとす」

矢が完成するに従って、春子の額に大粒の汗が現れ始める。

「外敵を招かんが穴を」

不意に春子の手に、頬に、まるで植物の根の様に黒い線が現れる。
「砕き返さん」

まるで何かに抵抗する様に現れた黒い線は、比喻ではなく黒い植物の根だった。

それが春子の皮膚を突き破り、枝となり、黒い葉を生やす。

体中から無数に、しかも同時に黒い枝が生えた事により、一瞬、春子の身体がぐらついた。

赤井美羽&飛矢折巴

「じゅ、準備完了」

そう笑って、常連客はズボンを……嫌だ！
嫌だ！

嫌だ！！

何で！

何で！？

抵抗しないの！？

何で！？

こんな！

こんな！！

いくら叫んでも、これが麗華の過去なら、これは……止められない。

ゆっくり覆い被さる常連客。

気持ち悪い！

嫌だ！

気持ち悪い！

止めて！

お願い！

誰か！

誰か！！

誰か！！！！

こんなの見たくない！

したくない！

止めて！

止めて！！

誰か止めてええええええ！

届かないと分かっている絶叫をした。

その瞬間！

？？？

「だああああ！ 負けるかったの！」

気合いの声を上げ何とか立て直した春子は、盛大な苦笑を浮かべ、
「まったく、うちの姉様と姪っ子様はなんでこんなのをポンポン

使えるかな！ 全然安定出来ないじゃない！」

愚痴っぽい事を大きな声でいい、

「力となれ！」

腕を引き切り、一本の黒い矢をその手から完成させ、後は放つだけの状態になった。

赤井美羽 & 飛矢折巴

「ふざけんなあああああああああ！」

誰かの絶叫と一緒に、ビジョンが砕け、一気に現実に戻った。

赤井 美羽

え！ …… え？ …… あれ？ …… え？ …… 今の… 夜衣斗さん？

飛矢折 巴

何！？ 何が起こったの！？ …… 急に現実に… しかも… 今の… 黒樹君？

？？？

「待った！」

カラスの急な制止の声に、春子は弦に矢を合わせる動作を止め、眉を顰める。

「……何か変化があったの？」

そう問いながら春子も制止の理由は分かっていた。

周囲の子供達も、戸惑ったような表情を見せて顔を見合わせている。

絶え間なく町全体に送られていた高神麗華のビジョンの気配が唐突に無くなったからだ。

「『武霊使い達』が強制精神感応から解放されているわ」

カラスの言葉に、春子は上空を見上げる。

確かにカラスの言う様に、先程まで動きを止めていた空を飛ぶ武霊が動き出している様だった。

「まだ誰も気づいていないようだけど、『凍眼』を使うのを止めた方が良いわ」

「そう……ね」

春子の同意の言葉に、ツインテール小学生は目を閉じた。

それと同時に、止まっていた全てが動きだし、余程疲弊したのか、即座にその場にへたり込み、荒い息を吐くツインテール小学生。

「ご苦労様」

そう言いながら、春子の目は分裂体の柱へと向けられていて、

「……魔人化は？」

春子の問いに、カラスは口籠る。

その様子に、春子は力ないため息を吐く。

「何が起こったか分からないけど……結局私が死ぬ事は変わらないわけね」

そう言いながら、未だ手から生えている矢を、弦を引く勿体ない美女の手の前に持っていき、

「いつでもいいわよ」

そう言って微笑んだ。

あまりにも痛ましい春子の姿に周りの子供達は辛そうな顔になるが、止めようとする者はいなかった。

魔人化と呼ばれる現象が完了してしまった時、『どんな事』が起きるか分かっているからだ。

そして、その『想定される最悪の事態』は唐突に起きた。

第一章『渴欲の武霊使い』 22

黒樹 夜衣斗

溢れ出した分裂体達に飲まれた俺は、気が付いたら真っ白な空間にいた。

何もない。

見渡す限り、下も、上も、横も、前も、後ろも、何もない空間。

……何もない空間に普通の人間が長時間いると発狂するとかって話を聞いた事があるような……

などと思った時、

「夜衣斗」

不意に俺の横にサヤが現れ、

「ここは高神麗華と名乗っていた少女の心の中よ。彼女の武霊に取り込まれたことによつて、ここにきてしまったみたい」

そんな事を言った。

と言う事は、オウキが奪われる？ ……と言うか……心の中！？

いや、ちよつと待って！？ 普通、心の中ってこんなに何もないものなのか！？

俺の問いにサヤが首を横に振る。

「普通は自分を構成しているあらゆる思い出が溢れているはずよ、はずよ？」

苦笑するサヤは、

「だって、夜衣斗の心の中以外人聞きだもの」

？ ……俺以外に憑いた事が無いって事か？

「そ、夜衣斗が初めて♪」

……言い方違くないか？ と言うか誰に聞いたんだ？

「それは……」

サヤが何かを言い掛けた時、何もない空間に変化が起きた。

下の方から、人形の様な物がぼこぼこ現れ、上がってきて……

何故か俺の周りで止まる。

「夜衣斗に反応した？」

そう呟くサヤに少し意識を取られた為、足元から上がってきた人形に俺は気付かなかった。

「夜衣斗！ それに触れちゃダメ！」

いち早く気付いたサヤのその言葉に、反射的にサヤの視線の先を見る動作を取ってしまい、人形が手に纏わりつくのを止める事が出来なかった。

人形が俺の手に触れ、纏わりついた瞬間、

食器として扱われる幼少時代の高神麗華と名乗っていた彼女の過去を体感した。

あまりの現実感に、今の俺は現実の身体ではないと分かっているが、フォークを突き刺された目の確認をする。

当然無事だが……ぞつとして、自分の手に纏わりついている料理を身に纏った人形と、周りの人形を見回した。

あの一瞬で、俺は理解してしまった。

この周りに浮かび、今なお下から上がってくる人形は、高神麗華を名乗っていた彼女の過去一シーンであり……あの環境下と周りに浮かぶ人形一つ一つの『異様な格好』からして……彼女がロクな人生を、『人として扱われていなかった人生』を歩んでいた事を――

「夜衣斗！ 大丈夫！？」

サヤの声に、俺は反応出来ないほど………怒りに震えていた。

俺に自身の過去を体感させた人形は、小さな声で、多分、サヤには聞こえない、触れている俺にしか聞こえない声で、

「私は食器、食器、食器、食器、食器になる事を欲している」

そうずっと言っているのが聞こえたからだ。

『欲している』だって！？

「違うだろ！」

思わず否定の言葉を俺は口にし、サヤを驚かせる。

自分の顔の近くまで食器人形を持っていき、

「違うだろ！ そんなのが！ 君が『本当に』欲している事じゃないだろ！」

心の底から湧き出した言葉を叫んでしまう。

それが何の意味がない事だと分かっているも！

俺の叫びに反応する様に、周囲に浮いていた人形達が一斉に俺に殺到する。

「夜衣斗！」

サヤが俺を庇う様に動くが、人形達はサヤを避け、俺に取り付く。取り付かれた瞬間！

兎の様に狩られる！

吊るされる！

母親の代わりにされる！？

的にされる！

拘束される！

花瓶の代わりにされる！？

椅子にされる！？

キャンパスにされる！？

全ての他人からの欲を、まるで自らの欲の様に受け入れる過去の

彼女。

その様子は渴ききつた砂に水を垂らした様に……そこに一切の抵抗もない。

しかも、残虐の記憶以外に僅かに見える生活の様子は……何もなかった。

無機質な部屋に、最低限生きられる程度しかない家具。

そこに誰かが訪れるのは、彼女に客が訪れた時。

食事の時ですら、機械仕掛けの壁から食事が出てくるのみで、一切の触れ合いはない。

それが、物覚えが付いた時からずっと続き……彼女は欲していた。『それ』が何なのか分からないまま、欲して、欲して、欲して、それが何なのかを欲する為に、自分に向けられる欲を欲してしまっただ。

……そう、俺には見えた、

彼女に何かを教える存在は誰もいなかった。

彼女の母親らしき人物は所々に現れるが、彼女が彼女に教える事は一切なく、彼女が唯一する事は客の欲を彼女に『ダイレクトに伝える』事。

それは一種のテレパシーの様な物なのか、彼女の母親らしき人物が、彼女に命令すると共に、彼女の中に客の欲する欲が流れ込んできた。

それが彼女の母親の能力なのか、彼女が何もないが故に欲し続けてきた故に生じた能力なのか、そう言う架空の知識はあっても、現実の知識はない俺には判断が付かない。

だが、何も教えられていないが故に、彼女がその流れ込む欲を自分が欲しているものだ勘違いしたのは分かった。

勘違いであるが故に、その欲に、その行動に、心が宿る事はない。所詮、他人の欲。

心の奥底から、本能から彼女が『真に欲している何か』ではない。だから……何も感じない！

一切の知識、基底となるべき経験を与えられていないから、どんな事をしても！

どんな事をされても！

心が動かない！

嫌がる事も！

悲しむ事も！

怒る事も！

絶望する事さえ！

彼女は知らない！

彼女は何もない……まるで、中身が空洞の、本物の人形の様に、

彼女は人形だった。

そんな彼女に、僅かな、僅かな変化が起きたシーンがあった。

それは、彼女が置かれている環境からしたら、必ず起きていたであろうと思っていた……人と言う生物の基礎と呼べる単純な欲。

その欲求に晒される時……男が彼女に覆い被さった時……本

当に、本当に僅かに……『喜んだ』……気がした。

その瞬間、俺は、

そんな最低な事に！

喜んだ気がした……！？

個人として、初めて触れ合って貰えた事だからか！？

何だそりゃ！

何だそりゃ！？

怒りが、これが既に起こってしまっている出来事である事は分かっている！

怒りが爆発するのを俺は止められず、

「ふざけんなああああああああ！」

叫んでいた！

心の底から！

感情が、理性が、自分の全てが、彼女が体験した出来事を、彼女が、今の彼女が存在したらしめている全てを否定した。

その瞬間、世界が崩れた！？

まるで俺の叫びによって周りの光景が壊れた様にひび割れ、ぼろぼろと崩れ出す。

急速に崩れた光景の先には……………見渡す限りの人形の大地。

いつの間にか足元も人形になっており……………その全てが、彼女が体験してきたさつき見た過去の続きだと……………俺に否応なしに理解させた。

何故なら、足元に敷き詰められている人形は、俺に纏わりついてきた人形より大きく、先を見れば見るほど、現在の彼女に対比して近付いている様で……………そのどれもが、過去に見た事がある……………成人指定の作品群の様な……………そんな格好をされていた。しかも、先へ行けば行くほど……………何であるか理解するのを拒否したくなる様な……………『現実では在ってはならない過去』が混ざっていた。

くそ！　こんなの！　あんなの！　フィクションの世界の中だけでの話だろ！　フィクションの！　フィクションの中だけでなくちやいけない話だろが！

なのに！　なのに！

「何で彼女がこんな目に遭ってるんだ！」

再びの俺の叫びに、今度は目の前の人形の一つが立った。

立つと同時に、その人形は俺と同じ大きさになり、俺に笑い掛ける。

その姿は、過去のビジョンに幾度となく登場してきた彼女の母親らしき人物と同じ格好をした彼女。

「何でって、私が欲しかったからに決まってるでしょ？」

「違う！」

俺の否定の叫びに、別の場所から人形が立ち、大きくなる。

絵に描いた娼婦の様な格好をした彼女。

「どうして違うの？　私が欲しかったからよ？」

「それも違う！」

更に別の場所から人形が立ち、大きくなる。
幼稚園児の格好をした彼女。

「なにがちがうのお〜？」

「何で分からない！」

更に別の場所から人形が立ち、大きくなる。

今度は男の格好をした彼女。

「あ？ 何が分からないって言うんだ！」

「君が本当に望んでいる事だ！」

更に別の場所から人形が立ち、大きくなる。

今度は……………高神麗華が作中でよく着ていた赤いドレスを着た彼女。

「私が本当に望んでいる事？」

不意に、周囲の光景が再び変化した。

今とほとんど変わらないぐらいに成長した彼女。

その彼女がいるのは、幼少期から彼女が仕事以外の時にいる無機質な部屋

最低限生きられる程度しかない家具が無いのはほとんど変わらないが、一つだけ増えている物があった。

それはテレビ。

流れているのは、高神麗華は嗤うを始めとするアニメや特撮……………彼女が奪った武霊の元ネタだった。

目の前の光景と他に、断片的な光景が見える。

断片的に見えた光景を纏めると、偶々アニメのコスプレプレイを要求した客が、彼女にアニメなどを見せ真似させた所、彼女が完璧にコスプレのキャラクターになった為、それを面白がった客達が、テレビを彼女の部屋に用意させた様だった。

その特に法則性が無く流されるアニメなどの中で、客達が特に面白がったのが、高神麗華は嗤うだった。

何をどう面白がったのかは分からないが…………面白がった客はアニメ

メの設定通りの物を彼女に与え始める。

服、食事、家具……そして、

無機質な部屋に初めて母親らしき人物以外が現れる。

線が細いが健康的な肌の色をした美少年。

とても彼女に似ても似つかないが、

「あなたであゝれ？」

彼女の問いに、

「初めまして……お姉ちゃん」

そう答えた。

まるでアニメの一シーンを再現したかのような答えに、

「ああ、あなたが礼治？ うふふ。礼治」

……高神麗華の弟も、アニメの途中から登場し、それまで互いに会った事が無かったと言う設定だった。

その設定通りに用意された弟。

それによつて常に高神麗華になった彼女は、高神麗華の思考で行動し出す。

自由奔放に、傍若無人に、それでいて弟思いに、弟の願いも応えた。

弟が彼女を求める様に客に命令されれば、それに応え、弟が嗜虐の対象にされれば、庇う。

それらの行動を日々彼女が続ける内に、彼女の中に高神麗華が定着する。

そして、高神麗華は思う。

何故ここにいるのだろうか？

高神麗華は、こんな所にいる生き物じゃない。

アニメにもあつた何者かに捕まり、脱出するシーンの通り行動しようとした。

敵の女性士官……女性客を籠絡し、彼女の手引きで脱出しようとする。

当然、彼女のその行動は予測されており、女性客もそう言うプレ

イを楽しんでいたに過ぎない。

彼女はあっさり捕まり、それで彼女の高神麗華は終わるはずだった。

だが……………？

不意に光景が飛ぶ。

どこかのビルの入り口らしき場所で、彼女は目を覚まし、目の前には、高神礼治にさせられている少年。

その少年の手には拳銃が握られており、彼女の母親らしき女性に銃口を向けていた。

彼女から僅かに見える少年の口元は、それまで彼女に向けてきた純朴無垢な微笑みとは違う、残忍の笑みを浮かべ、命乞いをする女性に向けて、躊躇なく撃った！？

倒れ、血を流す女性に見向きもせず、彼女に近付き、返り血を少し浴びた顔を、いつも彼女に向ける弟としての純朴無垢な微笑みにし、

「さあ、行こうよお姉ちゃん」

そう言つて、彼女を再び高神麗華にした！？ ……………… ちよつと

待て！ じゃあ、今も彼女が高神麗華として行動しているのは……

『あの少年の欲』なのか！？

第一章『渴欲の武霊使い』 23

???

「ツチ！ 良い所だったって言うのに何邪魔してやがるだあのエサは！」

高神麗華を自称する少女から発せられていた彼女の過去のビジョン。

それが途切れると同時に、荒々しく悪態を吐いたのは、高神礼治を自称する少年だった。

場所は分裂体の雲の上。

自身の武霊BBドラゴンの背に乗って、直前まで下の混乱を楽しんでいた。

だが、今は不機嫌そうに、姉と呼んでいる少女の前では見せた事が無い粗暴な態度で、イラつきをBBドラゴンの背中を蹴る事で晴らす。

背中を蹴られたBBドラゴンは、慣れているのか特に不満らしい様子を見せないが、不満の代わりに自身の視界を見せる。

BBドラゴンの片目には、己の血が付き、塞いでいた。

BBドラゴンの血の転送能力を使って、事前に町中に撒いていた血から町の様子を見ていたのだが、その一つが分裂体達の柱へと向かうコウリユウを捉える。

「っは！ いいね！ どうせあの女は直に『あの連中に殺されんだ』！ ここで『代わり』の『もう一つスピア』を作っておくのも悪かねえや！」

そう言っって残忍な笑みを浮かべた高神礼治を自称する少年は、BBドラゴンに命令を出し、応えたBBドラゴンは全身から血を吹き出した。

……えつと……夜衣斗さんが助けてくれたんだよね……

美羽は戸惑いながら周りを見回す。

周りには美羽と同じ飛行系の武霊に乗った武霊使いの人達がいて、気持ち悪そうにしている人や、困惑している人などがいたけど……さつきまで見ていた高神麗華の断片的な過去に、美羽も気持ち悪くなった。

だけど！今は気持ち悪がってる場合じゃない！

そう気合いを入れて、美羽は上を見た。

さつきのビジョンの影響も分裂体も受けているのか、未だに分裂体達は動きを止めている。

今の内なら夜衣斗さんを助けられるんじゃない？

美羽はそう思ってコウリユウを分裂体達の柱へと飛ばさせた。

どうしてあんな事があつて、それをどうやって夜衣斗さんが止めてくれたのかは分からないけど……少なくとも夜衣斗さんは高神麗華のもっとも近い場所に……多分だけど、麗華の武霊に取り込まれている。

それできつと夜衣斗さんが美羽達を助ける事が出来たのかな？

よく分からない。

でも！

助けられたのなら！今度は美羽が助ける番！

美羽がそう自分に言い聞かせて、分裂体達の柱突っ込もうとした時、いきなりコウリユウが急旋回した。

理由を美羽が問うより早く、上から赤黒い針が降ってきて、あのまま柱に突っ込んでいたら美羽達は串刺しになっていた。

ありがとうコウリユウ。でも！

針が降ってきた上空を見ると、赤黒い血の円が分裂達の下に出来ていて、そこからＢＢドラゴンが飛び出してきた。

「また邪魔をする！いい加減しつこい！」

その背中に礼治を見付け、思わず美羽がそう絶叫すると、

「っは！いいね！その感情を直ぐに表す未完成具合！はっ

は！ そそる！」

え？ ……何？ あれ？ ……こいつ高神礼治……だよね？

美羽は攻撃されたと言うのに、思わず硬直した。

だって、さつき相手した時は、純朴無垢な素直に姉の麗華に従う、まさに弟って感じだったのに……今、目の前にいるのは、その容姿とは全然似合わない、粗暴な男って感じになって……

「あ？ 何だ？ お前もあの性格の方が好みなのか？」

好みって……

「残念だったな。あれはあの女用で、もうやる気はねえのさ。どうせ直ぐに殺されっからな」

こ！ 殺される！？

「誰に！」

「あ？ そんなの後で教えてやんよ」

「後で？」

「飛矢折巴と一緒に俺のペットになった時にな！」

飛矢折先輩と一緒にペット！？ 美羽を！？ な、何言ってるのこいつ！？

「はっは！ 今頃、良い壊れ具合だろうよ！」

壊れ具合ってあの強い人が、壊れるなんて……

あまりの訳が分からなさに、美羽がぼーんとしていると、

「待ってな！ 今！ お前も良い具合に壊してやんからよ！」

そう言っつて、高神礼治？ は、レベル3になった！？

飛矢折 巴

「んゝつまらないですねえゝ」

そう言いながら、動かなくなった分裂達に腰を打ち付けて霧散させる高原坂。

あたしが高神麗華のビジョンから解放されて直ぐに、高原坂の意識もこちらに戻ってきた。

高原坂の興味は、既にあたしから分裂体達へと向けられていたか

ら、逃げる機会を逸していたあたしは助かったけど……

この場にいる全ての分裂体を倒した高原坂は、分裂体達の柱の方を見る。

「あそこから今のは来たんですよねえ」

そんな事を言いながら少し考える仕草をして、

「と言う事は、あそこにはもつと突き刺し甲斐があるのがいると言う事ですね！？ 素晴らしいiiiiiiiiふおおおおお
おお！」

叫びながら崖から飛び降りた！？

不味い！ 今、黒樹君は…… と言う事になっているか分からないけど…… 高神麗華の内で戦っている。

そんな状態の所にあんな男が乱入したら…… 黒樹君が危ない！

あたしは悲鳴を上げる全身を無理矢理動かし、高原坂を追って崖から飛び降りる。

矢乗りと矢不通しを使ってかなりの高さから強引に着地し、同時に別の気操術を使う。

その瞬間、強烈な加速感と共に、僅かに背が見えるほど離れた高原坂を追い越した。

これは『矢先』と名付けられた飛矢折流縮地で、気操術により瞬間的に瞬発力を高めると共に、接している地面との反発力を増加させ、普通の人間には視認出来ないほどの速度で移動する技。

勿論、ただ追い越すだけではなく、追い越すと同時に、背中と肩に対して掌底を打ち込み、その時生じた衝撃を利用して身体を回転させ、高原坂の前に塞がった。

「ふうふうふう。今のあなたには興味ないんですけどねえ」
そう言って立ち塞がったあたしをつまらなそうに見た高原坂だけど、

「第一、今の奇襲すら僕には効か！？」

突然高原坂の肩と背にひびが入り、驚愕に目を見開く。

「飛矢折流浸透剉『鏝砕き』」

あたしが技名を口にすると、高原坂は嬉しそうにひび割れた肩を触る。

すると、ひび割れた肩と背中の中のひびが瞬時に治ってしまう。

……やっぱりこの程度じゃ駄目なのね……

「一体どうしたんですか？ 先程までの気の乱れが嘘の様ですよ？」

高原坂の不思議そうな問いに、あたしも不思議だった。

そして、ふと思い出した。

曾お爺ちゃんは言っていた飛矢折流の起源の事を。

飛矢折流は、『飛んでくる矢から大切な人を守る為に作り出された物であり、飛矢折流の真価は誰かを守る時に最大限発揮される』。

……確かに、黒樹君を守ろうと思ってから、不思議と気操術が安定している……まだ自分の武術に対する不安感を拭い切れていないって言うのに……でも、これなら――

既に住宅街に入っているけど、元々空き家だったのか、それとも避難したのか周囲に人の気配はない。

気操術が安定したと言っても、既に身体は限界に近い上に、相手は明らかに格上。

なら、あたしに残された選択は………自分の命を掛ける事！

「武心が見たいって言っていたよね」

あたしの覚悟の言葉に、高原坂は明るい顔になる。

「ええ！ ぜひ！」

「なら見せてあげるわ！」

自分の気を最大限までに高めると共に、あたしは強く強くイメージした。

目の前にいる高原坂を戦闘不能にする。

ただその一点だけで心を塗り潰し、一気に気を脳に集中させ、

「心、武と、なれ」

発動言語を口にした。

黒樹 夜衣斗

高神礼治を演じている少年に連れられ、彼女は逃げ続けた。

追手は、彼女達がいた地下売春組織なのか、それとも警察なのか、そのどちらとも取れたが……とにかく逃げ続け、逃げた先で犯罪行為を繰り返す。

あるいは窃盗。

あるいは売春。

あるいは詐欺。

あるいは――

……よくもこれだけの犯罪行為をしたと思わせる事を彼女はしていた。

彼女はそれを自分の欲だと思っていた様だが……いや、思う事すら、少年の欲だったのだろう。

彼女は少年が望む通りに、犯罪行為を繰り返し、逃亡し続けた。

途中、何度か捕まりそうになる度に、弟を演じている少年がその本性を現し、捕縛者を殺していた様だが……彼女はその意味を理解している様ではなかった。

そもそも、彼女の人格は上辺だけ、しかも、誰かの欲を自分の欲だと勘違いして再現される作られた人格。

だから、表面上は人として行動していても、それはあくまで上辺だけであり、そこに彼女自身の根柢はない。

つまり、常識がない。

だからこそ、高神麗華と言うキャラクターになる以外の事は理解出来ない。

……あの作品は、中身は滅茶苦茶だが、殺人の描写が一切なかったらしいし……

そもそもそれに対する知識が無いのだからしょうがないが………何なのだろうか？ この少年は……便宜上少年と言っているが、明らかに俺と大して変わらない年齢なのに……手慣れた手付きで完璧に人を殺す。

あまりにあっさり人を殺すので、正直現実感が湧かない。

ただ、この少年は人間だった。

彼女の様に何も知らず分からずただ周囲の欲に反応して動く人形の様な人間ではなく、知識もあり常識もあり人として完璧に行動している。

買い物をする時も、無関係な人間に接する時も、そのどれをとつても人間だと思わせた。

なのに、あっさり人を殺す。

まるで『人と人外の境がない』様に見えた。

それが彼女と同じ様に創られた物なのかは分からないが……少なくとも、彼女が連続武霊使い殺人犯に仕立て上げられている原因の一つは、間違いなくこの少年だと確信出来た……が、同時に、彼が存在のおかげで、本当に、本当に僅かだが、彼女の本当の欲が現れ始め、人形の殻の中で人が育って行っている様に感じられ……何とも言えない気分になる。

明らかに彼を彼女の傍に置くべきでない。

だが、彼女が彼に人形としてではなく、人として執着し始めているのなら……

今は必要ない逡巡を俺がした時、彼と彼女は星波町に辿り着いた。そして、星波町で彼女は出会ってしまった。

武装守護霊に――

第一章『渴欲の武霊使い』 24

???

大量の買い物袋を持った高木弥恵は、誰もいない歩道で眉を顰めていた。

今は止まっているが、先程まで町中の『力ある者が強制的に見せられるビジョン』と、『高神麗華の近くに居る者達が未だに見続けているビジョン』を、『外』から強引に見ていた弥恵は、『ある事に気付き、

「……まさか……あの子は……」

思わずそう呟くと、大きく困惑した。

そして、しばらく考えて後、ある種の覚悟を決めた弥恵は、事の成り行きを見守る為、再び強引にビジョンを見出した。

黒樹 夜衣斗

そこには、彼女が見させられ続けてきたアニメや特撮のヒーロー達が現実具現化している姿が在った。

それが彼女に『被せられている』高神麗華と言う存在をより定着化させ、ついには高神麗華のペットスライムを自身の武霊として具現化出来る様にまでなってしまう。

……推察にしか過ぎないが、彼女がアニメや特撮のヒーロー達を基にした武霊達に奪う事に執着しているのは、守りたい者がいたからではないのだろうか？

もちろん、そこには高神麗華としての設定もあるだろうが……その設定によって僅かに出来た人間としての部分が、弟を守りたいと思……彼女の過去も高神礼治が出来てからは、ヒーローが登場するアニメや特撮に注視していた様にも見えなくもない。

武霊を発現させた彼女は、高神麗華としての設定通り、武霊を奪い続ける。

もつとも、最初は弟を自称する少年の手引きで、奇襲する様に武霊使いから武霊を奪っており……その際に、俺が予想した通り、武霊使いは服しか溶かされず、彼女が殺している様子は一切ない。

だが、彼女の存在が町にバレ、堂々と武霊を奪う様になってから、武霊を奪い切ると同時にスライム状の武霊が爆発する様になった。

これによって飛び散った武霊の破片から、分裂体が発生し、彼女が逃げる切っ掛けを作っている様にも見える。

……自称弟の行動といい、武霊を奪われた武霊使いを攫っている謎の武霊使いといい……何だか、まるで彼女に『こういう武霊が具現化するのを知っていた』かの様な動きをしているな……

更に言えば、バレて直ぐに武霊使いを奪う動きをしたという事は、自称弟と謎の武霊使いは繋がっていると考えるのが自然……だよな……自称弟の武霊はＢＢドラゴンと言う血を操るドラゴンみたいだし、同一人物と言う線は低い……だとすると、地下売春組織を脱出した時点で既にその謎の武霊使いと自称弟は繋がっていたのではないだろうか？

地下売春組織を脱出してから、自称弟と彼女は常に一緒にいた。

星波町に来てからも、僅かに離れた事はあったが、その短時間では、誰か、彼女に見付からない様に何からの繋がりを持った者を作るのは難しい。

少なくとも、彼女の記憶にはそれらしき者の姿はなかった。

だとすると、そう言う関係を自称弟が作れるのは、地下売春組織時代のみと言う事になる。

……考えてみれば、途中までは彼女によって行われた脱出だが、途中からは彼女は意識を失い、気付いた時には脱出していた。

彼女の視点からでは、その地下売春組織がどれほどの規模なのかは分からないが……少なくとも、たった一人で脱出出来るほどの小規模な組織には見えない。

なんせ、建物の中に人工の森を作ったり、彼女を一切外に出すことなく育てていたのだから……だとすると、籠絡された客役の客以

外に、客の中に自称弟の協力者がいたと考えるのが自然か？ 例えは自称弟の客とか……

何であれ、自称弟と謎の武霊使いは、彼女に気付かれずに常に行動を共にし、彼女をずっと利用し続けていたのだろう。

弟は彼女そのものに執着しているようだが、謎の武霊使いの目的は何なのだろうか？

武霊を奪った武霊使いを誰にも気付かれずに攫い、それ以降、その武霊を奪われた武霊使いは目撃されていない……つまり、星波町の中でそれなりの場所を確保出来る人物？ ……武霊を奪われた武霊使い達に、男性も半分以上いた事を考えると、性的な目的ではないのか？ ……いや、そうとも言い切れないが……だったらだつたでそんな面倒な事をする必要がない……要するに、攫った元武霊使いは……少なくとも、人間として扱われていないのだろうし……それが数年続いている事を考えれば……武霊を使って攫っているのなら、忘却現象の影響で外に協力者などを作るのは難しだろうし、町の外に連れ出す事自体難しいはず。なんせ、攫った事がばつさり抜けるわけだから……それによって起きるリスクを考えると、奴がこんな手の込んだ攫い方をしないだろうし……だがそうなると、町内で五十人近く監禁し続ける場所はあるのか？ その人数を生かし続ける為には、それなりの食料や生活雑貨が必要になり……謎の武霊使いが他に仲間を持つていれば別だが……人員だつてそれなりに必要になる。そうなれば必ず何らかの疑念や痕跡が生じるだろうし、コストも馬鹿にならない……一番しつくりくるのは……謎の武霊使いは、ネク……うっ！ 流石にこの想像は気持ち悪すぎる……だが、地下売春組織でネ……を楽しんでいた客が、タダでそれを行う為に自称弟に協力し、自称弟は彼女を独占する為にその客に協力を求め、地下売春組織を脱出。その後、彼女を隠れ蓑にしながら、客はネ……を楽しみ、行き着いた星波町と言う異常を利用して、より確実に、より安定的に互いが互いの目的の為に、星波町に居ついた……そんな所だろうか？

……まあ、この考えが、情報源が人として壊れてしまっている彼女視点からしか得られない事を考えると……全て合っているかどうかは分からないが……大体合っている。

そんな気がした。

まあ……何であれ……とてつもなく……胸糞悪いな……

俺が思考している間も彼女の過去の映像は続いていた。

星波町に彼女達が居ついでから、幾度となく自警団と戦い、徐々に彼女との戦い方を研究していった自警団は、終には後一步の所まで彼女達を追い詰めるまでになる。

これに危機感を覚えた高神麗華は、アニメでも危機に陥った高神麗華がした様に、より強力なヒーローを求め……そんな所に、俺……いや、オウキが現れてしまう。

そして、力を求めた彼女は、俺から武霊を奪おうと動き出した。アニメと同じ様に弟に作戦を考えさせ、それを忠実に実行して、自警団を逆に利用して俺を閉鎖空間に閉じ込める事までは成功したが、俺が高神麗華は嗤うを知っていた事により、自称弟の作戦は瓦解。

ざまあみる！ って感じもしなくはないが……自称弟がどう思ってるかは知らないが、謎の武霊使いの行動からして……彼女は少なくとも謎の武霊使いから切り捨てられたんだろう。

彼女に何かをし……武霊を暴走させた。

何をしたのは……時を止められていた為？ ……分からなかったが、その何かによって、彼女の武霊の性質は激変し、大量に分裂体が出て……取り込んだ俺を何故か自分の心の中に引き込んだ。

いや、何故か……じゃないな……俺をここに引き込んだのは、
彼女の本当の欲によるものだ。

そう俺が思った瞬間、過去の記憶の情景から、無数の人形が広がる情景に戻り、俺の目の前には！？ ……何だ？
流石に面食らった。

何故なら、目の前にいた彼女のその恰好は俺が現実世界で見たワンプース姿だったが、その姿は激変していた。

身体の至る所に、角と言える物を生やした……鬼とも悪魔とも言えるその姿。

俺が見れた過去のどの彼女でもないその姿に、俺は強烈な悪寒と共に嫌悪感とも拒絶感とも感じられる嫌な感じを受けた。

「私の……本当の欲って？」

彼女が何も込められていない問いを俺にする。

……精神世界だから俺の考えがダイレクトに彼女に伝わっているのか？

「私は欲しい。欲しいの」

俺が彼女の問いの答えを口にする前に、彼女に更なる変化が起きた。

「欲しいの！ 欲しいの！ 欲しいの？ 欲しいの！ 欲しいの！
おおおおおおおお！」

狂った様に同じ言葉を繰り返す彼女。

それと共に、彼女の身体から生える角が伸び、彼女の後ろから風が発生する。

風が発生した事で、俺はようやく気付いた。

彼女の背後に、何か、巨大な穴が開いている事を……その巨大さで気付かなかったのか……気付けなかったのか……何であれ、その穴から、俺は彼女から感じる同種で、それでいて彼女より圧倒的に強烈な嫌な感じを受ける。

だが、嫌な感じを受けながら、そこから生じている風に吹き飛ばされそうになっていながら、俺は何故かその穴に吸い込まれる様な感覚に陥った。

「夜衣斗！」

不意にサヤが俺の背後に現れ、俺の目をその手で塞いだ。

それによって吸い込まれる感覚はなくなったが……不意に気付く。彼女の後ろにある大穴は、俺は自分の心の中で見た円状に集まっ

第一章『渴欲の武霊使い』 25

???

美春は戸惑っていた。

夜衣斗を助けようと動こうとした次の瞬間、美春はそれまでいた分裂体の中ではなく、見渡す限り人形で埋め尽くされた空間にいた。あまりにも唐突な事と、周囲の環境の不気味さに、一瞬恐慌仕掛けたが、その直前にコロ丸からの思念を感じ、冷静さを取り戻す。とりあえず何が起きたか現状を把握する為に、コロ丸の視点を見ると、コロ丸の具現体は分裂達の中にいた。

しかも、レベル3状態を維持している為、美春の身体もそこにあると言う事。

(……つまり、あのビジョンの続き?)

そう思った美春だが、今の美春は高神麗華になっているわけでもなく、自分の身体で自由に動く事が出来た。

(何のかしら? コロ丸の具現化が解けてないから、『起きている』のは間違いないみたいだけど……)

首を傾げながら、なんとなしに足元の人形に注視した。

そして、ぞつとする。

何故なら、足元の人形はそれぞれ違った形で『人間が最低とされる行為』、あるいは『人間として扱ってすらない行為』に晒された姿をしていたからだ。

同じ光景を見た夜衣斗は、情報媒体や空想などによりある程度これらに耐性が付いていた為、これによって取り乱す事はなかった。

だが、美春は星波町で様々な活躍をしている人物であるとは言え、活躍のジャンルが違い過ぎる、目の前の渴欲と狂気の産物には耐性はない。

要するに、ただの女の子の反応の様に、

「きゃあ」

絶叫仕掛けた時、不意に背後から口をふさがれた。

あまりのタイミンクに、取り乱した美春は身に付けている護身術を忘れ、ただ暴れるが、

「落ち着いて、ここの主を刺激する様な事はしないで、お願い」
そう口を塞いだ人物に言われ、ぐっと自分を抑え込む。

何とか自分を取り戻した美春は、口を塞いでいる腕を軽く叩き、
落ち着きを取り戻した事を伝える。

それに応えた背後の人物は、美春から手を放し、美春の前に移動した。

その人物に美春は見覚えがなかった。

簡素な純白のドレスを着た、この場には似つかわしくない美人。

あまりの場違いぶりに、美春は困惑こそしたが、何故かこの人物
が自分に害をなす者だとは思えなかった。

「あなたは？」

刺激しないと言った彼女の言葉に従い、小声で聞くが、

「ここは高神麗華と名乗っていた少女の心の中」

彼女は微笑んで、自分が何者であるか名乗らない。

美春はその事に若干の不信感を覚えたが、そんな事より、

「ここが高神麗華の心の中！？」

そうだろうとは薄ら思っていたが、他人にそれを肯定されると驚
かざる得ない。

普通、人の心の中に、自分の心の中ですら入る事は出来はしない。
だが、チラツと人形の全体を見ない様に人形の顔を見ると、その
顔は高神麗華にそっくりであり、この場にある全ての人形がそうで
ある事から考えると、ここが高神麗華の心の中である事を納得せざ
る得ないが、

「何で私が高神麗華の心の中に？」

その疑問に目の前にいる女性は困った顔になり、

「多分、夜衣斗の近くに居たからでしょうね」

聞くとは思ってもいなかった名前が出てきた。

「夜衣斗君の！？　どういう事ですか！？」

その問いに、彼女は答えない。

その代わりなのか、彼女は横に視線を向ける。

つられて視線を追うと、目に入っただのは、黒樹夜衣斗の背中。

「夜衣斗君？」

こんな空間で、昨日今日知り合ったばかりとは言え、見知った人間を見つけた美春は無意識の内にほっとして、夜衣斗に近付こうとした。

だが、腕を掴まれ、

「駄目、危ないわ」

そう彼女に言われ、その場に留まざるえなく、同時に疑問に思った。

「危ないって、何が？」

美春が疑問を口にした瞬間、まるでその疑問の答えであるかの様に夜衣斗が何事かを叫んだ。

それほど離れていない距離なはずなのに、夜衣斗が何を言ったのか分からない。

その不思議さに不思議がるより早く、夜衣斗の前にある人形の一つが立ち、急激に大きくなった。

人間になった人形に驚く暇もなく、次から次へと人形が立ちあがり、大きくなる。

それぞれ違う格好の高神麗華に囲まれた夜衣斗は、感情をむき出しにして何かを叫び続け、赤いドレスを着た高神麗華が現れた時、唐突に周りの光景が彼女を過去の映像になった。

高神麗華からの視点ではなく、まるで彼女の過去に幽霊として入り込んでいるかのような状況に戸惑いながら、あまりにも酷い、直前に見た幼少時代の麗華以上に酷い過去に、美春は愕然とするしかない。

武霊と言う普通の人間ではありえない存在と日夜関わっている美春だが、それはあくまで人間外の出来事。

それによって感じる事は、全て日常へと続く・繋がる事はない。

だが、目の前で見させられている高神麗華と名乗っていた少女の過去は、全て人間の、激しく拒絶したくなるが、自身と同じ人間がした事。

それらは、同じ人間と言う接点だけでも、日常へと続き・繋がってしまい、どんな武霊に対峙しても、どんな窮地に陥っても、感じる事がなかった言い知れぬ恐怖と絶望を美春に感じさせた。

「こんなにも……こんなにも人間は……」

呆然する美春の口からそんな言葉が漏れてしまう。

そして進む事が止まらない過去は、少女が少女の弟にされた高神礼治を自称する少年と共に脱出する場面になり、少年が少女の母親らしき人物を銃殺する場面を見て、美春は再び悲鳴を上げそうになる。

出かかった悲鳴をぐつと堪えた時、

「これは……近県で起きた『地下売春組織壊滅事件』か？」

不意に美春の隣から今最も聞きたかった人物・東山賢治の声がした。

思わず顔を向けると、

「……なんて顔をしてるんだ……美人が台無しだよ」

そう言って、賢治は美春の出かかっていった涙を手で優しく拭った。

賢治が現れた事により、本当に落ち着いた美春だが、

「どうしてここに？」

思わず彼自身でも分かりようもない事を聞いてしまった。

「彼女の話だと、夜衣斗君の近くにいたかららしいね」

そう言って、美春の近くにいた白いドレスを着た女性を見る。

美春も白いドレスの女性を見ると、女性は微笑んだ。

何となく美春は理解出来た。

美春を落ち着かせる為に、同じくこの心の中に来ていた賢治を美春の所に導いたのだと。

だが、だとすると、彼女は同時に複数の場所に自分を居させたと

いう事になる。

何故なら、彼女が現れてから、賢治が現れるまで、ずっと美春の傍にいたのだから。

もつともその疑問は、いかぶる美春に対して、

「ここは心の中ですよ？ どこにどんな風にいようと物理法則影響は受けません。ちなみに他の方々も、この場には連れてきていませんが、いらつしやいますよ」

そう彼女が言った事で一応は納得出来た。

納得出来た事で、同時に気になる事が出てくる。

「賢治……さっきの事、知っているの？」

美春のその問いに、賢治は一瞬躊躇った様子を見せたが、直ぐにため息を吐き、

「……まあ、どんな形であれ、知ってしまった以上は教えなきゃいけないよな……」

そうつぶやいた賢治は、それでも少し躊躇いながら知っている事を口にした。

「……数年前。高神姉弟が星波町に現れる半年ぐらい前かな？」

隣の県で大量殺人事件が起きた」

賢治の言った事に美春は小首を傾げた。

「大量殺人事件？ ……そんな報道あったかしら？」

「どうやったかはまでは知らないが、かなり強力な情報操作が行われたらしいから、警察内部でも知っているのは極僅かだと思うよ」

「……その極僅かの中に、何で賢治が入っているのよ？」

その美春の問いに、賢治は思わず頬を掻き、

「……まあ、星波町に来る前はエリートコースを走ってたからね。それなりのツテはあるさ」

そんな事を言って苦笑した。

美春は賢治の、星波町に左遷させられる前の賢治の事を知らないが、断片的に彼が語った言葉から察するに、賢治は警察上層部のしからみや悪習に嫌気がさし、そこを突かれて警察内部の権力闘争に

巻き込まれ、エリートコースから外れる事になった様だった。

「とにかく、そのツテから得た話によると、ビルの前で女性の銃殺体が発見された事により、そのビルの中の調査が行われ、そこで大量の死体を発見すると共に、そこが非合法の、しかもかなり大規模な地下売春組織の拠点だった事が判明したんだ。しかも、その見付かった死体の中に、それなりの地位の人間がかなり混ざってらしく、それが公になれば日本国家の根底を揺るがしかねない事態になりかねないと判断した警視庁……いや、日本政府は、この事件を闇に葬る事にしたのさ」

事投げにそんなとんでもない事を言う賢治に、美春はさつきとは別の意味で啞然とするしかない。

「なに……それ……」

「残念だけど、国って言うのは、いや、組織って言うのは、大きくなればなるほど、自分達にとって不都合な事実を隠蔽する性質があるのさ」

何やら実感のこもった呆れとも諦めとも取れる自嘲をする賢治は、

「……その関係なんだろうな……これらの事件もほとんどが未解決で終わらされてる……」

そうぼそつと呟いた。

目の前で展開されているのは、地下売春組織を壊滅させた後の高神姉弟の足跡。

賢治の言う事が本当であるのなら、目の前で行われている過去に在った事件は、いや、高神姉弟の存在自体があえて放って置かれたという事になる。

彼女達を表に出す事で露わになる不都合な事実を隠蔽し続ける為に……

それによつて、彼女達が星波町にやってきてしまう事に繋がり、結果、五十人以上の武霊使いが『行方不明』になった。

夜衣斗の予想通り、星波町にやってきた彼女達、少なくとも高神麗華になつている少女は、武霊を奪った武霊使いを殺していない。

最初の頃の被害者とされていた武霊使いは、彼女の記憶上では裸でその場に放置されていた。

だが、その武霊使いは未だに見付かっている。

そして、星波町に高神姉弟の存在が明らかになってから、彼女の武霊が武霊を奪った後に爆発するようになった。

まるで、申し合わせた様にだ。

この事に、二人は夜衣斗と同じ様に地下売春組織を壊滅させた協力者の存在を予想するが、そこから先の予想までは至らなかった。

それは、死亡から行方不明になった事による淡い希望。

行方不明になった武霊使いのほとんどは、職業柄二人の知り合いであった為、無意識の内に最悪な予想を拒否してしまっていた。

もつともだからと言って、最悪な予想が出来ない二人ではないので、考える時間があれば夜衣斗と同じ予想に至ったかもしれない。

だが、過去の回想光景が終わった瞬間、

「嘘でしょ！？ 早過ぎる！」

不意に白いドレスの女性が驚きの声を上げ、

「あなた達はここから動かないで！」

夜衣斗の下へと駆け出す。

何事かと女性が駆け出した先、夜衣斗と高神麗華のいる場所を見ると、高神麗華の身に変化が起きていた。

その姿は、美春が現実世界で見た麗華の姿だったが、その時より更に全身の角が伸びており、

「なに……あれ……」

視界に入った瞬間、何もかもが吸い込まれるかの様な、ぞつとする感覚に一瞬だけ襲われた。

彼女の背後に巨大な『何か』があった。

それが何なのか理解出来ない。

ただただそれを認識出来ない。

内外からの拒絶感に襲われ、美春達は逃げる様に夜衣斗へと視線を向けた瞬間、更なる変化が起きた。

第一章『渴欲の武霊使い』 26

赤井 美羽

嘘！ こいつって確かレベル2止まりじゃ！

「コウリユウ避けて！」

美羽は驚きながらコウリユウに避ける様に指示。

直ぐに応えてくれたコウリユウだけど、BBドラゴンを身に纏った礼治の突撃を避け切れなくて、片足を血の剣で斬り飛ばされてしまう。

けど、同時にコウリユウは礼治を逆鱗剣で思いつき斬り付け、地面に叩き付けた。

レベル2の巨体による剣撃だけど……

丁度道路に落ちた礼治は平然と起き上がり、美羽を見上げで……笑った。

美羽がその笑みにぞっとすると同時に、礼治の姿が地中に沈んだ！？

その瞬間、頭上に嫌な予感を感じ、

「防御鱗！」

慌てて防御鱗を展開するけど、その展開した防御鱗に当たったのは、血だった。

礼治が上から襲ってくると思っていた美羽だったけど、血だった事に…… あ！ ヤバい！？

BBドラゴンの血が、防御鱗に当たった事で美羽達の周りにその血が散ってしまう。

血に囲まれたって事は、どこからでも礼治が襲い掛かって来れるって事で……

美羽達を取り囲む様に落ちる血の滴が、大きく広がる。来る！

コウリユウと美羽は、どこから礼治が飛び出してきてもいい様に

集中。

武霊の攻撃力・防御力は、その武霊の具現化率に大きく左右される。

当然、レベル2とレベル3の具現化率には差があつて……

背後から何かが飛び出す気配を感じ、逆鱗剣を振るうコウリュウ。現れたのは間違いなく礼治だったけど、礼治は自分に振るわれた逆鱗剣をあつさり片手で受け止めた！？

そんな！ 美春さんだつてこんな事は出来ない。武霊が違うだけどここんなに違うの！？

コウリュウが逆鱗剣を引くけど、びくもしない。

その動作に礼治がにやりと笑う！？

同時に、コウリュウの背に何かが刺さり、美羽の頭の上・コウリュウの胸を突き抜ける。

現れたのは、血の針。

それが、周囲に展開されていた血の滴が次々と飛び出し、コウリュウに次々と突き刺さる。

全身を血の針で串刺しにされたコウリュウは、それでも具現化が解けない。

それはそんな状態にさせられてもまだ致命傷に至つてないって事で……わざと礼治にそうさせられたって事……何なの！？ こんな圧倒的な実力を持つていながら！

「一体どういつつもり！？」

美羽の叫びに、礼治は首を傾げる。

「どういつつもりだつて？俺がお前を襲う事に付いてか？それとも今の今までレベル3を隠してた事に付いてか？」

「両方よ！」

礼治は、めんどくさそうにBBドラゴンの頬を掻き、

「なんでお前にそんな事を教えなくちゃいけないんだ？」

そんな事を言ってくるけど……まあ、当然よね。美羽だつて「別に教えて貰わなくてもいいわ」

答えが欲しいわけじゃないもの。

「は？」

間抜けな顔をする礼治に美羽はにやりと笑って、

「だって、ただの時間稼ぎだもの」

美羽のその言葉と同時に、コウリユウがレーザーブレスを吐く。

だけど、血の針で動きを固定されているせいでレーザーブレスは礼治には当たらない。

「何の」

つもりだ？ とでも言おうとした礼治背後からレーザーブレスが襲い掛かり、礼治は驚愕に顔を歪めて上空に吹き飛んだ。

やった！ 上手くいった！

美羽は目論通り行った事に思わずガッツポーズ。

防御鱗と言うか、コウリユウの鱗には、自身が吐く事が出来る属性の攻撃をある程度反射・無効化出来る能力がある。

これを利用してコウリユウのブレスを反射させる事が出来て、上に展開した防御鱗の一部を礼治に話し掛けている間に移動させて、レーザーブレスを反射させたのだけど……いくらレベル3だからって、レーザーブレスは威力が高すぎたかな？

別に心配をしているわけじゃない。

ただ、いくら武霊を使った事だとは言え、この年で人殺しになるのは……どんな年でも嫌だけど……相手がどんな相手であろうと……

「っは！ やつてくれんじゃねえか！」

不意に、頭上から礼治の声が聞こえた。

慌てて上を見ると、少しだけ焦げたBBドラゴンを身に纏った礼治がいて……嘘でしょ！？ いくらレベル3だからって、コウリユウの最強のブレスを……ただ焦げただけ！？

驚く美羽に、礼治は焦げているBBドラゴンの腕を摩り、

「っへ、確かにBBドラゴンだけじゃ今のは防ぎ切れなかっただろっよ」

？ …… だけじゃ？

意味が分からない礼治の言葉に、美羽は不意に気付いた。

礼治の摩っている腕が何かを持っている事を。

それは美羽の目にはスマートフォンのように見え…… あれって……

もしかして！？

「嘘でしょ！？ 装備型武霊！？ 何で『二体目の武霊』を持っているの！？」

美羽の驚きに、礼治は意味深な笑みを浮かべて、

「っは！ まあ、『そう』思うよな！ だがこいつは」

何かを言い掛けた時、近くにあった分裂体の柱が砕け散って、それまで止まっていた分裂体達が動き出し始めた。

「ツチ！ 思ったより早いな」

礼治がそうつぶやくのが聞こえたけど、その言葉に疑問に思うより早く、上空の分裂体達に更に変化が起きた。

麗華の武霊はその特殊性のせいかレベル1以上になった事を見た事が無くなって、当然、奪われた武霊も、奪われる前はレベル2に達していてもレベル1でしか出してない。

なのに、上空の分裂体達が次々とレベル2になって落下してきた！？

嘘でしょ！ あんな一辺にレベル2が落下してきたら、町が！

「コ！ コウリユウ！」

大慌てでコウリユウで迎え撃とうとしたけど、血の針のせいで動けない。

血の針を消して貰おうと礼治を見たけど、礼治はそんな美羽を笑って、それどころか、美羽に向かって落下しようと身構えていた！？

「何なの！？ 今そんな事態じゃないでしょ！？ このままだったらあなたも！」

美羽の叫びに、礼治は小ばかにする様に笑って急降下しようとした瞬間！

礼治が『何か』に巻き込まれた！？

へ！？ 何？ 何なの？ 次から次と！

????

「心、武と、なれ」

飛矢折巴がそう言うと共に、巴の顔から表情が消えた。

視線すら虚ろになり、構えすらしない。

対峙する高原坂耕治はそれでも油断はしなかった。

噂に聞く飛矢折流奥義『武心』は、心身ともに設定した目標を達するまで一切の無駄を排する技と聞いている。

それ故に、目の前の巴の行動は、その無駄を排した故に行動のだと判断し、耕治はただただ興奮する。

万象気功を身に付ける過程の修行で、多くの場合は自然にその身を置き、自分が何と相性がいいのか、自然と一体化する事により調べる事が多い。

耕治もそれに倣い、自然と一体化し、自身が岩と相性がいい事を知り、岩の属性を身に付ける。

だがその時、時折万象気功を身に付ける者に起こる『完全同化』を起こしてしまい、完全に岩となり一切の身動きの取れない、何も感じられない状況に陥ってしまう。

時々感じられるのは、大雨などよって起きる土砂崩れなどにより他の岩や木々にぶつかり砕け、突き刺さる感覚と、人としての僅かに残る人としての本能。

それらを頼りに完全同化を一手手前で止め続けていた耕治は、やがて本能に心を塗り潰されていく。

そして、業のトップ『壹業』によって助け出された時には、本能のままに行動する人間が一人出来上がっていた。

もつとも、助け出された当初に比べ、今の耕治はこれでも理性的な行動を取れる様になっている。

それらはひとえに業のトップ達に対する本能的な恐怖から生じている理性と言える。

そんな理性であるが故に、あつさり本能によって瓦解し、人の本能であるが故に、

「ふおおおおおおおおおおお！」

自分を抑えられず巴に向かつて突撃した。

下半身突き出して突撃してくる耕治に対して一切避ける仕草を見せない巴。

そのまま耕治の先端が巴に突き刺さろうとした瞬間、巴の姿が掻き消える。

気を自身に当る光に対して使用し、自身の像をその場に持続させる一種の分身の術・飛矢折流『やまと矢的』。

それを巴は使って半歩後ろに移動していた。

その半歩の間を利用して、飛び、耕治の攻撃を回転しながらギリギリで避け、上半身に鏝砕きを数度叩き込み、耕治を回転させる。

自身の勢いも加わって数回回転し、下半身の突起が地面にぶつか

り削つてようやく止まった。
うつ伏せに倒れる耕治に、矢先と矢越えを使い真上から襲い掛かる巴。

その背後では、麗華の分裂体達が再び活動を始め、次々とレベル2になっているが、互いの事に集中している二人は一切気にする様子はない。

耕治の背中に打ち込まれる巴の鏝砕き。

その瞬間、耕治の背中に無数の棘が生え、巴は咄嗟に矢越えで上に飛び、巴の手・腕・肩・腹・足に浅く突き刺さる。

巴は棘を蹴つて棘から脱し、着地と共に、気操術と筋肉を使い止血。

その間に耕治は下半身を地面に打ち付けて飛び上がり、ポーズングしながら着地して振り返る。

幾度となく鏝砕きを打ち込まれたはずのその身体にはひび一つ入っておらず、代わりの様に全身から背中同様に岩の棘を生やし出した。

「あ~~~~~突き刺したい突き刺したい突き刺したいいいいいいいいいいい！！！！！！」

絶叫と共に、耕治の姿は完全に岩の棘の塊となった。

対する巴は、止血したとはいえ、耕治の様に超回復が出来るわけではなく、気操術で強引に動かさなければ身動きすら取れないほど既に満身創痍。

そんな状態でも武心により耕治を倒すこと以外を切り捨てている巴は、逃げる様子すら見せない。

巴のその様子に耕治は満足そうに笑い、

「ふおおおおふおおおおふおおふおおふおおおおおおおおお
おおお」

叫びながら縮地による突撃をした。

唐突に分裂体達の柱が散り、そこから宙に浮く夜衣斗と麗華が現れた。

現れた麗華のその全身は、角だけではなく目・口・耳・鼻を無数に生やしており、人の形を辛うじて保っている様な状態だった。

その様子を別のカラスの目で見ていた春子達の傍にいるカラスが
「な！ 早過ぎる！」

カラスが驚きの声を上げると共に、それまで動きを止めていた上空にいる分裂体達が一齐に動き出した。

しかも、次々とレベル2になりながら落下してくる。

慌てて迎撃を始める星波町の武霊使い達が目に入るが、全員がレベル2と言う訳ではないので、明らかに火力が不足していた。

それを確認した春子は、カラスに向けて

「『四元結界』を張って！」

「ちよっ！ それは！」

それがとんでもない命令だったのか、驚き翼を広げるカラス！

「いいから早く！ 責任は私が取るわ」

「形だけのあんたにどんな責任を取れるって言うのよ！」

「酷い！」

「酷いじゃない！ 事実！ ええい！ 仕方ない！ みんな！
四元結界お願い！」

カラスがそう叫ぶと共に、町の四つの場所から、四つの現象が吹き上がる。

炎・風・水・土の竜巻が星波町と落下してくるレベル2の分裂体達の間でぶつかり合い、炎と水によって固まった土が風によって乱れ飛ぶ壁が出来た。

その壁にぶつかったレベル2の分裂体達は瞬時に霧散し、星波町に落ちる事はなかったが、少しずつ少しずつ町から上がる四つの現象の竜巻が弱くなっているのが見え、その状態をあまり長く維持出来ないのは明白だった。

「春子！」

「分かつてる！ まだ覚醒していない今ならまだ間に合う！」

そう春子が言う様に、現れた高神麗華の意識はまだ内にあるのか、その目は閉じられていた。

「覚醒していないのに……こんな……」

誰かがそう呟くの耳にした春子は、

「さあ、見せてあげるわ！」

自身の辛さや恐怖を隠す為に、精一杯元気に明るく声を上げ、

「黒樹家本家の味噌つかすと呼ばれたこの私、黒樹春子こと黒薔薇春が一世一代の」

体中に生える黒い枝が震え、黒い矢に黒い光が灯り、

「『無穴砕き』！」

技名を叫んだ瞬間、勿体ない美女が弦を放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364s/>

武装守護霊

2011年10月10日08時10分発行